

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2

－ 八千代市道地遺跡 －

平成16年3月

都市基盤整備公団
財団法人 千葉県文化財センター

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 2

やちよしどうち
—八千代市道地遺跡—





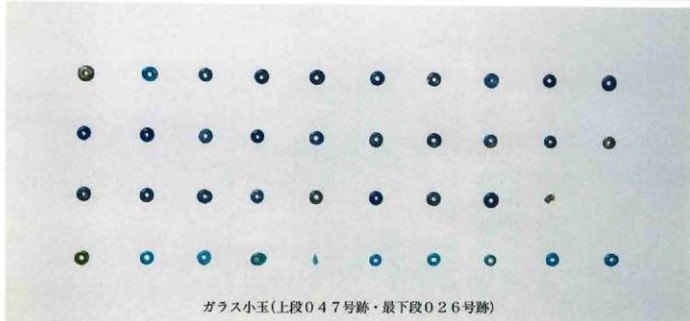
弥生時代後期の土器



古墳時代前期の土器(056号跡)



050号跡・069号跡出土土器



ガラス小玉(上段047号跡・最下段026号跡)



石製白玉(018号跡)管玉(014号跡・035号跡)

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第464集として、千葉県土木部の主要地方道船橋印西線建設事業に伴って実施した八千代市道地遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から古墳時代の住居跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。




終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による県道船橋印西線道路受託事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市平戸字道地217他に所在する道地遺跡（遺跡コード221-022）である。なお、本書には平成9年度調査分までを収録した。平成14年度以降の調査分については、別途刊行を予定している。
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の経緯及び担当者は、第1章・第1節に記した。
- 5 本書の執筆・編集は第1章、第2章第2節、第3章第2節、第3節の一部を西野雅人、第2章第1節を古内茂、上記以外を田中裕が担当し、編集は田中が行った。なお、第2章の土器について太田文雄・木島桂子の協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、都市基盤整備公団千葉地域支社、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 弥生土器の縄文施文について、佐倉市教育委員会 田村言行氏から御指導を受けた。また、八千代市内の遺跡について、八千代市教育委員会 秋山利光氏の御教示を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「白井」「小林」
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて、調査時の旧公共座標（国家標準直角座標第IX系）に基づく北である。
- 10 挿図に使用した遺構、遺物のスクリーン・トーンや記号の用例は以下の通りである。

	砂・盛土面	■	土製品		遺物実測図
	焼土	▲	石		赤 赤彩土器
	粘土・カマド壁	★	鉄		黒 黒色地層
	炭化物	●	土器		● 織物土器
		●	その他		

- 11 挿図の縮尺は原則として以下の通りである。

遺構	1/80	復原土器	1/4
ただし土坑の一部	1/40	破片土器	1/3
土器以外の遺物	1/1または1/2		

- 12 遺構番号は、発掘調査時につけた通し番号をそのまま使用した。
- 13 出土遺物の記載は遺構ごとに行い、属性は材質・種別ごとにまとめて付表に示した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査・整理の経緯	1
2	調査・整理の方法	8
第2節	遺跡の位置と環境	8
1	遺跡の位置と周辺の地形	8
2	周辺の遺跡	8
第2章	検出された遺構と遺物	13
第1節	旧石器時代	13
1	概観	13
2	層序	13
3	石器	13
第2節	縄文時代	17
1	縄文石器	17
2	土製品	23
3	石器	24
第3節	弥生時代・古墳時代	25
1	弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡	25
2	古墳時代中・後期の住居跡	141
3	古墳	159
4	土坑	162
5	環濠	163
第4節	その他の遺構・遺物	165
1	掘立柱建物	165
2	土坑・溝	166
3	遺構外出土遺物	169
第3章	まとめ	170
第1節	弥生時代後期から古墳時代前期の土器と集落	170
第2節	弥生土器の縄文	177
第3節	土器以外の出土遺物	183
第4節	総括	185
付表		186
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	グリッド命名法	2	第39図	020号跡(1)	55
第2図	地形と調査区	3・4	第40図	020号跡(2)	56
第3図	上層遺構配置(1)	6	第41図	020号跡(3)	57
第4図	上層遺構配置(2)	7	第42図	027号跡	57
第5図	周辺の遺跡	9	第43図	028号跡	58
第6図	標準土層図	13	第44図	029号跡	59
第7図	Z14地点石器分布図	14	第45図	030号跡	60
第8図	Z14地点石器実測図	15	第46図	031号跡	61
第9図	地点外出土石器実測図	16	第47図	032号跡	62
第10図	縄文土器分布 第10群	17	第48図	033号跡	63
第11図	縄文土器組成	18	第49図	034号跡	63
第12図	縄文土器(1)	20	第50図	035号跡	64
第13図	縄文土器(2)	21	第51図	037号跡	65
第14図	縄文土器(3)	22	第52図	039号跡	66
第15図	縄文時代土製品	24	第53図	041号跡	67
第16図	縄文時代石器	24	第54図	042号跡	67
第17図	001号跡(1)	26	第55図	043号跡	68
第18図	001号跡(2)	27	第56図	044号跡	69
第19図	001号跡(3)	28	第57図	045号跡	70
第20図	002号跡	30	第58図	048号跡	72
第21図	003号跡(1)	31	第59図	049号跡	72
第22図	003号跡(2)	33	第60図	050号跡	73
第23図	004号跡(1)	35	第61図	051号跡	75
第24図	004号跡(2)	36	第62図	052号跡	76
第25図	004号跡(3)	37	第63図	053号跡	78
第26図	005号跡(1)	39	第64図	054号跡	79
第27図	005号跡(2)	40	第65図	055号跡	81
第28図	006号跡	41	第66図	056号跡(1)	83
第29図	007号跡	42	第67図	056号跡(2)	84
第30図	008号跡	44	第68図	056号跡(3)	85
第31図	009号跡	45	第69図	056号跡(4)	86
第32図	010号跡	46	第70図	057号跡	87
第33図	011号跡	46	第71図	058号跡	88
第34図	012号跡	47	第72図	060号跡(1)	89
第35図	013号跡	48	第73図	060号跡(2)	90
第36図	015号跡	50	第74図	061号跡(1)	92
第37図	016号跡	52	第75図	061号跡(2)	93
第38図	017号跡	53	第76図	062号跡(1)	95

第77図	062号跡(2)	96	第107図	088号跡(1)	137
第78図	063号跡	97	第108図	088号跡(2)	138
第79図	064号跡	99	第109図	099号跡	140
第80図	065号跡	100	第110図	102号跡	140
第81図	066号跡	102	第111図	014号跡(1)	142
第82図	067号跡	102	第112図	014号跡(2)	143
第83図	068号跡	104	第113図	018号跡(1)	144
第84図	069号跡(1)	106	第114図	018号跡(2)	145
第85図	069号跡(2)	107	第115図	018号跡(3)	146
第86図	070号跡(1)	109	第116図	019号跡	148
第87図	070号跡(2)	110	第117図	036号跡(1)	151
第88図	070号跡(3)	111	第118図	036号跡(2)	152
第89図	071号跡	113	第119図	038号跡(1)	153
第90図	073号跡	114	第120図	038号跡(2)	154
第91図	074号跡(1)	116	第121図	038号跡(3)	155
第92図	074号跡(2)	117	第122図	038号跡(4)	156
第93図	076号跡	119	第123図	040号跡	158
第94図	077号跡	120	第124図	075号跡	159
第95図	078号跡	121	第125図	022号跡	160
第96図	079号跡	122	第126図	026号跡	161
第97図	080号跡	123	第127図	046号跡	162
第98図	081号跡	124	第128図	047号跡	162
第99図	082号跡	125	第129図	059号跡	164
第100図	083号跡(1)	126	第130図	023号跡	165
第101図	083号跡(2)	127	第131図	072号跡	166
第102図	084号跡(1)	130	第132図	089・090号跡	167
第103図	084号跡(2)	131	第133図	遺構外出土遺物	169
第104図	085号跡	132	第134図	道地遺跡における集落変遷	172
第105図	086号跡	134	第135図	印旛沼西部の弥生後期～古墳前期の遺跡	174
第106図	087号跡	135	第136図	054・061号跡小石の大きさ分布	184

表 目 次

第1表	掲載遺構索引	5	第9表	弥生土器・土師器	193
第2表	縄文土器集計結果	18	第10表	土製品	210
第3表	弥生土器の縄文組成	182	第11表	玉類	211
第4表	旧石器	186	第12表	石製模造品	212
第5表	縄文土器	186	第13表	弥生・古墳時代石器	213
第6表	縄文時代土製品	188	第14表	軽石	214
第7表	縄文時代石器	188	第15表	金属製品	215
第8表	弥生・古墳時代遺構	189	第16表	鉄滓・鉄塊	215

图版目次

- 图版1 遺跡付近航空写真1
图版2 遺跡付近航空写真2
图版3 発掘前風景，下層調査状況
图版4 001・002号跡
图版5 003～005号跡
图版6 006・007号跡
图版7 008～010号跡
图版8 010～012号跡
图版9 013～015号跡
图版10 016～018号跡
图版11 019・020・027号跡
图版12 028・029号跡
图版13 030～032号跡
图版14 033～035号跡
图版15 036～038号跡
图版16 038・039号跡
图版17 040～042号跡
图版18 043～045号跡
图版19 048～050号跡
图版20 051～053号跡
图版21 054～056号跡
图版22 056～058号跡
图版23 060～062号跡
图版24 063～066号跡
图版25 067～069号跡
图版26 070・071号跡
图版27 073～075号跡
图版28 076～078号跡
图版29 079～081号跡
图版30 082～084号跡
图版31 085～087号跡
图版32 088・099・101・102号跡
图版33 022・026号跡(古墳)・023号跡(掘立柱建物)
图版34 046・047・072・098号跡(土坑)・059・089・090号跡(溝)
图版35 旧石器時代乙14地点石器
图版36 旧石器時代地点外石器
图版37 縄文土器 (1)
图版38 縄文土器 (2)
图版39 縄文土器 (3)
图版40 縄文時代土製品・縄文時代石器
图版41 遺構出土土器 (1)
图版42 遺構出土土器 (2)
图版43 遺構出土土器 (3)
图版44 遺構出土土器 (4)
图版45 遺構出土土器 (5)
图版46 遺構出土土器 (6)
图版47 遺構出土土器 (7)
图版48 遺構出土土器 (8)
图版49 遺構出土土器 (9)
图版50 遺構出土土器 (10)
图版51 遺構出土土器 (11)
图版52 遺構出土土器 (12)
图版53 遺構出土土器 (13)
图版54 遺構出土土器 (14)
图版55 遺構出土土器 (15)
图版56 遺構出土土器 (16)
图版57 遺構出土土器 (17)
图版58 遺構出土土器 (18)
图版59 遺構出土土器 (19)
图版60 遺構出土土器 (20)
图版61 遺構出土土器 (21)
图版62 遺構出土土器 (22)
图版63 遺構出土土器 (23)
图版64 遺構出土土器 (24)
图版65 遺構出土土器 (25)
图版66 遺構出土土器 (26)
图版67 遺構出土土器 (27)
图版68 遺構出土土器 (28)
图版69 遺構出土土器 (29)
图版70 遺構出土土器 (30)・支脚・遺構外出土土器

図版71 遺構出土土器片 (1)
図版72 遺構出土土器片 (2)
図版73 遺構出土土器片 (3)
図版74 遺構出土土器片 (4)
図版75 遺構出土土器片 (5)
図版76 遺構出土土器片 (6)
図版77 遺構出土土器片 (7)
図版78 遺構出土土器片 (8)
図版79 遺構出土土器片 (9)
図版80 遺構出土土器片 (10)
図版81 遺構出土土器片 (11)

図版82 遺構出土土器片 (12)
図版83 遺構出土土器片 (13)・遺構外出土土器片
図版84 軽石
図版85 弥生時代・古墳時代の砥石・敵石 (1)
図版86 弥生時代・古墳時代の砥石・敵石 (2)
図版87 弥生時代・古墳時代の土製品
図版88 鉄製品・X線写真
図版89 石製模造品・合貝殻土塊・スラグ
図版90 弥生土器の縄文 (1)
図版91 弥生土器の縄文 (2)
図版92 弥生土器の縄文 (3)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査・整理の経緯

千葉県では、県内外各都市との広域的な交流・連携の基盤づくりと現道の混雑緩和を目指して、交通網の整備を展開している。県道船橋印西線は、千葉ニュータウンと国道16号を結ぶ幹線道路であり、八千代市内部分の改良工事を進めることとなった。千葉県土木部は、事業の計画に当たって路線内の埋蔵文化財の所在について照会した。これに対し、千葉県教育委員会は、道地遺跡、間見穴遺跡、島田込ノ内遺跡の3遺跡が所在するとの回答を行った。遺跡が所在することを受けて、千葉県教育委員会と千葉県土木部は、遺跡の取扱いについて協議し、その結果、路線内に存在する埋蔵文化財について、やむを得ず記録保存することとなった。

発掘調査及び整理作業は千葉県文化財センターが受託して実施することとなり、平成5年度から島田込ノ内遺跡と間見穴遺跡、平成6年度から道地遺跡の発掘調査を開始し、断続的に調査を行ってきた。島田込ノ内遺跡は平成10年に報告書を刊行済みである（部1998）。間見穴遺跡は平成5・6年度調査分について今年度刊行予定であり、現在平成10年度調査分の整理作業を実施中である。道地遺跡は下記のように4度の調査を実施しており、本書は平成9年度調査分までの報告である。なお、当遺跡については4地点の小面積の調査が未了である。平成14年度調査分も含めて、本事業の第4冊として報告を行う予定である。

発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は下記のとおりである。

(発掘調査)

(1) 平成6年度

期 間 平成6年6月1日から平成7年2月28日

組 織 印西調査事務所長 谷 匂

担当者 分室長 部 淳一・研究員 猪股昭喜・主任技師 田形孝一

内 容 上層確認調査300㎡・本調査6,900㎡、下層確認調査469㎡・本調査156㎡

(2) 平成8年度

期 間 平成8年7月1日から平成9年3月27日

組 織 印西調査事務所長 谷 匂

担当者 調査室長 部 淳一・研究員 榎原弘二

内 容 上層確認調査1,070㎡・本調査10,852㎡、下層確認調査434㎡・本調査320㎡

(3) 平成9年度

期 間 平成9年9月1日から平成9年10月13日

組 織 北部調査事務所長 折原 繁

担当者 調査室長 部 淳一・研究員 猪股昭喜

内 容 上層確認調査525㎡・本調査83㎡、下層確認調査20㎡

(3) 平成14年度

期 間 平成14年12月2日から平成14年12月25日

組 織 北部調査事務所長 古内 茂

担当者 主席研究員 池田大助

内 容 上層本調査887㎡, 下層確認調査32㎡

(整理作業)

(4) 平成6年度

期 間 平成6年9月1日から平成7年1月31日

組 織 印西調査事務所長 谷 旬

担当者 主任技師 出形孝一

内 容 水洗・注記

(5) 平成8年度

期 間 平成8年4月2日から平成9年3月27日

組 織 印西調査事務所長 谷 旬

担当者 調査室長 部 淳一

内 容 平成6年度調査分的水洗・注記の一部から復元まで

(6) 平成9年度

期 間 平成10年1月4日から平成10年3月31日

組 織 調査事務所長 折原 繁

担当者 調査室長 部 淳一

内 容 平成8年度調査分的水洗・注記の一部から記録整理まで

(7) 平成14年度

期 間 平成14年8月1日から平成15年3月31日

組 織 調査事務所長 古内 茂

担当者 上席研究員 大塚一実・西野雅人, 研究員 田中 裕

内 容 分類から原稿執筆の一部まで

(8) 平成15年度

期 間 平成15年6月1日から

平成16年3月31日

組 織 調査事務所長

古内 茂

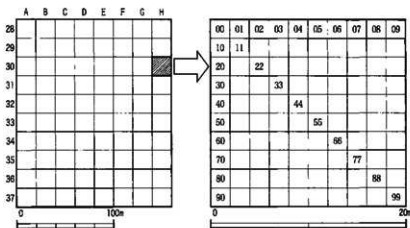
担当者 研究員

大内千年

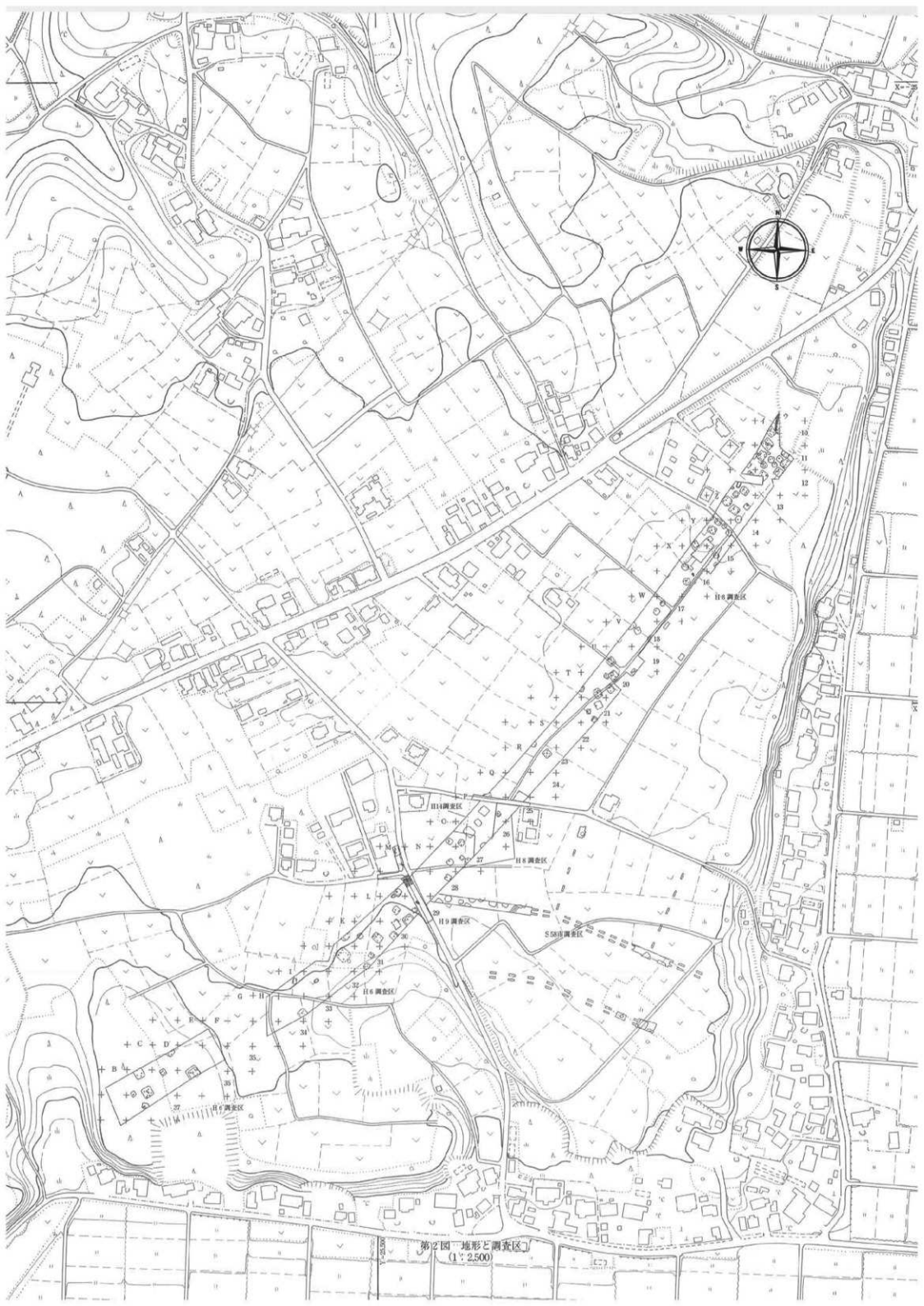
田中 裕

内 容 原稿執筆の一部

から刊行まで



第1図 グリッド命名法



第2图 地形と調査区
(1:2,500)

第1表 掲載道標索引

第2章第3節-1 弥生後期から古墳前期の住居跡

001	住居跡	M29-59	25	ページ	052	住居跡	Z14-42	75	ページ
002	住居跡	N29-55	29		053	住居跡	Z14-05	77	
003	住居跡	N29-92	29		054	住居跡	Z14-27	79	
004	住居跡	M30-57	34		055	住居跡	911-42	80	
005	住居跡	M30-50	38		056	住居跡	911-73	82	
006	住居跡	K30-58	42		057	住居跡	910-50	87	
007	住居跡	L30-53	43		058	住居跡	Z13-92	88	
008	住居跡	K31-35	43		060	住居跡	410-47	88	
009	住居跡	L31-27	45		061A	住居跡	411-05	91	
010	住居跡	L31-75	45		062	住居跡	411-83	94	
011	住居跡	I32-38	46		063	住居跡	412-23	97	
012	住居跡	M28-88	46		064	住居跡	411-53	98	
013	住居跡	J33-50	47		065	住居跡	411-51	100	
015	住居跡	D35-08	49		066	住居跡	411-40	101	
016	住居跡	D35-85	51		067	住居跡	711-88	103	
017	住居跡	C35-86	51		068	住居跡	911-50	103	
020B	住居跡	C37-18	54		069	住居跡	412-19	105	
027	住居跡	O27-68	54		070	住居跡	411-88	108	
028A・B	住居跡	O26-88	54		071	住居跡	411-66	112	
029	住居跡	P27-43	59		073	住居跡	712-18	112	
030	住居跡	P27-55	60		074	住居跡	V20-62	115	
031	住居跡	P26-82	60		076	住居跡	U20-76	117	
032	住居跡	Q25-77	61		077	住居跡	U21-53	118	
033	住居跡	Q24-93	62		078	住居跡	U21-95	120	
034	住居跡	S22-91	63		079	住居跡	S23-26	121	
035	住居跡	U20-70	64		080	住居跡	O28-28	122	
037	住居跡	V20-20	65		081	住居跡	Z14-59	123	
039	住居跡	W20-00	66		082	住居跡	W18-67	125	
041	住居跡	W18-42	66		083	住居跡	Z13-38	128	
042	住居跡	X17-60	68		084	住居跡	713-61	129	
043	住居跡	X17-33	68		085	住居跡	714-03	131	
044	住居跡	Y16-42	69		086	住居跡	713-02	133	
045	住居跡	Y15-81	70		087	住居跡	713-56	135	
048	住居跡	Z15-74	71		088A・B	住居跡	712-86	136・139	
049	住居跡	Z15-44	71		099	住居跡	M27-28	139	
050	住居跡	Y15-06	72		102	住居跡	M28-23	141	
051	住居跡	Z14-71	74						

2 古墳中・後期の住居跡

014	住居跡	E35-88	141
018	住居跡	D36-50	147
019	住居跡	C36-63	149
020A	住居跡	C37-18	149
036	住居跡	Y19-61	150
038A	住居跡	V20-22	156
038B	住居跡	V20-22	157
040	住居跡	W18-20	157
075	住居跡	U21-27	158

3 古墳

022	古墳	M28-97	159
026	古墳	J32-36	160

4 土坑

046	土坑	Y16-14	162
047	土坑	Y16-14	163

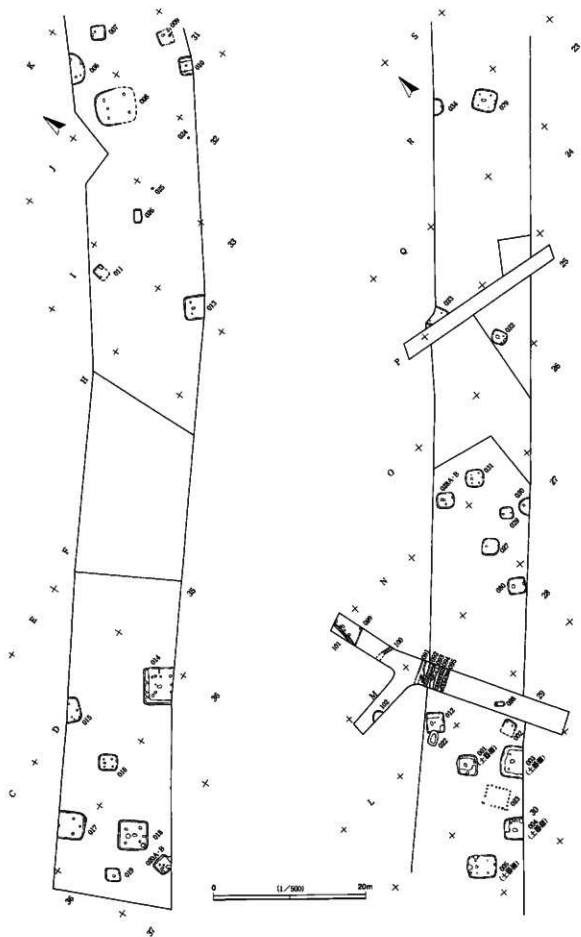
5 溝

059	溝	410-19	163
-----	---	--------	-----

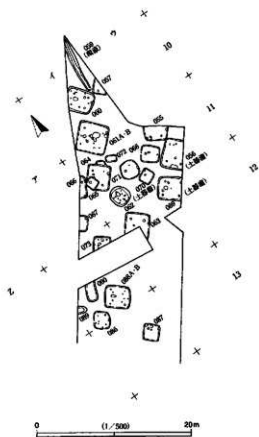
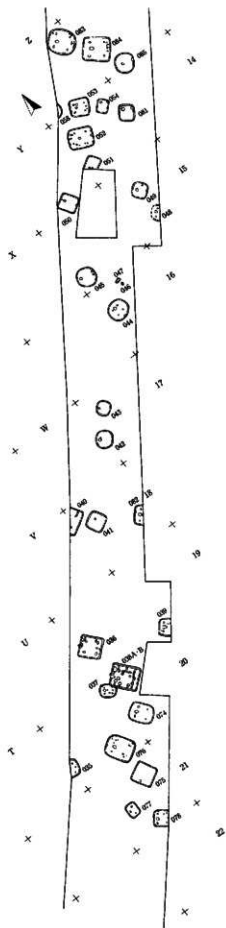
第4節 その他

023	竪穴建物	M30-08	165
061B	土坑	411-05	166
072	土坑	411-35	166
098	土坑	N29-16	167
089	土坑または溝	712-71	167
090	土坑または溝	712-63	167
091	溝	N28-21	全測図のみ
092	溝	N28-21	全測図のみ
093	溝	N28-31	全測図のみ
094	溝	N28-42	全測図のみ
095	溝	N28-42	全測図のみ
100	溝	M27-69	全測図のみ
101	溝	M27-06	全測図のみ

欠番 021, 024, 025, 096, 097



第3図 上層遺構配置(1)



第4図 上層遺構配置(2)

2 調査・整理の方法

(1) 発掘調査

当センターでは、千葉県教育委員会の指導により、上層については対象面積の約10%、下層については約4%の確認調査を行い、その結果に基づいて本調査範囲を確定している。当遺跡の調査においても、この方式を採用した。調査を開始するにあたって、当時の旧公共座標（国家標準直角座標第IX系）に基づく基準杭を設定した。発掘区は路線状の調査であることから20m×20mの大グリッドとし、そのなかを2m×2mの小グリッドに区分した。大グリッドは西から東へA・B・C…ア・イ・ウ、北から南へ01・02・03…37とした。代表点であるO28グリッドの旧公共座標は $x=-25,630.000$ $y=25,540.000$ である。小グリッドの名称は西から東に向かって00～09、北から南に向かって00～90とした（第1図）。上層の確認調査は、路線に対して平行に幅2mのトレンチを設定して行った。削平等によって調査対象外とした区域以外は満遍なく遺構を検出し、ほぼ全面について本調査を実施した（第2図）。そのため、確認調査のトレンチ配置図は省略した。下層については第2章第1節に記載する。

(2) 整理作業

遺構番号は発掘調査で遺構の種類に関わらず001から3ケタの通し番号を付けており、整理作業においてもそのまま使用した。報告に当たっては、すべて「〇号跡」と呼称している。なお、弥生時代後期から古墳時代前期にわたる遺構・遺物は間段なく出土しているため、弥生時代と古墳時代に区分するのは困難な場合が多かった。したがって、掲載の区分は、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中・後期とした。第1表は掲載遺構の索引である。

第2節 遺跡の位置と環境

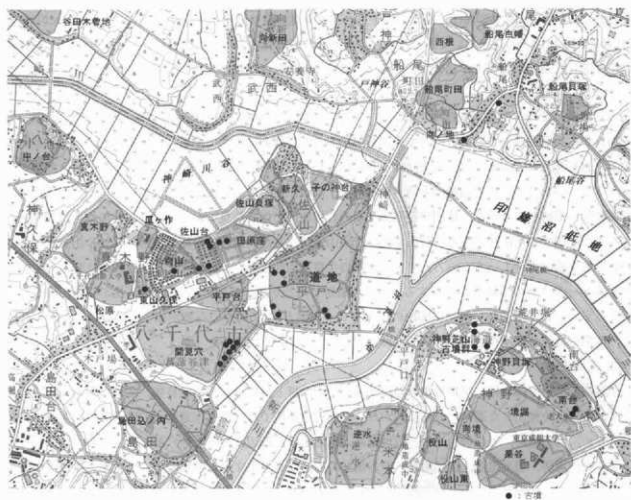
1 遺跡の位置と周辺の地形

道地遺跡の所在する八千代市は、千葉県北部に広がる下総台地の北部に位置する。北東に印旛沼の低地を望み、その水系に繋がる樹枝状の谷によって刻まれた低平な台地によって代表される、水と緑豊かな地域である。遺跡の所在する台地は、第135図に使用した地形図のように、昭和30年代まで印旛沼の西端を直接望む場所であった。神崎川と平戸川（現在の新川）の河口部に挟まれ、低地に向かって突き出た広大な台地である。地名は県道を挟んで大字佐山と平戸に分かれているが、「平戸台地」と呼ばれる。台地上の標高は約20m、現水田面との高低差は約15mである。

付近の低地は、縄文海進のピーク時には古鬼怒湾の最奥部となった。そのことは、縄文早期後葉の海水産の貝類を中心とした貝塚が点在することからもうかがうことができる。海退に伴って水域の淡水化と、周辺の湿地化が急速に進行したものと考えられる。弥生後期以降には広大な湿地が、耕地として利用されたと考えられる。

2 周辺の遺跡（第5図）

第5図は、2万5千分の1地形図「白井」「小林」を使用し、周辺のおもな遺跡の位置を示したものである。網掛けは遺跡の範囲、ドットは古墳である。下段には各遺跡の時期を示す。塗りつぶした記号は多くの遺構が検出された集落の時期である。三角は貝塚を伴う集落である。一見して、弥生時代から古墳時代前期の集落が密集していることがわかる。なかでも、真木野遺跡の西側の小支谷より東側、間見穴遺跡



No.	遺跡	旧石器	縄文早	縄文中	弥生～ 古墳前	古墳中	奈良平	安
1	船尾貝塚		▲		○	○		
2	向ノ地	○			●	○		
3	船尾町田				●	○		●
4	船尾白幡	○	○		●	○		●
5	西根			●				
6	向新田				○			
7	谷田木曾地				○			
8	中ノ台				○			
9	真木野				○			
10	松原	○		○	●	●		○
11	東山久保			●	●	○		
12	瓜ヶ作		●		●			
13	向山	○		○	●			○
14	佐山台			○	○			
15	田原窪			○	●			
16	佐山貝塚					▲	○	○
17	新久					○	○	
18	子の神台	○	○		○	○		○
19	蓮地	○	○		○	○		○
20	平戸台				○		○	
21	間見穴	○	▲	○	○	○		○
22	鳥田込ノ内				○	○		○
23	逆水				○	○		○
24	夜山			○	○	○		○
25	神野貝塚				○	○		○
26	南台						○	○
27	境塚				○			○
28	向境			○	○	○		○
29	夜山東				○			○
30	栗谷				●		●	●

第5図 周辺の遺跡 (1 : 25,000)

の南側の小支谷より北側の範囲は、台地上のすべてが遺跡といつてよい状況である。以下ではこの遺跡群を「周辺遺跡群」と呼び、これを中心に当遺跡周辺の遺跡についてみていきたい。第5図下段で遺跡名をゴチックで表示している。なお、周辺遺跡群は八千代市教育委員会によって近年数多く調査が行われており、現在整理作業が進められている。その概要については八千代市教育委員会による記載がある(同教育委員

会1995)。図版1の航空写真は、平成7年1月6日に京葉測量株式会社によって撮影されたもの(写真番号C16B-10を1:10,000に拡大)である。当日は南西部分の調査中であり、調査区が写っている。その南西側には間見穴遺跡の調査区が見える。さらに、台地の北側には田原窪遺跡の環濠集落と古墳が見える。

(1) 旧石器時代

周辺遺跡群では、間見穴遺跡でⅢ層、Ⅳ・Ⅴ層、Ⅶ層で小規模な石器群が見つかった(未報告)。そのほか、松原遺跡、子の神台遺跡でも調査例があるが、詳細は不明である。印旛沼低地の北側・船尾台地上には船尾白幡遺跡がある。Ⅲ層からⅦ層にかけて17か所の石器群を検出しており、Ⅲ層の細石刃ブロックなどがある。台地の南端部の向ノ地遺跡や、向新田遺跡でも石器が出土している。印旛沼南岸は旧石器時代の遺跡が少ないが、地図の範囲より南の萱田地区では多数見つかっており、その傾向は調査例の少なさに起因する可能性がある。萱田地区では坊山遺跡、井戸向遺跡、白幡前遺跡、ヲサル山遺跡で多くの石器群が検出されている。一方、ずっと北側の手賀沼低地との分水界付近には、全国的に知られている千葉ニュータウンの遺跡群が存在する。木苺峠遺跡では25か所の石器群、6,200点に及ぶ石器が出土している。また、新山北遺跡では、径60mの環状ブロック群と約1,500点の石器が出土している。大まかにみて、印旛沼低地の沿岸付近は、比較的遺跡が少ないといえようである。

(2) 縄文時代

印旛沼低地沿岸部には、早期後葉の遺跡が多い。炉穴群と貝層をもつ船尾貝塚、間見穴遺跡をはじめとして、炉穴群を検出した遺跡は枚挙に暇がない。周辺遺跡群では、瓜ヶ作遺跡の93基、間見穴遺跡の29基をはじめ、向山遺跡、子の神台遺跡、道地遺跡と低地を望む縁辺に連続と炉穴群が形成されている。そのほか、役山遺跡、境塚遺跡、向境遺跡、栗谷遺跡の周辺にも集中する。前期では、黒浜期の拠点的な集落とみられる瓜ヶ作遺跡のほか、地図範囲外の八千代市仲ノ台遺跡、ヲイノ作南遺跡等でも住居跡が発見されている。しかし、前期の遺跡分布は手賀沼低地周辺に中心があって、印旛沼低地周辺には少ない。中期では、当遺跡の昭和58年の調査で前葉の阿玉台期の住居跡(?)1軒を検出しているほか、萱田地区のヲサル山南遺跡はこの時期の集落である。中葉の加曾利EⅠ・EⅡ期の資料はきわめて少なく、後葉の加曾利EⅢ・EⅣ期の遺構・遺物は多くの遺跡で見ついている。松原遺跡、向山遺跡、田原窪遺跡で住居跡を検出しており、当遺跡でも多くの土器が出土している。印旛沼低地沿岸の広域に分散的で小規模な居住の痕跡を残しているようである。後・晩期では、印旛沼南岸の台地上に佐山貝塚と神野貝塚が存在する。いずれもヤマトシジミ主体の貝層をもつ大規模集落である。また、戸神谷の低湿地で発見された西根遺跡が注目される。現在当センターで整理作業を実施しているが、加曾利B期の土器が大量に出土している。

(3) 弥生時代から古墳時代前期

この周辺には弥生中期の遺跡がごく少ない。集落として捉えられているのは、周辺遺跡群内にある田原窪遺跡くらいであろう。同遺跡は40軒ほどの住居跡を伴う宮ノ台期の小規模な環濠集落である。集落が数多く形成されるのは、弥生後期後葉から古墳時代前期である。集落はきわめて多く、密度が高い。印旛沼周辺のなかでも、印旛沼低地西端部から入り込む小谷や、神崎川と平戸川河口付近の広い低地に面した台地縁辺にとくに集中がみられる。周辺遺跡群では、松原遺跡、東山久保遺跡、瓜ヶ作遺跡、向山遺跡、佐山台遺跡、田原窪遺跡、子の神台遺跡、当遺跡、間見穴遺跡と、連面と住居跡が検出されている。なかでも、当遺跡周辺は、佐山台遺跡の229軒を筆頭に、きわめて多くの住居跡が見つかっており、中心的な場所であった可能性がある。印旛沼低地北岸では船尾白幡遺跡、船尾町田遺跡、向新田遺跡、南岸では、栗

谷遺跡、おおびた遺跡、萱田遺跡群（とくに権現後+ヲサル山）をあげることができる。未調査の遺跡を考慮すると、この時期の集落は当地域の台地縁辺に連続と展開した可能性が高い。

集落の数からみると墳墓はとても少ない。方形周溝墓ないし初期方墳は、①周辺遺跡群の東山久保遺跡と松原遺跡、②南東岸の栗谷遺跡・向境遺跡・境堀遺跡、③萱田地区のヲサル山遺跡と井戸向遺跡に存在する。多くは集落内の一角に位置するが、栗谷遺跡では集落とは別れて墓域を形成する。

なお、この時期の様相については、当遺跡の調査・整理の成果を加えて、第3章まとめにおいて再度取り上げてみたい。

(4) 古墳時代中・後期

当遺跡では、この時期の住居跡を8軒検出した。周辺遺跡群でみても前期から継続する多くの遺跡で検出されるものの、1遺跡での遺構数は少ない。もう少し広域でみると、萱田地区の北海道遺跡、北岸の船尾町田遺跡などの後期集落をあげることができるが、印旛沼低地西半ではこの時期の集落が少ないといえる。墳墓も少ない。古墳は点在するが、いずれも大きな群を形成せず、また大きな古墳を含まないのが特徴である。調査例としては、当遺跡内に存在した「平戸台古墳群1号墳」において、埋葬遺体の一部を伴う箱式石棺を検出している。後期の方墳である。また、佐山台遺跡内に存在した真木野古墳は40m級の円墳で、箱式石棺内から2～3体分の遺体と鉄剣が出土している。佐山台遺跡と田原窪遺跡に跨る田原窪古墳群では1号墳と3号墳が前期の円墳と推定されている。南東岸の神野芝山古墳群では、30m級の円墳である2号墳で10数体の遺体を伴う箱式石棺が見つかった。4号墳は未調査で失われたが、八千代市内最大の古墳であつたらしい。埴輪を伴い、石枕・刀・鏡が出土したとされている。

(5) 奈良・平安時代

周辺遺跡群では、間見六遺跡でこの時期の住居跡を17軒検出しているほかには、まとまった例がない。これに対して、低地の北岸や南東岸ではこの時期の集落が多い。印旛沼低地北岸では船尾白幡遺跡、鳴神山遺跡という大集落の存在が知られており、前者は船尾郷の拠点と考えられている。いずれも多数の住居跡、掘立柱建物跡とともに墨書・刻書土器、帯金具をはじめとした大量の遺物が出土している。なお、船尾白幡遺跡の直下の低湿地遺跡である西根遺跡では、古墳時代から平安時代の水路跡を検出し、多数の木製品が出土している。人形・馬形の形代、丸木杭・梯子・柱材を伴う堰跡などが見つかった。印旛沼低地南東岸では、栗谷遺跡、境堀遺跡、役山遺跡、役山東遺跡、郷遺跡、上谷遺跡、南台遺跡でこの時期の住居跡を検出している。上谷遺跡では190軒以上の住居跡、栗谷遺跡で住居跡130軒以上と終末期方墳22基、境堀遺跡で規則的な配置をもつ掘立柱建物群を検出している。

参考文献

第1章・第3章

- 朝比奈竹男 1983 『佐山寺ノ下遺跡』『北部遺跡群緊急発掘調査報告』八千代市教育委員会
大野康男 1991 『八千代市白幡前遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書V—』千葉県文化財センター
小高春雄 1995 『千葉県における弥生時代後期土器の地域性について』『研究紀要16』千葉県文化財センター
加藤修司他 1984 『八千代市権現後遺跡』千葉県文化財センター
金丸誠・落合章雄 2002 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XV —印西市向新田遺跡—』
阪田正一・藤岡孝司 1986 『八千代市ヲサル山遺跡 —萱田地区埋蔵文化財調査報告書III—』千葉県文化財センター

- 浦淳一 1998 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1—八千代市烏田込ノ内遺跡—』千葉県文化財センター
 鈴木道之助 1975 『木苅峠遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』千葉県都市公社
 千葉県教育委員会 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) —東葛・印旛地区(改訂版)—』
 千葉県教育委員会 1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』
 千葉県教育委員会 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和47～53・59・62・63年度,平成元～6年度
 千葉県文化財センター 1989 『房総考古学ライブラリー4 弥生時代』
 千葉県文化財センター 1992 『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』
 常松成人 2000 『真木野向山遺跡a地点』『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
 西野雅人・鈴木弘幸他 2003 『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 Ⅰ—松崎Ⅱ遺跡—』
 千葉県文化財センター
 野村幸希・古内茂 1976 『船尾白幡遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ』千葉県文化財センター
 藤岡孝司 1986 『八千代市井戸向遺跡』千葉県文化財センター
 藤岡孝司 1987 『八千代市白幡前遺跡』千葉県文化財センター
 古内茂 1984 『船尾町田遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅶ』千葉県文化財センター
 八千代市教育委員会 1995 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』
 八千代市史料編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
 林勝則 1986 『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会
 森電哉・玉井庸弘 2000 『ライノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
 蔵茂美 2001 『栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会
 第2章
 中野修秀 2000 『遺構外出土の遺物』『香掛貝塚遺跡—金谷郷遺跡群Ⅲ—』山武郡市文化財センター
 西野雅人・鈴木弘幸他 2003 『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 Ⅰ—松崎Ⅱ遺跡—』
 千葉県文化財センター

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代

1 概観

本遺跡における旧石器時代の調査は、上層の調査で住居跡等の遺構が分布する範囲では上層遺構調査後、遺構が存在しない部分では確認調査終了後に継続して下層調査へと移行し、調査対象地の約4%について発掘し、その存否の確認をした。

その結果、数地点においてローム層中から剥片等を検出したが明らかに石器集中地点を形成しているものは2か所となり、その他の地点では1～2点の出土にとどまり集中地点として捉えることはできなかった。また、後述するが遺構の覆土中からの出土も認められるため、本遺跡の立地する広大な台地上にはまだかなりの旧石器時代石器群が含まれているものと思われる。

集中地点として報告する石器群はZ14区から出土した石器群であり、石器の分布からみると2地点として捉えられる。しかし、出土層位がほぼ同一であるため、ここでは一括して報告することとした。他にM29区では2点、M30区で1点と出土が確認されているが、その周辺は拡張区を設定して調査を継続しても石器の検出は認められなかった。そのためこれらについては単独出土として取り扱った。以下、層序についても若干記しておきたい。

2 層序

堆積物の層序についてみると、調査区ではほぼ平坦な面を呈し、ローム層の層準も基本的には変わらない。図示した位置は、調査区の南西隅のC37区と小規模な谷が入り込むM30区の2地点である。

第I層 表土

第II層 黒褐色土、いわゆる新期テフラ混入層。

第III層 黄褐色土、ソフトローム

第IV層 褐色土、ソフトローム化が著しい。

第V層 褐色土、場所により上面がやや黒みを帯びることもある。

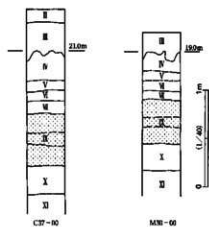
第VI層 褐色土、AT含有層で第V層よりもやや明るく、スコリア・微細炭化粒を含む。

第VII層 褐色土、暗色帯漸移層で部分的に認識できる程度である。

第VIII層 暗褐色土、いわゆる暗色帯でスコリア粒を含有する。

第IX層 暗赤褐色土、立川最下層でやや赤みを帯び、粘性を有す。

第X層 武蔵野ローム層

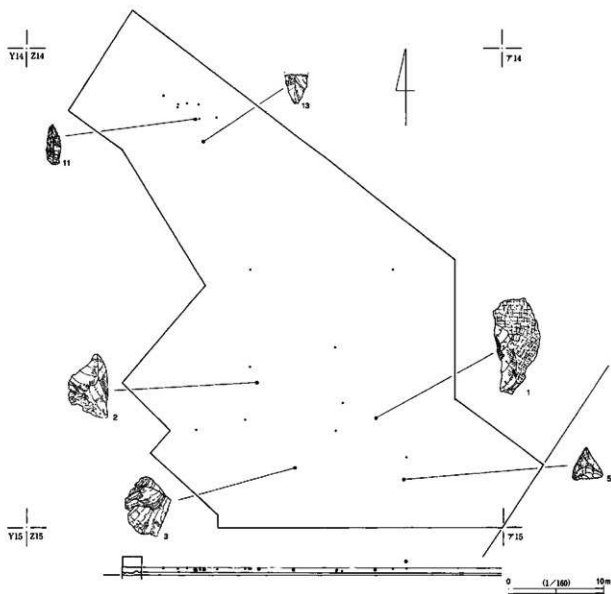


第6図 標準土層図

3 石器

(1) Z14区出土の石器 (第7図, 第8図, 第4表, 図版35・36)

本地区出土の石器群は、確認調査においていわゆるソフトローム層中からその一部が検出されたため、順次拡張区を設定し調査を続けた。その結果、北側でも小ブロックが確認され、結果的には不整形な発掘区となってしまった。石器の出土層位は大半が第III層のソフトローム層であり、若干第V層のハードロー

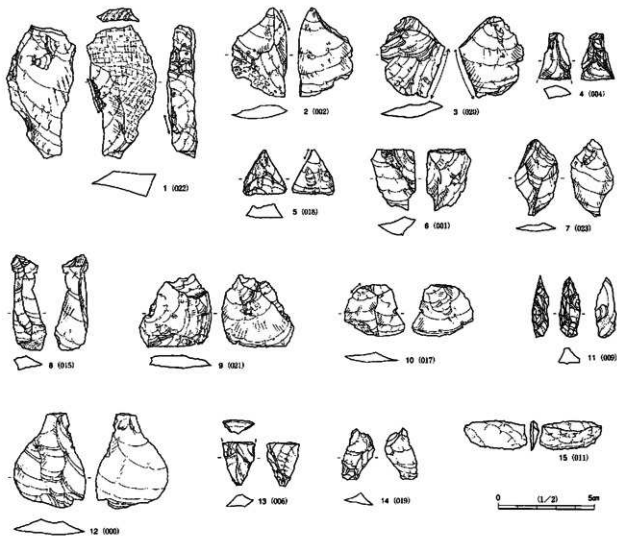


第7図 Z14地点石器分布図

ムに包含されているものもあった。ハードローム層の下部は、ATを含む第VI層となるため本地区の石器群は本来第V層からの出土とも考えられた。出土状況図において1点のみ第II層出土の石器がある。ここでは耕作による攪乱もあり、明確に旧石器時代の遺物として捉えることのできるものではないが一応ここにまとめた。

まず、発掘区の南にまばらに散布するような石器群（1～10）では計13点の石器が出土し、剥片10点、屑片3点で構成されていた。石材は黒曜石12点、チャート1点となり、黒曜石が主体をしめる。これらの黒曜石では図示した4点に二次剥離・調整痕等が認められた。また、これらはすべてに気泡が顕著に認められ、材質的には良好とはいえないものであった。

一方、北側小ブロックから出土した石器群（11・13～15）は長径3m弱、短径約1.2mの小範囲からの検出で小形の尖頭器が1点含まれていた。合計9点出土し、石器・剥片が4点、屑片が5点となっている。使用石材はメノウ・チャート・頁岩などで構成され、石材からみると明らかに異なる。



第8図 Z14地点石器実測図

尖頭器 11は唯一出土した定形石器である。横長剥片を素材とし、断面はほぼ三角形となる。小さな尖頭器のわりに整形は粗く、先端部周辺と左側縁を微調整し石器としている。主剥離面での加工は認められない。石材はチャートである。

剥片 14点の剥片を図示したが、このうち二次加工や使用痕などが認められるものが7点存在した。1は大型剥片で、表面には自然面を残す。左側縁の中央に二次剥離が施され、右側面下部には剥離の際に生じた湾曲部を整形加工している。削器として使用したものであろう。2は表面右上に使用痕が認められる。3は右側縁の直線部に刃こぼれ痕が顕著である。5も先端部に微細な使用痕を残す。10も同様に上部に微細な使用痕が認められる。12は確認時に出土した石器で両側縁に微細な調整痕を顕著に残す。形態から切断具としての使用が考えられる。13は表面右上に調整痕が若干施されている。

他は単なる剥片であり、中には十分石器製作が可能とみられる剥片(9)もあるが、加工などは認められない。6～8・10の黒曜石は不純物が混入し、黒色味が薄れる。石材は1～10は黒曜石、11はチャート、12は(珪質)頁岩、13～15は同一母岩のメノウである。

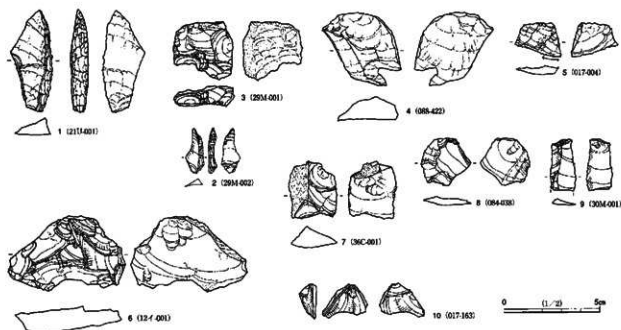
(2) 地点外及び単独出土の石器 (第9図, 第4表)

本遺跡での石器は、Z14地区以外では断片的に遺構あるいはグリッドからの出土が認められるだけであった。遺構出土の石器については旧石器時代の可能性が高い石器のみ図示し、グリッド出土のものについては数点の屑片は省略した。またグリッド出土石器の出土層位は、大半が第III層のソフトローム層中であるが、これらの多くは第V～VI層に包含されていたものと考えられた。前述した石器群と比較すると、一概にはいえないが、より古い時期に位置づけられるものもある。石材についても偏りは認められず安山岩・メノウ・頁岩・チャート・黒曜石とバラエティーに富む。

ナイフ形石器 1はU21区の大グリッドから1点だけ出土したナイフ形石器で、横長の剥片を素材とし背面は1方向からきれいに剥離し、基部には若干自然面を残す。左側縁の刃潰しも表面だけに施される。石材は安山岩である。2はM29区の大グリッドから3の撻器とともに出土したもので、先端部の上に小さな整形剥離が施される。左側基部でも極小の刃潰しが観察でき、細石器を思わせる小型品で、石材はメノウである。

撻器 3もM29区の大グリッドから出土した石器で、裏面には自然面を残す。表面には3回以上の剥離痕が認められるため、残核部分を石器に利用したものであろう。刃部には大きな剥離により、抉りをもたせている。石材は珪質岩である。

剥片 7点を図示したが、5は下端部に微細な調整痕が認められる。7は主剥離面の側縁に小さな調整痕が残る。いずれも石器として使用されたものであろう。6は大型剥片ながら加工は認められない。9は石刃に近い形状を有する。8・10は遺構内から検出されたものでこの時代に属するかは疑問も残るが参考までに呈示した。石材は1・4が安山岩、2・6はメノウ、3は珪質岩、5・7・8・9が頁岩、10は黒曜石である。また、この黒曜石には不純物が含まれず半透明な良質品で、Z14地区出土の黒曜石とは明確に異なる材質であった。



第9図 地点外出土石器実測図

第2節 縄文時代

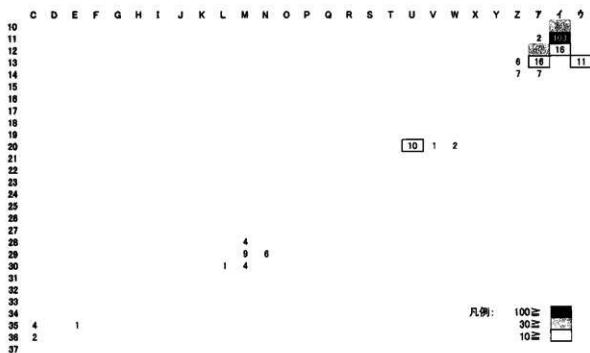
今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、全体で整理箱2箱程度にすぎない。遺構や包含層は検出されず、出土遺物は弥生時代ないし古墳時代の遺構に混入したものと、グリッド一括で取り上げられたものである。数量的、分布的にまとまりが認められたのは、調査区北東端の加曾利E式後半の土器と、調査区南西端の前期末葉から中期前葉の土器である。それぞれ、印旛沼低地に直面した台地縁辺部に近く、付近の調査区外に遺構や遺物の集中区が存在した可能性を示している。路線状の調査区の間端がすでに削平されていたことによって、中心的な部分を調査できなかったことも十分考えられる。

1 縄文土器

ごく小さな破片と劣化の著しい破片を除くと、縄文土器は遺跡全体で約1,200点出土している。遺構等に伴うものはなく、同時期の資料がとくに集中する例も認められなかったため、大グリッド単位での報告にとどめることにした。遺構に混入していたものもグリッドに戻して扱う。分類は、中野修氏が示した分類大綱（中野2000）に準じて群の大別を行う。ただし、一部を変更しており、群№には空白がある。細分は行わず、本文中に随時型式名等を記載して、時期を確認することに主眼を置いた。なお、観察事項は第6表に示した。

(1) 縄文土器分類基準

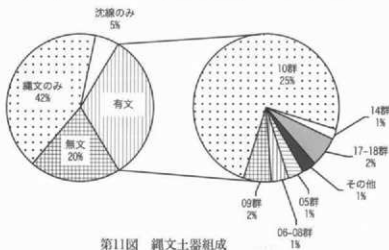
第1群 燃糸文系土器	第9群 阿玉台式土器
第3群 条痕文系土器	第10群 加曾利E式土器
第4群 羽状縄文系土器	第12群 称名寺式土器
第5群 浮島・興津式系、諸磯式系土器	第14群 堀之内式土器
第6群 前期末葉土器	第17群 後期安行式土器
第8群 五領ヶ台式土器	第18群 晩期安行式土器



第10図 縄文土器分布 第10群

第2表 縄文土器集計結果

地点	無文	縄文	沈線	01群	03群	04群	05群	06-08群	09群	10群	12群	14群	15群	17-18群	計
計	232	489	63	2	4	1	14	14	23	293	2	9	3	25	1,174
B36	1	5					1	2							9
B37	2	1													3
C35	6	34	10				8	3		4			1	5	68
C36	19	13	6					4	6	2			1	2	53
C37	61	22	3	2	2		6	4	11			1		5	117
D35	7		3						6					2	18
E35	2	3	4							1				4	14
I34	2	2										1			5
J33			1				2								3
L30										1		1			2
L30		1													1
M28	3	3								4			1		11
M29	4	3								9					16
M30		5						1		4					10
N29	2	8								6		5			21
U20		5	1							10					16
U21			1		1										2
V20	1	1	1							1				1	5
W20										2					2
Z13		2								6					8
Z14		7				1				7					15
711	2	4	1							2					9
712	6	65	5							47		1		2	126
713	1	10	4							16				4	35
714		6								7					13
f10	31	45	3							34	2				115
f11	62	215	16		1					103					397
f12	11	14								16					41
913	9	15	4							11					39



第11図 縄文土器組成

(2) 時期別の出土数と分布状況

縄文のみ、沈線のみ、無文の破片は基本的にそれ以上分類しなかった。その他の有文あるいは型式分類が可能な土器は全体の33パーセント、390点である。早期前葉から晩期前葉まで、断続的に出土しており、比較的まとまっているのは、中期後葉、分類区分でいうと第10群（加曾利E式土器）の後半の土器である（第11図）。第1表には大グリッド別に集計した結果を示した。加曾利E式土器は調査区内の4か所に集中が認められる。とくにI11区では50mグリッドで100点以上出土しており、調査区北東端に大半が集中している（第10図）。

(3) 観察の結果

以下は掲載資料について分類ごとの傾向とおもな土器について記載する。

第1群 燃糸文系土器（第12図1, 2, 図版37）

1・2はいずれも口唇が肥厚せず、縄文が疎に施文される。稲荷台式であろう。第1群土器はこの小片2点ですべてである。

第3群 条痕文系土器（第12図3～5, 図版37）

3～5は条痕文のみまたは無文の口縁部小片であり、詳細な時期は不明である。5は薄く、口縁端部は角頭状を呈し、丁寧に仕上げられている。胎土には繊維を含む。繊維土器は断面にドットを示した。

第4群 羽状縄文系土器（第12図6, 図版37）

6は附加条縄文を地文とし、半截竹管の内側を用いた平行沈線によって文様を描く。上段はXやY字状の鋸歯状文のなかにさらに沈線を充填する。関山II式ないし黒浜式であろう。繊維土器である。

第5群 浮島・興津式系、諸磯式系土器（第12図7～11, 図版37）

9は変形爪形文、10は波状貝殻文、11は三角文を特徴とする土器で、浮島式であろう。8は結節浮線文が重畳するものである。7は幅の狭い結節浮線文によって横区画と2本の弧状のモチーフが描かれる。浮文が剥がれていて拓本ではわかりにくい。7・8はこの時期の異系統の土器であろう。7は十三菩提式であろうか。

第6群 前期末葉土器（第12図12・13, 図版37）

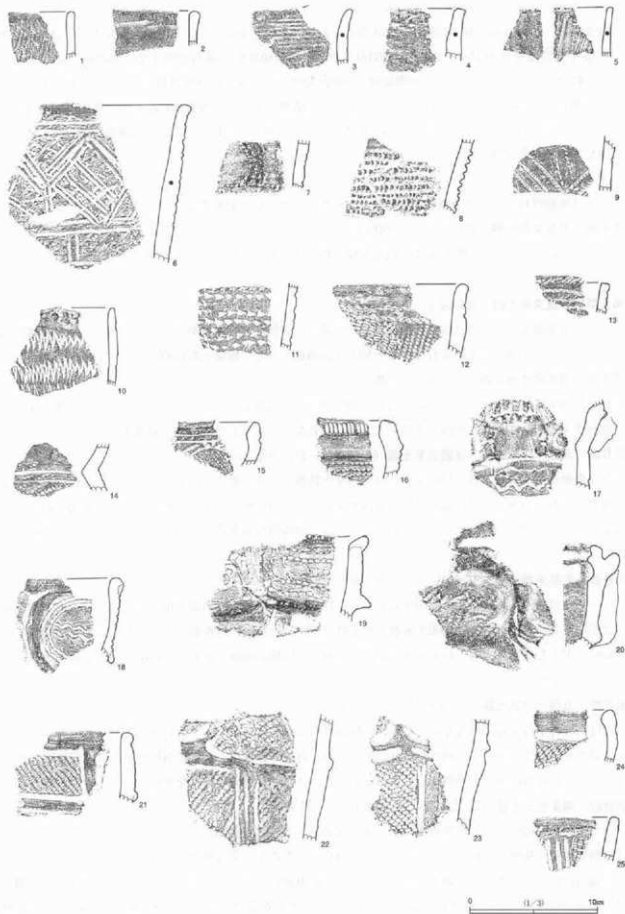
12・13は口縁部に縄文原体の側面圧痕をもつ。12は2段、13は1段の縄を用いている。なお、非掲載資料は前期末葉の6群から中期初頭の8群までを区分せず、全部で14点を数える。これらはすべて調査区南西端から出土しており、若干のまとまりが認められる。印旛沼低地に南面する台地縁辺部に遺物の集中が存在する可能性がある。

第8群 五領ヶ台式土器（第12図14～16, 図版37）

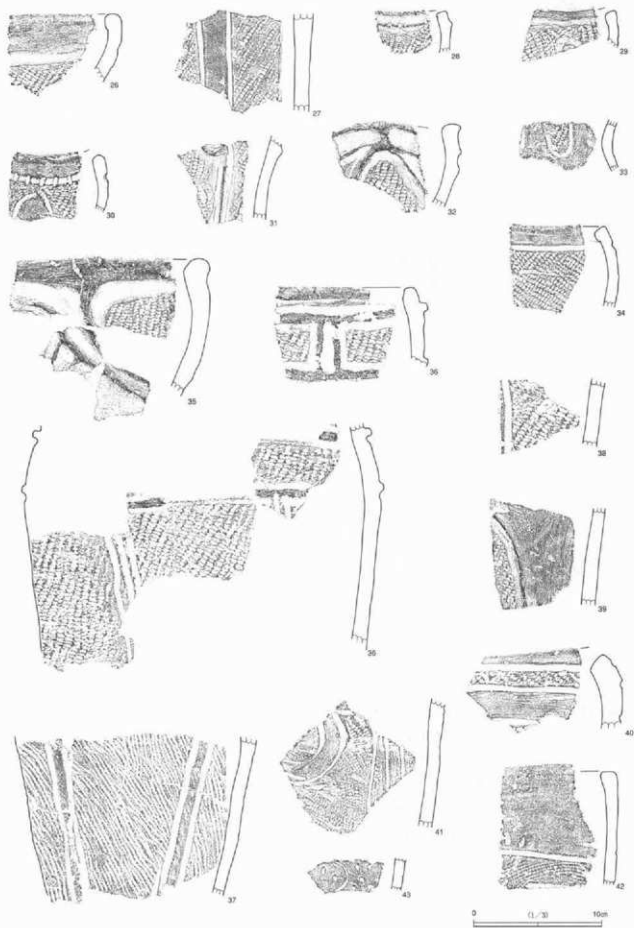
15は弧状の平行沈線間に交互刺突を施す。16は隆帯に沿う沈線の中に半截竹管状工具による刺突文を施す。刺突文の向きはすべて上側に開いている。五領ヶ台式であろう。14は屈曲部の破片で、口縁側の無文部をもち、屈曲部以下に文様帯をもつものであろう。3点とも雲母・砂粒を含む。

第9群 阿玉台式土器（第12図17～20, 図版37）

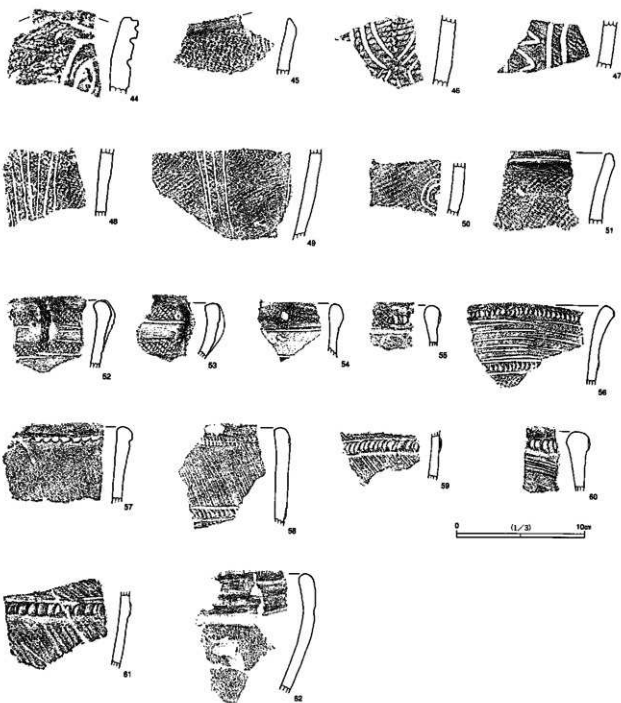
17・19は高い隆帯に単列の角押文が沿うものであり、朝顔状の突起がつく。阿玉台Ib式であろう。18は隆帯に複列の角押文が沿うものであり、阿玉台II式であろう。20は隆帯の一部分に沈線が沿い、隆帯上や区画内に縄文が施される。阿玉台IV式であろう。非掲載資料を含めても23点にすぎないが、すべて調査区南西端のD35・C36・C37区から出土しており、まとまりが認められる。印旛沼低地に南面する台地縁辺部に遺物の集中が存在する可能性がある。



第12圖 縄文土器 (1)



第13图 縄文土器 (2)



第14図 縄文土器 (3)

第10群 加曾利E式土器 (第12・13図21～39, 図版37・38)

今回の調査で唯一まとまった量が出上している。非掲載資料を加えると293点と圧倒的に多い。無文・縄文のみとしたものについてもこの時期の土器が大半とみられる。加曾利E式期は、県内の様相として集中居住型の集落が多数形成された前半期＝加曾利EⅠ式～Ⅱ式期と、後半期＝加曾利EⅢ式～EⅣ式に分けることができる。当遺跡では前半期とわかる土器は少なく、掲載資料では21・22・36・37のキャリパー形土器4点のみである。23～27・38のキャリパー形土器はEⅡ式とEⅢ式のどちらに属するか明確でないが、EⅡ式に特徴的な曾利系及び連弧文系土器が非掲載資料も含めて1点も見られないことから、EⅢ式に伴うものが多いと考えられる。28～35, 39は後半期を代表する意匠充填系土器群と横位連繫弧線文土器群である。62はやはり後半期の粗製土器である。先に述べたように、この時期の土器は出土土器全体の

25%、行文字器の7～8割を占める。この時期の遺構は周辺遺跡群で点々と住居跡が見つかっている。分布は第10図のように調査区北東端、すなわち印旛沼低地側に偏っている。

第12群 称名寺式土器 (第13図43, 図版38)

43は蛇行する沈線の内外に列点文を配するものである。

第14群 堀之内式土器 (第3図41, 第14図44～51, 図版38・39)

41はJ字状等のモチーフと垂下沈線を持ち、沈線間は磨り消される。網取式などにみられるモチーフであろう。この群に含めておいた。44は深く太い沈線による単位文をもつ波状口縁の土器である。46・50は浅い3本一組の沈線で蕨手状などの文様が描かれる。47はさらに浅い沈線である。45・51は幅の狭い口縁部無文帯直下から垂下沈線が引かれている。48・49は集合沈線の胴部破片である。非掲載資料を含めても9点を検出したのみである。

第15群 加曾利B式土器

非掲載の小片3点のみであった。

第17群 後期安行式土器 (第14図52・53・56～58, 図版39)

52・53は帯縄文の間を貼瘤で連繫する平縁の深鉢である。57・58は粗製深鉢である。紐線文の代わりに連続刺突文が2段に配される。56もこの時期の土器であろう。

第18群 晩期安行式土器 (第14図54・55・59～61, 図版39)

54・55は精製深鉢である。54は口唇上の突起、55は指頭で押圧された横長の貼瘤から晩期と推定した。59～61は17群ないし18群に伴う粗製深鉢であろう。非掲載資料を含めた集計は17～18群として一括している。出土数は非掲載資料を含めても25点にすぎないが、そのうち18点は調査区南西端から出土している。調査区外に分布の中心が存在する可能性がある。

分類外 (第13図40・42, 図版38)

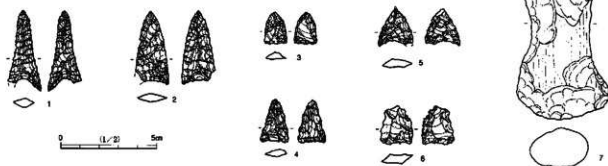
分類ができなかったものである。40は分厚い波状口縁の土器である。縄文施文後に沈線を引き、沈線間を磨り消している。中期または後期の土器であろう。42は平縁で、幅の広い口縁部無文帯の下に縄文による横方向の文様帯をもつ。内外面とも調整は粗く、施文も粗野な印象を受ける。称名寺式、加曾利B式の可能性を検討したが、確証をもつに至らなかった。

2 土製品 (第15図, 図版40, 第6表)

土製耳飾1点、土器片鍾7点、土器片円板1点が出土している。1の土製耳飾はほぼ半分が遺存している。中央には穿孔の痕跡があり、けつ状耳飾と思われるがスリット面は残っていない。両面の窪み方が異なるので表裏が存在したかもしれない。列点文は先端の尖ったもので穿たれ、深さは最大で2mmほどある。微細に見た先端はささくれ立っている。前期から中期初頭の製品と考えられるが、出土したI10区ではこの時期の土器が出土していない。当遺跡の主体となる弥生時代後期から古墳時代前期には、この製品とよく似た土製紡錘車が知られており、可能性を検討した結果、表裏及び側面が窪んだ形状から耳飾であろうと判断したものである。しかし、胎土や調整からみてもよく似ていて断言はしにくい状況である。2～8の土器片鍾と9の土器片円板は、中期の土器片を再利用したものである。加工及び使用の時期は、素材となった土器の示す縄文中期阿玉台期から加曾利E期である可能性が高い。これらが数多く出土したI11付近は、加曾利E式土器の分布の中心と重なっている。



第15図 縄文時代土製品



第16図 縄文時代石器

3 石器 (第16図, 図版40, 第7表)

弥生・古墳時代の遺構や、遺構外から出土した石器のうち、形状等から縄文時代の石器と判断したものを掲載する。石鏃5点、剥片1点、打製石斧1点である。1・2・4・5は凹基形、3は平基形の石鏃である。6は石鏃の未完成品であろう。石材は4がチャート、ほかは黒曜石である。7は分銅形ないし撥形の打製石斧である。砂岩製である。

なお、弥生時代・古墳時代の遺構から出土した磨石類や軽石類等は、形状からでは縄文時代の製品と区別できないものが多く、個別的に時期の帰属を決定するのは難しい。縄文時代の石器が、砥石・磨石・台石等に再利用されるケースも少なくないようである(西野・鈴木2002)が、今回は出土した遺構の時期に伴うものとして掲載した。磨石・砥石類のなかでは、縄文石器が再利用された例としては、001号跡から出土した第19図24をあげることができる。本資料は、縄文後・晩期の石剣を研磨や敲打に再利用したものであろう。

第3節 弥生時代・古墳時代

1 弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡

001号跡（第17～19図、図版4・41）

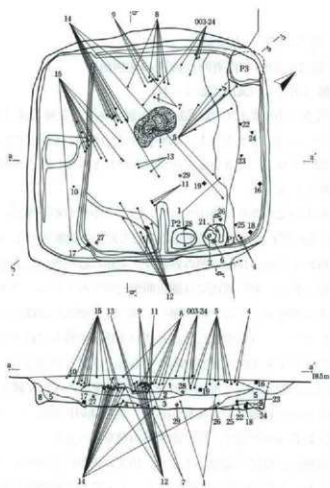
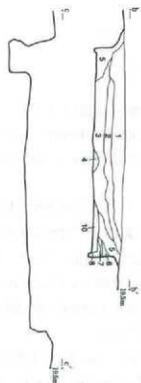
弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡の南半部北寄り（M29グリッド）に位置する。4.6m×4.9mの隅円方形をなし、確認面からの深さは0.6mである。主軸はN49度Wである。時期をさほどおぼえずに、少なくとも改築が1回は行われたとみられる。最終的には自然埋没し、覆土上層には土器溜まりが形成されている。

炉は主軸上の北西寄りに検出されている。2か所の炉が連結したような瓢箪形をなす。北側の炉A、南側の炉Bにそれぞれ、南東縁（住居の中心方向）を遮断するように土器片が立位で埋め込まれている。炉囲いの内側には7cm～10cmの凹みがあり、全体に被熱硬化し、底部付近は赤色化している。住居跡内区の床面は平坦である。炉の周辺には硬化面が形成されている。外区には、壁に沿って高さ5cm～10cmのベッド状の高まりが囲む。左辺（南西側）では、硬化面及び貯蔵穴と、高まりとの境界に仕切溝が走る。下辺（南東側）では、一旦硬化した床にわざわざ盛土を施して高まりを構築している。

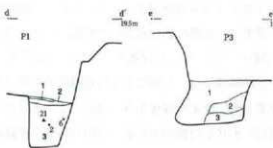
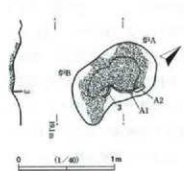
東側隅のP1は深さ約54cmの貯蔵穴である。埋戻しがなされ、その埋土から多くの土器が出土した。P1と仕切溝との間に並んで検出されたP2は、床とみられた硬化土層の下から検出された。廃棄された貯蔵穴、または出入口施設の可能性がある。北側隅のP3は、ベッド状高まりの上面で検出された貯蔵穴である。深さ約47cmの方形で、堅穴住居跡の壁を挟り込む。

堅穴住居跡に直接伴う遺物は少ない。炉Aの炉囲い土器片A-1、A-2と、P2出土の2・6が改築前の土器とみられ、炉Bの炉囲い土器片3と、1・7が改築後の土器とみられる。炉囲い土器片のうち、炉Aに示すA-1、A-2は、径の復原ができない大型の破片である。A-1は、粘土帯積み上げ単位に沿って水平に割れた壺胴部下腹部片（30cm×12cm）で、上辺破断面が被熱し黒（赤）色化している。久ヶ原系の大型壺で、外面にハケのち丁寧なミガキが施される。A-2は、上部破断面がやや風化した壺胴部下腹部片（13cm×7cm）である。薄手で、外面に横の密なハケが施される。3は炉囲いの壺口縁部片（14cm×4cm）であるが、被熱程度は軽い。「く」の字口縁壺としては、口縁端部の刻み、頸部湾曲の緩さ、外面ナデ調整等の点が古相を示す。口縁端部は、右側に布等の組織圧痕が刻まれ、左側に鋭利なへら状工具痕で刻まれるといった、在来要素と新出要素の混在がみられる。1・2は薄手の小型鉢である。擦るようなへらナデ調整と、鋭い口縁端部の形状が特徴的である。五領式の成立前後に盛行する器種である。6は壺の小型土製品である。縦のハケが外面全体に施されたのち、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整が施され、歪んだ器形に反し丁寧な薄手の造りをもつ。小型鉢と同じ明るい色調である。7は東海系開脚高杯の杯部である。「ハ」の字脚の破損後に被熱している。ハケを inclusion 縦ミガキで消し、赤彩を施す。内面も赤彩の可能性はあるが、黒色化していて明瞭でない。外面中腹に煤が帯状に付着する。

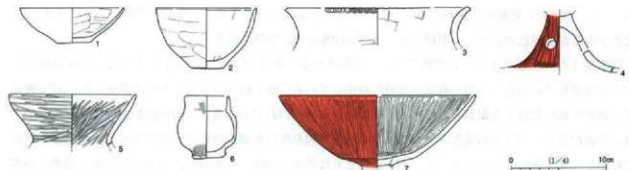
銅製品1点、鉄製品1点、石器類7点、土製品4点が下層及び床面から出土している。27は銅鏃である。ほぼ完形であるが、刃部や端部が腐食し粉化している。弥生時代末ごろに多い非精製の長三角形銅鏃で、錫率の低い軟質の青銅製とみられる。整形時の研磨痕がわずかに残る。29は鉄製工具類とみられ、木質の付着状況から刀子等の茎とみられる。24は雲母片岩を用いた縄文時代の石剣であるが、両側面を砥石に転用し、端部を蔽打に用いている。25・26はともに半拳大の礫で、被熱し、破損している。前者は砂岩で、蔽打痕が認められるが、後者は流紋岩で使用痕跡は不明瞭である。軽石は4点出土しており、図示し



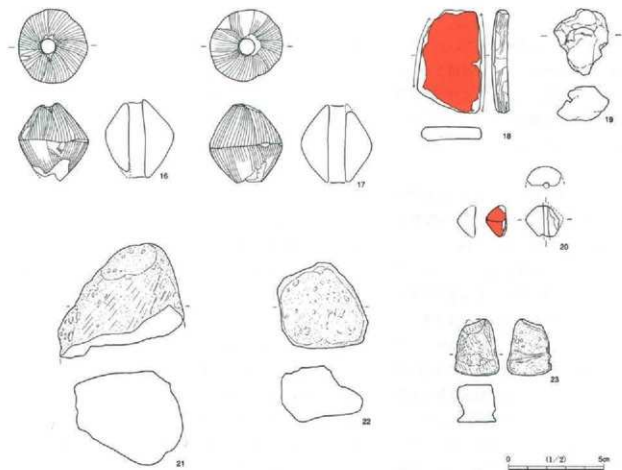
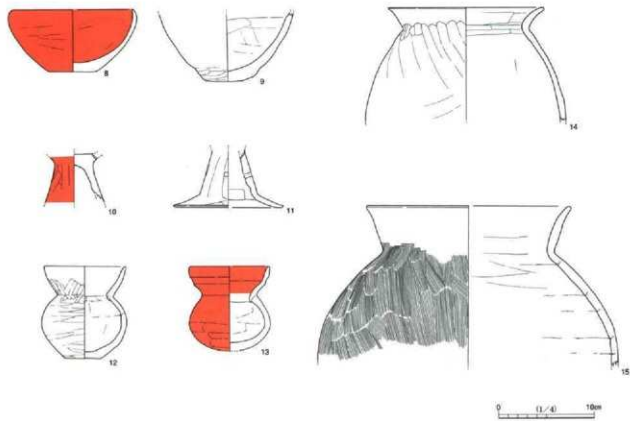
- 001
- 1. 黒褐色土
 - 2. 黒色土
 - 3. 暗褐色土
 - 4. 暗褐色土
 - 5. 暗褐色土
 - 6. 暗褐色土
 - 7. 暗褐色土
 - 8. 暗褐色土
 - 9. 暗褐色土
 - 10. 黄褐色土 (粘土)
 - ローム軟泥
 - ローム多量混
 - ローム多量混
 - ローム混
 - ロームプロット混
 - ロームプロット混



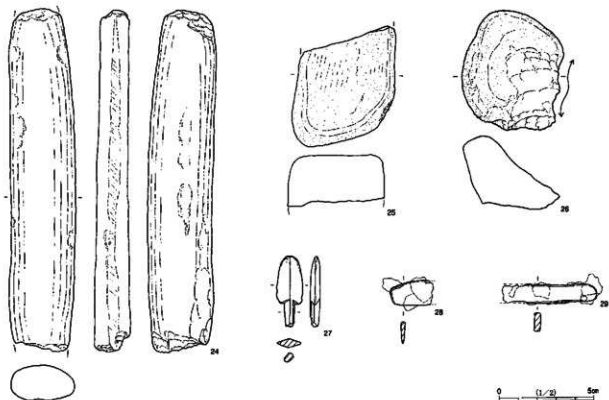
- P1
- 1. 黄褐色土
 - 2. 黒色土
 - 3. 暗褐色土
- P3
- 1. 暗褐色土
 - 2. 黒褐色土
 - 3. 暗褐色土



第17図 001号跡 (1)



第18图 001号迹 (2)



第19図 001号跡 (3)

た。21～23は白色系の軽石で、いずれも平らな面が多数形成されている。とくに23は切傷のような擦痕が1面で観察される。16・17は鍾とみられる土玉である。うち1点は攪乱溝から出土した。縦ハケで調整され、明瞭な稜を有し、ともに片面が黒斑に覆われる。18は土器片転用砥石である。外面に赤彩を有する壺の胴部片で、破断面のうち3面が研磨され平滑である。19は一塊りの粘土を、折返すように指で数回こね、指紋が残る不整形な状態で焼成された粘土塊である。炉の周辺で出土した。

<001号上層土器溜まり>

001号跡上層には、おもに古墳時代中期とみられる土器溜まりが形成されている。001号跡出土土器は総重量3.8kg超で、大半が土器溜まりに属す。001号跡の埋没途中、壁上部の崩落等により形成された楯鉢状の凹地(3層上面)を利用して、土器等が投入されたものとみられる。

4は椀形高杯の脚部である。三方に円形透し孔を配し、裾が大きく開く。外面は縦ハケのち裾部に縦ミガキを施し、赤彩する丁寧な造りである。5は直口壺の口縁部である。胎土に雲母を多く含む。薄く丁寧な造りで、内面のミガキは明瞭である。8は和泉式古相に含まれる平底杯である。両面赤彩で、ナデを基調とし、強いヨコナデで口縁部が内湾する。9は丸底杯である。厚手の粗い造りで、口縁部にヨコナデ調整、底部には粘土板付け足しによる段があり、ケズリにより丸底に造られる。10・11は和泉式の屈折脚高杯の脚部である。ともに外面は稜を明瞭にもつ縦へラナデ、内面は粗いへラケズリである。10には外面赤彩がみられ、11には中央部に小孔がみられる。12・13はともに小型丸底壺(埴)である。ただし、12は平底になっている。口縁部と頸部の中間に稜を有する。13には赤彩の痕跡がみられる。14・15は縦長球形をなす甕である。14は口縁部が一周する資料で、頸部がしっかり屈曲し、ナデ調整を主体とする。和泉式の甕である。15は遺存部位が少ない。口縁部に強いヨコナデ、頸部に粗い横のへラナデ、胴部外面に細かい

ハケが施される。以上、土器溜まりには4・5のように下層と同時期の遺物も含まれるが、下層とは明らかな空白期間があり、主体は和泉式の土器群である。

鉄製品1点、土製品3点が出土している。28は鉄製鎌の切先で、小片である。曲刃鎌の可能性が高い。土器溜まりに伴う。20は土製琺瑯の破片である。縦ミガキと赤彩が施され、焼成されている。大きさ、特徴は003号上層土器溜まり出土例と同じである。ほかに、焼成粘土塊が2点出土し、1点は土器溜まりに伴う。窯状繊維の痕跡が多く認められ、意図的な造形物とはみられない。壁材などの可能性がある。

002号跡 (第20図、図版4・41・71)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡の南半部北寄り(N29グリッド)に位置し、平成6年度と9年度に分けて調査された。4.9m×5.0mの隅円方形をなし、深さは確認面から0.3mである。主軸はN65度Eである。西辺が後世の溝により破壊されている。

炉ははっきり検出できなかったが、南東側床面付近に焼土が検出されている。覆土中層にも大きな焼土塊が含まれている。床面は、中央付近で硬化面が観察される。主柱穴は検出されていない。ただし、北側と南側の隅部にそれぞれ浅い土坑がみられ、土層からこれらが本跡の付属施設と観察された。

土器総量は0.2kgと少ないが、床面付近で図示可能な五領式の土器群が出土している。1は小型丸底鉢(埴)である。外面と口縁部内面に太いハケがみられ、外面下腹部には規則的な調整痕はみあたらない。二次被熱がみられる。2は開脚高杯の杯部である。内外面とも丁寧な縦ミガキと赤彩が施される。薄手で、杯部の浅さが特徴的である。3は台付壺の脚部である。外面には細かな単位で明瞭に施された細いハケが観察される。4は壺の口縁部細片である。細いハケが内外面にみられ、胎土や焼成から3と同一個体の可能性がある。口縁端部にハケ刻みが認められる。

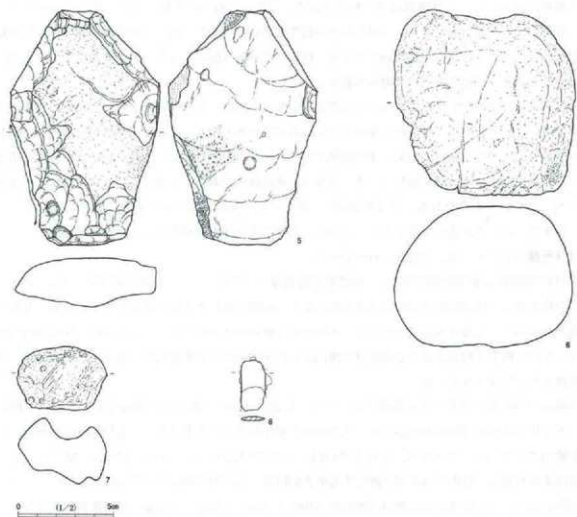
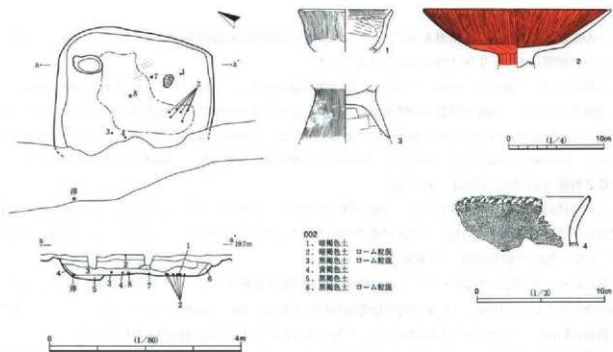
石器は3点、鉄器は1点出土した。5は磨・砥石類としたが、周囲を剥離された石核的な要素をもつ。硬質で重い灰色の石材で、剥離面に発泡した明緑色部分が露出する。玉などの原材料を採取した残材である可能性がある。6は敲打痕のある準人の礫である。灰味緑色の石材で、表面に石の皸が縦横に走る。敲打により、皸に沿って一部欠損している。7は白色系の軽石である。小型で、抉れは穿孔による可能性があるが、擦痕は不明瞭である。8は鉄製品で、鋭ないし工具の刃部とみられる。錆化の進んだ小片である。薄手で、両刃であるが、錆はない。ほかに、鉄塊に近い滓1点が出土している(第16表)。

003号跡 (第21・22図、図版5・41~43・71)

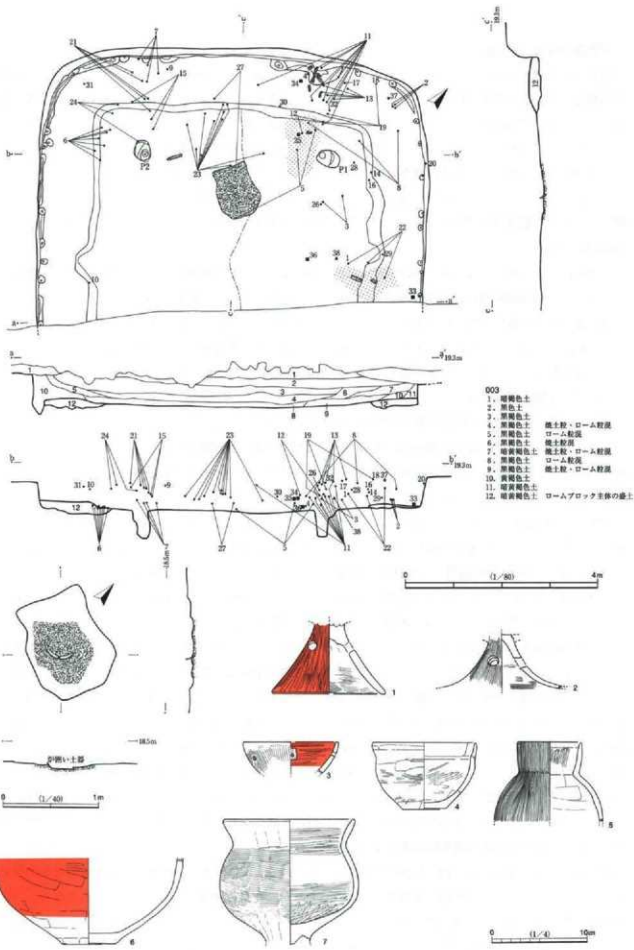
古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(N29グリッド)に位置する。幅8.2mの大きな隅円方形をなし、確認面からの深さも0.8mに及ぶ。本跡の南半分は調査区外であったため、北半分のみ調査されている。主軸はN47度Wである。本跡中央を後世の溝が横断しているものの、床面付近は攪乱されていない。覆土下層には焼土と炭化材が検出されたが、並び方は不連続で、量は少ない。覆土上層には土器溜まりが形成されている。

主軸上のやや北西寄りに炉が検出されている。1.2m×0.9mの範囲が被熱硬化し、6cmほど凹んでいる。赤色化がみられる炉床中央部では、大きめの土器片が立位で検出された。主柱穴は4か所のうち2か所が検出されている。外区には、柱穴と壁の間にかけて幅1.2m、高さ8cm~15cmの、盛土によるベッド状の高まりが廻る。壁際には小穴が連続する壁溝が廻る。床の硬化面は内区のみ確認されている。

炉囲いには、水平に割れた壺胴部下腹部片(30cm×9cm)を利用している。径の復原ができないが、胴丸の大型壺とみられ、外面はハケのち縦ミガキ、内面は比較的丁寧なナデ調整が施される。上部破断面は



第20圖 002号跡



第21図 003号跡 (1)

二次被熱を受け、黒色化している。

明らかに下層出土といえる土器は、2・4～7である。これらは遺存度が比較的好く、いずれも五領式の古相を示す。2は碗形高杯の脚部で、三方に円形透し孔を配し、裾部が大きく開く。細いハケが密に施される。4は小型丸底鉢とみられるが、平底に造られている。粗いハケのうち、荒々しいヘラナデが小単位で施される。5はヒサゴ壺である。淡い色調を有し、丁寧な縦ミガキで器面が滑らかに仕上げられるなど、東海のものにかなり忠実で、他とは異なる質感をもつ。6は壺の胴部・底部である。外面は細い斜めのハケがナデにより消され、赤彩が施される。7は台付壺で、身はほぼ完形である。口縁部ヨコナデのち縦のヘラナデ、胴部外面に横の太いハケ、内面には細いが荒々しいヘラナデ（ミガキ）が観察される。脚部破損後に被熱している。

土製品は2点が出土している。33は東壁断床面で出土した、土製紡錘車の完形品である。専用に焼成されたもので、側面が直角に近い比較的扁平な円形をなす。孔の周囲に使用による欠損がみられるほか、糸紡ぎの際に付く放射状の傷が観察される。36は土器片転用砥石である。内区床面の、やや浮いた位置で出土している。土器片の両側面に縦方向の擦痕が確認できる。土器片外面には網状燃糸文を山形沈線文で区画した文様帯と、その外区に赤彩が認められ、久ヶ原系の壺胴部とみられる。

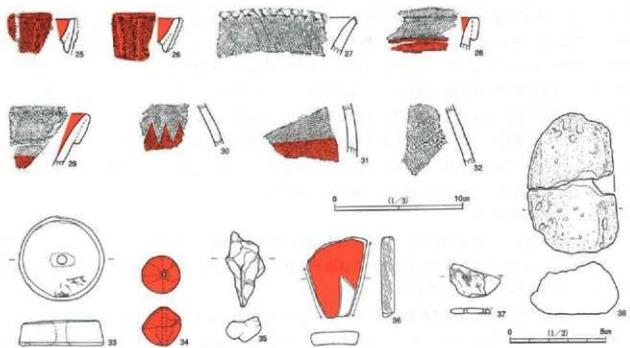
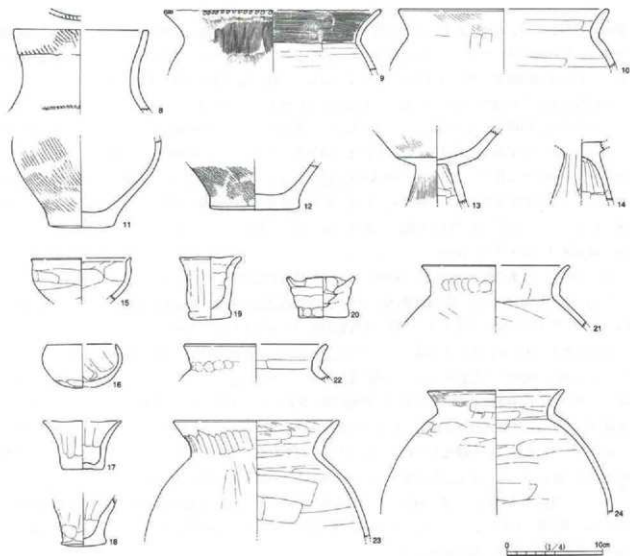
<003号上層土器溜まり>

003号跡上層には住居跡直後及び中期後半の土器溜まりが形成されている。

003号跡からは総重量約5.5kgの土器が出土し、出土位置は3層前後を境として概ね上下2か所に分離が可能で、上層土器が多くを占める。堅穴住居跡の自然埋没過程で形成された掘り鉢状の凹みを利用して、土器が投入されたとみられる。

下層の時期に近い遺物が多く含まれ、1・3・8～12・16・25～32がそれに該当する。1は開脚高杯の脚部である。三方に円形透しを配し、細いハケのうち外面に縦ミガキが施される。3は小型鉢か壺の口縁部とみられる。1/5周ほどの破片に2か所の小孔が確認できる。外面の縦ハケは穿孔の前、内面のヘラミガキは穿孔後に施されている。口縁上端部に面をもち、内面にのみ鮮やかな赤彩が施される。9・10は壺の口縁部で、ともに小片である。9は外面にヨコナデのち細い密なハケ、端部に等間隔のハケ刻みが施され、10は外面に太いハケのちヨコナデ、ヘラナデが施される。8・11は印手式の壺である。8は高さ1mm～2mmの低い口縁部肥厚帯を有し、その外面と上端部に附加条縄文が施される。頸部は無文帯で、肩部以下に再び附加条縄文が施される。11は8と同一個体の底部とみられる。12は印手式の壺底部で、縄文が密に施される。16は小型鉢とみられる。粗い調整ながら薄手の造りである。拓本に示したものでは、25・26・28～31が久ヶ原系の装飾壺である。縄文の文様帯と、赤彩を有する無文帯とで構成され、内面は無文・赤彩を基本とする。口縁部文様帯が赤彩された25・26は、ともにヘラ刻みを伴う棒状浮文がつく。縄文の種類には、羽状（25・26・30）とそうでないもの（28・29）や網目状（31）があり、31は山形沈線文により区画される。27・32は印手系の壺で、ともに附加条縄文を有する。装飾的であり、細かい押圧波状口縁を有し、肩部に波状の結節回転文3条が追加施文される。

和泉式以降の土器器では、13・14が屈折脚高杯とみられる。13は厚手の造りで、杯部下部の稜が明瞭である。ハケとヘラナデにより調整される。14は脚部であり、外面に規則的な縦ヘラナデがみられる。二次被熱を激しく受ける。15は丸底杯とみられるが、小片である。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整である。17～20は鉢形の手捏ね土器である。前3者は整形後の外面にヘラナデ（ケズリ）調整を加えている。



第22图 003号跡 (2)

20のみ調整が一切されず、底面には木葉痕が残る。21～24はいずれも縦長球形の胴部をもつとみられる甕である。比較的明るい色調で、口縁部をヨコナデ調整し頸部からヘラナデを加える、頸部が明瞭に屈曲する等、和泉式の特徴を示す。24は隣6mを隔てた001号跡土器溜まりの破片とも接合している。

土製品2点、滑石製模造品1点、軽石1点は、おもに焼土・炭化材層の上で出土した。34は縦ミガキと赤彩が施され、焼成された土製甕玉である。35は2・3本の細い粘土紐を指で数回こね、不整形の状態焼成された粘土塊である。001号跡出土例と特徴を共有するもので、焼土直上に位置することから、古段階の土器溜まりに伴うとみられる。37は双孔円板である。1/3が欠損した灰色の滑石製模造品で、多数の辺からなる多角形をなし、2か所穿孔される。側面及び表裏面に製作時の擦痕が認められる。38は白色系の軽石である。片面に緩く凹む摩耗面が観察されるが、擦痕は不明瞭である。

004号跡（第23～25図、図版5・43・44・72・73）

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り（M30グリッド）に位置する。一辺約5.2mの隅円方形をなし、深さは約0.6mである。南西辺は調査区外のため未調査である。主軸はN50度Wである。覆土に多量の土器を含み、住居跡廃絶直後の土器溜まりが形成されている。

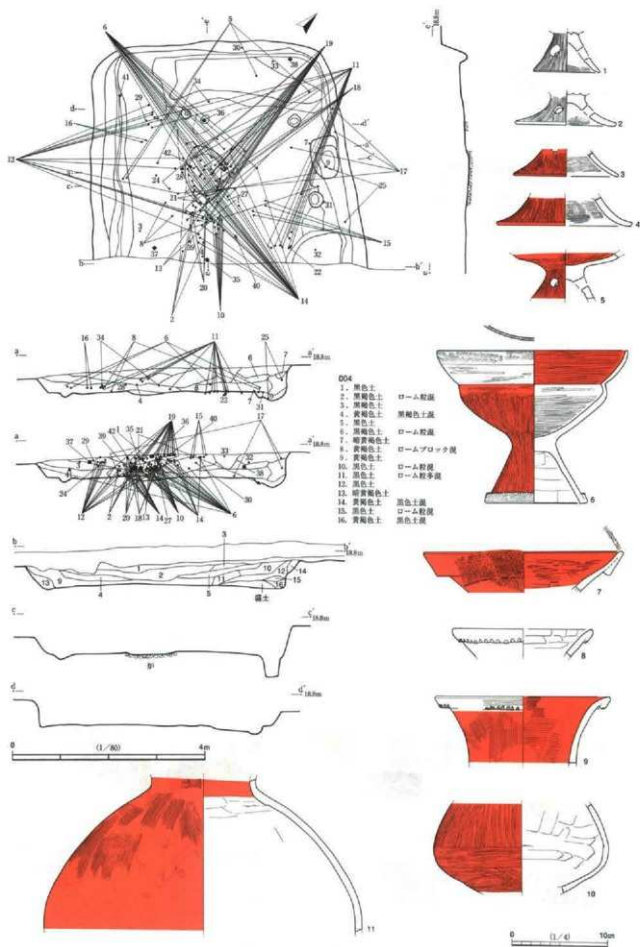
炉は主軸上に1か所、その北西隣に1か所検出されている。主軸上の炉は被熱硬化していないものの、1.2m×0.8mの範囲で赤色化がみられ、最深部12cmほどの凹みが認められる。北西側の炉は小さく、径20cmほどの焼土が検出されたのみである。住居跡内区の床面は低く平坦であり、炉の周囲を中心に硬化面が形成されている。主柱穴は4か所のうち2か所が検出されている。径は20cmと25cmであり、両者とも深さ5cmの小穴であるが、底が硬化しており、柱の重みで凹んだ痕跡と考えられた。住居跡主柱穴よりも北西側の外区には、6cmほど盛土がなされ、ベッド状の高まりが構築されている。高まりの上面に硬化面はみられない。外区南西側では、壁に向かってむしろ緩やかに低くなる。主軸上北東側の壁際には、径0.9m×0.5mの隅円長方形をなす土坑が認められる。貯蔵穴とみられる。貯蔵穴の南隣には、径30cm、深さ12cmの小穴が、硬化面除去後に検出されている。

床面及び最下層出土遺物としては、6・11・16・25・34が挙げられる。6は著しく装飾的な精製の高杯である。在来系の準完形品で、遺存状態も良好であるが、状態のよい杯部は本跡から出土し、やや風化がみられる脚部は、隣5mを隔てた005号跡土器溜まりから出土している。内湾する有段口縁と、ヘラ刻みをもつ折返し脚部が特徴的で、それぞれの外面と口縁端部に細かい縄文が施される。赤彩は明瞭に塗り分けられ、赤彩部と内面底部は入念にミガキ込まれている。11は無文の二重口縁壺とみられる肩部片で、細いハケをミガキ消しており、外面全体に赤彩が施される。16は台付甕の脚部とみられ、二次被熱を受けている。粗いハケ調整で、破片上部は広がり始めている。25は装飾壺の折返し口縁部片で、肥厚帯内外面に網状燃糸文、各下部の無文帯には赤彩が施される。34は33とほぼ同じ文様をもつ印手式壺の肩部片で、附加条縄文が施文され、その上部に結節文が追加され区画される。

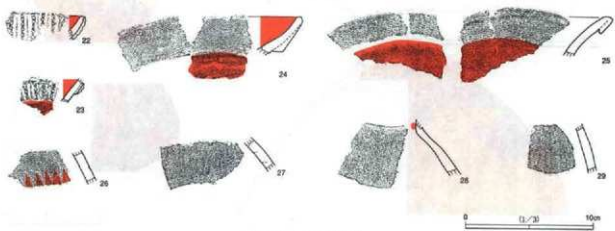
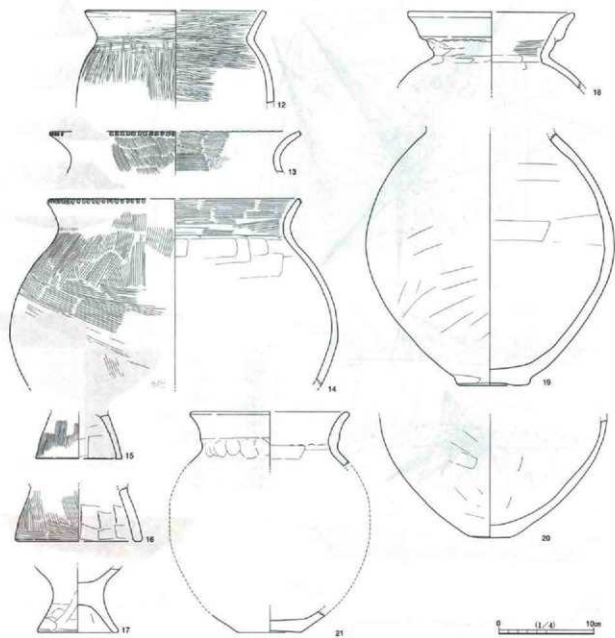
<004号上層土器溜まり>

土器の総重量は多く、6kgを超える。これらの多くが、自然埋没過程で生じた挿鉢状凹みの底部分に集中している。中層出土土器が最も多く、それらは最下層出土遺物と時期が近い。最上層に和泉式の土器群も含むが、土器溜まりほどの量ではない。

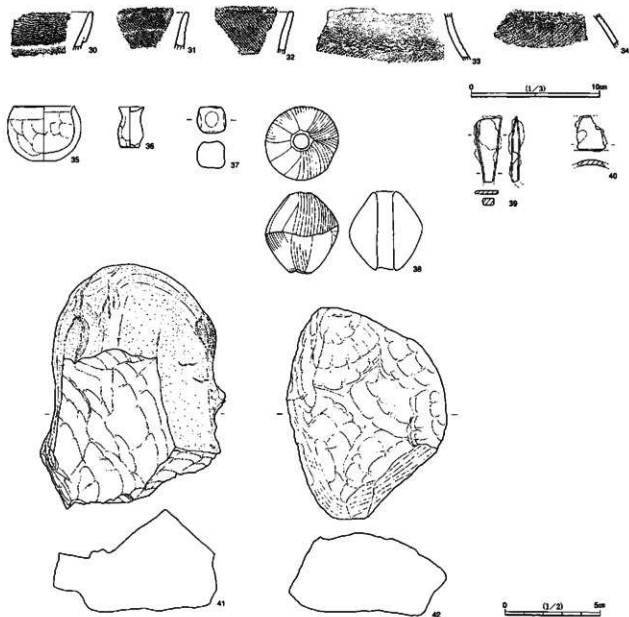
1～5は外来系高杯の脚部等である。ハケのちヘラミガキを基調とする。比較的大きめの透し孔を三方に配するものが多い。胎土や焼成は地元のものである。7は装飾壺の折返し口縁部片である。肥厚帯外面



第23图 004号迹 (1)



第24图 004号跡 (2)



第25図 004号跡 (3)

と端部に羽状縄文が施され、無文帯は丁寧なミガキで、全面に赤彩される。8・9は壺の折返し口縁部片である。ともに肥厚帯下端に8は波状の、9はハケ工具による木目列点で刻みが施される。9の外表面はハケを基調としており、赤彩される。10は赤彩の壺である。胴部は下膨れ形をなし、外面に丁寧なミガキが施される。12~14は「く」の字口縁甕である。小型の12は屈曲が強く、壺と同程度に丁寧なミガキが全面に施される。大型の13・14はハケを基調とし、口縁端部にはハケ刻みが整然と並ぶ。14は甕としては異色の明色をしている。15・17は台付壺の脚部で、二次被熱を受ける。調整はハケ主体とナデ主体とがある。装飾壺片には、口縁部に22・23のへら刻み棒状浮文や24の羽状縄文を有するもの、肩部に26~29の網状燃糸文、その下部に26の鋸歯文を有するものがあり、無文帯を赤彩される。印手式の壺片には、口縁部に30の燃糸文や31・32の附加条縄文、31の輪積み装飾、肩部に結縄文で区画された33の附加条縄文を有するも

のがみられる。18～21は、最上層から出土した和泉式の壺・甕で、縦長球形の胴部を有し、ナデを基調とする。

土製品は4点、鉄製品2点、石器類2点が出土している。35は鉢形の土製小型模造品である。ナデにより調整され、焼成される。36は壺形の土製小型模造品である。中実であり、焼成される。37はサイコロ状の焼成粘土塊である。38は錘とみられる土玉である。縦方向にハケが施され、明瞭な線を有する。39は鉄製工具（タガネ）または方頭鎌の身である。40は帯状鉄製品で、緩やかな弧を描いて曲がる。41・42はともに拳大の礫で、粒子が細かい硬質の堆積系石材であり、前者には敲打による欠損がみられ、後者は意識的に打ち割られたのち、端部が敲打に用いられる。

005号跡（第26・27図、図版5・43～45・73）

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部の北寄り（M30グリッド）に位置する。7.2m×5.7mの大きな隅円長方形をなす。深さは0.8mである。主軸はN50度Wである。ゴボウ耕作機の攪乱が激しいが、床面は攪乱されていない。上辺壁際と右辺北寄り壁際に、径1.0m～1.5mの土坑2基が重複している。調査時の土層観察によると、少なくとも住居構築後に掘られたものではない。本跡外側の東3m地点においてこれらに並ぶ柱穴が検出されているため、本跡以前に遡る掘立柱建物の存在が想定されるが、組となる柱穴はほかに確認できなかった。本住居跡の上層には土器溜まりが形成されている。

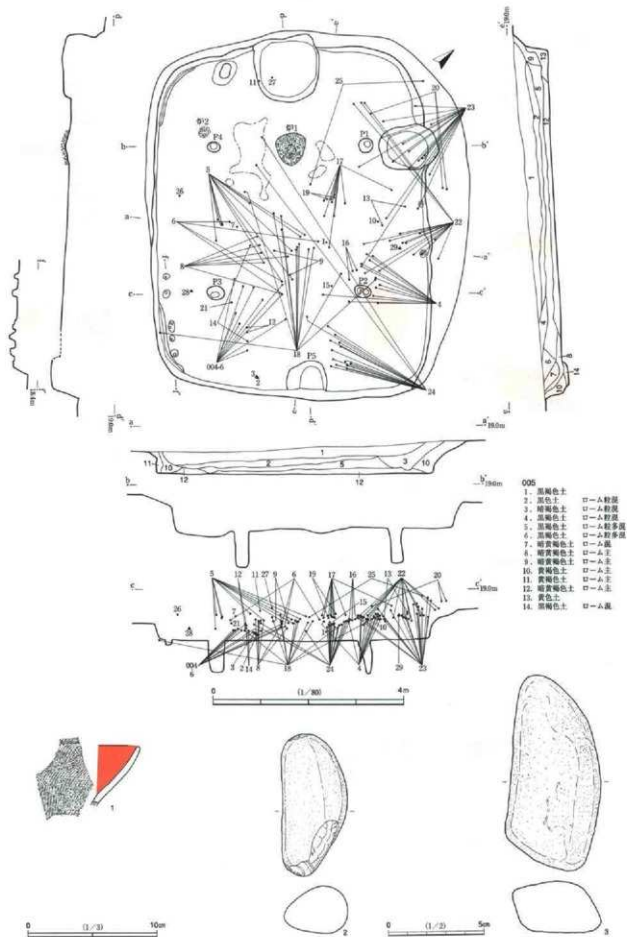
本跡の炉は0.7m×0.6mの規模で、炉床に硬化・赤色化がみられる。最深部は10cm凹んでいる。住居跡の床面は全体的に平坦で、炉の左右に若干の硬化面が検出されている。主柱穴は4か所検出されている。径20cm～30cm、深さ70cm前後で、いずれも細く、深い。壁溝は一部で検出されているが、不明確である。壁溝に沿うように、深さ12cm前後の浅い小穴が、連続して検出されている。下辺には野廐穴のみみられる90cm×70cmの隅円長方形をなす土坑がみられる。深さは15cm程度の浅いものである。

本跡に伴うと認定できる床面直上や最下層からは、図示できる遺物が出土していない。ただし、土器溜まりより低位置から出土した遺物には、1の在来系の高杯片がある。外面に単節羽状縄文を配し、内面に赤彩を伴うミガキが施された精良品である。同種の脚部片004-1も土器溜まり最下層から出土しているので、本跡はこれらが示す時期の以前に遡ることが確実である。土器以外では、2・3の磨石があり、後者は明瞭な被熱・敲打痕を伴う。

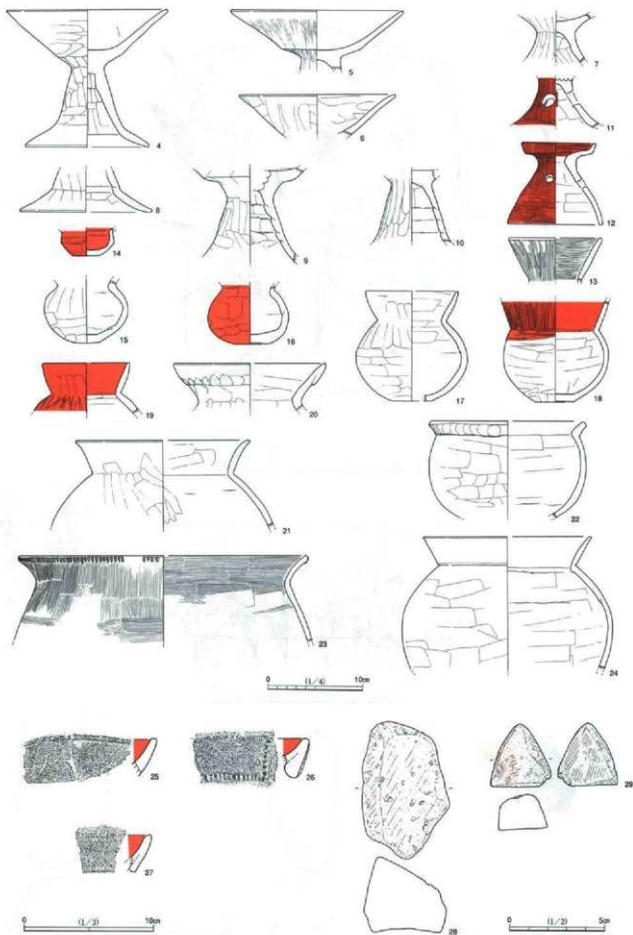
<005号上層土器溜まり>

005号跡上層には住居廃棄直後から古墳時代中期までの土器溜まりが形成されている。005号跡出土の土器総重量は9kgを超え、大半が1・2層に集中している。本跡右辺の壁上部が潰鉢状に崩れているのは、土器溜まり形成に伴う可能性があるが、調査時の土層観察では明確に表れていない。土器溜まりは2段階に分けられる。第1段階は左辺の004-1高杯脚部片の投入を端緒とし、右辺に中心が移動するもので、第2段階はそれらから約10cmの間層を置いて、中央部浅凹地に形成されるものである。

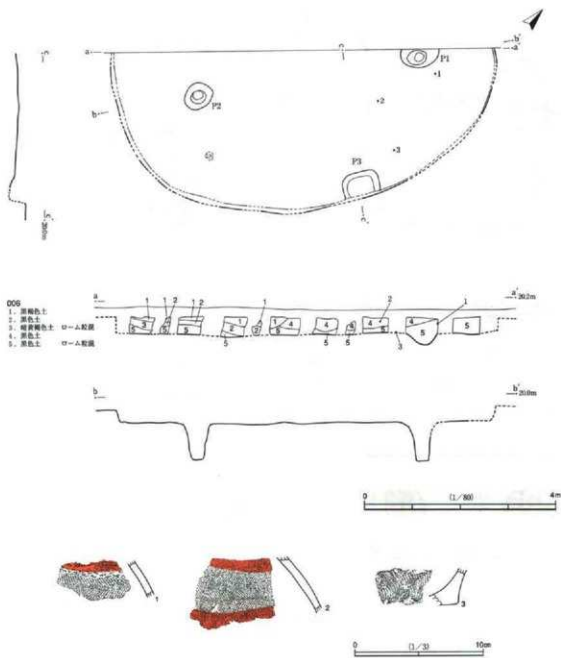
第1段階は五領式成立前後の土器群である。7・11・12・14・18・22～24が相当し、上位出土の25～27も含まれるとみられる。11は高杯の脚部である。赤彩を伴うミガキが施され、径15mmの大きい透し孔を三方にもつ。12は小型器台のほぼ完形品である。ハケのミガキが丁寧に施され、径9mmの小さい透し孔を三方にもつ。13・18は小型直口壺であり、比較的丁寧に調整される。14は小型丸底鉢の形態をもつ土製品で、全面に赤彩と丁寧にナデが施される。22～24は初期的な「く」の字口縁壺である。22・24は頸部に輪積み的な裝飾段を有し、23は明瞭なハケと口縁部ハケ刻みが施される。25～27は裝飾壺の折返し口縁部片



第26图 005号迹 (1)



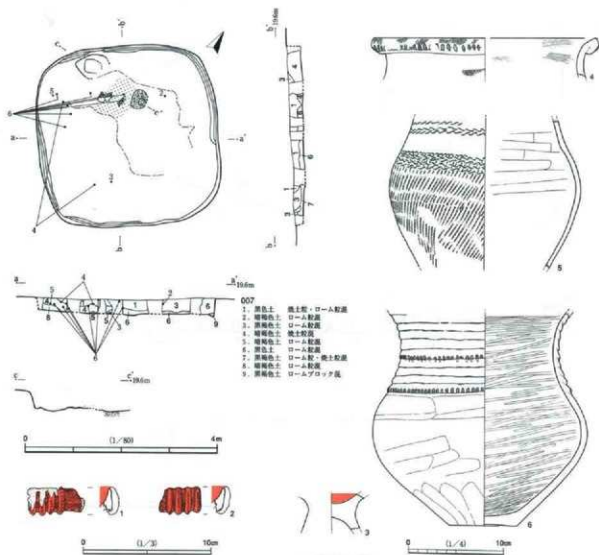
第27图 005号跡 (2)



第28図 006号跡

である。いずれも内面に赤彩を伴うが、外面の施文は異なり、順に網状捺糸文、羽状縄文+棒状浮文+下端刻み、羽状縄文のみで構成される。28・29はこれらの土器群付近で出土した白色系軽石である。明瞭な平滑面が4面ずつ形成され、きめの細かい29には刃部を立てて擦ったような傷が多数認められる。

第2段階は和泉式の土器群である。4～6・8～10は屈折脚高杯である。粗いナデ調整が施された比較的小型品が多い。13・15～17・19は小型丸底壺である。比較的粗いナデ調整を基調とする。古相を示す15・16は高杯4と同地点から出土している。20・21は和泉式の壺と甕である。



第29図 007号跡

006号跡 (第28図, 図版6・45・73)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(K30グリッド)に位置する。調査区外に未調査部分を残すが、長軸8.0mの大きな楕円形をなすとみられる。主柱穴を結んだ方角をとると、主軸はN39度Eである。深さは確認面から0.1m以内と浅く、ゴボウ掘削機によって遺構の全面が荒らされている。

主炉は調査区外とみられる。別に、床面が径20cmほど赤色化した部分が、主柱穴よりも外区で検出されている。主柱穴は4か所のうちの2か所が調査されている。径約30cm、深さ75cmを基本とし、上端は広がっている。東側の壁際に検出された長方形土坑は浅く、いわゆる貯蔵穴とは異なるものである。

土器量は少なく、0.6kgにも満たない。1・2はともに胴丸の裝飾壺片である。肩部に羽状縄文による文様帯を配し、上下の無文帯には赤彩を施す。比較的薄手であり、小型の壺とみられる。3は印手式の甕の底部片であり、全面に附加条縄文を施される。

007号跡 (第29図, 図版6・45・73)

弥生時代後期の竈穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(L30グリッド)に位置する。一辺が3.8mの小さな隅円方形をなす。主軸はN46度Wである。確認面から0.3m前後と浅いため、ゴボウ掘削機によって全面が攪乱されている。西側の覆土上層に焼土を多く含む部分がある。

主軸から右にややずれて、炉の本体とみられる径35cm、深さ8cmほどの凹みが認められた。ここから西側の床面、長さ1.1m、幅0.8mの範囲が被熱し、硬化・赤色化している。被熱範囲では大きな甕片6が出土している。住居跡の床面は、炉の周辺と、その南東側にかけてよく踏み固められ、硬化している。

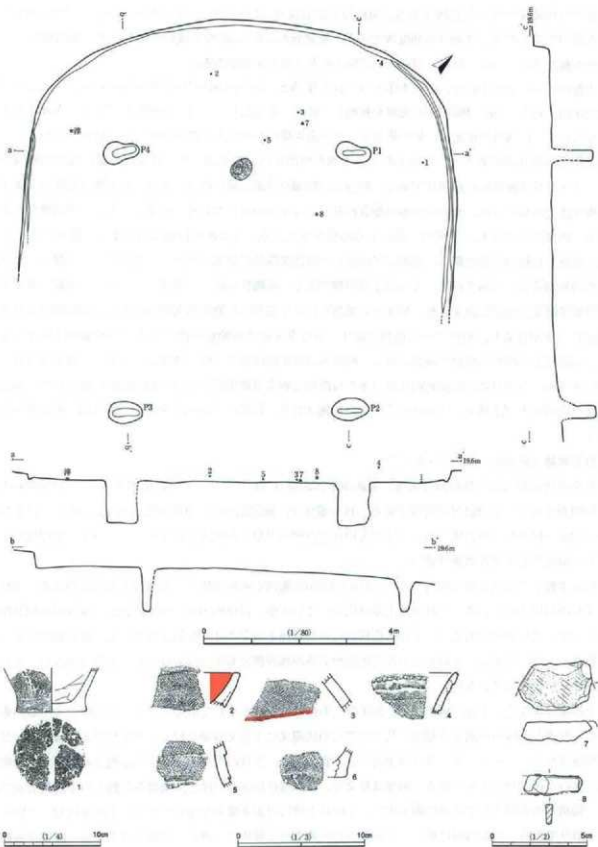
出土土器は比較的豊富で、2kgを超える土器が検出され、印手式・久ヶ原式期の甕に良好な資料を含む。1・2は裝飾壺の口縁部片である。折返し口縁部の外面に羽状縄文、その上から刻みを伴う4条1組の棒状浮文が付けられ、全面に赤彩が施される。3は在来の高杯である。厚手であり、ナデ調整を主体とする。内面が赤彩され、外面の一部にも赤彩痕がみられる。4は壺の口縁部片である。極めて小片である。折返し口縁の端部に縄文、沈線で区画された頸部文様帯に縄文、折返し下端部にハケ(柳)による鋭利な刻みが連続して施される。5は印手式の甕である。裝飾性が高く、胴部には3cm~4cm幅を基本として附加条縄文が横位に施文され、肩部から頸部にかけて波状の結節回転文が3条以上、追加施文される。外面には煤が付着し、煮炊きへの使用を示す。6は久ヶ原系の輪積み甕である。口縁端部は現存しないが、10段以上の輪積み裝飾が確認される。輪積みの損圧痕は弱く、積上げ後にヨコナデで仕上げられ、最下段と下から5段目に、布織組織圧痕(または微細な縄文原体圧痕)を伴う刻みが密に施される。胴部外面及び内面はナデ調整で、内面はとくに人念に施される。底部に二次被熱を受け、内外面ともに煤が付着する。

008号跡 (第30図, 図版7・45・73)

弥生時代後期の竈穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(K31グリッド)に位置する。一辺9.0mの大きな楕円形をなす。主軸はN46度Wである。浅い遺構で、確認面からの深さは0.3m前後である。付近は南東に向かう緩やかな傾斜地であり、床面と壁は北西側の半分しか検出されなかった。ゴボウ掘削機による激しい攪乱により遺存状態は悪い。

炉は主軸上の北西寄りに位置する。0.4m×0.5mの範囲が赤色硬化し、6cmほどの凹みがある。主柱穴は4か所検出されている。それぞれ上端は広がっているが、長径約60cm、短径約25cm、深さ85cmの長楕円形をなす、深い柱穴である。いずれも住居軸に対し長径を直交させて配置されている。柱も板状であった可能性がある。壁溝は、全周していた可能性があるが残存部でも深い部分はなく、明瞭ではない。床に硬化面等は検出されていない。

土器量は少なく、1kgに満たない。図示したものはいずれも小片である。2・3は厚手の大型裝飾壺である。折返し口縁の外面と上端部、及び肩部に羽状縄文による文様帯を配し、非文様帯と口縁内部には赤彩が施される。1・4・5・6は印手式の壺・甕である。5は内面に丁寧なナデが施された厚手の土器片で、壺の口縁部付近とみられる。頸部は無文で、口縁部は折返し口縁と、輪積み裝飾との中間的表現である。輪積みの表現としては単位幅が広く、下段粘土帯に附加条縄文を施したのちに上段を積む、手間の掛かる造りである。4は内面に粗いナデが施された薄手の土器片で、甕の口縁部とみられる。輪積み裝飾は3段確認でき、下位の広い輪積み帯に附加条縄文を施したのち、上位の狭い輪積み帯2段が追加される手間の掛かる造りで、口縁端部にも附加条縄文原体押圧による刻みが付けられる。1は甕底部片で、外面



第30图 008号跡

に附加条縄文が施され、底面に木葉痕を有する。6は壺または甕の底部片で、外面に縄文、底面に木葉痕を有する。内面に器肌荒れが目立つ。

7は砂岩製の砥石片である。8は鉄製刀子の茎である。ほかに、鉄片1点が出土している。

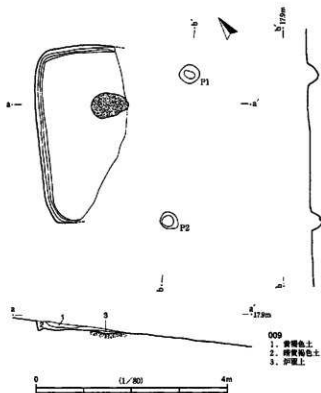
009号跡 (第31図, 図版7)

古墳時代前期ごろの竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り (L31グリッド) に位置する。

一辺3.5mと小さく、やや隅円ぎみの方形をなす。軸はN59度Wである。確認面からの深さは最深部0.3mしかないで、付近が南東に向かう緩やかな傾斜地であることから、北西側しか検出されなかった。

炉は主軸上のやや北東寄りに位置する。ほとんど凹みはなく、0.5m×0.8mの範囲で被熱硬化がみられ、内側の広い範囲が赤色化している。周辺の床面も、全体に硬くしまっている。壁溝は、深さ5cm以内と浅いものが確認されている。住居跡南東側によく似た柱穴が2か所検出されている。径35cmと40cm、深さ28cmと24cmで、主柱穴としては軸が異なるため、別の遺構の重複も考慮の余地がある。

土器量は極めて少なく、0.2kgにも満たない。



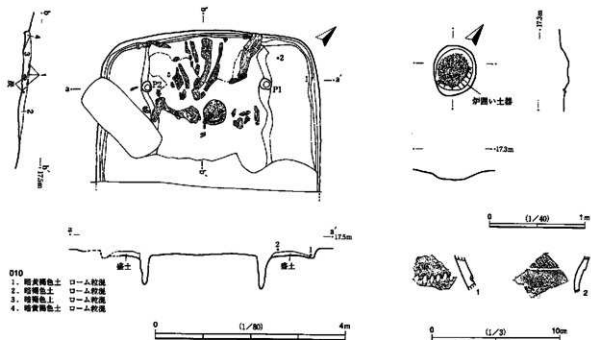
第31図 009号跡

010号跡 (第32図, 図版7・8・73)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り (L31グリッド) に位置する。一辺4.7mの隅円方形をなす。深さはわずか0.2mであり、南東に向かう緩やかな傾斜地にあるため、調査区境付近を境にして、南東側はあまり遺存していないものとみられる。主軸はN43度Wである。遺存部では、覆土下層から床面直上において放射状に炭化材が出土している。ただし、柱穴内に炭化材はみられず、床や壁に焼土が形成されていないことから、火災ではなく、廃材を焼却した痕跡と考える。

炉は径0.5m×0.4m、深さ4cm～5cmの凹みであり、内部に顕著な被熱硬化、赤色化が認められる。また、炉の南側を弧状に区画する炉囲いの土器片が検出されている。炉の周辺から主柱穴までの内区の床には、硬化面が形成されている。主柱穴は4か所のうちの2か所が確認されている。径23cm前後、深さ60cm～70cmと、細く深い。住居跡の外区には、左右の両辺に高さ4cm～5cm程度の盛土が施され、ベッド状の高まりが構築されている。高まりの面は平坦であるが硬化面はない。住居跡上辺には高まりがなく、内区と同じ高さの床で、硬化面が形成されている。

土器量は少なく、1kgに満たない。図示した2片はいずれも印手式に属する甕で、頸部付近とみられる小片である。1は上から下に被る段を有し、そこに布様の粗織圧痕を伴う刻みが規則的に施されている。2は口縁部肥厚帯に縄文が施され、頸部に無文帯が配される。頸部下半に煤が付着している。



第32図 010号跡

011号跡 (第33図, 図版8)

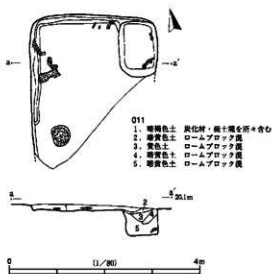
古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡南半部中央付近(132グリッド)に位置する。一辺2.7mの方形とみられるが、確認面とほぼ同じ高さで床が検出されている状況で、最深部でも0.1mしか残存せず、形状は不明瞭である。長軸はN12度Eである。北辺は貯蔵穴より東に延びていた可能性もある。わずかに残存した覆土には、床面に付近で炭化材と焼土塊が含まれていた。西側の壁に近い床面に、径40cmほどの被熱赤色化範囲がみられたため、これを炉と判断した。1cm～2cm程度の凹みがある。支柱穴は検出されていない。北西側に1.1m×0.8mの長方形をなす、深さ55cmの土坑が検出された。貯蔵穴とみられる。覆土は埋め戻されており、最下層に炭化材が検出されている。

土器総量は0.3kgに満たず、良い資料はえられなかった。

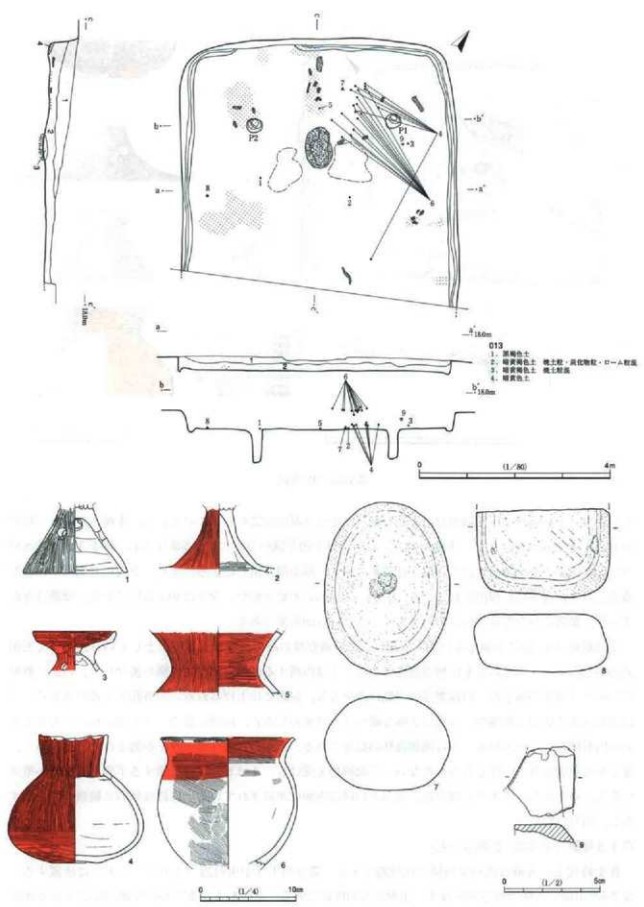
012号跡 (第34図, 図版8・45)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(M28グリッド)に位置する。一辺約4.6mの方形をなす。主軸はN53度Wである。確認面から0.15m前後と浅く、後世の溝等による攪乱、ゴボウ掘削機の攪乱が激しい。

炉は1.1m×0.6mの範囲で被熱硬化し、6cm～8cmほど凹んでいる。炉床には、顕著な赤色化が認められる。内区の床面は平坦で、炉の周辺を中心に硬化面が形成されている。中心部に柱穴が1か所検出され



第33図 011号跡



第35图 013号跡

き、未調査である。覆土下層から床面付近で、焼土層と炭化材が検出されている。焼土層は多く認められたが、床面との間にわずかな隙間がみられる。炭化材は少なく、連続性は認められない。

炉は0.8m×0.5mの範囲で被熱硬化が認められ、深さ3cm～5cmの凹みがある。炉床に顕著な赤色化が認められる。炉の両脇では、床が踏み固められて硬化面を形成しているが、ごく一部の範囲にとどまる。主柱穴は4か所のうち2か所が検出されている。いずれも径30cm～35cm、深さ50cm～60cmと、細く深いものである。住居跡が正方形であれば今調査区内に下辺の主柱穴が検出されるはずであるが、認められない。よって本跡は隅隅長方形とみられる。床は平坦である。壁溝が検出されており、全周するとみられる。

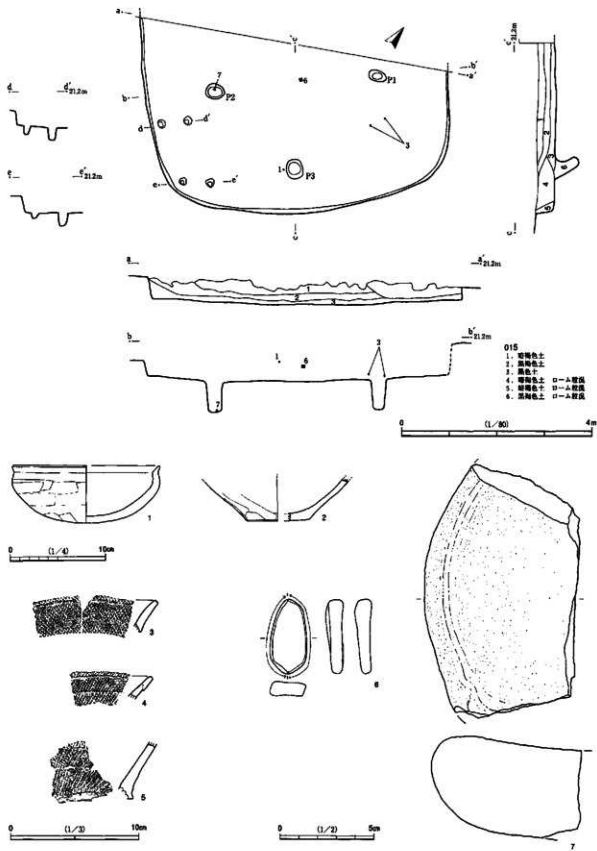
土器量は約2kgが出土した。図示した資料はいずれも五領式成立直前の土器群で、遺存度が高く、6以外はすべて、床面付近から出土している。1は高杯の脚部である。裾が内湾気味に着地する形状は、東海西部の廻間Ⅰ・Ⅱ式土器に類似する。透し孔は径約1.0cmで、上下に三方ずつ、計6か所が交互に穿孔される。穿孔時に内面で爆発的な剥がれを生じる点は東海に特有の方法である。外面に丁寧なヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。胎土は砂っぽく、淡い色調を示し、搬入品とみられる。2は碗形高杯の脚部とみられる。上部が細く、裾部が大きく開き、透し孔はない。外面に赤彩を伴う縦ヘラミガキ、内面に入念なヘラナデが施される。3は小型器台である。脚は直線状に開く。脚部内面を除く全面にミガキが施され、赤彩される。脚部には径0.8cmの小円形透し孔が三方に配される。4は壺である。頸部が一周する。内外面ともヘラミガキが施され、赤彩される。ただし内面下部はナデ調整とみられる。破断面が激しく被熱しており、破損後、壺の器台に転用されたとみられる。5は直口壺である。口縁端部は剥落、摩耗しており、使用度の高さを示す。下膨れ胴部と凹底をもつ。丁寧な造りで、外面は横の細いハケのち上部縦ヘラミガキ、下部横ヘラミガキ、内面はヘラナデのち口縁部縦ヘラミガキが施される。ミガキ範囲に赤彩を伴う。6は小型甕である。口縁部にはハケ→ヨコナデ→内面ヨコハケ→内外面赤彩→端部ハケ刻み、という煩わしいほどの手間が掛かる。明瞭な頸部屈曲、薄手、広口、刻みなどは、小型の「く」の字口縁甕としては初期の特徴である。

石製品2点がほぼ床面から、金属製品1点は覆土中から出土した。7・8はともに堆積岩の礫で、砂礫質の7は磨石とみられる。縄文時代石器を転用した可能性が高い。均整な扁平槽口体をなし、両面及び両端部に敲打痕、敲打痕の周囲に研磨痕が観察される。泥質の8は砥石である。中央で折れているものの表裏に平滑面と、側面に黒色付着物が観察される。9は厚みのある鉄製品で、錆が安定化し、破損面と原面の見極めが難しい。斧などの破片とみられる。

O15号跡（第36図、図版9・46・74）

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部南寄り（D35グリッド）に位置する。一辺6.4mの隅隅方形をなす。主軸はN38度Wと推定される。深さは確認面から0.4mほどである。北西側は調査区外につき未調査である。

調査区内に炉は検出されていない。床面はあまり硬化していない。主柱穴は4か所のうちの2か所が検出されている。長径35cm前後、短径20cm～30cm、深さ60cm前後の楕円形をなす。穴の長軸は、住居軸に対し直交する。主軸上の下辺（南東）中央にも柱穴1か所が検出されている。上端は径40cmの円形をなし、最深部は50cm前後で、本跡の外側に向かって斜めに傾く形状から、梯子穴のような出入口施設とみられる。そのほか、南側隅部に径15cm前後、深さ20cm前後の小穴が4か所認められ、隅部に木造の施設を備え



第36图 015号跡

ていたことが想定される。

土器量は少なく、0.7kgに満たない。1は上層から出土した和泉式の丸底杯である。比較的遺存度が高いが、住居跡に伴うとはいいがたい。2は土師器甕の底部片である。煤状付着物が認められる。3は床面付近から出土した印手式の甕口縁部片である。口縁部肥厚帯と端部に附加条縄文が施される。4・5は印手式の甕である。ともに附加条縄文を有し、4は口縁部に輪積み装飾を併せもつ。

土製品・石製品は各1点出土した。6は土器片転用砥石で、破断面が繰り返して研磨されている。もとはナデが基調の甕片である。7は柱穴の底から出土した砂岩製の石皿で、平滑面形成後に欠損している。

O16号跡（第37図、図版10・46・74）

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡の南半部南寄り（D35グリッド）に位置する。5.0m×4.3mの隅円長方形をなす。主軸はN39度Wである。確認面からの深さは約0.3mである。遺存状況は良好である。

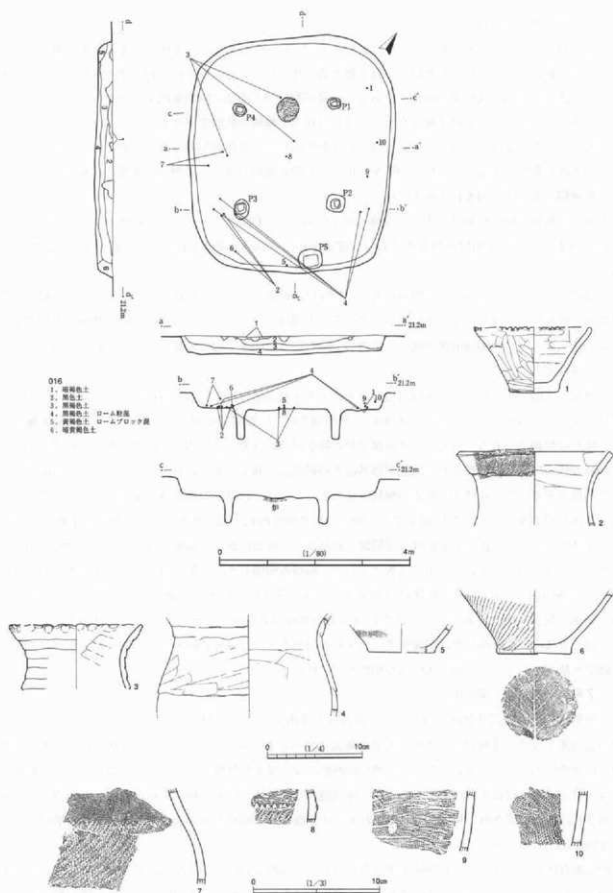
炉は径45cm前後で、6cmほどの凹みがあり、炉床は赤色化している。周辺の床面には、とくに硬化面等は認められない。主柱穴は4か所検出されている。上端はやや広がっているが、一辺約20cmの方形を基本とする柱穴で、深さは60cm前後で揃う。下辺のやや右寄りに50cm×40cmの長方形土坑がある。深さは9cm程度の浅いものである。

土器量は1kgに満たないが、床面付近で印手式・久ヶ原式期の特徴的な土器群が出土している。1は小型鉢である。比較的厚手で、内外とも粗いナデが施され、口縁端部に粗いヘラ刻みが不等間隔で施される。底面は無調整である。外面に一筋の煤状付着物が認められる。2は印手式の甕である。わずか1mm～2mm高の低い口縁部肥厚帯をもち、肥厚帯外面と口縁端部に縄文、頸部に無文帯が配される。内面はヘラナデ調整である。3・4は久ヶ原系の輪積み甕である。3は6段以上の輪積み表現を有する口縁部片で、横上げ後に横の細いハケで指圧痕を消し、最後に指で押圧波状口縁が作出される。煤状付着物がみられる。4は頸部片で、肩部に上側が被る段装飾、頸部から口縁部にかけて輪積み装飾をもつ。内面の滑らかなナデに比べ、外面は粗いヘラナデ（板ナデ）で、輪積み装飾もナデで指圧痕により潰され不明瞭な部分が多い。外面約2/3周に大量の煤状付着物がみられる。5・6は印手式の甕の底部である。底面に木葉痕、胴部に附加条縄文を有し、5の内面には多量の煤状付着物がみられる。7～10は印手式の甕片である。前2者は肩部片、後2者は胴部片で、いずれも暗色をし、5mm～6mmという一定の厚みをもつ。附加条縄文を基本としながら、施文法には多様性がみられる。

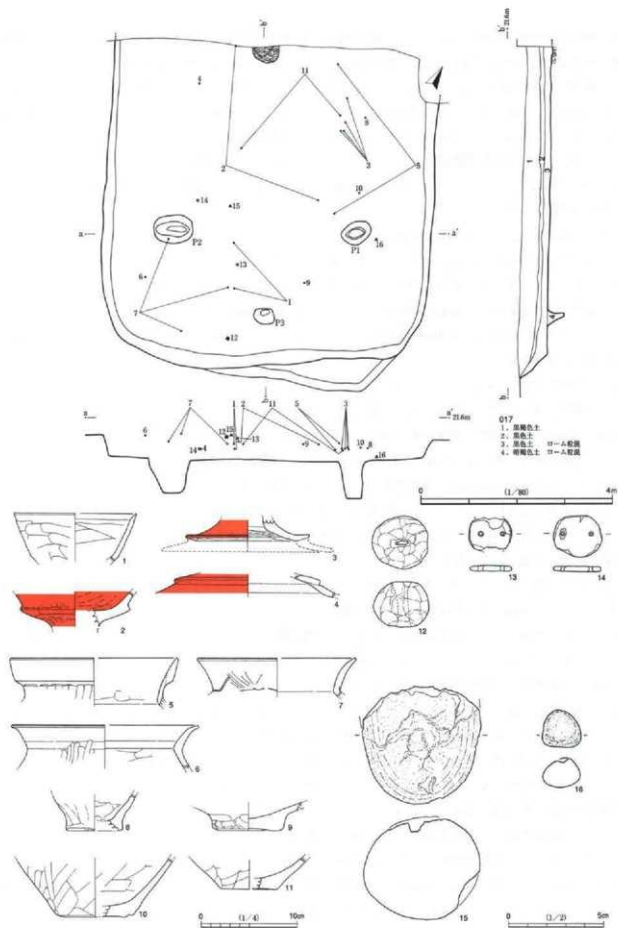
O17号跡（第38図、図版10・46・47・74）

弥生時代後期の竪穴住居跡とみられる。遺跡南半部南寄り（C35グリッド）に位置する。一辺6.8mの隅円長方形をなす。主軸はN37度Wである。確認面からの深さは0.5m前後で、遺存度は良好である。北西辺は調査区外につき未調査である。本跡の南西側には、壁より外側に突出している段がある。土層観察では、段が本跡に付属する可能性もあるが、埋没過程で播鉢状の凹みが形成された際、その時点で壁上部が崩れ、段が形成された可能性も読みとれる。土器溜まりと認める量はないが、上層から古墳時代中期の遺物が出土している。

炉は調査区界に近く、半分しか検出できなかった。5cm程度の凹みがあり、内部は赤色化している。周囲の床面は、ソフトロームであるため柔らかく硬化面はない。主柱穴は4か所のうち2か所が検出されている。上端はかなり広がっているが、西側穴は71cm×28cm、東側穴は40cm×24cmのともに長楕円形の柱穴



第37图 016号跡



第38图 017号跡

で、板状の柱の存在が想定される。穴の長軸は住居軸に対し直交方向に向く。下辺中央には、いわゆる梯子穴がみられる。40cm×32cmの隅円方形をなし、深さは37cm。本跡の外側に傾けて掘られている。

土器量は3.5kgと比較的多く出土しているが、図示しうる土器片はすべて上層出土で、本跡に直接伴うものではない。五領式以前に遡る可能性があるのは1の鉢、8の壺底部、9の大型壺底部である。8は不整形の小型壺とみられる。外面にハケが一歩認められ、暗色である。これらのほか、土器溜まりほどの量ではないが、和泉式の土器群が出土している。2~4は赤彩を伴う裝飾高杯である。2は杯部、3・4は有段の脚部である。5は壺、6・7・10・11は甕で、いずれもナデを基調とする。甕の底部内面には多量の煤状付着物がみられる。

土・石製品では、16だけが床面付近から出土した。白色系の軽石で、摩耗の結果、小さくなったとみられるが、明確な平滑面は観察できない。12は土玉である。焼成されている。土錘とみられる。孔は幅狭の長楕円形をなし、穿孔具を挟み込むように穿ったとみられる。13・14は双孔円板である。滑石に類するが、緑味を帯びる前者と、結晶が光沢をはなつ灰色の後者では石材が異なり、大きさ、孔の位置も若干異なる。縁は多角形をなし、各辺に擦痕がみられる。15は磨・巖石とみられる半拳大の石英斑岩礫で、著しい被熱の結果、損壊している。

020B号跡 (第39~41図、図版11・48~50・75)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡南半部南寄り(C37グリッド)に位置する。小規模であり、4.3m×4.8mの隅円方形に構築されている。主軸はN18度Eである。深さは0.5m前後である。上層に020A号跡が被る。遺物の大半は020A号跡に帰属し、本跡に伴う遺物は少ない。

中央に炉とみられる被熱硬化部が認められたが、赤色化は顕著ではない。むしろ、南西隅部の床面で、赤色化の顕著な面が検出されている。周辺の床面は平坦ではなく、皿状に凹んでいる。硬化面は形成されていない。柱穴等は検出されていない。遺物の詳細は020A号跡と一緒に後述する。

027号跡 (第42図、図版11・50)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(O27グリッド)に位置する。4.4m×4.4mの隅円方形をなす。主軸はN50度Wである。確認面からの深さ0.2mの深さしかなく、ゴボウ掘削機などにより激しく攪乱されている。床面直上に、焼土と炭化物が堆積しており、とくに後者は、いわゆる炭化材のほか、北東側で炭化した木の実や、茅状の炭化物が集中的に出土している。

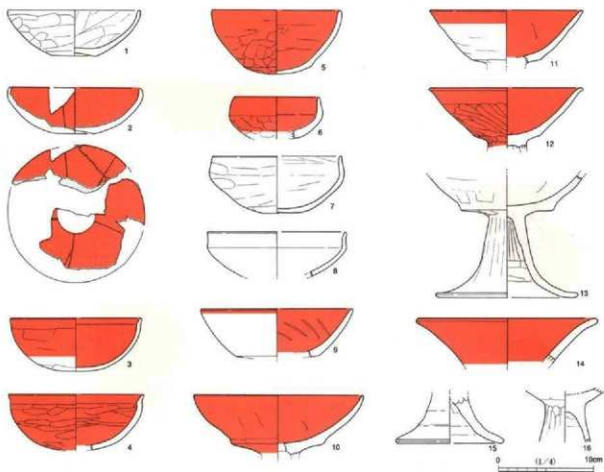
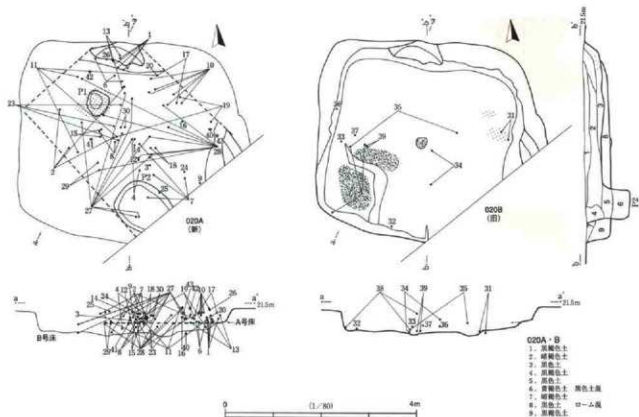
主軸上の北西寄りに炉が検出されている。平坦であり、被熱範囲として認識されたが、攪乱にあつているため遺存状況は悪い。炉床中央では、土器片が立っている状態で出土している。

出土土器量は0.1kgにも満たないが、1の高杯脚部が含まれる。暗色の在来系高杯である。接地面は平らで、脚の肥厚帯に縄文、肥厚帯上端部に縄文原体押圧による刻み、上部無文帯に三角形透し孔が二方ないし三方、その間に円ないし小三角形透し孔が各1か所配され、ミガキで仕上げられる。

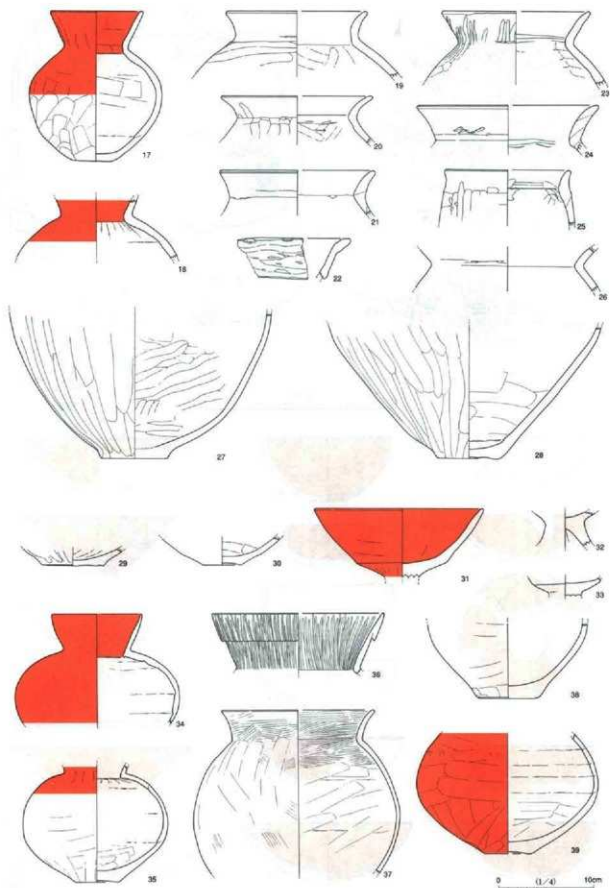
028A号跡 (第43図、図版12・50・75)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(E26グリッド)に位置する。4.6m×4.2mの隅円方形をなす。主軸はN49度Wである。028B号跡と軸が同じで、そっくり重複する。床位置はB号跡より約15cm高く、建替え、もしくはB号跡の凹みを利用して構築が行われたとみられる。確認面からの深さは0.25mと浅く、ゴボウ掘削機により床は激しく攪乱されている。

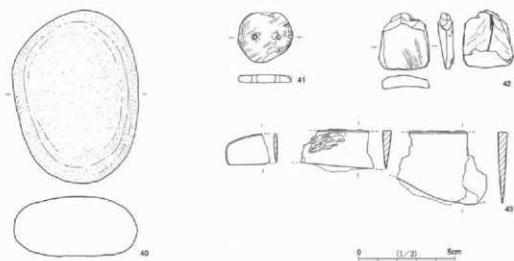
本跡の存在は、床の硬化面と炉の検出によって確認された。炉とみられる焼土は3か所で検出されてい



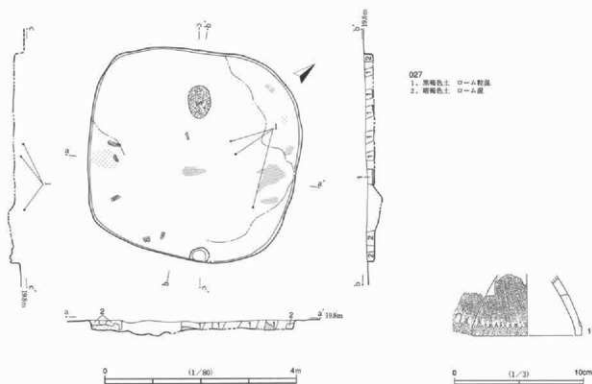
第39图 020号跡 (1)



第40图 020号跡 (2)



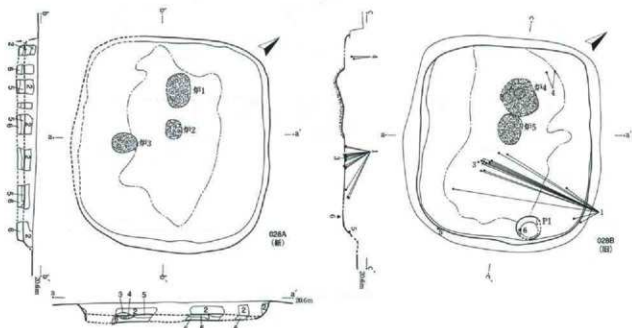
第41図 020号跡 (3)



第42図 027号跡

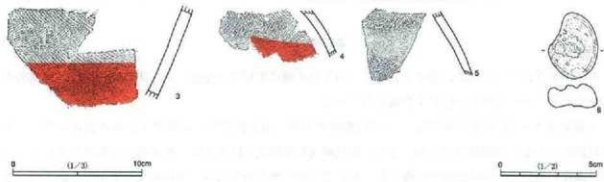
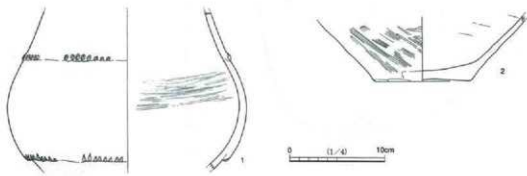
るが、攪乱されているため、個々の範囲については正確に把握できなかつた。床の硬化面は、遺構の中央部を中心に、やや主軸方向に長く形成されている。

土器量はA・B合わせても少なく、0.5kg程度である。出土位置から本跡出土とみられるのは3・4の壺肩部片である。別個体であるが、ともに羽状縄文が結節文で区画され、無文帯に赤彩を施される。5の壺肩部片も羽状縄文が結節文で区画されるもので、細い無文帯を挟み、複数の文様帯が配されるのは外来要素である。



028

- 1. 黒褐色土 ロームブロック面
- 2. 暗赤褐色土 ロームブロック面
- 3. 暗赤褐色土 黄土層・ロームブロック面
- 4. 赤褐色土 砂土・SP3
- 5. 黄褐色土 ロームブロック面、破くしまる
- 6. 暗褐色土 ロームブロック面、破くしまる



第43図 028号跡

028B号跡 (第43図, 図版12・50・75)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。028A号跡以前の遺構である。同じ主軸をとってそっくり重複しており、A号跡に比べ、規模は4.1m×3.6mとやや小さい。隅円方形をなす。床面はA号跡よりさらに約15cm低い位置で検出された。確認面からの深さは0.4m前後である。ゴボウ掘削機の攪乱が床に及ぶ。

炉とみられるのは、主軸線上の2か所である。外側の炉は径約70cm、深さ18cmであり、内部に赤色化等は認められない。もし炉と認めてよければ、深い掘込みを有する点で、本遺跡では特異な存在である。内側の炉は、攪乱されているため一部しか遺存しないが、3cm程度の凹みであり、内部に赤色化部分が認められる。これら2か所の炉は、028A号跡における主軸上2か所の炉とほぼ同じ位置にあたる。炉3と炉5については、土層断面で上下が別々に営まれたことが確認されている。床の硬化面は上層の遺構よりも広い範囲で検出され、主軸方向では壁際まで広がっている部分がある。

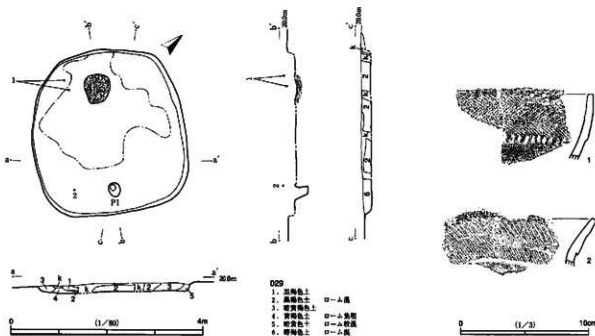
1は床面から出土した壺である。遺存度は低い。豊かなふくらみをもつ胴部形状と刻みを伴う段装飾が特徴的である。滑らかな器面をもち、肩部と下腹部に段装飾し、下腹部段にはヘラ刻み、肩部段には布状組織圧痕(または微細な縄文原体圧痕)刻みが巡る。久ヶ原系の刻み壺である。2は同類の壺底部片とみられる。外面はミガキ痕がよく残存しているが、内面のナデ痕は剥がれ、器面荒れが著しい。

土器以外では、本跡下辺の土坑内から、軽石1点が出土している。6は白色系の軽石で、小型であるが、現状で明瞭な使用痕は確認できない。

029号跡 (第44図, 図版12・75)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り(P27グリッド)に位置する。3.4m×3.2mの、比較的小さな隅円方形をなす。主軸はN58度Wである。確認面からの深さは0.2m弱しかなく、ゴボウ掘削機の激しい攪乱が床に及ぶ。

炉は径60cmの範囲で焼土がみられる。ほぼ平坦であり、5cm程度の凹みがみられるのみである。炉の周



第44図 029号跡

辺では、床面が硬化している。主軸上の下辺（南東側）には、いわゆる梯子穴がみられる。住居跡の外側に傾斜している。

激しい攪乱のため、原位置を保つものはないが、約1.1kgもの土器細片が出土している。図示したのはいずれも印手式の土器群である。1は鉢ないし高杯の口縁部である。肥厚帯に施文された羽状縄文は、単節縄文と附加条縄文の組合せによる。肥厚帯下端の刻みは布状の組織圧痕を伴う。内外面ともミガキをかけた丁寧な造りであるが、二次被熱を受け、煤状付着物がみられる。2は甕の口縁部片である。肥厚帯と口縁端部に附加条縄文が施される。

030号跡（第45図、図版13・75）

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り（P27グリッド）に位置する。調査部分では径4.5mの円形をなす。南東側は調査区外のため未調査である。主軸はN34度Wである。確認面からの深さは0.2mしかなく、ゴボウ掘削機が床まで激しく攪乱している。

炉の位置は、北西壁際にかかり寄っている。焼土のみみられ、凹みは検出されていない。炉の周囲から住居跡中央部にかけて、床が硬化している。柱穴等は確認されない。

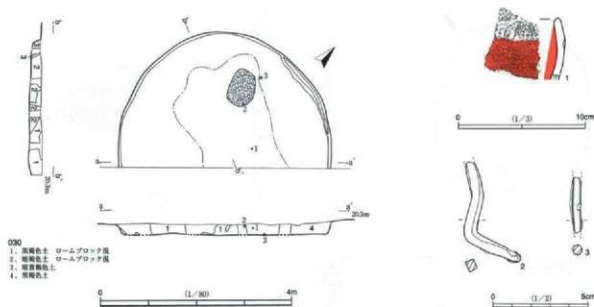
土器量は少なく、0.5kgに満たない。図示した1は、鉢または高杯とみられる口縁部小片である。肥厚帯に羽状縄文と刻み、そのほかの内外面には赤彩を伴うミガキが施される。

鉄製品が2点は攪乱に乗じて混入した可能性がある。2は確認面で出土した釘とみられる鉄製品である。3は床面付近から出土した断面円形の釘状鉄製品で、混入の疑いがある。

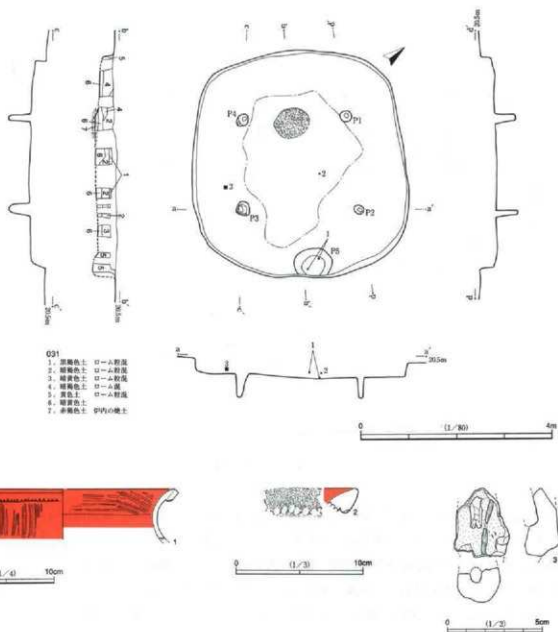
031号跡（第46図、図版13・50）

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡南半部北端（P28グリッド）で検出された。4.8m×4.3mの、楕円に近い隅円方形をなす。主軸はN54度Wである。確認面からの深さは約0.4mである。ゴボウ掘削機の攪乱が床に及んでいる。

炉は主軸線上のやや北西寄り、主柱穴と並ぶ位置にみられる。ほぼ平坦であり、焼土の範囲として検出



第45図 030号跡



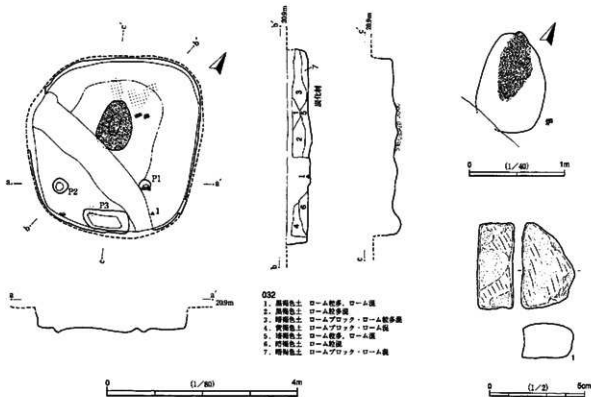
第46図 031号跡

されている。主柱穴で囲まれた内区の床面には、硬化面が形成されている。主柱穴は4か所検出され、それぞれ径20cm～30cmの不整形円形をなし、径の細さに比して、45cm～50cmの深さがある。主軸上下辺（南東端）に80cm×60cmの楕円形土坑がみられる。深さは約10cmである。攪乱により本跡に伴うという確証は得られなかったが、住居内における位置から、出入口施設の可能性が考えられる。

土器量は少なく、0.7kg前後が出土したにとどまる。1は無文の壺である。口縁部折返しの下端部にヘラ刻みを有する。赤彩を伴うミガキが施されるが、二次被熱を受ける。2は壺の小片で、口縁部折返しの外面に羽状縄文が施され、下端部に布状組織圧痕を伴う刻みが巡る。3は焼成粘土塊の破片で、破断面には葉状・笹状の混入物痕が観察される。

032号跡（第47図、図版13）

弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北端(Q25グリッド)に位置する。規模



第47図 032号跡

は小さく、3.7m×3.4mの不整な隅円方形をなす。主軸はN34度Wである。確認面からの深さは約0.5mで、小さい規模に反して深い。中央部から北側に焼土と炭化材が検出され、南隅にも少量の焼土と炭化材が検出されている。中央からやや南西側に後世の溝が走っており、攪乱は床面にまで達している。

炉は中央からやや北に位置し、30cm×70cmの範囲で赤色化と被熱による硬化がみられ、深さ5cm～7cmの凹みが認められる。炉周囲の床面は、南西側を攪乱によって失っているが、硬化面が形成されている。支柱穴とみられる小穴は南東側に2か所が検出されている。ただし、深さはわずか6cm前後である。南東側にある不整長方形の土坑は、深さ約20cmで、出入口施設の可能性がある。

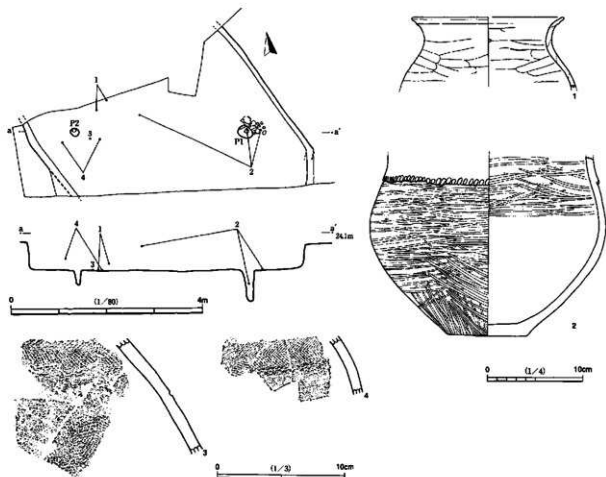
土器量は極めて少なく、0.2kgにも満たない。無文の甕胴部片ばかりであり、図示できる資料に恵まれなかった。石製品では、砂岩製砥石片1点が床面付近で出土している。これは溝の近くで出土したため、混入品の可能性は排除できない。

033号跡 (第48図、図版14・50・51・75)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南端(R24グリッド)に位置する。南北辺が調査区外のため、全形は確認できなかつた。長軸はN20度Wである。幅は約4.6m、確認面からの深さは約0.6mである。

炉は検出されていない。小穴が2か所検出され、東側の小穴は、径約30cm、深さ約65cmであることから、支柱穴の一つである可能性が高い。西側の小穴は、径約20cm、深さ約30cmである。床面は、全体がよく締まっている。

土器量は少なく、0.7kg程度であるが、遺存度の高い土器が床面直上で検出されている。Iは無文・素

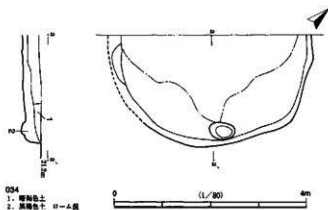


第48図 033号跡

口縁の變で、ナデ調整される。外面に煤状附着物がみられる。2は柱穴の脇からまとまって出土した刻みの甕である。胴・底部の遺存度が高い。滑らかなナデ調整が特徴で、肩部に段装飾を有し、丸みを帯びた丁寧なへら刻みが伴う。内面下部と外面が煤状附着物に覆われる。3・4はともに久ヶ原系の大型装飾壺である。器面荒れが進行している。肩部文様帯では、結節文区画に羽状縄文が充填され、腹部文様帯では、山形沈線文による区画内に斜めの羽状縄文が充填される。

034号跡 (第49図、図版14)

弥生時代後期の竅穴住居跡である。遺跡北半部南端(S22グリッド)に位置する。調査範囲では推定径4.3mの円形をなすが、北西側が調査区外のため、全形は確認できなかった。確認面からの深さは約0.4m



第49図 034号跡

である。ゴボウ掘削機によって全面が攪乱されている。

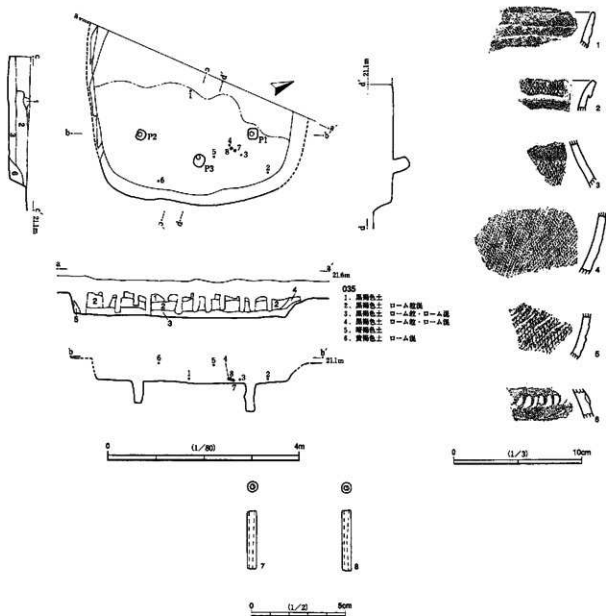
炉は検出されていない。南西側の壁際に1か所検出された小穴は、出入口施設の可能性がある。床面は、全体的にハードローム面が露出しやや硬く締まっており、北西側中央部分周辺に硬化面が形成されている。

土器量は極めて少なく、0.2kgに満たない。無文の壺甕片と赤彩の高杯がみられる。

035号跡 (第50図, 図版14・75)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り(U20グリッド)に位置する。一辺4.3mの隅円方形をなし、深さは約0.45m前後である。ただし、北西側が調査区外のため、全形は確認できなかった。ゴボウ掘削機の攪乱が床面の一部に及んでいる。主軸は、N55度Wである。

炉は検出されていない。主柱穴は現状で2か所が検出されている。それぞれ隅円方形をなし、一辺が約20cmで、深さは約50cmである。下辺中央に1か所検出された小穴は、径30cm、深さが約30cmで、外傾する



第50図 035号跡

形状から、梯子穴のような出入口施設とみられる。

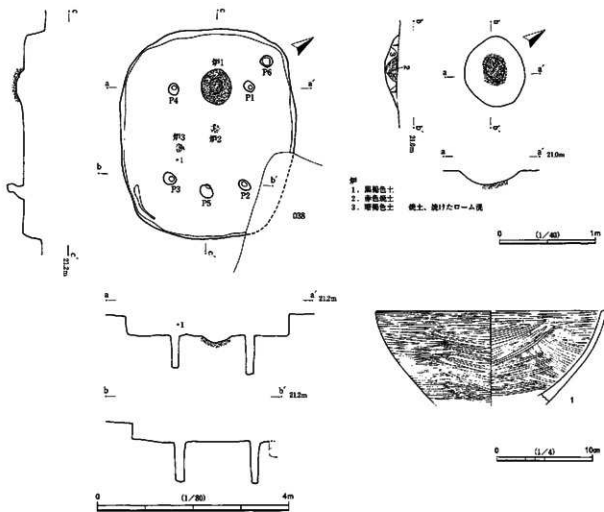
土器量は極めて少なく、0.2kgに満たない。いずれも小片ながら、印手式の土器片が多くみられる。1は壺口縁部であり、久々原式の輪横み装飾を取り入れながらも外面と端部に附加条縄文が施される。2は壺口縁部であり、折返しの肥厚帯と口縁端部に附加条縄文が施される。3は2と同一個体とみられる壺胴部片で、頸部に無文帯が配され、下部に縄文が施される。4・5は壺胴部片で、附加条縄文が密に施文される。6は刻み壺の肩部で、段装飾に押圧による刻みが施される。

7・8は碧玉製管玉である。2・6の土器片と一緒に出土した。若干の色の違いはあるが、深緑色系の緻密な硬質石材を用い、丁寧な縦方向研磨で仕上げられた、細身の良品である。7は長さ15mm、径2.7mmで、片面穿孔され、8は16mm、径2.5mmで、両面穿孔される。

037号跡 (第51図, 図版15・51)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り (V20グリッド) で検出された。4.4m×3.7mの、槽間に近い隅隅長方形をなすが、東側の隅を038号跡に切られている。主軸はN56度Wである。確認面からの深さは約0.4mであるが、ゴボウ掘削機による激しい攪乱が床にまで及んでいる。

炉は3基確認されている。本遺構の長軸線上北西側の支柱穴と並ぶ位置にある1基がもっとも大きく、



第51図 037号跡

径約25cmの不整形形の範囲で、7cmほど凹み、ゴボウ掘削機によって攪乱されているが、赤色硬化が認められる。残る中央付近の1基と、中央よりやや南東側の1基は、凹みがみられず、赤色硬化のみ認められる。主柱穴は4か所検出されている。それぞれ径18cm～26cmの不整形形をなし、径の細さに比して、66cm～87cmの深さがある。北隅部にも径約25cmの小穴が見られるが、貯蔵穴としては小型である。主軸線上の南東側には出入口施設とみられる小穴が認められる。床面は、全体に硬く締まっている。

土器量は約0.4kgである。1は鉢か高杯で、在来系であるが、全面にミガキが施され無文である。

039号跡 (第52図, 図版16)

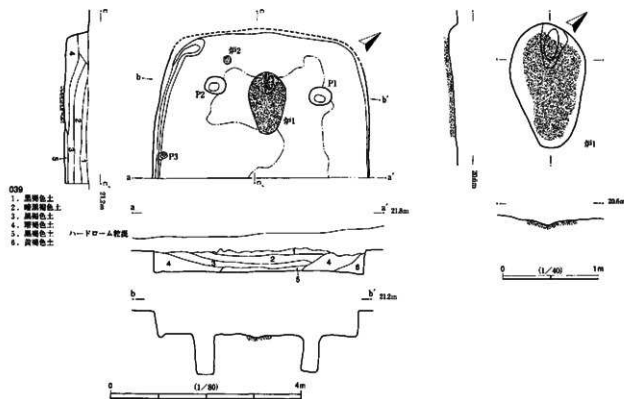
弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り(W20グリッド)に位置する。本跡の南東側半分が調査区外に位置するため全形は確認できない。一辺が4.5m前後の隅円長方形と推定され、主軸はN42°Wである。深さは確認面から0.5mである。

中心的な炉1は、主軸上の中央部から北西側にある。本体は80cm×130cmの楕円形をなし、約7cmの凹みがある。炉3は、炉1の北東側に位置するが、木の根等により大きく攪乱されている。その他、2基を検出している。主柱穴は、4か所のうちの北西側2か所が調査され、それぞれ径が40cm前後の不整形円形(もしくは不整形形)で、深さは80cm前後と深い。南西側に深さ5cm～8cmの壁溝が検出されている。

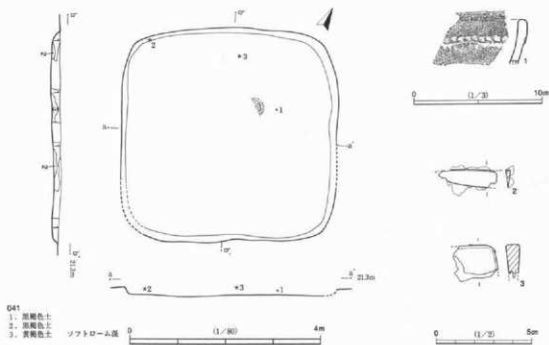
土器量は少なく、0.4kgに満たない。肩部に刻みを伴った段装飾をもつ、ナデ甕片を含む。

041号跡 (第53図, 図版17・76)

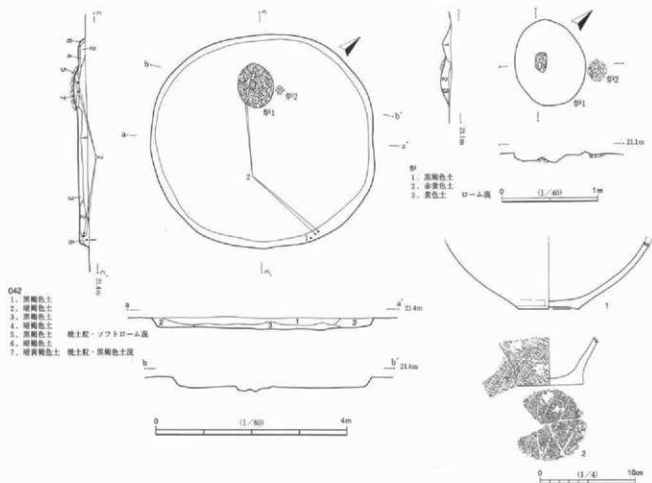
弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近(W18グリッド)に位置する。一辺が4.5mの隅円方形である。主軸はN25°Wである。深さは確認面から0.1mと浅く、ゴボウ掘削機の激しい攪乱が床に及んでいる。



第52図 039号跡



第53図 O41号跡



第54図 O42号跡

炉は、中央部からやや北側に検出されたが、攪乱を免れた床面が若干赤色化している程度で、掘込みは確認できない。主柱穴やその他の施設は検出されていない。床面は締まっていない。

土器量は少なく、0.4kgに満たない。1は壺か鉢または高杯の口縁部片で、低い肥厚帯を有し、肥厚帯下部に縄文原体圧痕を伴う刻みが密に施される。二次被熱のため不明瞭であるが、赤彩の可能性もある。

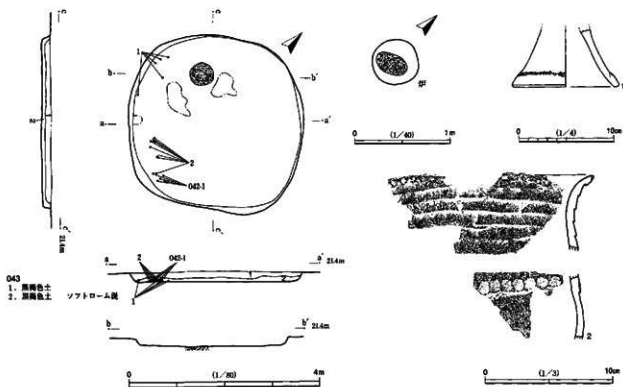
鉄製品2点が出土している。2はゴボウ掘削機による攪乱との境から出土した、刀子の切先である。3は覆土から出土した、刀または剣の茎とみられる鉄製品の破片である。

042号跡 (第54図, 図版17-53)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近(X17グリッド)に位置する。4.4m×4.7mの円形に近い隅円方形をなす。深さは確認面から0.2mである。主軸は炉の位置からN59度Wである。

炉は、中央部から主軸上の北西寄りで2か所検出されている。炉1は74cm×90cmの楕円形の範囲で、約10cmの凹みがあり、炉床は10cm×20cmほどの範囲で赤色化している。炉2は、径が約20cmの範囲で赤色硬化し、2cmほど凹んでいる。主柱穴やその他の施設は検出されていない。床面は締まっていない。

土器量は少なく、0.3kgに満たないが、炉の付近から2の一部が出土している。1は甕または壺の底部片である。壁際から2の一方の破片とともに出土し、043号跡出土片とも接合した。ナデを基調とし、一部にミガキ痕跡もみられる。小さい平底で、球形胴部を有する。2は印手式の甕である。複節の附加条縄文と単節の附加条縄文が羽状に施文された、高い装飾性をもつ。二次被熱を受け、煤状付着物が多い。底部には明瞭な木葉痕を残す。



第55図 043号跡

043号跡 (第55図, 図版18・53)

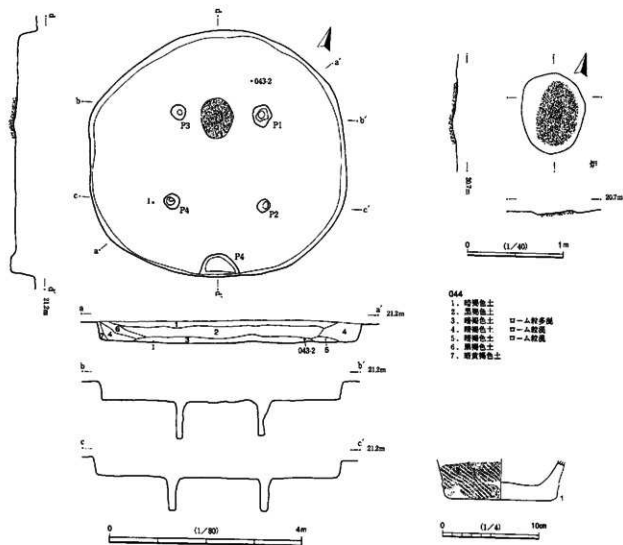
弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近 (X17グリッド) に位置する。3.6m×3.7mの小さな隅円方形をなす。主軸はN37度Wである。確認面からの深さは0.2mである。

炉は、中央部から主軸上のやや北西寄りにあり、径50cm前後の円形で、ほとんど凹みがみられない。炉床は20cm～45cmの範囲で淡く赤色化している。炉の周囲の所々に硬化面がみられる。支柱穴やその他の施設は検出されていない。

土器量は極めて少なく、0.2kgにも満たないが、本跡左辺の床面から、久ヶ原式の特徴を有する土器片が出土している。1は在来系高杯の脚部である。二次被熱により荒れが目立つが、脚端部に折返し肥厚帯を有し、肥厚帯上部に縄文原体圧痕による刻みが観察される。2は輪積み甕口縁部片と、胴部片で、同一個体とみられる。外面には肩部から口縁部にかけて輪積み裝飾が施され、各粘土帯に弱い指圧痕が残り、表面には多量の煤状付着物が認められる。また、口縁端部と肩部に弱い押圧による刻みが巡る。内面はミガキ様の滑らかなヘラナデ調整がなされる。

044号跡 (第56図, 図版18・53)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近 (Y16グリッド) に位置する。径5.4mの円形をなす。主軸は炉の位置から導くとN26度Wである。確認面からの深さは0.4mである。



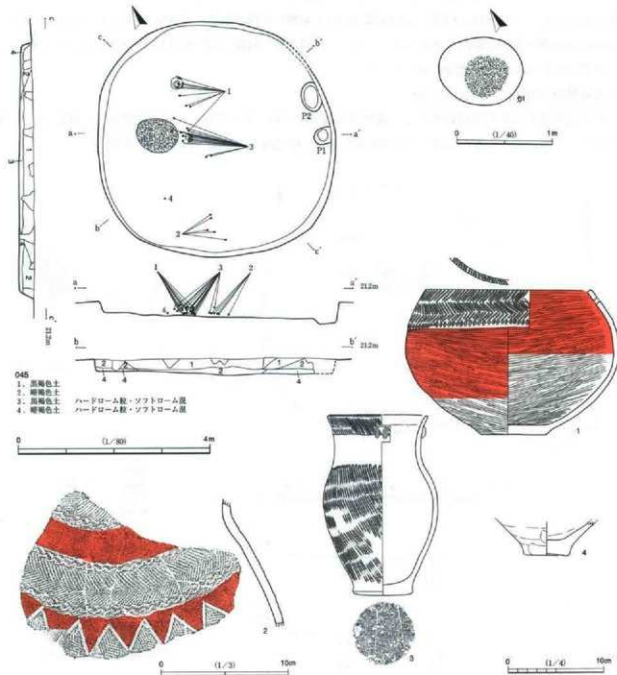
第56図 044号跡

炉は、中央部からやや北に寄り、65cm×80cmの楕円形の範囲で、3cmほどの凹みがみられる。主柱穴は4か所検出されている。いずれも本跡の中央部に寄っており、柱穴2か所は炉と直線に並ぶ。径は36cm～46cmで、深さは確認面から75cm前後である。主軸の南側壁面に、深さ15cmほどの、出入口施設と思われる土坑が検出されている。

土器量は0.7kg程度が出土しており、多くは印手式の特徴を有する。1は附加条縄文が長い単位で施された比較的大型の甕底部である。激しい二次被熱を受け、内面を中心に層状剝離を起こしている。

045号跡 (第57図, 図版18・53・54・76)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近 (Y15グリッド) に位置する。径5.0mの円形



第57図 045号跡

に近い隅円方形をなす。主軸を炉の位置に求めるとN67度Wである。確認面からの深さは0.3mである。

炉は、中央部から主軸上やや北西寄りにあり、70cm×85cmの楕円形で、ほとんど凹みはみられない。中央部には径43cmほどの範囲で、被熱による赤色化が認められる。主柱穴は検出されておらず、東側壁際に土坑2か所が検出されている。主軸上のP1は径35cm前後、深さは10cm前後で、本跡に伴うとすれば出入口施設の可能性がある。P2は35cm～60cmの楕円形で深さが10cm前後である。2か所の土坑からは、小石が集中して出土している。P1は数点小石を一括で、P2は一部を除いて点上げて取り上げた。

土器量は0.7kg程度であるが、炉の周辺から、完形を含む良好な土器群が低位置で出土している。1は印手式の土器群に属すとみられる精製の鉢で、炉の北側から、床面とはわずかに隙間を保ち、伏位で検出された。ほぼ完形で遺存状態もよく、無文帯におけるヘラミガキと赤彩が明瞭である。口縁部文様帯は布状組織瓦痕刻みを伴う低い段装飾で区画され、附加条縄文が羽状に充填される。口縁部は明瞭な面を有し、附加条縄文が施文される。文様帯には、端部から1cm下に2か所1組で、一対に施された焼成前穿孔が認められる。径4mm～5mmの小孔で、1か所は孔から上が欠損している。残る3か所では、上部にわずかな摩耗はあるが、繰り返し紐が通った形跡はない。2は大型の装飾壺である。赤彩された無文帯を挟み、結節文区画の羽状縄文帯が頸部と肩部に、山形（鋸歯状）沈線文区画の羽状縄文帯が腹部に配される。3は印手式期の小型甕である。炉の主軸上南東側に隣接した床面から横位で検出され、遺存度が高い。茨城県南部の上稲吉式に類する。薄手の造りで、頸部は無文帯、口縁部は輪襷み表現を残した肥厚帯に縄文、肩部の刺突列点文区画を境に、胴部も縄文が施される。口縁部に2個ずつ、一対の耳状突起が貼付けられる。底部に木葉痕を残す。煤状付着物と二次被熱が認められる。4は甕の底部片である。ナデ調整を主体とし、底部下面もヘラケズリ調整されている。外面に煤状付着物がみられる。

048号跡（第58図、図版19）

弥生時代後期の竈穴住居跡である。遺跡北半部中央付近（Z15グリッド）に位置する。本跡の南東側半分ほどが調査区外であり、北西側が後世の攪乱を受けているため、形状の詳細は不明である。主軸は炉の位置から求めるとN39度Wとみられる。幅は4.0mである。確認面からの深さは0.5mである。

炉は、住居の北西側に位置するとみられる。北辺が攪乱によって削平されているが、明瞭に検出され、遺存部分では44cm×76cmの楕円形をなし、2cmほどの凹みがみられる。主柱穴は、4か所のうち2か所が検出されている。炉を挟んで並ぶ位置に配され、どちらも20cm×30cmの不整楕円形で、深さは60cm前後である。穴の長径は住居軸に直交する。壁溝は南西側壁際において検出されている。

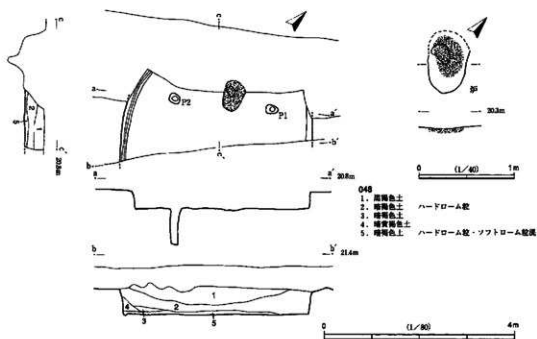
土器量は極めて少なく、0.2kgにも満たない。

049号跡（第59図、図版19）

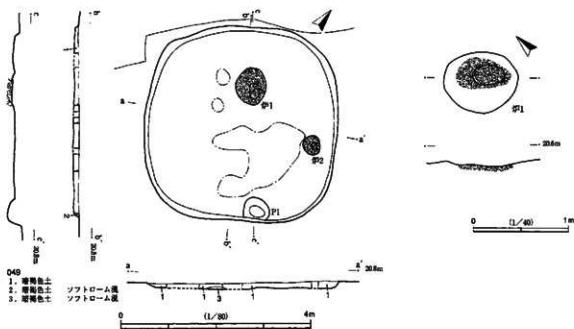
弥生時代後期の竈穴住居跡である。遺跡北半部中央付近（Z15グリッド）に位置する。一辺が4.0mの、円形に近い隅円方形である。主軸はN49度Wである。確認面からの深さは0.2mである。

炉は2か所検出されている。炉1は、中央からやや北西側の主軸上にあり、約64cm×78cmの楕円形で、2cmほど凹んでいる。炉2は、径が40cm前後で不整円形をなし、深さは6cmほどである。まばらに赤色化しているところがみられるが、とくに被熱による硬化部分は認められない。主柱穴は検出されていない。南東側壁際にある土坑は、46cm×56cmの楕円形で、深さ約15cmである。出入口施設の可能性がある。床面中央部分に硬化面がみられる。

土器量は極めて少なく、0.2kgに満たない。良好な資料も見あたらなかった。



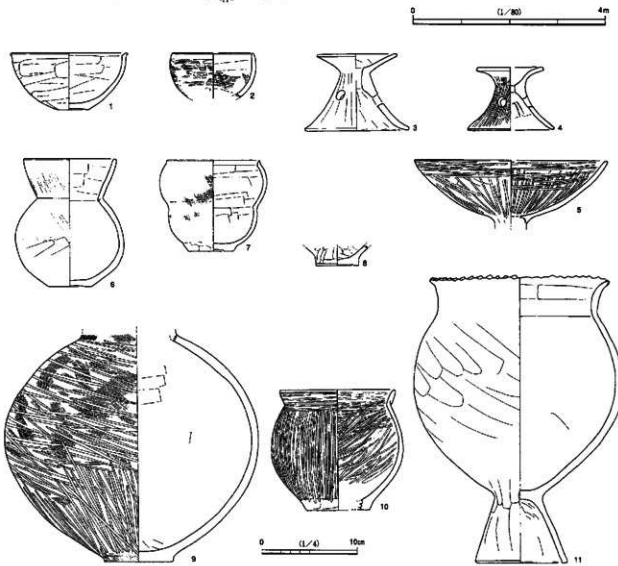
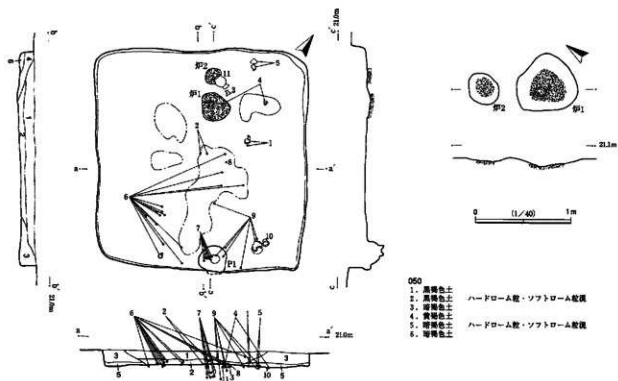
第58図 048号跡



第59図 049号跡

050号跡 (第60図, 図版19・54・55)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り (Y15グリッド) に位置する。4.6 m×4.7mの方形に近い隅円方形である。主軸は、N34度Wである。確認面からの深さは0.3mである。



第60図 050号跡

炉は中心から北西側主軸線上に、並んで2か所検出されている。炉1は径60cm前後の不整形で、深さが10cm前後である。内部に赤色硬化面が径35cm前後の範囲で形成される。炉2は、径35cmの円形で、3cmほど凹んでいる。内部に赤色硬化面が20cm前後の範囲で形成される。炉に倒れ込むように、11の壺が横位で出土している。支柱穴は検出されていない。貯蔵穴が南東側壁際に1か所検出されている。径55cmの不整形円形で、深さ30cm前後である。位置関係から出入口施設の可能性もあるが、内部より7の小型壺形品が出土しているので、貯蔵穴とみられる。主軸線上の床面を中心に、硬化面が確認できる。

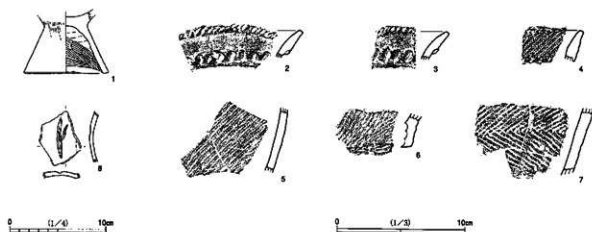
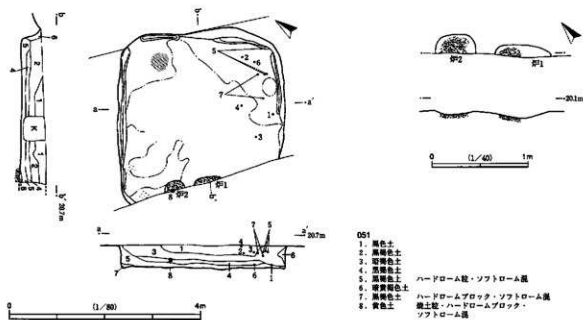
土器量は1.3kgを超える。床面に置かれたような状態で、完形に近い五領式成立期前後の良好な土器群が出土している。1は中央付近床面で出土した小型平底の鉢である。ほぼ完形で、明色である。均整のとれた造形であるが、内外面とも粗いケズリで仕上げられる。2も小型の鉢である。口縁部が全部残っている。暗色で、内外面ともナデとミガキが施される。3・4は炉の付近から出土した小型器台である。とくに3は、11の壺と同じ方向に倒れていた。ともに脚や口縁の一部に欠損があるだけの準完形品で、円形透し孔を三方に有し、芯に孔が貫通する。ナデ調整と、ハケのちミガキ調整の違いがあり、孔径や器形は若干異なる。5は北辺の床面から出土した高杯の杯部片である。杯底の縁が不明瞭ではあるが、形状は外来系である。全面に放射状の丁寧なミガキが施される。6は直口縁の平底壺である。破片は床に散在していたが、ほぼ完形に復原できる。ハケのちミガキ調整で、底面までミガキが施される。7は貯蔵穴内から出土した完形のヒサゴ形壺である。均整がとれた明色の個体で、胴部径より口縁部径が上回る鉢に近い形状をもつ。細かいハケとヘラナデを基調とする。底部はドーナツ状をなす。8は小型壺または鉢の底部である。9・10は本跡右下隅床面に正位で並べられた壺・甕である。9は無文の壺である。胴部の大部分が遺存し、明色で均整な球形をなす。外面は細かいハケとミガキ、内面は光沢のない滑らかなヘラナデが施される。内面の状況からすれば、肩部以下を制作し、のちに肩部から頸部が造り足されている。10は小型平底壺である。壺と同じく明瞭なミガキが全面に施され、頸部屈曲部に輪積み状の段裝飾が作出される。11は炉2に倒れ込んでいた完形の台付壺である。細かい押し波状口縁で、頸部は緩やかに湾曲する。ヘラナデを基調とし、外面下部は引っ掻くようなヘラケズリが施される。二次被熱の結果、脚部は赤色化し、胴部に煤状付着物がみられる。

051号跡（第61図、図版20・55・76）

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（Z14グリッド）に位置する。本跡の西辺の一部が調査区外につき未調査であるが、一辺が3.5mの隅円方形である。主軸は、S60度Wである。確認面からの深さは0.5mである。東辺を後世の擾乱によって一部削平されている。

炉は、2か所検出されているが、調査区界に位置していたためそれぞれ半分だけ調査された。主軸上の南西寄りに位置する炉1が最も大きく、幅0.6m以上、深さ8cm前後である。内面に幅0.3m以上の赤色化範囲がみられる。炉2は炉1の西隣にあり、幅0.45m以上、深さ5cm前後である。内面に幅0.3m以上の赤色化範囲がみられる。住居跡西隅にも軽い被熱範囲がみられる。柱穴は検出されていない。床の硬化面は隅部を除く広い範囲に認められる。東隅に灰色粘土塊が床面に貼りついて検出されている。壁溝は検出されており、ほぼ全周しているとみられる。

土器量は0.8kg程度が出土しているが、いずれも覆土出土である。1は下層から出土した台付壺の脚部である。太いハケが施され、一部ナデ消される。6も下層から出土した印手式の壺底部片である。附加条縄文が密に施され、底面に木葉痕が残る。以下は上層出土の印手式土器群である。2・3は壺または壺の

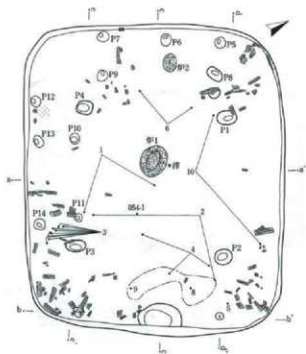
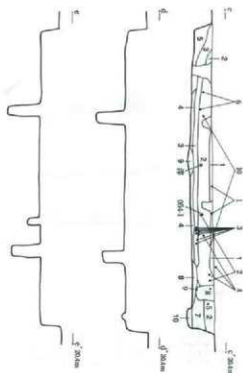


第61図 051号跡

口縁部片で、折返し肥厚帯の下部に蛇行隆帯を貼り付け、口縁端部には縄文原体圧痕を伴う刻みが施される。4は壺口縁部片で、折返しの肥厚帯に附加条縄文が充填され、口縁端部と肥厚帯下部に原体圧痕刻みが施される。5は甕胴部片で、附加条縄文が充填され、煤状付着物が多い。7は厚手の壺または甕の胴部片で、附加条縄文が羽状に施される。8は土器片転用磁石である。ヘラナデ調整主体の小型壺または小型甕で、肩部に相当し、図の右側は頸部屈曲部にあたる。金属製品の端部等が鋭角に擦り付けられ、幅4mm前後の溝が形成される。転用後に熱を受ける。

052号跡 (第62図、図版20・54・55・76)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り(Z14グリッド)に位置する。6.6m×5.5mの隅円長方形である。主軸はN62度Wである。確認面からの深さは0.5mである。攪乱は少なく、検出状況は

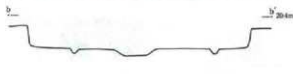
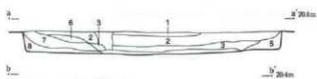


052

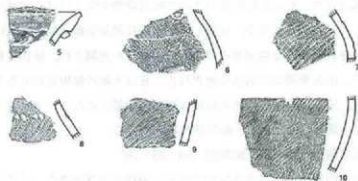
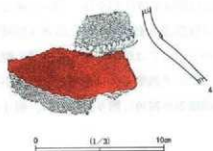
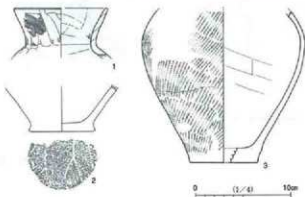
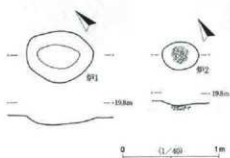
1. 黑褐色土
2. 暗褐色土
3. 灰褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗黄褐色土
9. 灰褐色土
10. 黄褐色土

出土房屋

□—A. 主体·暗褐色土面



0 1/200 4m



第62图 052号迹

比較的良好である。本跡の四隅では、2・3層を中心にして、炭化材が多数検出されている。床面や壁面が焼けておらず、焼土もほとんどないことから焼失住居とまではいえず、住居廃棄後炭化材等が捨てられたか、もしくは部分的に焼却された可能性が高い。

炉は、北西側の隅とほぼ中央付近の2か所がある。中央付近にある炉1は、55cm～75cmの楕円形で、8cm程度の深さがあり、赤色硬化部分はみられない。やや主軸からはずれる北西側の炉2は、30cm～40cmの楕円形をなし、2cm程度の凹みがみられ、20cm弱の範囲で赤色硬化部分がみられる。主柱穴は4か所みられる。いずれも30cm×40cmの楕円形で、深さが50cm～70cmある。柱穴の主軸線上の南東側壁際に楕円形の小穴がある。46cm×90cm、深さが13cmほどで、出入口施設とみられる。また、南東側の壁に沿って、径20cm弱で、深さが10cm弱の小穴が2か所ある（P12、P13）。同様の小穴は北西側の炉の周辺にもある。径23cm～35cm、深さ50cm～60cmの小穴が7か所、炉を規則的に囲んでいる（P1～P7）。南東側の壁沿いには、径20cm～25cm、深さ30cm～40cmの小穴が4か所、規則的に並んでいる（P8～P11）。調査時の所見では、これらの小穴が棚等の施設の支柱ではないかとみられた。床の硬化面は出入口施設周辺にのみ認められる。壁溝は検出されていない。

土器量は0.9kg前後が出土している。このうち床面からまともに出て出土したのは3の甕である。附加条縄文で覆われた印手式の甕で、底面には木葉痕が残る。1は確認面から出土した五領式期の直口壺である。本跡はこれより確実に古いことを示す。2・4～11はおもに覆土から出土した印手式の土器群である。2は木葉痕を残す甕の底部片である。4は裝飾壺の頸部～肩部片で、頸部に羽状縄文帯、頸部付け根に縄文原体瓦痕刻みを伴う段、その下に赤彩を伴う無文帯を挟み、結節文区面の羽状縄文帯が配される。文様構成や器形には南関東の特徴が強い。5は壺または甕の口縁部で、口縁端部は縄文、肥厚帯は無文、その下端に蛇行隆帯が貼り付けられる。6～10は甕の肩部～胴部片であり、いずれも附加条縄文が施文される。7はP9内から出土し、本跡に直接伴うとみてよい。また、8の刺突状文様は縄文原体端部による。

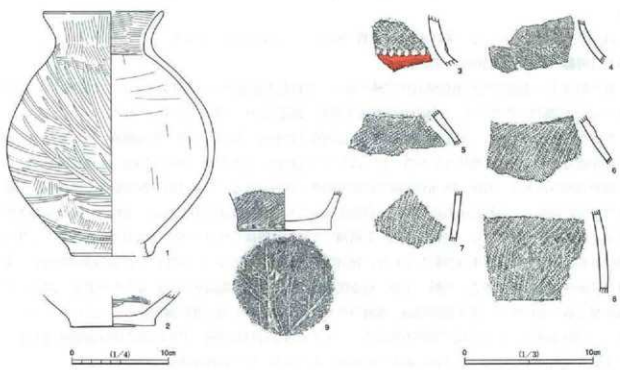
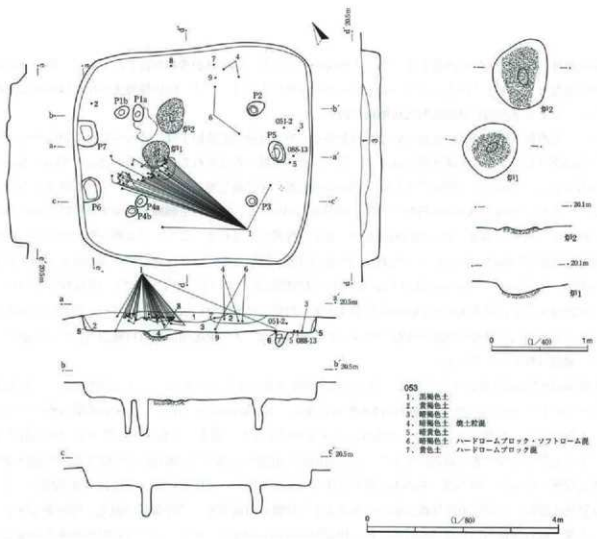
鉄滓1点が出土している（第16表）。発泡質で軽く、ごく小さいものである。

053号跡（第63図、図版20・55・77）

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（Z14グリッド）に位置する。5.0m×4.6mの隅円方形である。主軸はN65度Wである。確認面からの深さは0.4mである。

炉は3か所認められる。炉1は、主軸線上の北西寄りにある。径60cm、深さ10cm前後の円形をなし。赤色硬化部分が40cm前後の範囲で広がる。炉2は炉1の北西側に近接する。55cm×70cmの不整楕円形で、5cm前後の凹みがあり、37cm～68cmの範囲で赤色硬化部分がみられる。炉3は南東側の壁近くにあり、主軸よりやや左に寄る。径約12cmの円形で、赤色硬化はみられるが、ほぼ平坦である。主柱穴は本跡の対角線上4か所に配置されている。主軸の上辺（北西側）では穴が隣接して2か所ずつ検出されたため、主柱穴数は計6か所である。覆土は類似しており、新旧関係は明確にいない。径はいずれも20cm～35cmで、深さは50cm～70cm前後である。主軸の下辺、南東側壁近くに、出入口施設とみられる小穴がある。37cm×42cmの横に広い楕円形で、深さは約35cm、本跡の外方に傾斜する。上辺、北西側壁際の小穴2か所については、いずれも36cm×50cm前後の隅円方形をなし、P7の深さは11cm前後、P8の深さは6cm前後である。炉1から南西側柱穴にかけては狭い範囲で硬化面がみられる。壁溝は検出されていない。

土器量は1.2kg程度であるが、1がその大半を占める。床面付近から出土したのは2・3・5・9で、



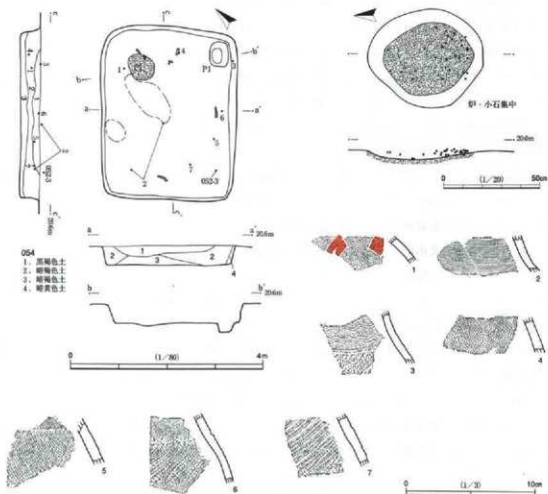
第63図 053号跡

印手式の土器群を主体とする。1はやや厚手の無文壺である。覆土上層出土であるが完形に近く復原できる。太いハケを基調とし、隙間のある斜位ヘラナデ（ミガキ）が加えられる。煤状付着物が胴部の広い範囲に認められ、壺と同様の暗色を示す。2は壺の底部片である。外面は無文であるが、1と同様に太く粗いハケ調整が内面に認められる。二次被熱が著しい。3は裝飾壺の頸部片である。屈曲部の段に布状組織（または微細な縄文原体）圧痕を伴う刻みが巡り、上部に不揃いの羽状縄文が施される。4～9は壺の胴部片である。いずれも附加条縄文で、9には異なる撚りの羽状交互施文がみられ、底面に木葉痕が残る。

054号跡（第64図、図版21・77）

弥生時代後期ごろの竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（Z14グリッド）に位置する。3.6m×2.8mの小さな隅円長方形である。確認面からの深さは0.4mある。長軸はN49度Eである。遺構の遺存状況は良好である。

炉は、北側の隅部付近にあり、軸からかなりずれている。40cm×60cmの楕円形で、炉床はほぼ平坦であり、40cm×50cmほどの範囲で赤色硬化面が形成される。炉の覆土には多数の小石が含まれており、本跡の覆土中からも、26点にも及ぶ礫・小石が出土している。炉内の小石は30点以上が出土し、4mm～8mm大の



第64図 054号跡

ものが主体を占めるがばらつきがある。主柱穴は検出されていない。貯蔵穴とみられる土坑が東側隅部で検出されている。45cm×55cm、深さ20cmの方形をなす。貯蔵穴の覆土中からも、焼土塊と石が出土している。床面はほぼ平坦で周壁溝は検出されず、炉の南西側に狭い範囲で硬化面が認められた。北西側の壁際では、覆土に焼土塊が含まれ、主軸線上の両端と南東側の壁際でも炭化材が出土しているが少量であり、建材としての有機的連続性はみられない。

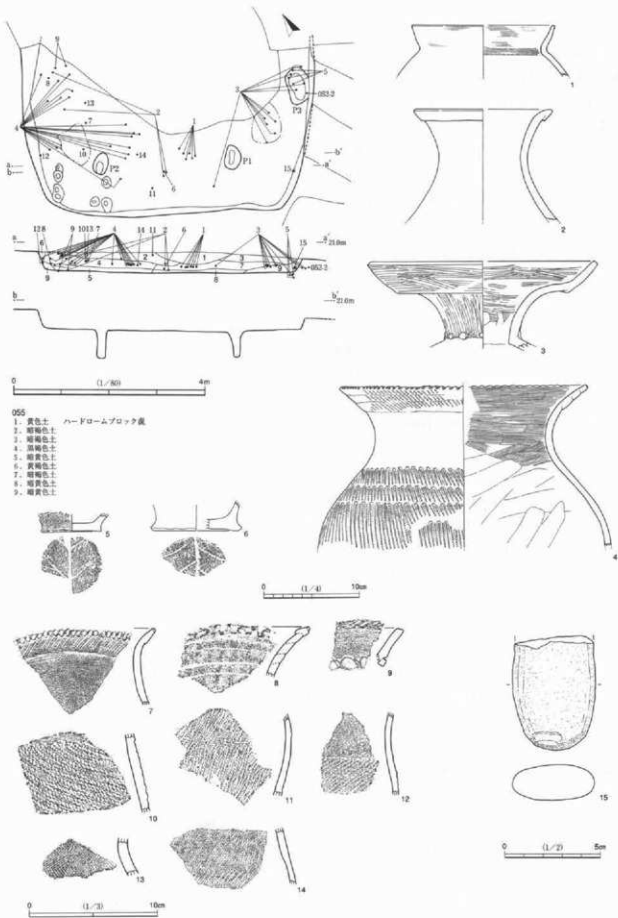
土器は小片ばかり1.2kg程度が出土している。図はいずれも覆土出土資料である。1は薄手で明色の裝飾壺胴部片である。本遺跡ではやや異質な感じがする。文様構成は不明確であるが、山形(鋸歯状)沈線文区画に縄文が充填され、文様帯内部に赤彩を伴う菱形沈線文が並ぶものとみられる。2は壺または甕の頸部片で、5本1単位の櫛描文4単位が横に下から、直線、波、波、直線で連続施文され、そこから上に縦方向の櫛描文1単位が延びる。3も壺または甕の頸部片で、2本1単位の櫛描文が横に3単位、下から直線、波、波状に離れて施され、直線櫛描文から下部に附加条縄文が充填される。4～7は壺・甕の胴部・胴部片で、いずれも附加条縄文が施されている。6は区画に結節文が用いられる。

055号跡(第65図、図版21・55・77)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端(ウ11グリッド)に位置する。本跡の北東側1/3は調査区外のため未調査であり、土採取による攪乱が本跡中央部を挟んでいる。軸長6.1mの隅円方形または隅円長方形と推定され、主軸はN63度Wとみられる。確認面からの深さは0.4mである。

炉は攪乱のため確認できない。柱穴は4か所のうち2か所が検出されている。両者とも径30cm×50cm前後の不整形円形で、長径は住居軸に直交し、深さは50cm～60cmである。南東壁際に46cm×60cmで、深さが9cmほどの小穴(P3)があり、出入口施設と思われるが、中から5の甕が出土している。ほかに、西側隅において径24cm～40cmの小穴が5か所あり、規則的に四角く並んでいる。床の硬化面は、出入口施設の周辺と、北西側柱穴と壁との間の2か所にみられる。

土器量は2.6kgを超えるが、本跡がやや埋没した時点の凹みに投入されたものが大部分である。床面等から出土したのは、5・9の小片2点を示しうる。5はP3から出土した印手式の甕底部片である。外面に附加条縄文、底面には木葉痕がみられ、煤状付着物が認められる。9は床面から出土した印手式の壺口縁部片である。肥厚帯は無文赤彩、口縁端部には附加条縄文、肥厚帯下部には細い角柱状粘土紐による蛇行隆帯が貼り付けられる。上層出土資料は次のとおりである。1は「く」の字口縁の小型甕小片である。二次被熱を受ける。細ハケ、ナデ消しを基調とする。胴部内面の非常に粗いヘラナデ痕は放置される。2は比較的下層で出土した折返し口縁部の小片である。ナデを基調とし、無文・無赤彩である。3は有段口縁部の口縁部である。接点のない同一個体片を含め、2/3周分が遺存する。ハケのうち、頸部に2cm間隔で円形浮文(円板形)が貼付けられ、入念にヘラミガキが施される。胎土・焼成は地元の一般的な特徴を示す。4は、下層上面から出土した印手式の壺(甕)である。遺存部が多く、図示した破片以外にも同一個体とみられる明色の胴部片がともに出土している。広く緩やかに開く口縁部形状と輪襷み装飾をもつ一方、細長い胴部形状と、附加条縄文、深い縄文原体刻みを併せもつ。肩部の結節回転文3条、口縁内部のハケ、内面下部の粗いヘラケズリ等は、本遺跡でもやや特異な調整である。周辺様式の特徴が混在する。6は甕の底部片で、木葉痕がみられる。7は印手式の甕口縁部である。縄文原体刻み、縄文が施される。8は久ヶ原系の甕口縁部片である。押圧波状口縁で、外面に指圧痕を伴う輪襷み装飾がみられ、煤状付着物が多い。内面は滑らかなヘラナデで、端部に突帯が巡る。10～12・14は印手式の甕胴部片である。明色



第65図 055号跡

の11を除き、暗色が多い。12・14には多量の煤状附着物がみられる。頸部に無文帯、胴部に附加条縄文を配し、結節文が追加されるものを含む。13は壺の頸部片で、淡色を示し、密に羽状縄文が施される。

石器は1点出土した。15は敲打痕を有する砂岩礫であり、被熱が認められる。

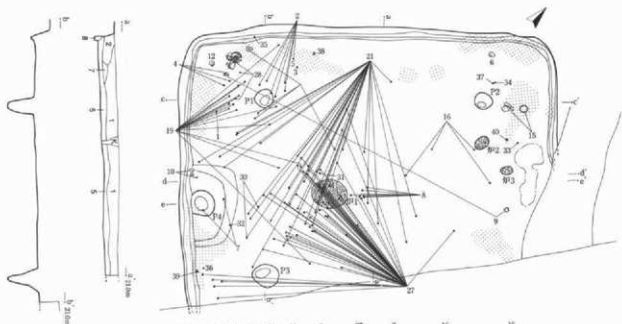
056号跡(第66～69図、図版21・22・55～58・77)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端(ウ11グリッド)に位置する。本跡の南東側1/4程度が調査区外であり、北東側の壁は後世の掘削で部分的に削平されている。長辺は7.9m、短辺推定7.0mの隅円長方形と推定され、主軸はN48度Eである。確認面からの深さは0.3mである。覆土最下層にはロームブロックを含む薄い層(5層)が水平に堆積し、外区にはそれに焼土を含む層(6層)が堆積しており、明瞭な赤色化焼土層がみられた西隅部や北隅部では、完形に近い土器がその中から出土している。炭化材は認められない。本跡の廃絶後すぐに、これらの土層と土器溜まりが形成されたと考えられる。

炉は3か所検出されている。主炉とみられる最大の炉1は、中央付近、長軸上のやや南西寄りにある。60cm×75cmの赤色硬化面で、平坦である。残りの2か所は、長軸上北東側壁近くであり、炉2は24cm×33cm、炉3は20cm×24cmの、楕円形をなす赤色硬化面として検出されている。いずれも平坦であり、外区の焼土層に近い。焼土層形成と同時に被熱した可能性もある。ただし、ほかには床の被熱痕跡が検出されなかった。主柱穴は4か所のうち3か所が検出されている。径35cm～50cmの不整形円形をなし、50cm～60cmの深さがある。上辺(南西)中央の壁際には、径54cm前後、深さ30cm前後の円形土坑がある。その周囲を囲むように土手状に高まりが検出されている。貯蔵穴とみられる。一周する壁溝を有している。

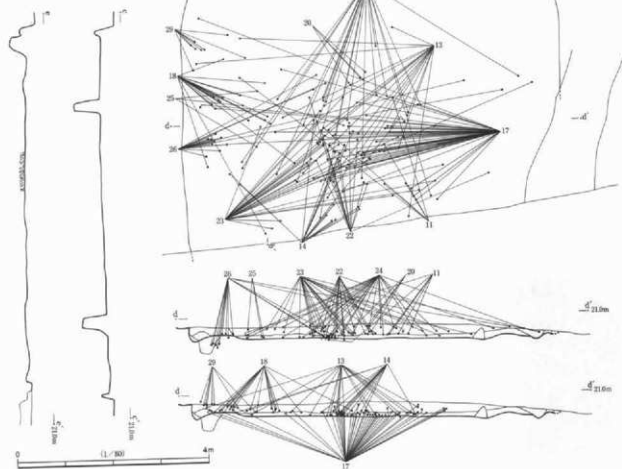
5.6kgを超える土器が出土しており、床面及び薄く堆積した最下層(5・6層)上面に集中する。3・4・12・28は西側隅の、6・9・10・15は北側隅の、外区に形成された同様の焼土層から形を保って出土したもので、とくに一括性が高い。中央部では、小型土器群や壺等が完形に近く復原できる遺存度を持ちながら、破片が一面に飛散した状態で出土しており、土器溜まりと同じ特徴を有する。これらは、間層をほとんど挟まない一括性の高い資料であり、総じて五領式古相の土器群とみられる。

1～4は小型器台である。ミガキが行き届いた精製品であるが、二次被熱がみられ、とくに4は割傷が著しい。1は径1.3cmの大型円形透し孔が四方、2は隅円三角形透し孔が三方と、その間に径0.7cmの小型円形透し孔が1か所、3・4は径1.1cmの円形透し孔が三方に施される。軸の孔形状には互いに相違がみられる。5は高杯脚部片で、二次被熱を受け、外面にヘラナデ(ミガキ)調整痕と赤彩が認められる。6～11は小型壺である。均整な形をもち、ヘラナデを基調とするが、部分的にミガキ調整がなされる。10には細かいハケが残され、9には東海系ヒサゴ壺にもかかわらず口縁部内面に輪襷み段表現が加わる。6・7・10・11は褐色の器面と明瞭な黒斑を有する。12は小型鉢である。頸部に折返し段装飾がある。小型壺と同じ質感で、褐色の器面と明瞭な黒斑を有する。13・14・16～18・29は壺である。素口縁の14と折返し口縁の16・17があり、ともに無文で、明瞭な黒斑を有し、やや下膨れ気味の球形胴部を有する。ヘラナデ・ミガキを基調とし、赤彩のみみられるが、いずれも激しい二次被熱のため内外面とも器面荒れが著しい。比較的器面状態がよい17・18は、丁寧なヘラミガキが観察され、うち18には腹部に煤状附着物がみられる。15は印手式の壺とみられる。遺存度は高い。口縁部と胴部がはずれた状態で、それぞれ形を保持したまま並んで出土した。両者は接合するが、口縁部がはずれたのちに被熱している。状況図の点は遺物最上部の高さである。壁より低い位置の焼土内から出土し、土器の周辺に攪乱は及んでいない。広口筒胴の在来形態を保持するが、底部径が小さくなり、単節縄文の羽状施文など、変異的要素がみられる。羽状施



056

- 1. 黒褐色土
 - 2. 暗褐色土
 - 3. 暗褐色土
 - 4. 黄褐色土
 - 5. 暗褐色土
 - 6. 暗褐色土
 - 7. 黄褐色土
 - 8. 黄褐色土
- ハードローム・ブロッカー・
 ソフトローム・後土校蓋
 後土校蓋
 後土校・ハードローム校・
 ソフトローム蓋
 ハードローム・ブロッカー・
 ソフトローム蓋



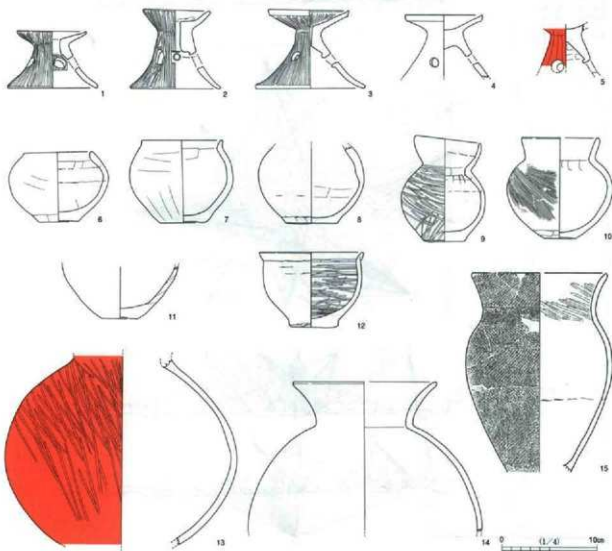
第66図 056号跡 (1)



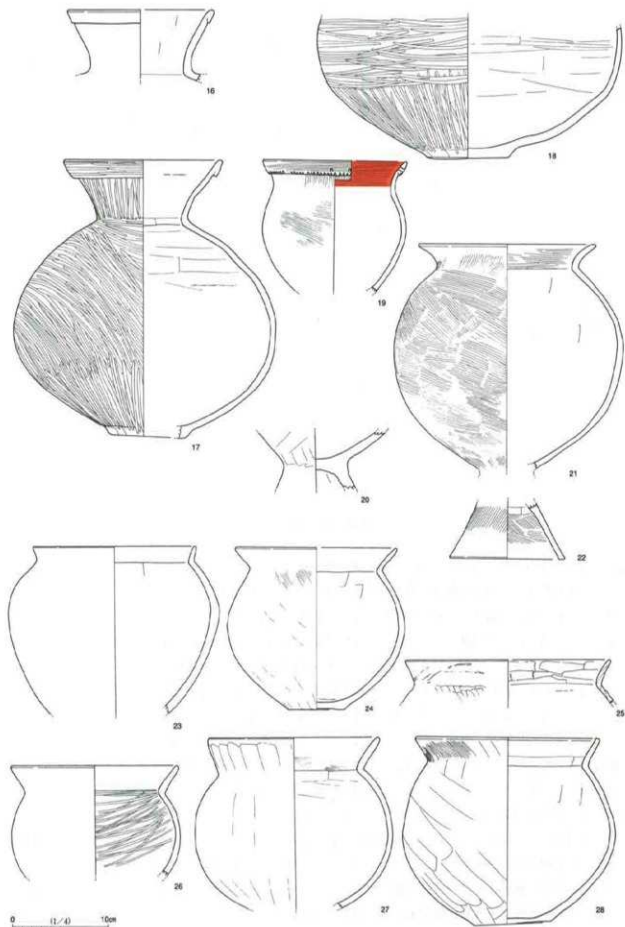
西侧隔层土器出土状况



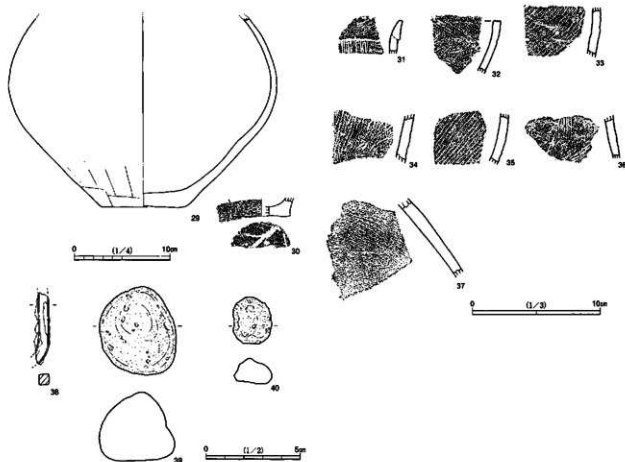
北侧隔层土器出土状况



第67图 056号迹(2)



第68图 056号钵 (3)



第69図 056号跡 (4)

文が施された他の土器と同じく、18も羽状縄文は撚りの方向によって目の細かさ、揃い方に極端な差がある。口縁部は端部及び外面に縄文を有し、肥厚帯はもたない。19は壺であるが、折返し口縁を有する。焼成前の径3mm小孔が2個ずつ、対に穿たれたとみられる。折返しの下端部にヘラ刻み、器面調整にはハケが施される。激しい二次被熱を受けるが、口縁部内面に赤彩の痕跡が残る。20～22は台付壺である。20は粗いハケをナデ消しているが、21・22は5本～6本/cmの粗いハケが施され、口縁部が明瞭に屈曲する。23～28はいずれも遺存度が高い「く」の字口縁平底壺である。23は短い直口縁で肩が張るやや特異な形状をなし、外面はミガキ様のヘラナデが施される。24～28は素口縁である。26・27は頸部が著しく屈曲し内面に鋭い稜をもつ形状で、外面に粗いハケのちヘラナデが施される。なお、26は上半部が完存し、腹部破断面は被熱した資料で、器台に転用されたとみられる。口縁部ヨコナデが唯一確認され、胴部内面にミガキ様の細いヘラナデがみられる。28は完形に復原されたが、破砕状態で二次被熱を受けている。24・25・27は内面の黒色化部分が底ではなく腹部にみられるため、斜位や横位で二次被熱したとみられる。30～36は上記土器溜まりで一緒に出土した印手式の土器群であるが、小片であり客体的である。10は壺底部片である。附加条縄文と底面木葉痕がみられる。31は壺または甕である。折返し口縁に附加条縄文、頸部に5歯1単位の縦方向櫛描文が3単位以上接して施される。32は甕または鉢の口縁部片である。肥厚帯をもち、端部に附加条縄文、外面に附加条縄文の羽状交互施文がみられる。33～35は甕の胴部片である。附加条縄文が施される。36は壺または甕の肩部片である。縦方向の櫛描状(半截竹管束状)文と附加条縄文

が施される。37は大型装飾壺の肩部片である。網状文が幅2cm前後の細かい単位で横位に施される。

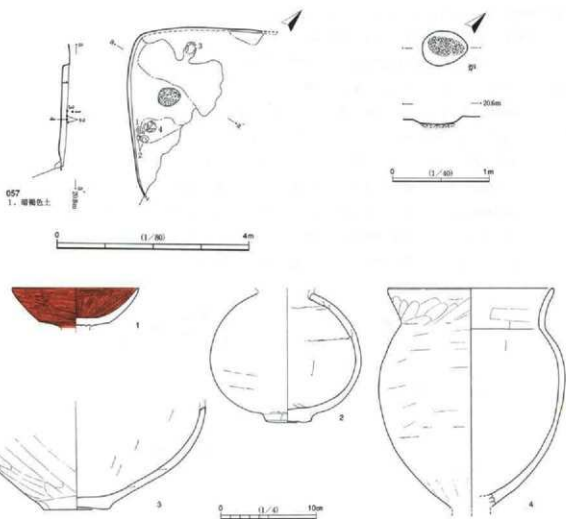
鉄製品1点は確認面付近から、軽石2点は焼土付近から出土した。ほかに鉄滓小片が出土している。38は棒状鉄製品である。出土位置から、本跡および土器溜まりに直接伴うものではない。39・40はともに白色系の軽石である。とくに39は磨面に覆われて円錐形をなし、一面が平滑化している。

057号跡(第70図, 図版22・57)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端(ウ10グリッド)に位置する。1/3程度を残して、土採取の攪乱によって削平され、規模は判明しない。形状は隅円方形と思われる。深さは0.1mである。

炉は南西側の壁近くに認められる。30cm×45cm前後の楕円形をなし、赤色硬化面が20cm×38cm前後の範囲で形成され、8cm前後の凹みがある。炉の北側の床面には、硬化面が認められる。柱穴等は検出されていない。

土器は、図示したもの以外では0.2kgに満たないので、南西壁際で出土した4個体のみ伴うとみられる。五領式の土器群である。1は高杯の杯部である。赤彩を伴う丁寧なミガキが施される。2は無文の壺である。下膨れ形の胴部で、厚い平底を造り出す。頸部で欠損し、破断面はきれいに削られて面をもつ。



第70図 057号跡

口縁のない状態で使用されている。一次焼成前にはずれていた可能性もあるが、二次被熱が著しいため判断できない。3は大型の平底甕とみられる。球形胴部を有し、外面は粗いヘラナデ、内面は比較的平滑なナデが施される。二次被熱し、薄い煤状付着物に覆われる。4は素口縁の台付甕である。粗いヘラナデを基調とし、とくに頸部は連続する斜めの粗いヘラナデにより器面が波打っている状態である。二次被熱による赤色化・脆弱化が著しく、内面は薄い煤状付着物に覆われる。

058号跡 (第71図, 図版22・57・78)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡とみられる。遺跡北半部北端 (Z13グリッド) に位置する。形状は円形と推定されるが、本跡の1/4以上が調査区外のため規模は判明しない。深さは0.1mである。

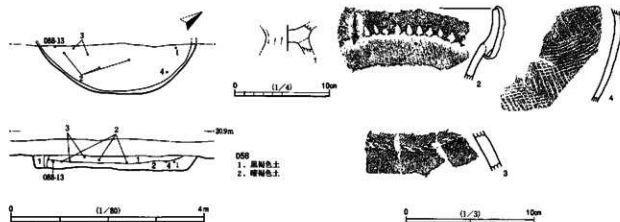
炉等を含む各施設は検出されず、調査区外に位置していると思われる。

土器量は少なく、0.3kgに満たないが、特徴のわかり易い破片が数点含まれる。1は台付甕の脚部である。二次被熱をうけ、内面に煤状付着物がみられる。2は二重口縁装飾甕の口縁部で、口縁端部と外面に細い羽状縄文と3条以上1単位の棒状浮文が施される。棒状浮文と口縁部下端にヘラ刻みがみられ、頸部には二重口縁作出前に施されたハケ目が残る。3も同種の甕胴部片で、結節文で区画の羽状縄文帯がみられる。無文帯には赤彩された可能性もあるが、現品では確認できない。4は印手式の甕胴部片で、附加条縄文が羽状に交互施文される。これらのほか、053・088号跡と接合した印手式の甕片がある。

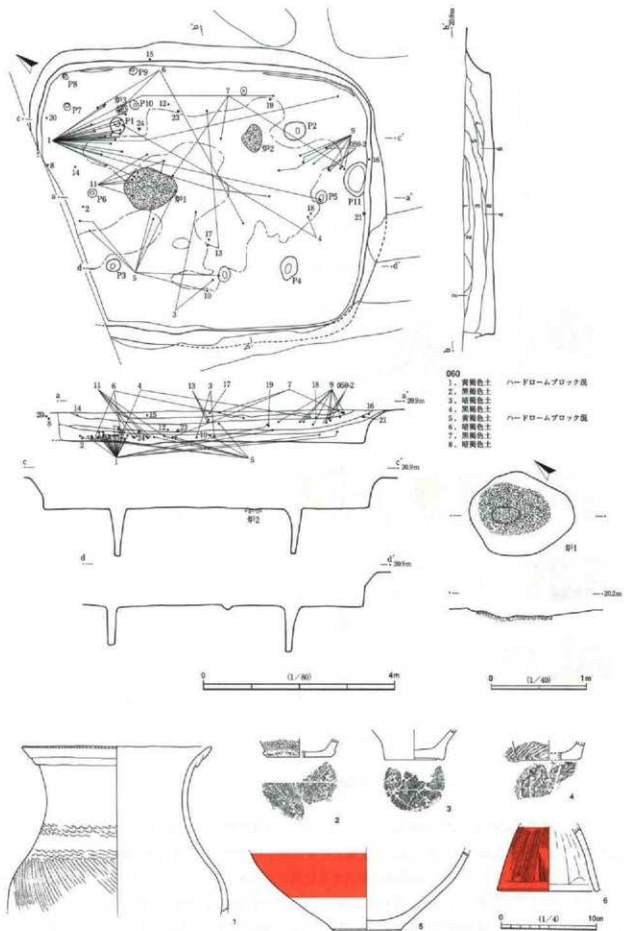
060号跡 (第72・73図, 図版23・58・59・78)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (イ10グリッド) に位置する。北西側の壁は調査区外であるが、遺構の大部分を検出できた。平面形は7.3m×6.3mの隅円長方形をなし、主軸はN38度Wである。検出面からの深さは0.6mである。東側の壁 (右辺) に接して、059号跡 (環濠) が検出されている。西側の壁 (左辺) を2条の浅い溝によって攪乱されているが、ほかに重複はなく、検出状況は良好である。右辺と下辺の壁上部は斜めに崩落しており、自然埋没過程で播鉢状の凹みを形成していた時期が認められるが、出土土器の多くはそれよりも下層に見いだされている。

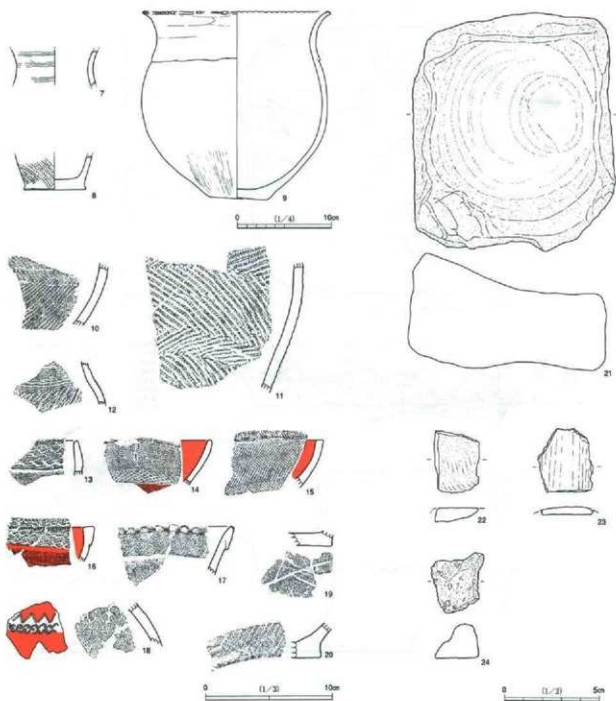
炉は3か所検出されている。炉1は、主軸線上の北西寄りにみられる。85cm～110cmの楕円形 (たまご形) で、6cm前後の凹みがあり、赤色硬化面が54m～76mの範囲で広がる。炉2は、右辺 (北東辺) 下寄りのP2付近に位置する。40cm～60cmの楕円形で、3cm前後の凹みがあり、赤色硬化面が18cm～25cmの範囲で広がる。炉3は炉1の北東側に位置し、20cm～25cmの楕円形で、平坦である。主柱穴は4か所検出さ



第71図 058号跡



第72図 060号跡 (1)



第73図 060号跡 (2)

れている。径30cm~40cm、深さが80cm~95cm前後と深いのが特徴で、北西側のP1・P3は円形に近く、南東側のP2・P4は隅円長方形に近い。主軸上にも前後1か所ずつ、径20cm~25cm、深さ13cm前後の小穴P5・P6が検出されている。棟持柱に相当する位置にあるが、主柱穴に対し著しく貧弱である。P11は南東側の壁に接して検出された、径40cm×75cm、深さ15cm前後の浅い楕円形土坑である。また、P7~P9の小穴群が本跡の北側隅に検出されている。径20cm前後、深さ35cm前後の小穴4か所が規則的に並び、棚の支柱等と観察された。P3~P4の間にも径24cm×33cm、深さ15cm前後の小穴が1か所、P1~P

2の間にも径13cm×16cm、深さ17cm前後の小穴1か所がみられる。壁溝の存在は不明瞭で、右辺(北東側)においてのみ検出されている。床面は、中央付近や出入口施設付近、炉1周辺などに硬化面が形成されている。

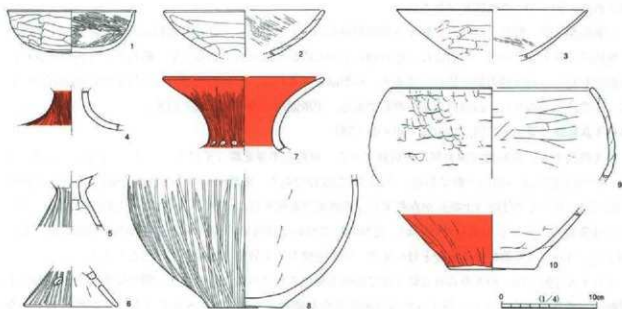
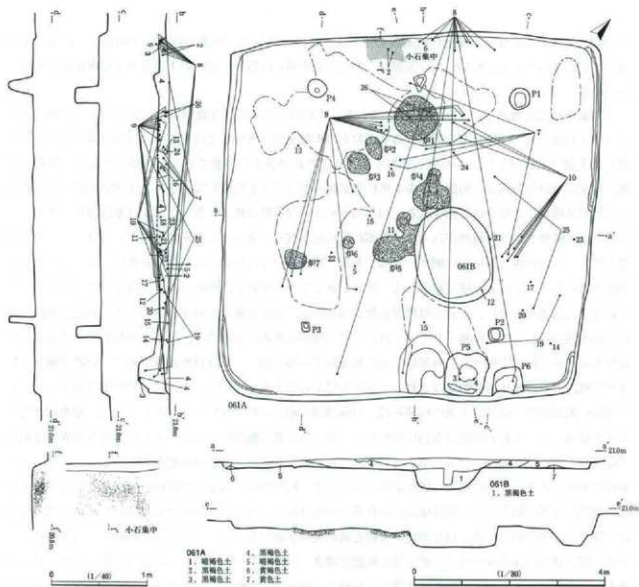
土器量は比較的豊富で、3.3kgが出土している。床面直上での良好な資料には恵まれなかったが、1～6・10・11は下層(8層)出土遺物であり、おもに本跡北隅に集中して出土した。ほかに摺鉢状部分に堆積した上層(7層以上)からの出土である。1は印手式の壺または甕である。口縁部に2段の輪積み装飾、端部のみ附加条縄文、頸部に3条1単位の結節回紋文が2単位離れて施され、下側の結節文を区画として附加条縄文が胴部全体に施される。内外面とも煤状付着物に覆われる。2～4は甕底部片である。いずれも二次被熱と煤状付着物がみられ、底部に木葉痕が残る。2・4には附加条縄文、3はヘラナデを基調とする。5は球胴に近い壺の胴部、底部である。遺存部分では無文であり、赤彩を伴うヘラミガキが、下部では斜めに、上部では横に施される。内面が著しく荒れており、明色の胎土には多量のスコリアが含まれる。二次被熱を受け、一部に煤状付着物がみられる。6は在来系の高杯脚部である。暗色の器面に赤彩を伴う縦方向のミガキが施される。7は12と同一個体の甕頸部片である。3本1単位の櫛描波状文が間隔をあけて4単位以上施され、肩部以下は附加条縄文が施される。8は甕底部片である。附加条縄文と底部木葉痕、少量の煤状付着物がみられる。9は上層からままとって出土したほぼ完形の甕である。ふくよかな短い胴部形状、肩部に1条の輪積み段、口縁端部に細かい押圧波状の刻みを有する久ヶ原系の甕で、ナデを基調とし、多量の煤状付着物に覆われる。10・11は甕の胴部片である。ともに、撚りの異なる附加条縄文が羽状に交互施される。厚手の11には二次被熱がみられ、内面が黒色化している。12は7と同一個体の甕片である。ほかに同一の破片がもう1点ある。13～16は、鉢または高杯の口縁部である。13・16は口縁部に結節回紋文、14・15は細かい羽状縄文が施される。13を除き端部にも施文され、無文部分は赤彩を伴うミガキが施される。14は羽状縄文帯と網状文帯を組み合わせた、薄手で装飾的かつ精美な造りである。17は甕の口縁部片である。肥厚帯に附加条縄文、端部にヘラによる波状の刻みが施される。18は装飾壺の肩部片である。上から鋸歯状沈線文・結節文・羽状縄文が配され、無文帯と羽状縄文部分に赤彩が施される。19・20は甕底部片である。

石製品類3点、軽石1点が、上層と下層の境界から出土している。21は砂岩製の石皿である。上下両面が摩耗により大きく凹む。磨面には、横方向に平滑な段が形成されているので、砥石として再利用された可能性が高い。22は砂岩製の砥石片である。小型とみられる。23は細粒の白色石材を用いた砥石片である。小型とみられる。24は白色系の軽石である。平滑面が二面形成されている。

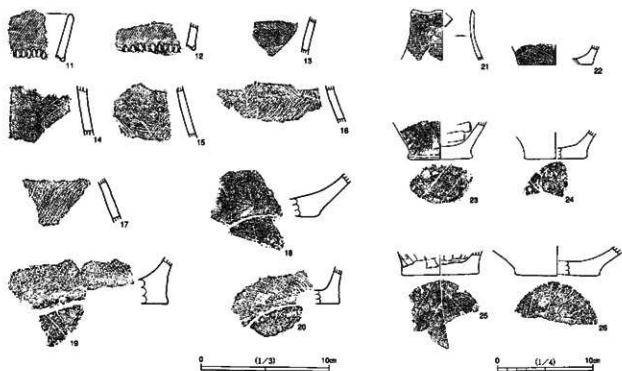
061A号跡(第74・75図、図版23・59・60・78)

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡北半部北端(イ11グリッド)に位置する。7.7m×6.3mの方形に近い隅門方形である。主軸はN43度Wである。確認面からの深さは0.6mである。本跡中央部には、061B号跡(土坑)が存在する。本跡覆土を掘り込んで構築されたものと観察された。土坑からは多量の土器片が出土しているが、完形の杯については古墳時代末～奈良時代の所産である。したがって、061A号跡に伴う施設とはいえ、別の遺構として分離して報告することとする。

061A号跡では、炉とみられる焼土が7か所も検出されている。炉の多さ、礫や炭化材の出土から工房跡の可能性も考慮される。炉1～炉3は赤色硬化が顕著であり、炉4～炉7は赤色化が進行していない。炉1は、主軸線上の北西寄り、柱穴と並ぶ位置に検出された。径90cm前後の円形で、5cm前後凹みが



第74图 061号跡 (1)



第75図 061号跡(2)

あり、全面が赤色硬化している。炉2と炉3は、炉1の南側付近に並んで検出された。炉2は20cm×50cmの楕円形で、平坦であるが全面に赤色硬化面がみられる。炉3は、44cm×54cmの楕円形で、平坦であるが全面に赤色硬化面がみられる。炉4は、炉1の南東側付近に位置する。70cm×90cmの紡錘形をなし、8cmの凹みがある。炉5は、炉4の南側付近に位置する。40cm×90cmの不整形で、3cmの凹みがある。土坑に切られている。炉6は炉5の南側に位置する。径20cmほどの円形でほぼ平坦である。炉7は38cm×50cmの不整形円形でほぼ平坦である。支柱穴は対角に4か所検出されているが、均等な配置ではない。南東側のP2・P3は、一辺20cm～34cmの方形をなし、深さは約50cmである。北西側のP1・P4は、径約40cmの円形をなし、深さは50cmである。柱穴のうち3か所で、周囲を突き固めた埋土（ロームロウソットローム混暗褐色土）が認められる。貯蔵穴とみられるP5が、下辺東寄りに、壁に接して検出された。84cm×86cmの方形をなし、深さは約40cmである。貯蔵穴の西隣には径約1mの土手状の高まりがあり、本跡中央に向かって緩やかに傾斜する。周囲はとくに強固な硬化面を形成しているので、出入口に付随する足場の可能性がある。

上辺（北西側）壁際に、413点もの小石集中部が検出された。分布は覆土の下から上まで分布しており、061A号跡に直接伴うのか疑問がある。個々の石は非常に小さく、2mm～4mm大前後が191点と最も多く、1cm以下が95%を占める。

土器総量は6.7kgにも及び、浅い遺構にしては多量である。ただし、赤彩を含むものの無文小片が多く、接合が困難なため、図示できたのは2～10の五領式成立期の土器群と、11～27の印手式の土器群にとどまる。2・3は外来系の高杯口縁部である。2は小石集中区内から出土している。いずれも外面ナデ、内面ヘラミガキを基調とする。4は碗形高杯とみられる高杯脚部である。赤彩を伴うヘラミガキが施され

る。5・6は小型器台であるが、6は高杯脚部の可能性もある。ともにヘラミガキが施され、6は三方透し孔が施される。5は二次被熱が著しい。7は素口壺の口縁部である。外面は全部、内面は口から頸部屈曲部までヘラミガキと赤彩が施され、頸部屈曲部にドーナツ状の円形浮文が1.5cm間隔で貼り付けられる。8は壺胴部の大きな破片である。小石集中区の東隣から出土している。無文・無赤彩で、外面に縦方向のヘラミガキが丁寧に施される。9は大型の鉢とみられる。遺存部分は少ない。指圧痕を伴う輪襷み装飾を有し、内面は荒々しいヘラケズリ、端部に面が施される。10はやや大型の壺底部である。外面に赤彩とミガキが施される。11・12は印手式の壺口縁部片である。ともに口縁部肥厚帯に附加条縄文、肥厚帯下部に深い刻みが施される。13～16は壺の頸・肩部片である。13は5本1単位の櫛描波紋がやや間隔を置いて3単位確認できる。14は縦に文様帯を区画し、斜格子状線刻を充填している。15は縄文原体端部側面による連続押圧文が横に2条と、斜めに交差する5本1単位の櫛描文の一部が観察される。16は15の下部に当たり、V字形櫛描文の下に縄文原体端部側面圧痕による区画が走り、胴部には附加条縄文ともう1条の縄文原体端部側面圧痕が施される。17は壺胴部片である。附加条縄文が施され、煤状付着物も多い。18・26は無文・無赤彩の壺底部片である。ともに底部木葉痕を有し、18はヘラミガキ調整、26はナデ調整される。19・20はともに附加条縄文と底部木葉痕がみられる。21は壺頸部片である。4本1単位の同じ櫛を用い、間隔をあけて小波状櫛描文が3単位施されており、上部破断面が摩耗していることから、口縁部破壊後にも用いられていたとみられる。22～25は壺の底部片で、いずれも附加条縄文と底部木葉痕がみられる。

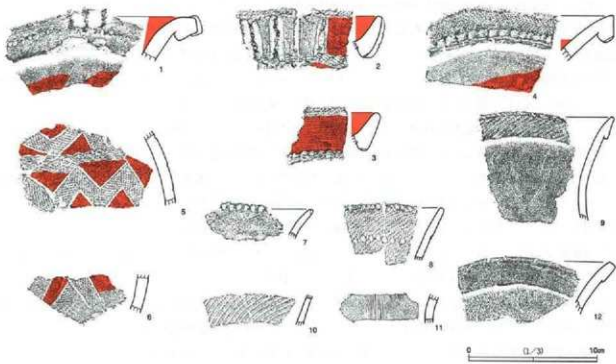
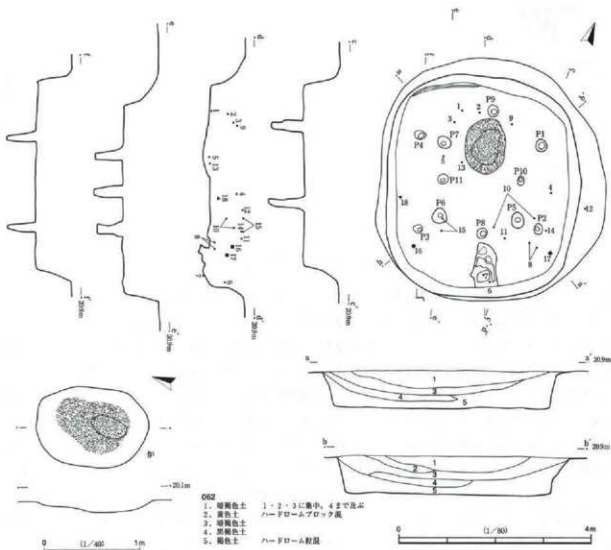
なお、1は、061B号跡から出土した土師器杯の完形品である。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施され、器形等から古墳時代末以降、奈良時代の所産とみられる。

磑のほか、軽石2点が出土しているが、いずれも小片である。

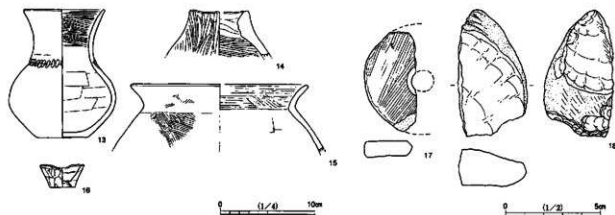
062号跡（第76・77図、図版23・60・79）

弥生時代後期の堅穴住居跡である。遺跡北半部北端（イ11グリッド）に位置する。4.7m×4.0mの隅円方形をなすが、上端では壁が崩れて円形に近い。主軸はN15度Wである。深さは0.5mである。上端の崩れは、自然埋没する過程で形成された播鉢状の凹みと関連しているとみられ、そこに堆積した1、2、3層から、古墳時代前期の土器が多数出土している。ただし、細片が多く、図示できるものが少ないため、土器溜まりとは認めがたい状況である。

炉は1か所検出された。北側の主柱穴と並ぶ位置に設けられており、80cm～120cmの隅円方形をなす。深さは15cmあり、赤色硬化面が55cm～80cmの範囲にわたって形成されている。主柱穴は4か所検出されている。いずれも径26cm～30cmの円形で、深さは55cm～70cm前後である。出入口施設とみられる小穴が下辺の壁際にみられる。50cm×94cm前後の不整形で、深さは25cm前後であり、底面の凸凹が激しい。ほかに小穴7か所が検出されている。P1は北側の柱穴東側に位置し、20cm×24cmの不整形円で、深さが60cm前後である。P2は、径20cm前後の不整形円で、深さが60cm前後である。P3は、18cm×22cmの不整形円で、深さが30cm前後である。これらP1～P3は、主柱穴に囲えるような配置をされている。P4は炉の北側付近に位置し、22cm×29cmの楕円形で、深さは5cm前後と浅い。P5は出入口施設の北側近くに位置し、径20cm前後の円形で、深さは4cm前後と浅い。P4とP5は、ほぼ主軸線上に位置しており、同様の小穴配置は060号跡でもみられる。P6は、径20cm前後の円形で、深さが60cm前後である。P7は、15cm×18cmの円形に近い楕円形で、深さが60cm前後である。P6とP7は、東西主柱穴の中間に位置している。壁



第76図 062号跡 (1)

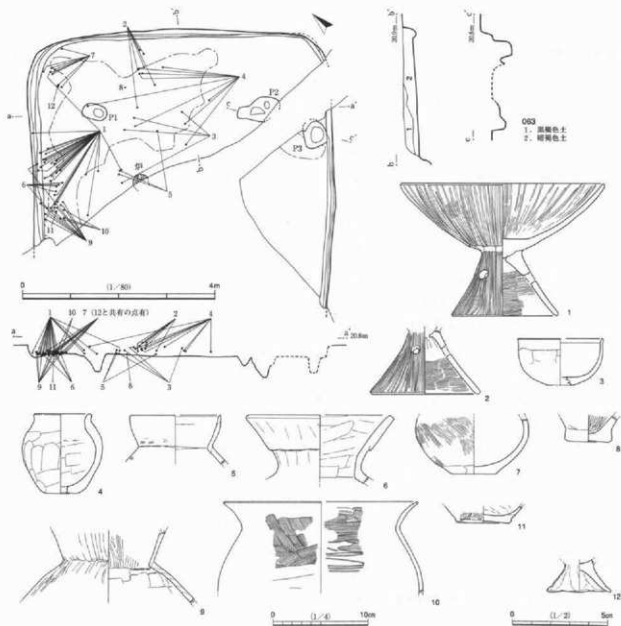


第77図 062号跡 (2)

溝については、北西隅にのみ検出されている。床面は全体にわり硬く締まっている。

出土土器量は5kgに及び、うち半分程度は上層出土といえる。床面付近から出土しているものでは、1・5・7・8・13がある。1は端部面が外向きの、折返し口縁壺である。3本1単位の棒状浮文が端面に貼り付けられ、端部面下部に7mm間隔の刻みが施される。全体に荒れが著しく、文様は判然としなが、無文部分にミガキ痕と赤彩が残る。2・3は端部面が上向きの、折返し口縁壺片である。狭い端部面に縄文、折返し外面に6本/cmの粗いハケと、刻みを伴う4本以上1単位の棒状浮文、折返し下端部にハケ刻みが施され、ハケ及び内面ミガキ部分は赤彩される。4は、1と類似の壺である。外向き口縁端部に羽状縄文、折返しの下端部に押圧波状の刻みを有する。無文部分は器肌荒れが著しいが、一部に赤彩が残る。5は裝飾壺の胴部である。結節文を挟んで上下に山形沈線文区画の文様帯が配され、区画内は縄文、区画外の無文三角部分は赤彩が施される。6は、5と同一個体とみられる壺胴部片である。7は久ヶ原系統の壺である。口縁端部に深いへう刻みが密に施され、粗いナデを基調とし、煤状付着物もみられる。8は印手式の壺である。外面に附加条縄文、縄文原体先端による刺突文が、口縁端部に縄文原体圧痕を伴う刻みが施され、煤状付着物に覆われる。9は壺または甕の口縁部片である。肥厚帯外面と口縁端部に附加条縄文が施される。10は甕胴部片である。附加条縄文が施される。11は甕の頸部片である。幅1.1cmの平行沈線文が2.5cm間隔で縦に施される。櫛とは異なり、径約1.5mm半截竹管状の草茎を束ね、束幅約6mmで、1か所に2回ずつ描かれる。器面は滑らかで、煤状付着物はみられない。12は、064号跡の7と同一の壺口縁部片である。肥厚帯はヨコナデ、頸部はミガキ様のへらナデが施され、内外面とも黒色化している。13は小型の壺である。炉に隣接する床面から出土した完形に近い品である。素口縁・無文であり、頸部に刻みを伴う段裝飾一条がみられる。刻みは長楕円形をなし、内部に細かい凹凸がみられる。口縁部ヨコナデのち、内面へらミガキ、胴部ナデが施される。内面の荒れが著しい。14は小型無文の壺と考えるが、類例に乏しい。厚手で不整形な反面、内外面とも密にへらミガキが施される。15は上層出土の「く」の字口縁壺である。4本〜5本/cmのハケのち、口縁部ヨコナデが施される。16は鉢形の小型土製品である。内面は無調整で、外面のみ底部までへらナデが施される。

その他に土製品1点、砥石1点が出土している。17は土器片転用の紡錘車とみられる。ハケ壺の胴部片を円形に研磨し、中央に両面から穿孔している。ハケとは方向の異なる微細な傷がみられることから、若干は実用に供されたとみられる。18は砂岩礫片である。被熱、破損している。砥石としては破損前に用いられたとみられ、一部に鉄分が付着した平滑面がみられる。側面に6条以上の磨切傷が観察される。



第78図 063号跡

063号跡 (第78図, 図版24・60・61)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端(イ12グリッド)に位置する。一辺6.3mの隅円方形, または隅円長方形とみられる。炉の位置で計測すると, 主軸はN49度Wである。確認面からの深さは0.3mである。本跡の南西側約1/2以上が後世の攪乱で削平されている。

中央北西寄りの床面で, 炉の一部が検出されているが, 攪乱によって削平され形状や規模は知りえない。柱穴は4か所のうち2か所について検出されている。P1は径35cm×50cm, 深さが40cm前後の楕円形で, 攪乱を受けているP2のほぼ同様の穴とみられる。P2には西に隣接して径約30cm, 深さ30cm前後の小穴が付属している。貯蔵穴とみられる土坑P3が南東側壁際に検出されている。径50cm×60cmの楕円形をなし, 深さは40cm前後である。貯蔵穴の周囲の床は硬く締まっている。床の硬化面はP1周辺においても確認されている。壁溝は本跡遺存部分では全周で検出されている。

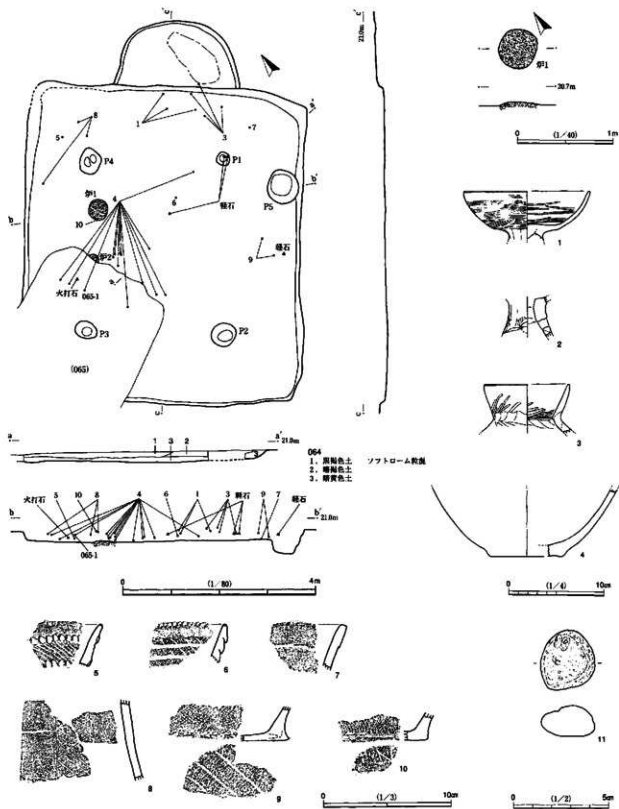
土器量は1.7kgを超える。とくに北西壁際の床面では、五領式の土器群が集中的に出土している。1は東海系の「開脚」高杯である。三方透し孔をもち、丁寧なミガキが施された精良品であるが、搬入品ではない。細片化しているが杯部は大部分遺存する。脚部は遺存度が低い。脚がはずれたのち、杯部のみ二次被熱しており、赤色化、煤状付着物がみられる。2は小型器台である。三方透し孔をもち、1と同じ質感をもつ。二次被熱し、帯状に煤状付着物がみられる。3は小型丸底鉢に類する鉢である。薄手の造りであるが、手の込んだ調整は施されない。4は無文の小型壺である。ヘラナデを基調とし、明瞭な黒斑がみられる。5は東海系ヒサゴ壺とみられる口縁部片である。6は折返し口縁壺の口縁部である。粗いヘラナデを基調とし、無文である。7は小型壺の胴部である。外面に粗いハケがみられる。8は小型壺の底部である。内面に比較的丁寧なヘラナデが施される。9は直口縁とみられる明色の壺である。口縁内部と外面に丁寧なヘラナデ（ミガキ）が縦方向に揃って施される。10はハケ塗の口縁部小片である。二次被熱により内面が黒色化している。11は10と同一とみられる壺底部片である。外面に細かいハケがみられる。

064号跡（第79図、図版24・61・79）

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡北半部北端（イ11グリッド）に位置する。5.8m×6.6mの隅円長方形で、炉の位置から測定すると主軸はN44度Wであり、この場合、本跡は横に長い形状をもつ。深さは0.2mである。西側隅を065号跡に切られる。

炉は本跡の北西寄りに、主軸線をまたいで2か所検出されている。右の炉1は40cm×45cmの円形で、平坦である。左の炉2は065号跡に切られるため全形が確認できないが、検出部最大幅は約28cmで、平坦である。支柱穴は4か所検出されている。このうちP3は065号跡に切られるが、底部のみ、同跡より低いために残っていた。いずれも径35cm～50cmの範囲で、深さは60cm～65cmである。貯蔵穴とみられる土坑は東側の壁際に検出されている。60cm×70cmの円に近い隅円方形をなし、底は平らで、深さは36cm前後である。右辺（北東側）壁から、外側に半円形の張出し状施設が検出されている。径1.5m前後、深さ5cm前後の浅い土坑で、底が平坦である。一部に硬化面が確認できるため、出入口施設の可能性があるとして本跡とともに調査された。この施設床面と同じ高さの本跡覆土内から、1・3の土器が出土しており、これらが施設に伴うなら、住居跡の廃絶後に重複して営まれた、別の堅穴状遺構である可能性が高い。

土器量は3.2kgを超えるが、床面付近では良好な出土品がなく、大部分は1・2層から出土した。1～4は外来系、5～10は印手式の土器群である。1は碗形高杯の杯部である。外面底部に明瞭な線を有し、上部に細かいハケが施される。2は小型器台とみられる。著しく不均等な位置に4か所、円形透し孔が施される。3はヒサゴ形に類する小型直口壺の口縁部である。胴部内面を除き、粗いヘラミガキが施される。4は壺の底部である。器肌の荒れが著しいが、一部外面に縦方向のミガキが確認できる。5は壺の口縁部片である。輪積みないし折返しの装飾が2段みられる。下段外面に附加条縄文を施したのち、上段折返しを加え、各段下端にヘラ刻みが施される。口縁端部は縄文原体圧痕による刻みを有する。煤状付着物がみられる。6は壺の口縁部片である。3段の輪積み装飾の上に、附加条縄文が1回でまとめて施文される。煤状付着物がみられる。7は壺の口縁部片である。低い折返しはヨコナデ、頸部は縦方向ヘラミガキが施される。内外面とも黒色化している。8は壺頸部片である。鋭利な串状工具による刻線が2.5cm～3cm幅で縦方向に施され、一区画置きに斜格子刻線文が充填されている。9・10は壺底部である。木葉痕を残し、後者は明瞭な附加条縄文が施される。



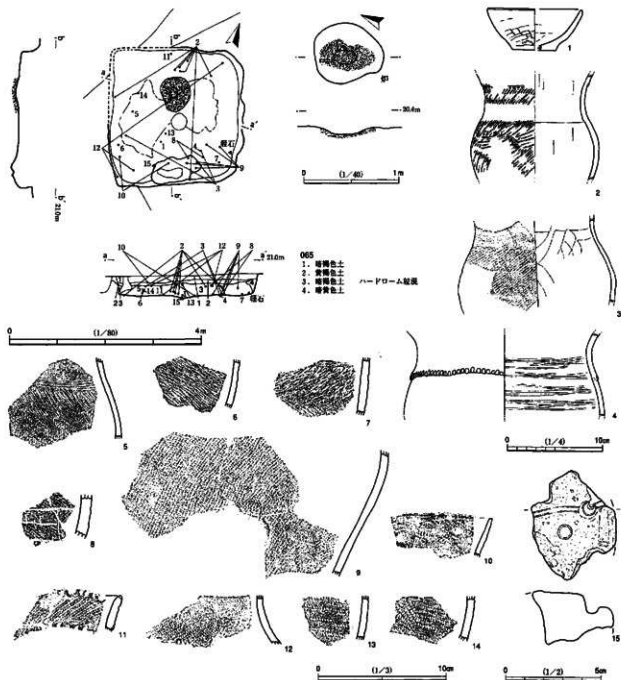
第79図 064号跡

軽石2点、火打石とみられる礫1点、焼成粘土塊1点が出土している。11は白色系の軽石である。完形であるか明確な磨面はなく、貫通する孔1か所は人為の穿孔ではない。礫は図示していない。自然面は欠け落ち、稜もつぶれた不整形球体で、最大径は3.7cm程度である。乳白色～青味白色の蛋白石（オパール）とみられ、火打石の可能性はある。焼成粘土塊も図示していない。長さ3.2cmの棒状で、握ね痕がつく。

065号跡 (第80図, 図版24・61・79)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (イ11グリッド) に位置する。一辺2.8mの小さな遺構で、隅円方形をなす。主軸はN19度Wである。深さは0.4mである。東側で064号跡を切っている。066号跡とも重複するが、攪乱のため土層による前後関係の確認はできなかった。

炉は1か所検出されている。主軸線上のやや北西寄りに位置し、60cm×70cmの楕円形をなす。赤色硬化面は30cm×60cmの範囲でみられ、深さは9cm前後である。床面は、炉を中心にして硬化面が検出されている。下辺 (南東側) 中央の壁際には、60cm×70cmの不整形な穴がある。貯蔵穴としては深さが13cm前後と



第80図 065号跡

浅く、底面が凸凹している。

土器量は0.9kg程度で、図示したものがほとんどを占める。1～10は床面付近から出土したもので、11～14は覆土2層の前後から出土したものである。1は小型鉢片である。外面は荒々しいヘラナデ調整であるのに対し、内面は滑らかなヘラナデが施される。2は印手式の甕である。口縁部肥厚帯と頸部下部は無文で、肥厚帯下部に縄文原体端部圧痕による刻み、頸部上部と胴部に附加条縄文が裝飾的に施される。煤状附着物が顕著である。3は甕である。頸部無文帯の下に附加条なし前段多条の縄文が施される。煤状附着物が覆われる。4は久ヶ原系の甕である。肩部に、刻みを伴う輪積み裝飾1段が施される。片側に煤状附着物がみられる。5～7は印手式の甕胴部片である。いずれも煤状附着物が覆われ、附加条縄文を有する。5は半截竹管状の草茎の束による条線が無文帯との間を区画している。7は附加条縄文が羽状に交互施文される。8は裝飾壺の胴部片とみられる。沈線文区画の中に縄文が充填される。図は沈線を水平で掲載しているが、山形文区画の可能性もある。9は甕胴部片である。縄文が密に施され、煤状附着物が上部にみられる。10は薄手の甕口縁部片である。不明瞭な輪積み裝飾2段がみられ、その表面に附加条縄文が施され、口縁端部にも施される。外面のみ黒色化が進む。11～14はいずれも印手式の甕片である。煤状附着物が顕著である。11は口縁部片である。附加条縄文が施され、肥厚帯の上下両端部に縄文原体による刻みと刺突が施される。12は頸部片である。無文帯の下は附加条縄文とみられる。肩部に縄文原体刺突が巡る。13・14はともに胴部片である。附加条縄文が施される。

軽石2点が床面から出土している。そのうち、15は白色系の軽石である。5面が欠損しているが、欠損面のうち2面に明瞭な磨切傷が複数認められる。

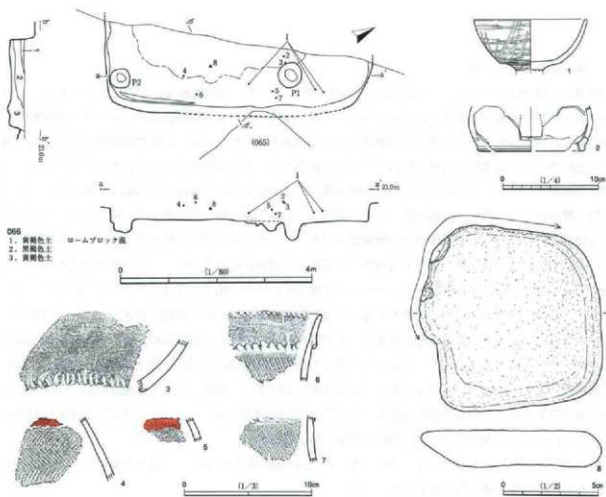
066号跡 (第81図、図版24・61・79)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (イ11グリッド) に位置する。本跡の北西側約3/4は調査区外につき未調査である。確認された一辺は長さ5.6mであり、方向はN25度Eである。全形は確認されていないが、隅円方形または隅円長方形と推定される。確認面からの深さは0.4mである。065号跡との切り合い関係は、攪乱等のため判然としない。

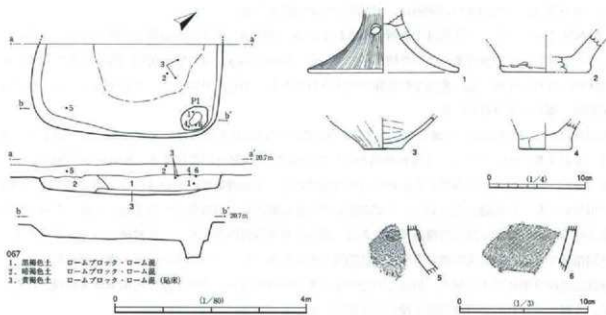
炉は検出されていない。柱穴は1か所検出されている。径60cm、深さ40cm前後の円形をなす。貯蔵穴とみられる土坑は、南西側隅部に1か所検出されている。40cm×45cm、深さ20cm前後の隅円方形である。住居跡床面には外周を除く広い範囲で硬化面が検出されており、調査区外に向かって広がっている。壁溝は南東側の一部で確認されている。

土器量は少なく、0.7kgにも満たないうえに、床面付近では良好な資料に恵まれなかった。図示した遺物はいずれも覆土出土である。1は椀形高杯の杯部である。3/4周分が遺存する。杯底縁が明瞭で、濃い黒斑を有し、滑らかにナデ調整が施された均整な品である。2は香炉形ともいべき土器片である。四方に方形ないし長三角形透し孔を有し、ナデ調整が滑らかに施された均整な品であるが、小片のため全形は確認できない。3は久ヶ原系の甕胴部片である。刻みを伴う段裝飾を伴う。二次被熱がみられる。4・5は壺形部片である。結節文区画の下部に羽状縄文が施される。6・7は印手式の壺・甕口縁部片である。口縁端部に縄文原体による刻み、折返し肥厚帯下端部に波状刻み、頸部上部に附加条縄文が施される。なお、本跡からは062号跡の15と接合した破片が出土している。

石製品1点が出土している。8は素粒の砂岩製磨石ないし砥石である。平坦な形状を有し、両面に平滑面が形成される。



第81図 066号跡



第82図 067号跡

067号跡 (第82図, 図版25・61・79・80)

弥生時代末～古墳時代初期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (A11グリッド) に位置する。本跡の北西側約2/3は調査区外になるため未調査である。全形は確認されていないが、一辺 (幅) 3.9mの隅円方形が隅円長方形と推定される。検出部分を下辺とすると、主軸はN50度Wとなる。確認面からの深さは0.4mである。

炉や柱穴は検出されていない。貯蔵穴とみられる土坑が1か所検出されている。50cm×64cmの不整形をなし、深さが37cm前後である。床面のうち中央付近を中心に、大変締まった貼床が検出されている。

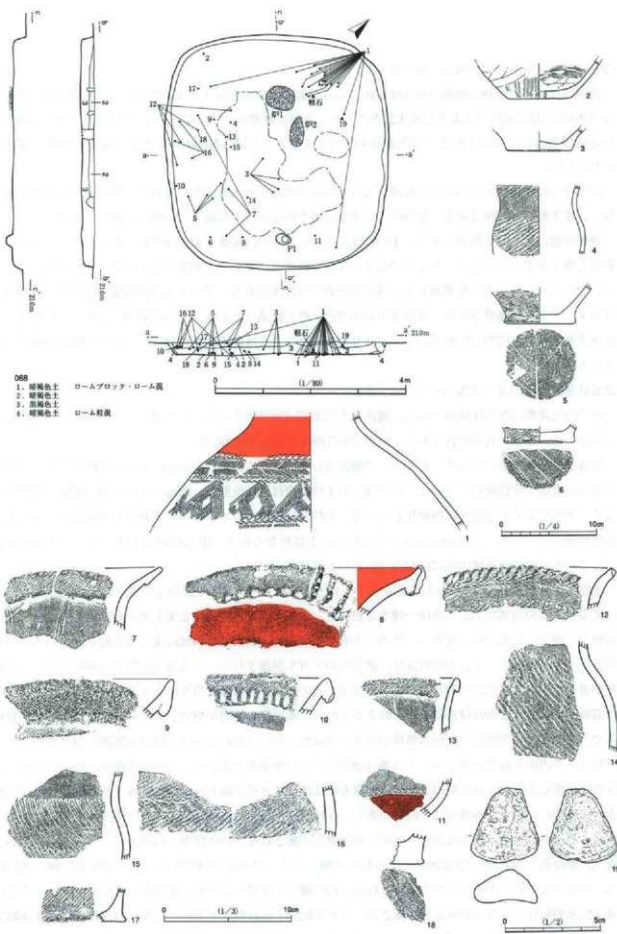
遺構規模に比して土器量は多く、1kg程度出土しているが、床面付近では資料に恵まれない。図示した資料も覆土や表土から出土したものである。1は東海系高杯である。非搬入品で、透し孔を不均等に三ないし四方に有し、ミガキを基調とし、外面は赤彩の可能性がある。2・4は壺の底部片である。外面及び底面までヘラナデ調整される。3は薄手の小型壺・甕の底部片である。5は壺頸部片である。結節文と羽状縄文施文のち円形 (円板形) 浮文が貼り付けられる。6は印手式の甕胴部片である。附加条縄文が施される。

068号跡 (第83図, 図版25・61・62・80)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (U11グリッド) に位置する。5.0m×4.7mの隅円方形である。主軸はN48度Wである。確認面からの深さは0.3mである。

炉は2か所検出されている。炉1は、主軸線上の北西寄りに位置し、50cm×55cmの楕円形をなす。平坦であるが全面で赤色硬化している。炉2は、炉1の南東付近に位置し、30cm×60cmのやや細長い楕円形をなす。平坦であるが全面で赤色硬化している。主柱穴は検出されていない。主軸線上南東寄りに小穴が1か所検出されている。径20cm×30cm、深さ10cmの小規模なもので、出入口施設とみられる。床の硬化面は、この小穴から住居跡内区に広がっているのが確認されている。

土器量は比較的多く、3.2kgを超える。1～6・8・11・14・15は床面付近に散らばって出土した。1は大型装飾壺の肩部である。ほぼ一周する資料で、上から赤彩無文帯、2条1単位の結節文、羽状縄文、結節文、縄文が充填された複合 (交差式) 山形沈線区画文、結節文、羽状縄文の順に配されている。内面が著しく荒れている。2は壺の底部で、縦方向のミガキが施される。3は遺存部無文の甕底部で、二次被熱が著しく、内面黒色化が認められる。4は印手式の甕で、頸部無文帯を挟んで附加条縄文が施され、上部破断面には摩耗と煤状付着物がみられることから、破損後の使用が想定される。5・6は印手式の甕底部で、ともに附加条縄文と底面木葉痕がみられるほか、5には外面最下部に結節文区画が施される。二次被熱により内面黒色化が著しい。7は壺口縁部片で、口縁端部と肥厚帯には附加条縄文、頸部には細い半截竹管状束による幅5mm単位の平行沈線が縦方向に離れて2単位描かれている。8・9は折返し口縁装飾壺の口縁部片である。端面は上向きである。8は折返し外面に羽状縄文、刻みを伴う棒状浮文3条、下端部に押圧波状の刻み、9は折返し外面に羽状縄文が施される。10は折返し口縁部で、外向きの端面に縄文、端面下部に縄文原体側面による刻みが施される。11は壺の胴部片である。結節文区画と羽状縄文、無文帯に赤彩、内面にミガキが施される。12は壺の口縁部片である。端部がわずかに外反し、そこに縄文原体側面による深い刻みが密に施され、直下に幅約1cmの粗いナデの無文帯、頸部以下に附加条縄文が施される。煤状付着物に覆われる。13は壺口縁部である。細い肥厚帯に附加条縄文、頸部に浅い縦方向の沈線文、その区画内に×形の沈線文が施される。14・15は壺の肩から胴部片である。頸部は無文、胴部



第83図 068号跡

は附加条縄文が施され、厚い煤状付着物に覆われる。16は壘形部片である。撚りの違う附加条縄文の羽状交互施文、羽状部に結節回転文がみられる。煤状付着物がみられる。同一個体片が070号跡からも出土している。17・18は壘の底部片である。ともに底部木葉痕がみられ、内面黒色化がすすむ。

軽石2点が出土しているが、1点は小片である。19は白色系の軽石である。明らかな磨面が確認でき、そのうち2面はサドル状の凹みが生じている。砥石やヤスリとしての用途に供されたと考えられる。

069号跡（第85図、図版25・62・63・80）

弥生時代末～古墳時代初頭の整穴住居跡である。遺跡北半部北端（I2グリッド）に位置する。幅5.8m、長さは6m以上の隅円長方形と推定される。主軸はN50度Wである。確認面からの深さは0.6cmである。本跡の南東辺は調査区外につき未調査であるが、大きな攪乱はなく、良好な検出状況である。覆土は自然埋没の状況を示し、その過程で一時的に掘鉢状の凹みが形成されたことが窺える。この凹みより上層（1層～3層）には、多量の土器が投入されている。

炉は4か所検出されている。炉1は、主軸線上の北西寄りに位置する。径1m前後の不整形で、赤色化範囲が0.7m×0.6mの範囲で広がる。深さは10cm前後である。炉2は、炉1の北東側に位置し、0.7m×0.6mの不整形で、赤色化範囲が0.3m×0.4mで広がる。深さは8cm前後である。炉3は、径0.4m前後の不整形で、平坦である。赤色化範囲は0.2m前後で広がる。炉4は、0.3m×0.2mの楕円形で平坦である。赤色化は弱い。主柱穴は4か所検出されている。いずれも25cm×50cmの長楕円形（板状柱穴）で、深さは80cm～95cmである。柱長軸は建物軸と直交する。床の硬化面は、珍しく外区の方に確認されている。西側壁寄りと炉2の周辺に広がる。壁溝は浅いものの、調査部分ではほぼ全周する。

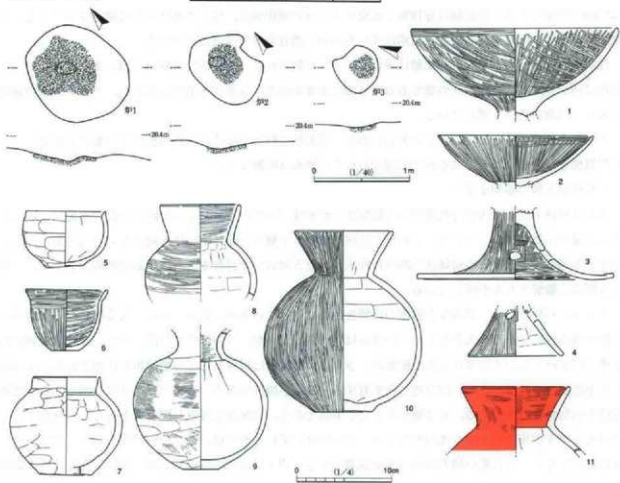
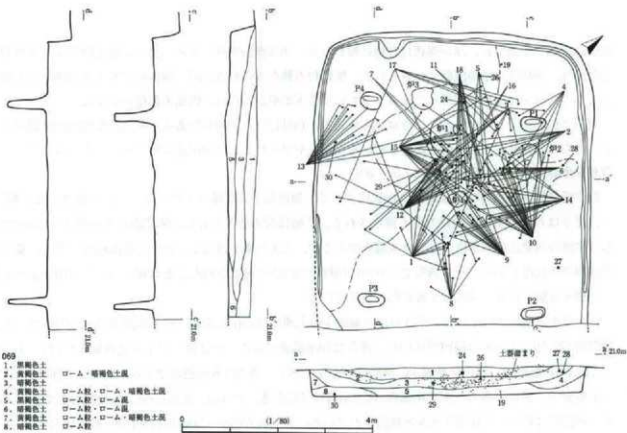
住居跡に直接伴うとみられる土器は少なく、小片に限られる。明らかに下層（5層）出土とみられる土器片に19がある。19は印手式の甕である。外面に附加条縄文、底部に木葉痕がみられ、多量の煤状付着物があり、内面は著しく荒れている。

下層出土の石製品としては、30の軽石がある。灰褐色の軽石である。白色の軽石より細かく発泡したやや異質感を有する。小石であるが欠損部分はなく、磨面は明瞭でない。

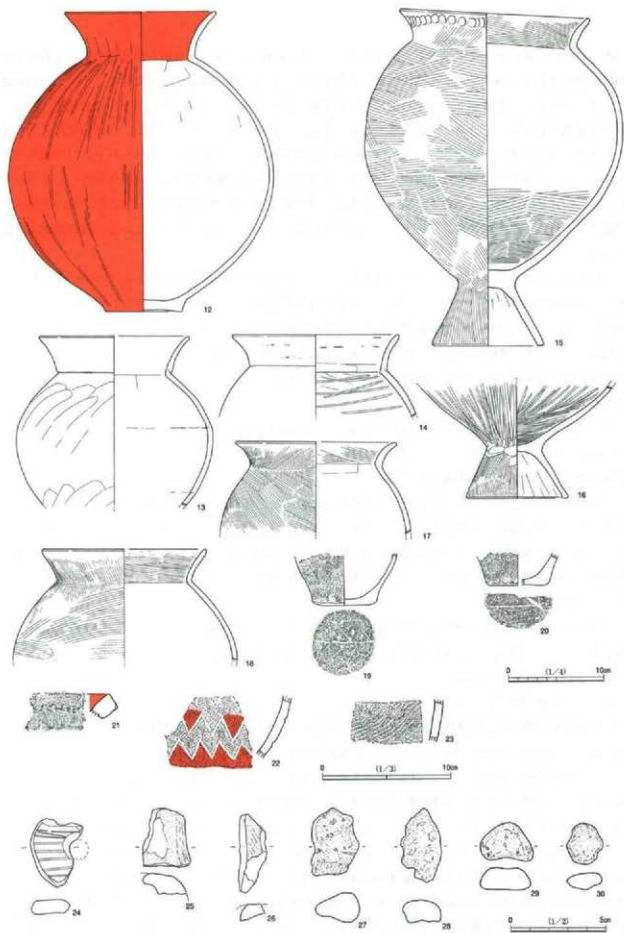
<069号上層土器溜まり>

069号跡上層には古墳時代前期の土器溜まりが形成されている。069号跡からは総重量18.8kgにも及ぶ大量の土器が出土しており、そのうち住居跡に伴う下層の土器は1kgにも満たない。大多数は、自然埋没する過程で形成された掘鉢状の凹みに投入された五領式の土器群で、5層上面を形成面として、1層～3層に土器溜まりを形成している。

1～3は高杯である。東海など外部の影響を色濃く受けているが、器形、厚み、端部形状などに地域の伝統が残る資料である。入念なミガキのほかに装飾されないが、3の脚部は内面ハケで、穿孔時に剥がれを伴う円形透し孔が不均等に3か所配され、さらに、脚端部に折返しによる肥厚帯が作出される。4は高杯か小型器台の脚部である。四方透し孔を有する。5は小型鉢である。ナデとケズリを基調とするが比較的薄手の均整な造りである。6は壘形をした小型鉢である。口縁部に折返し肥厚帯を有し、内外面ともハケのちミガキが施され、やや光沢を有する。7～9はいずれもやや粗い造りの小型壺である。7はナデ、8は粗いミガキ、9は粗い横方向のハケを基調とする。10・11は直口縁壺である。10は丁寧なミガキが施され、均整のとれた精製品である。11はハケのち粗いヘラミガキが施される。12は素口縁の大型壺である。外面に赤彩を伴うミガキ、内面は無光沢の滑らかなナデが施される。底部は内外とも器肌荒れがみら



第84图 069号迹 (1)



第85图 069号钵 (2)

れる。13・14は粗いナデを基調とした甕である。やや長い口縁部をもち、鋭利な頸部屈曲部には輪積み状の段が形成される。外面や内面下部に煤状附着物が認められる。15～18はハケを有する「く」の字口縁甕である。いずれも二次被熱し、肩部付近に煤状附着物が認められる。ほぼ完形の15と16は台付で、15の口縁部には指圧痕が並び、ヨコナデによる消しは不十分で、輪積み痕がわずかに残る。16は胴部に入念なヘラミガキが施される。20は印手式の甕底部である。附加条縄文と底部木葉痕が認められる。21は装飾壺口縁部片である。端面が外向きの折返し口縁で、端面には縄文、端部下端に縄文原体側面による刻みを有する。22は装飾壺肩部片である。羽状縄文と結節文の施文後、鋸歯状沈線文が三重に施され、胴部以下の縄文は一部ミガキで消され、無文部に赤彩が施される。23は印手式甕の胴部片である。附加条縄文が施される。

土製品1点、軽石を含む石製品が5点出土している。24は土器片転用紡錘車である。中央に両面から穿孔し、外側の破断面を磨って円形に整形している。ほぼ等間隔に浅い平行沈線文を有しており、素材は土師器ではなく、縄文土器片や古い弥生土器片の可能性もある。25・26は砂岩製の砥石小片である。27～29は軽石である。27・29は白色系で、27には明確な磨面と擦切傷を有する。29は暗褐色で珉晶が大きく、発泡が細かい硬質の軽石で、明確な磨面はなく、欠損面がめだつ。

070号跡 (第86～88図、図版26・63～65)

弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡である。遺跡北半部北端(イ11グリッド)に位置する。3.4cm×3.6cmの小さな隅円方形である。主軸はN28度Wである。確認面からの深さは0.2mである。廃絶直後の槽鉢状凹みに土器溜まりが形成されている。

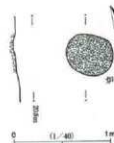
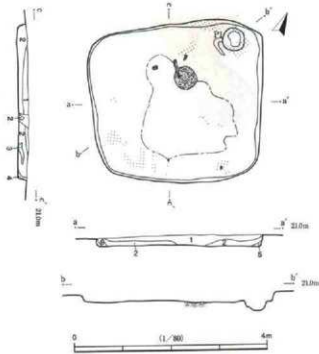
炉は1か所検出されている。主軸線上の北西寄りに位置し、径50cm前後の範囲で赤色硬化している。掘込みはなく平坦である。貯蔵穴とみられる土坑が、北側隅(上辺右側)にみられる。45cm×60cmの隅円方形で、深さは20cm前後である。貯蔵穴の西側に接して、ほんのわずかな土手状の高まりがある。床は中央部を中心に硬化面が形成されている。北東側と南西側の両隅では、床面付近において炭化物や焼土塊が検出されている。

本跡に直接伴う土器片は少なく、P1付近から出土した12を示しうるのみである。12は完形の深身小型鉢である。ナデを基調とし、比較的均整な造形である。搬入品ではない。外面にのみ多量の煤状附着物がみられるが、内面底に残留物はない。

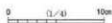
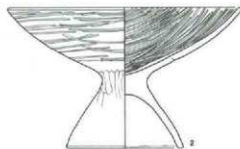
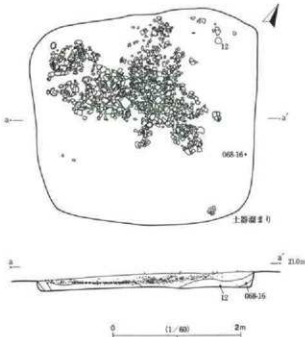
<070号上層土器溜まり>

070号跡上層には古墳時代初頭の土器溜まりがある。070号跡からは総重量28.3kgという大量の土器が出土している。それらのほとんどが、埋没過程で生じた槽鉢状の凹みに向かって一挙に投入されたもので、2層の上面を形成面とし、一面に破片を敷き詰めたような状態の土器溜まりが形成された。五領式成立前後の土器群が中心で、外来の形態を有するが、純粋な搬入品はみられない。図示した遺物は完形を含む遺存度がとくに高いものだけであり、とくに壺などの個体数はさらに多い状況である。

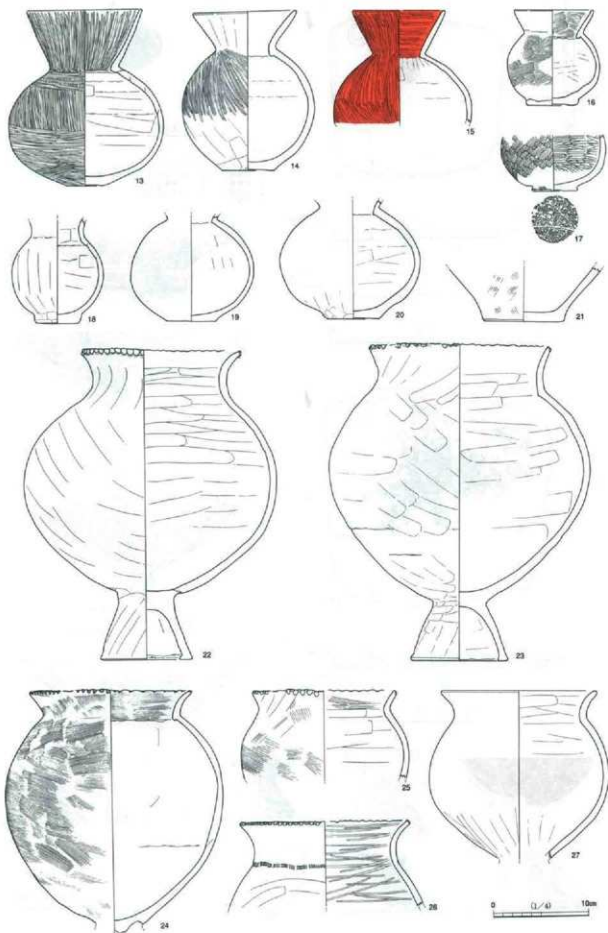
1は外来系高杯の杯部である。丹念にヘラミガキが施されて白っぽい光沢をもつ。有段口縁状をなし、壺の可能性もあるが、柏市戸張一番割遺跡の前方後方墳出土高杯が類例として挙げられる。北陸系とみられる。2は在来の高杯とみられる。変容著しい。台付甕の胴～脚部と同じ造りで、丁寧なナデ及びミガキが施される。3・4は東海系の「開脚」高杯である。ハケのちミガキが施され、杯底外面に襷を有する。3は三方透し孔である。5は碗形高杯の杯部である。明るい赤彩を伴うミガキが施され、杯底外面に襷を



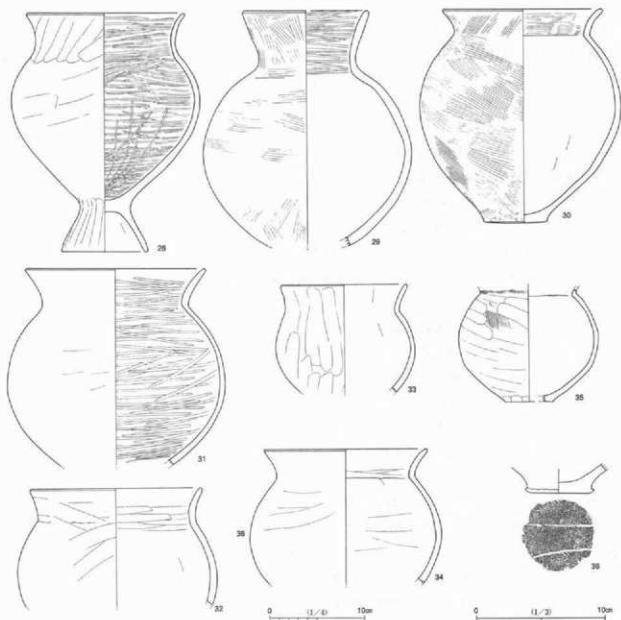
- 070
- | | |
|----------|--------------|
| 1. 暗褐色土 | □—△ |
| 2. 深褐色土 | □—△、□—△、氧化铁质 |
| 3. 深褐色土 | □—△、□—△、氧化铁质 |
| 4. 黄褐色土 | □—△、暗褐色土质 |
| 5. 暗黄褐色土 | □—△、暗褐色土质 |
| 6. 深褐色土 | □—△ |



第86图 070号钵 (1)



第87图 070号钵(2)



第88図 070号跡 (3)

有する。6～11は小型器台である。少しづつ形態が異なる。透し孔をもたない8は比較的粗いナデ、そのほかは、不均等なものを含む三方透し孔と、ヘラミガキが施され、11の受部内面にのみ赤彩が観察される。12は下層出土である。13～20は直口縁壺とみられる。13～15はヘラミガキ、19・20はナデを基調とするやや大型品である。16～18は小型品で、16・17はハケとともに、底部突出や木葉痕という在来要素が附加される。21は壺または甕の底部である。広い平底を形成し、粗いハケのちナデが施される。22～25は刻み口縁の台付甕、27・28は素口縁の台付甕である。いずれも二次被熱し、腹部に煤状附着物がみられる。頸部屈曲度は多様で、ハケ調整の24・25は鋭利な「く」の字屈曲をなすが、ナデを基調とする他の個体は屈曲度も緩やかなものが多い。台付甕に珍しく、28の内面には斜め放射状ミガキが施される。26は刻み口縁の甕である。伝統性がみられるが変容著しい。口縁端面を歯車形に削り取ったヘラ刻みは独特で、頸

部下部には2歯の刺突列点が施される。肩部に煤状付着物がある。29は大型直口緑壺である。粗いハケを基調とし、厚手の粗製品で、二次被熱もみられる。30～35は「く」の字口縁の平底甕とみられる。30は粗いハケがタタキに似ており、鋭利な頸部屈曲、胴部形状など、畿内系甕の模倣とみられる。ほかはナデを基調とし、小型の33・35は粗いナデが施される。いずれも二次被熱しており、腹部に煤状付着物のあるものが多い。底部が欠損している個体は台付の可能性も残る。36は印手式の甕である。底部木葉痕がみられる。このほか、068号跡出土片と接合した印手式の甕片などが出土している。

071号跡 (第89図, 図版26・66・80)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (I11グリッド) に位置する。径4.9mの不整形円形もしくは隅円方形である。主軸はN73度Wである。確認面からの深さは0.2mである。

炉は2か所検出されている。炉1は主軸線上の北西寄りに位置する。径約50cm、深さ7cm前後の浅い凹みで、全面が赤色硬化している。炉2は、本跡の中央付近から北よりに位置する。20cm×25cmの不整形円形で、凹みはなく、全面が赤色硬化している。主柱穴は検出されていない。主軸の東南東、壁際に浅い土坑が検出されている。45cm×85cmの隅円方形をなし、深さは7cm前後である。床面に硬化面が確認されているが範囲は狭く、炉1の北周辺と、浅い土坑の西側周辺に限られる。

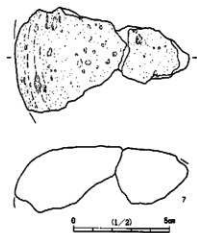
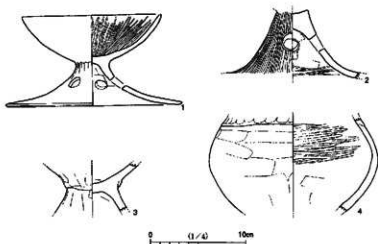
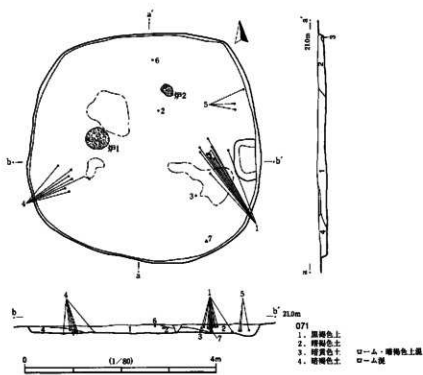
土器量は1.5kg程で、高杯など特徴的な資料が出土した。1は椀形高杯である。搬入品ではないがナデ・ミガキで仕上げられた薄手の精良品で、大型円形透し孔が五方に穿たれる。2も椀形高杯脚部である。ミガキ仕上げであるが、厚手で、大型円形透し孔が四方に穿たれる。二次被熱のため黒色化が進む。3・4はナデを基調とした久ヶ原系の甕である。3は台付甕の脚部、4は輪積み口縁甕の胴部で、脚の接着部と口縁部の輪積み裝飾には明瞭な指圧痕がみられ、その上から粗い板ナデが施される。4の内面上部には明瞭なへらミガキが施され、3は内面に煤状付着物がみられる。5・6は印手式甕である。二次被熱が著しい。5の胴部片は深い附加糸縄文が密に施され、6の肩部片は2条～3条の結節文と細かい附加糸縄文が施される。このほか、小片にはヒサゴ壺等の外来系土器とともに、印手式の甕片が多く含まれる。

軽石2片が出土し、両者は接合した。7は白色系の軽石である。破損前に広い平滑面の形成後に破砕される。投棄に伴う破砕ではなく、破断面に磨削傷が若干みられる。

073号跡 (第90図, 図版27・66・80)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北端 (A12グリッド) に位置する。本跡は斜めに削平され、南半分が失われている。遺存部では東北辺が4.2mであるが、主柱穴との関係から、約5m×4mの楕円に近い隅円長方形に復原できる。主軸はN52度Wである。確認面からの深さは0.6mである。

炉とみられる焼土が3か所検出されている。炉2を主炉とすると、炉1は右辺の主柱穴と並んだ位置に営まれる。50cm×70cmの不整形円形で、深さ7cm前後の凹みがある。赤色硬化面は40cm×60cmの範囲で形成される。炉2は、主軸上のやや北西寄りに位置する。50cm×67cmの楕円形をなし、深さ6cm前後の凹みがある。赤色硬化面は30cm×45cmの範囲で形成される。炉3は、炉1の南西側に隣接している。径約30cmの不整形円形で、わずかな凹みを有し、径10cm前後の赤色硬化面がみられる。主柱穴は4か所検出されており、左辺2か所は上部が削平されて底のみが検出されている。径20cm～25cmの円形をなし、床面からの深さは50cm～60cmである。床面には硬化面が形成されていたが、内区の大部分が削平されていたため、右辺 (北東) 壁際に確認されている。上辺 (北西) 壁際には、小穴が1か所検出されている。30cm×60cmの隅円方形をなし、深さは5cm前後の浅いものである。

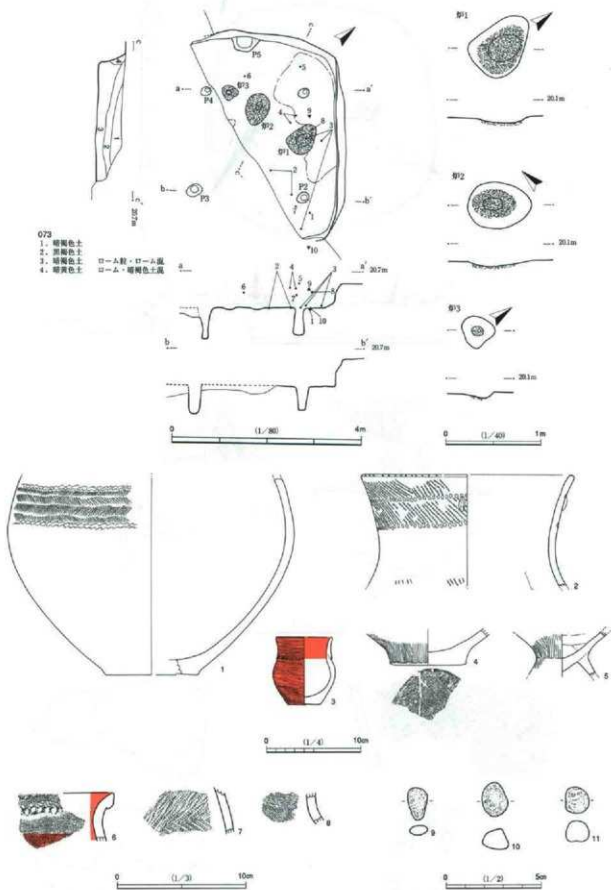


第89图 071号迹

073

1. 暗褐色土
2. 深褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土

□—人形、□—水痕
 □—△、暗褐色土底



第90图 073号迹

土器量は2.3kg程度が出土した。1～3は床面直上から出土した。1は装飾壺の胴部である。肩部破断面が粘土の継ぎ目であり、摩耗して疑似口縁を形成することから、上部破損後、鉢として転用された可能性が高い。器肌荒れのため赤彩は確認できない。文様帯が上部肩部に配され、結節文区画内に羽状縄文を充填される。2は素口縁の甕である。端部に附加条縄文、外面に2列の附加条縄文と、各列の下に刺突列点文がそれぞれ施される。2列目に、5.5cm間隔で2個の耳状突起が貼付く。頸部は無文で、肩部以下に附加条縄文が施される。明色で煤状付着物が少なく、胎土に白雲母が多い。上稻吉式等と類似する。3は甕の土製小型模造品である。高さ7.2cm、肩部に刻みを有する輪横み状段装飾があり、ヘラミガキ、赤彩で丁寧に仕上げられる。4～8は上層出土土器である。4は平底のハケ甕である。底面に木葉痕がある。白っぽい胎土で、外面は黒色化している。5は台付甕片である。外面に粗いハケが施され、内面に煤状付着物が多くみられる。6は折返し口縁壺の口縁部片である。折返し外面に結節文、下端部に縄文原体側面による刻み、内外面に赤彩を伴うミガキが施される。7は印手式の甕片である。附加条縄文が羽状に施される。8は装飾壺の頸部片である。結節文で区画され、その下に縄文が施される。

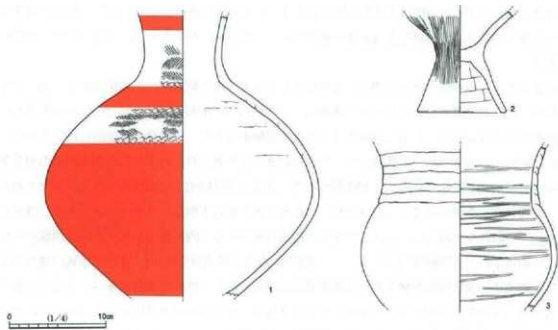
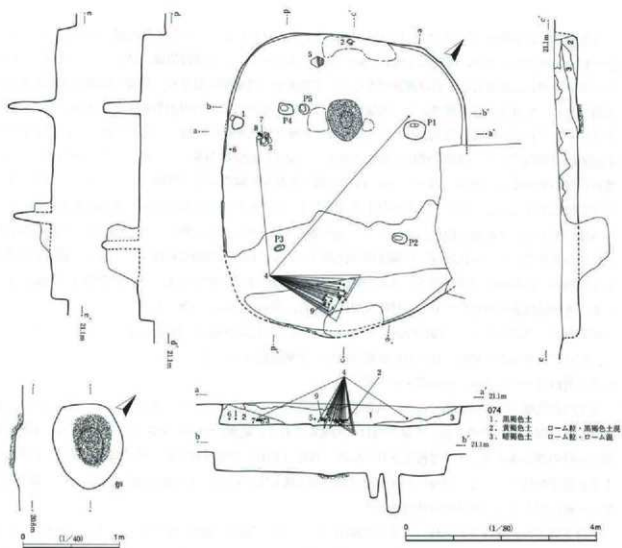
軽石3点、鉄片小片1点(第17表)が出土している。軽石は小礫で、床面付近から出土したものはなく、10は白色系の粗く軟質、9・11は灰褐色系のやや密な質感である。

074号跡(第91・92図、図版27・66・81)

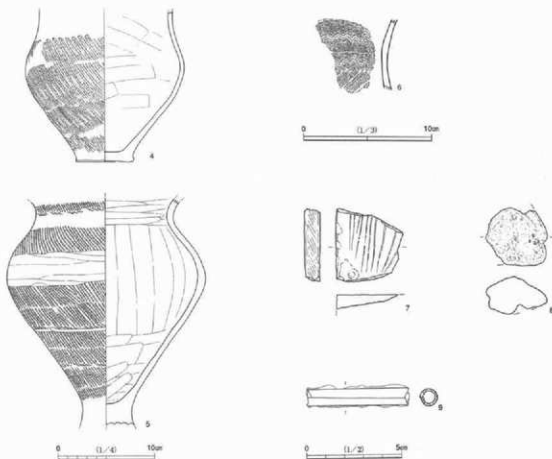
弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り(V20グリッド)に位置する。6.3m×5.1mの楕円形または隅円長方形である。主軸方向はN36度Wである。確認面からの深さは0.5mである。本跡南東側を後世の溝が横切り、床まで攪乱されている。右辺(北東)の壁付近がちょうど調査区界で、わずかに未調査部分を残す。下辺(南東)の壁付近では、焼土塊が床から浮いた状態で検出されている。覆土は壁際から順に流入する、自然埋没状況を示す。

炉は主軸上の北西寄りに主柱穴と並んで検出されている。70cm×80cmの楕円形で、深さ4cm前後の凹みがあり、内部に赤色硬化面が40cm×54cmの範囲で形成されている。主柱穴は4か所検出されている。幅20cm前後、長さ45cm前後の楕円形ないし隅円長方形をなし、深さは75cm～90cmに達する。配列は不均等で、正方形をなさない。P4と炉の間にもP5の柱穴がある。径20cm×24cmの円形で、深さは45cmに達する。主柱穴と同じ覆土である。床の硬化面はあまり確認されていないが、炉の左右と、上辺(北西)壁際に少し確認された。

土器量は2kg弱で、遺存度の高い大型の土器が出土している。出土位置は、上辺壁際中央に甕2個体、左辺壁際に壺・甕・石製品、下辺中央に甕と鉄製品という内容で、床面付近の、同じ高さで検出されている。意図的な配置とみられる。1は左辺壁際出土の大型装飾壺である。口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性が高い。頸部が一周するが、器肌荒れにより赤彩がほとんど剥がれ、わずかに結節文区画の羽状縄文帯、赤彩の無文帯が交互に配されることが確認できる。2は上辺壁際出土の甕脚部である。あまり被熱しておらず、外面に揃った縦ヘラミガキがみられ、内面もミガキ様の丁寧なヘラナデが施される。高杯の可能性もあるが、赤彩はなされない。3は左辺出土の輪横み甕である。内外面ともナデ、口縁部輪横み装飾にはヨコナデが施され、指圧痕は目立たない。二次被熱による赤色化が著しい。4は印手式の甕である。頸部は無文、胴部は附加条縄文が施され、底部木葉痕が認められる。煤状付着物が多い。5は台付甕であるが、縄文が施された希有な例である。頸部に無文帯を残し、施文単位が水平になるよう装飾的に縄文が施される。ただし、器面傾斜がきついため必ずしも成功していない。肩部無文帯は施文後にナデ消された



第91图 074号迹 (1)



第92図 074号跡 (2)

もので、さらに各施文単位の間には結節文や、細いナデを施し、水平な文様に近づけている。胴部は完存し、脚と口縁部のみ破損している。口縁部は破損後に被熱し、破断面が黒色化している。内外面とも煤状付着物に覆われる。6は壺の頸部片である。5歯1単位の不規則な櫛状施文具による波状文が2条、その下部に附加条縄文が施される。

石製品2点、鉄製品1点が出土している。7は粘板岩製とみられる砥石片である。側面は整形時のものとみられる擦痕があり、研面は平滑になっているが、10条以上の深い磨切傷がついている。8は白色系軽石である。角が多い多面体であるが明確な磨面等は認められない。9は管状鉄製品である。4の土器と一緒に出土した貴重な資料であるが、鉄板を筒状に曲げ、端部をびたりと合わせたもので、端部を重ねずに閉じる鉄板加工技法は古墳時代以前にはあまり採用されないため、混入品の可能性も排除できない。

076号跡 (第93図、図版28・66・67・81)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り (U20グリッド) に位置する。7.6m×6.1mの隅田長方形である。主軸はN34度Wである。確認面からの深さは0.6mである。ゴボウ掘削機の攪乱が激しく、一部は床面にまで達している。覆土は廃絶直後に一定程度埋め戻された可能性があるが、上半部分は自然埋没の可能性が高い。

炉は3か所検出されている。主炉である炉1は、主軸上の北西寄りに主柱穴と並んで検出されている。

75cm×110cmの楕円形をなし、深さ5cm前後の凹みがあり、60cm×100cmの範囲で赤色硬化面が形成されている。炉2は、南寄りのP3付近に位置する。径40cm前後の不整形で、深さ4cm前後の凹みがあり、径25cm前後の範囲で赤色硬化面が形成される。炉3は、炉2の南側に位置する。径10cm前後、深さ4cm前後で、全面が赤色硬化している。主柱穴は4か所検出されている。径20cm～30cmの円形ないし楕円形で、深さは40cm～54cmである。長方形に配置される。ほかに小穴が10か所検出されている。おもに住居跡の隅部や壁際に検出され、北側隅部にはP1に隣接して小穴5か所が長方形に配置されている。径15cm～24cmで、深さは7cm～14cmである。調査時には棚のような施設の支柱痕跡と考えられた。東側隅部の小穴は30cm×60cmの半円形で、深さが12cm前後である。主柱穴P2に隣接する小穴は径20cm、深さ7cmである。上辺(北西)壁際の小穴は径25cm、深さ4cm、左辺壁際には径25cm、深さ16cmの小穴がある。P1と炉1の間にも、径18cm、深さ10cmの小穴がある。壁溝の存在は両側の壁際において確認されている。床面には炉の周辺から下辺外区に向かって硬化面が広がる。

出土土器量は2.7kgを超える。床面直上で検出された1・2・4・5は比較的遺存度も高い。1は折返し口縁部の口縁部である。折返し端面が外向きで、そこに縄文、端面下部にヘラ刻みが施される。内外面とも丁寧なミガキが施される。赤彩はされない。2は炉付近から出土した折返し口縁部である。折返し端面は外向きである。風化が進行している。無文部は赤彩を伴うミガキ、頸部から肩部にかけての結節文区画内には羽状縄文が施される。肩部の被熱が著しく、破損後に倒立状態で炉の器台として用いられた可能性が高い。3は胴丸の壺底部である。外面に縦ヘラミガキが施され、内面は荒れが著しい。4は壺である。口縁部肥厚帯と胴部に附加条縄文、肥厚帯下部に刺突列点文、頸部は5歯1単位とする横位櫛描行線区画、区画内は6cm間隔毎に2単位ずつ縦方向櫛描き行線が施される。5は壺である。口縁部は素口縁の可能性が高いが、輪積み装飾があった可能性もある。上から1段目の粘土継ぎ目において水平に割れている。附加条縄文が羽状に施され、羽状の境界とその上に刺突列点が2列巡り、耳状突起文が貼りつけられている。6は壺片である。附加条縄文が羽状に施される。7・8は鬼高式の杯である。近隣の075号跡などに関係深いとみられ、東海産須恵器などとともに確認面で検出された。8は油煙とみられる黒色付着物がつく。ほかに軟質の焼石2個が出土している。

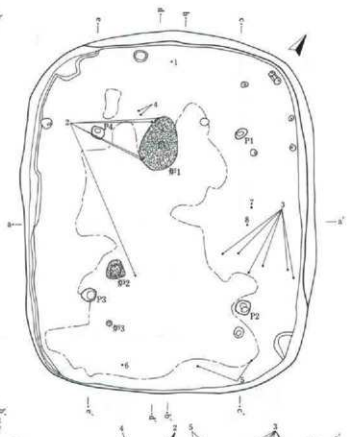
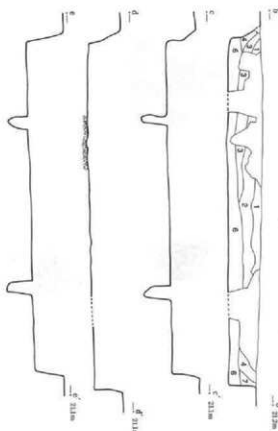
077号跡(第94図、図版28・81)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り(U21グリッド)に位置する。3.6m×3.1mの小さな隅円方形である。主軸は、N(真北)である。確認面からの深さが0.2m以内で、ゴボウ掘削機の攪乱が床面に及んでおり、遺存状況は悪い。

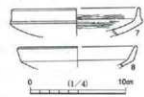
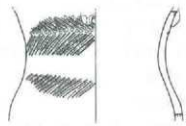
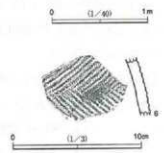
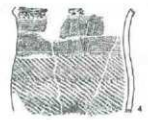
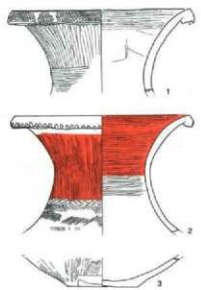
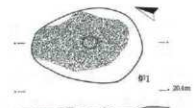
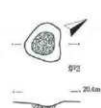
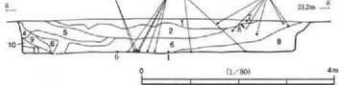
炉は2か所検出されているが、いずれも攪乱されている。主炉とみられる炉1は北側に位置し、中心線よりやや東に寄る。40cm×50cmの楕円形をなし、深さ6cm前後の凹みがあり、全面が赤色硬化している。炉2は西寄りに位置し、推定値40cm前後の楕円形で、深さ6cm前後の凹みがあり、遺存部では全面が赤色硬化している。出入口施設とみられる小穴が1か所、主軸上の南寄りに検出されている。径24cm、深さ25cmである。床面は、中央付近に硬化面が形成されている。

出土土器量は極めて少なく、0.2kg程度である。小片であるが、床面付近出土の破片4点が図に示された。1は球胴の装飾壺肩部片である。結節文区画の羽状縄文帯が2区画観察される。2・3は大型装飾壺片である。山形沈線文区画に縄文、無文部に赤彩、それらの上部に結節文が施される。

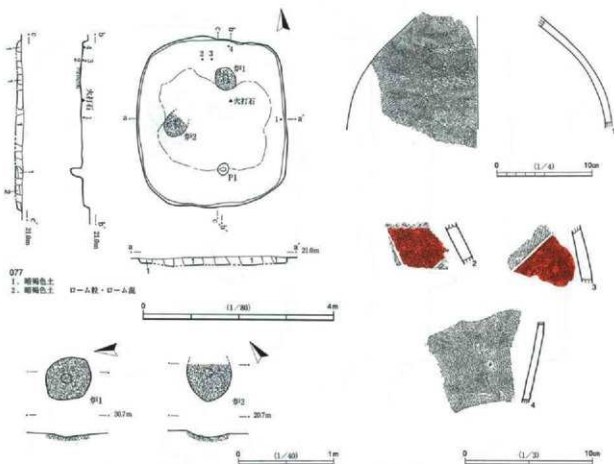
炉の南側床面からメノウまたは蛋白石とみられる石塊が出土している。青味白色のなかに薄紅色が層状



- 076
- 1. 赭褐色土
 - 2. 灰褐色土
 - 3. 深灰色土
 - 4. 赭褐色土
 - 5. 赭褐色土
 - 6. 深褐色土
 - 7. 黄褐色土
 - 8. 灰褐色土
 - 9. 深褐色土
 - 10. 深褐色土
 - 11. 深褐色土
- △形・□—△形
 - △・赭褐色土混
 - △形
 - △形・□—△形
 - △・赭褐色土混
 - △・赭褐色土混
 - △形
 - △形
 - △形
 - △・赭褐色土混



第93图 076号跡



第94図 077号跡

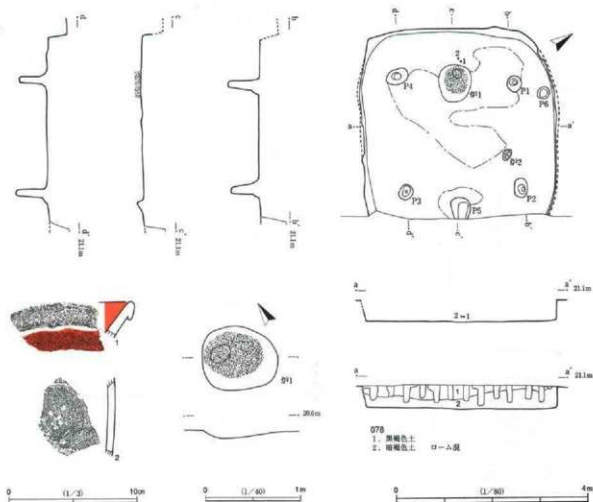
に入る。最大3.0cm程度の石片で、片面が大きく欠損し、もう1面は細かい剥離面に覆われ、後はつぶれて鉄錆状の汚れが付着する。火打ち石の可能性が高い。本跡への相伴については、ゴボウ掘削機の攪乱を考慮して慎重に扱う必要がある。

078号跡 (第95図, 図版28・81)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り (U21グリッド) に位置する。長さ5m前後、幅4.3mの隅円方形または隅円長方形である。主軸はN53度Wである。確認面からの深さは0.5mである。ゴボウ掘削機の攪乱を受けているが、床面には達していない。南東側の壁付近が調査区界にあっており、壁は未検出である。覆土は明確に埋戻しといえるような状況ではなく、自然埋没の可能性が高い。

炉は2か所検出されている。炉1は、主軸線上の北西寄りに位置し、北西側の主柱穴2か所と並んで検出された。60cm×80cmの楕円形をなす深さ8cm前後の凹みで、赤色硬化面が43cm×60cmの範囲で形成されている。炉2は、右辺に位置する。炉1より小さく、15cm×25cmの楕円形で、ほぼ平坦であり、全面が赤色硬化している。主柱穴は4か所検出されている。径は30cm～50cmとばらつきがあるが、深さは60cm～70cmに揃っている。出入口施設とみられる小穴が、南東側の調査区界で検出されている。40cm×45cmの方形で、深さは13cm前後である。北側壁際の小穴は、径25cm、深さ10cmである。床面は、中央から炉1周辺と、出入口施設周辺で硬化面が形成されている。

遺構の深さに比して出土土器は少なく、0.5kgに満たない。いずれも小片である。1は小型の折返し口



第95図 078号跡

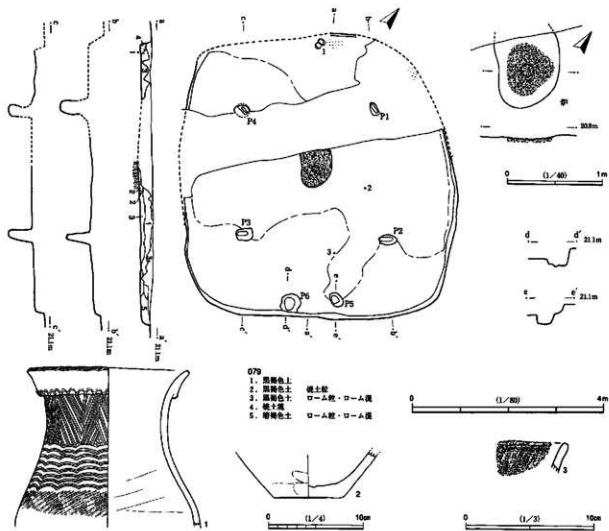
縁装飾壺片である。口縁端部は上向きである。口縁外面には縄文、内外面の無文帯には赤彩を伴うミガキが施される。2は印手式の壺胴部片である。外面に附加条縄文、内面に粗いヘラケズリが施される。

079号跡（第96図、図版29・67・81）

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南端（S23グリッド）に位置する。6.0m×5.7mの隅円方形である。主軸はN41度Wである。確認面からの深さは0.3mである。覆土には埋戻しを思わせる要素に欠けるが、主軸上辺の壁際に焼土が集中して発見された。本跡を横切るように幅約2.1mの溝が中央付近を貫通し、床まで攪乱している。

炉は本跡のほぼ中央に位置する。幅は約65cmで、北側が攪乱されるが、楕円形と推定される。わずかに3cmほど凹んでおり、赤色硬化面が50cm×56cmの範囲で広がっている。主柱穴は4か所検出されている。いずれも30cm×60cmの楕円形で、深さが50cm前後である。攪乱されていない下辺主柱穴は住居軸に対し直交方向に長軸をとるが、攪乱されている上辺のP1とP4は斜めに長軸が向く。小穴2か所が南東壁際に検出されている。P6は径40cmほどの不整形円で、深さが15cm前後の浅いものである。P5は20cm×30cmの楕円形で、深さ18cm前後である。床の硬化面は、P5から内区に細く延び、内区全面に形成され、左右の壁際まで広がっている。

出土土器量は1.3kg前後である。注目されるのは、上辺中央の壁際床面から、横位で出土した1である。1は壺である。遺存部分はヒビもなく全周することから、胴部破損後の器台などへの転用品と考えら



第96図 079号跡

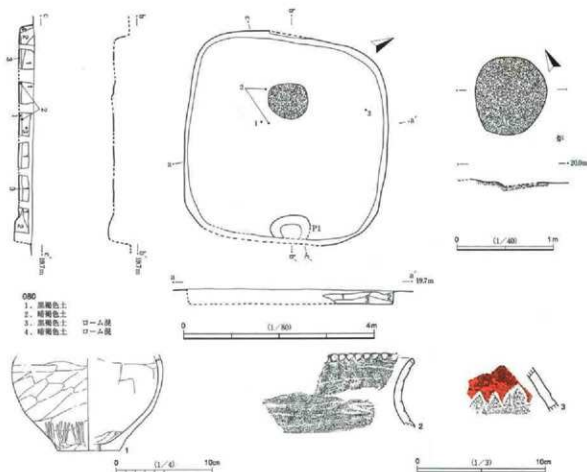
れる。厚い折返し口縁で、端部に附加条縄文、肥厚帯下部に波状のヘラ刻み、頸部に櫛描文、胴部に附加条縄文が施される。櫛描文は、幅3mmの3歯1単位であり、上半部は対方向の斜線が交互に、下半部は連弧文が平行に充填される。屈曲位置を揃えたり、斜線の接点が稲妻状をなす文様効果が演出されるなど、装飾的配慮が細部に行き届く。煤状付着物が認められる。胎土に白雲母を多く含み、茨城県側などとの関連が目ざされる。2は壺の底部片である。外面にミガキが施される。内面の荒れが著しい。3は印手式の要口縁部片である。端部及び外面に附加条縄文が施される。輪襷み装飾の最上段とみられる。

080号跡 (第97図、図版29・67・81)

弥生時代後期の壑穴住居跡である。遺跡南半部北端 (O28グリッド) に位置する。4.4m×4.2mの隅円方形である。主軸はN58度Wである。確認面からの深さは0.3m以内で、ゴボウ掘削機によって床面まで激しく攪乱されている。

炉は主軸上の北西寄りに位置する。75cm×80cmの楕円形に近く、5cm前後の凹みがあり、全面が赤色硬化している。出入口施設とみられる小穴が南東壁際に検出されている。50cm×60cmの楕円形で、深さ10cmである。ほかに柱穴は検出されなかった。

土器量は少なく、0.3kgに満たない。炉の南隣りにおいて床面から出土した甕1・2は直接本跡に伴うといえる。1・2は同一個体の可能性が高い、輪襷み甕である。煤状付着物に覆われる。口縁部輪襷みは指圧痕を残す。凹凸は比較的に明瞭であるが、強いヨコナデにより不明瞭な場所もある。端部に波状のヘラ



第97図 080号跡

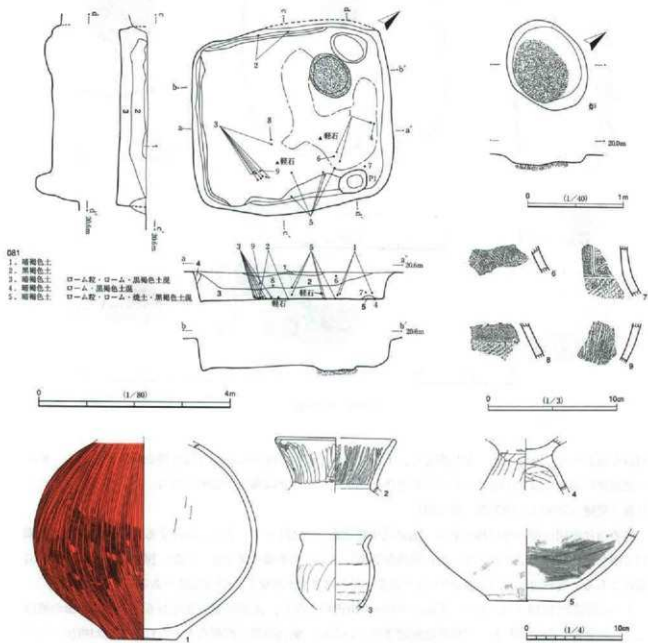
刻みが施される。胴部はナデを基調とし、下部にヘラミガキも施される。3は裝飾壺肩部片である。細かい鋸歯状の山形沈線文を境に、上は赤彩を伴うヘラミガキ、下は縄文が充填される。

081号跡 (第98図、図版29・67・81)

古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り (Z14グリッド) に位置する。3.9m×4.2mの隅円方形で、比較的小型といえる。炉の位置が隅部にあるため主軸は決めがたいが、図のようにおくとN51度Wである。確認面からの深さは0.6mである。覆土は3層が埋戻し土の可能性はある。

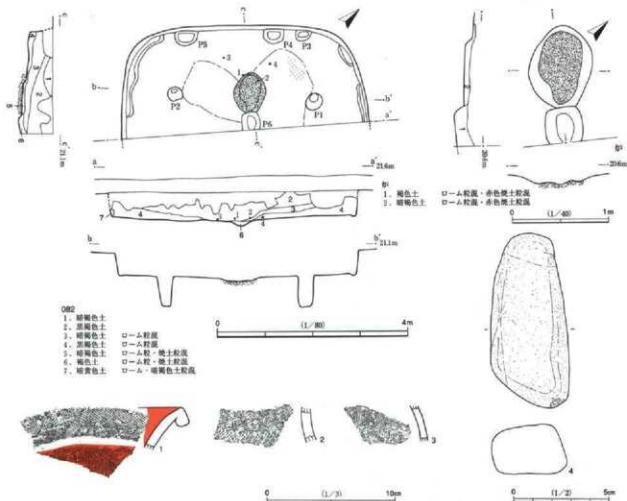
炉は北隅部で検出されている。80cm×100cmの楕円形をなし、深さ10cm前後である。55cm×80cmの範囲で赤色硬化面が形成される。支柱穴は確認されていない。東側隅部に貯蔵穴とみられる土坑が検出されている。45cm×60cmの隅円長方形で、深さが30cm前後である。北隅部にも小穴が検出されている。60cm×80cmの楕円形で、深さが15cm前後である。壁溝は北東辺では確認できないものの他の3辺で検出されている。

出土土器量は比較的多く、2.6kgを超える。遺存度の高い1～5はいずれも床面付近から出土し、本跡に直接伴う。五領式の土器群とみられる。1は赤彩無文の壺である。床面に正位で置かれていた。細いハケののち、縦方向に揃った丁寧なヘラミガキが施される。内面はナデ調整で、下部ほど荒れが目立つ。底部木葉痕がみられ、二次被熱を受ける。2は直口壺の口縁部である。ミガキ様の縦方向ヘラナデを基調とする。3は小型壺形土器である。粗いヘラナデを基調とし、造形は不均整である。大きな黒斑を有するが



第98図 O81号跡

二次被熱はみられない。4は台付甕脚部片である。5は壺底部片である。外面は縦ヘラミガキ、内面は細いハケが施される。底部木葉痕がみられる。6～9は覆土出土の甕小片である。6は5歯1単位の櫛描波状文2単位が一部重なって施文される。7は2条1単位の沈線文・波状文と附加条縄文が施される。8は肩部以下に深い附加条縄文が施される。9は胴部に浅い附加条縄文が施される。



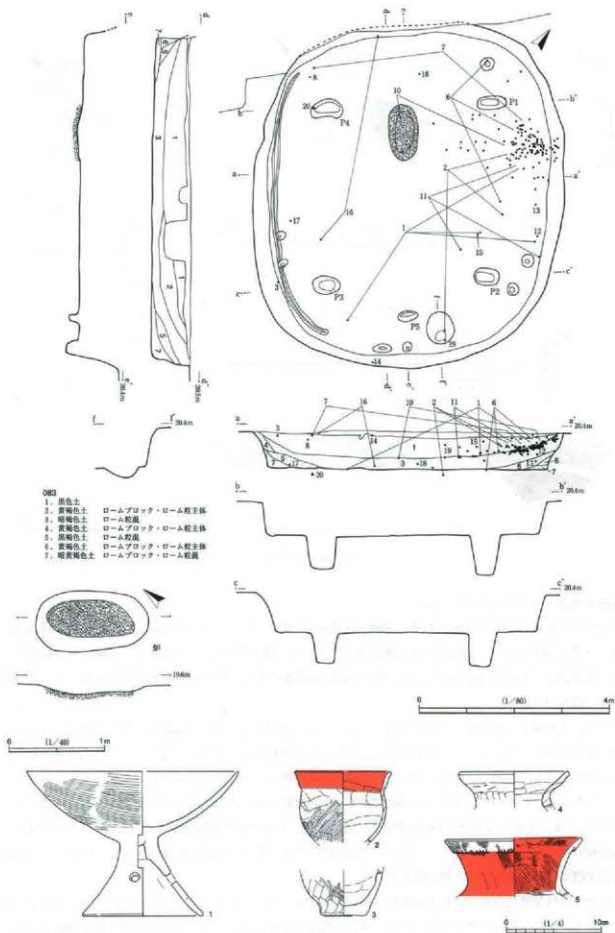
第99図 082号跡

082号跡 (第99図, 図版30・81)

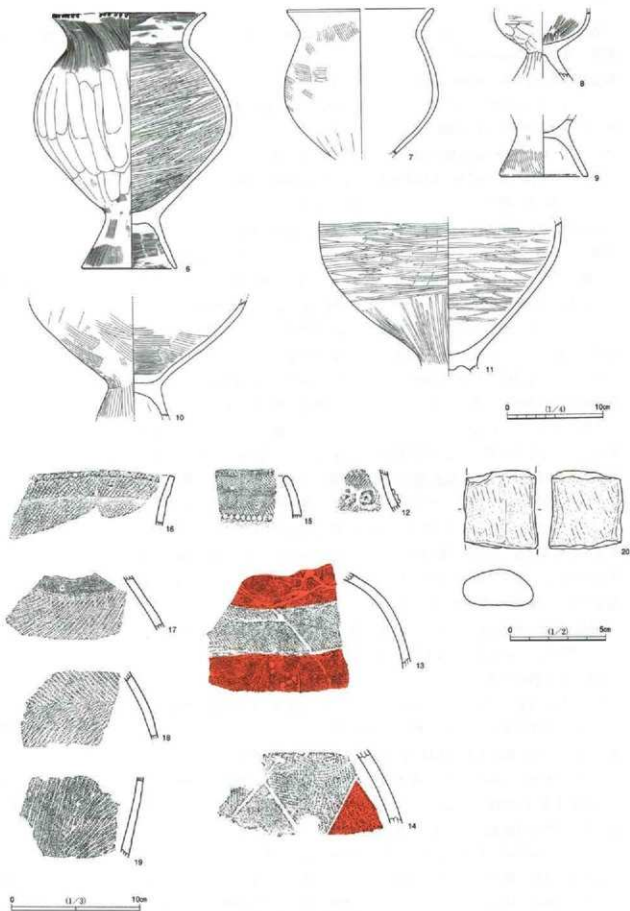
弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央 (W18グリッド) に位置する。南東側2/3は調査区外につき未調査である。幅が5.2mの隅円方形、もしくは隅円長方形とみられる。主軸はN47度Wである。確認面からの深さは0.6mである。覆土の状態は複雑である。埋め戻された可能性があるが、埋没後に深い攪乱が入る。

炉は、主軸線上の北西寄りに位置する。65cm×77cmの楕円形で、深さ9cm前後、赤色硬化面が34cm～88cmの範囲で広がっている。炉の南東側を切っている小穴は幅40cm、深さ15cmである。赤色面はみられないが、壁面・底面が被熱して硬化している。主柱穴は4か所のうち、炉と並ぶ上辺の2か所が検出されている。どちらも径約40cmで、深さが約65cmである。上辺壁際には、浅い小穴が3か所検出されている。左からP5とP4はどちらも30cm×45cmの隅円長方形をなし、P5は深さ10cm前後の平坦な底面、P4は深さ5cm前後の皿状底面をなす。P3は、24cm×32cmの楕円形で、深さ5cm前後の皿状をなす。壁溝は、南西側と北東側において巡っているのが確認できる。

出土土器は極めて少なく、0.2kg程度しかない。図示したものは炉の周辺床面付近出土の特徴的な土器片である。1は赤彩の裝飾壺口縁部片で、折返し端部面が外向きになり、端部面に羽状縄文が施される。2・3は印手式の甍片で、2は肩部以下に附加条縄文、3は附加条縄文と結節文が施される。



第100图 083号跡 (1)



第101图 083号跡 (2)

石製品1点が出土している。4は砥石である。9.2cm×4.0cm×2.5cmのチャート自然礫で、端部に一部打痕とみられる粗面がある。

083号跡（第100・101図，図版30・67・68・82）

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（Z13グリッド）に位置する。7.2m×6.6mの楕円形に近い隅円長方形である。主軸はN37度Wである。確認面からの深さは0.8mあり、床面はハードローム層を深く掘り込んでいる。攪乱もなく検出状況は良好である。覆土は、3層以下がロームブロックを含むため埋め戻された可能性もあるが、隅部の堆積は自然埋没の可能性を排除できない。これより上層は自然埋没で、右辺に土器溜まりが形成されている。

炉は主軸線上の北西寄りに1か所検出されている。60cm×120cmの楕円形をなし、深さは0.8cm前後で、内側に赤色硬化面が40cm×90cmの範囲で形成される。主柱穴は4か所検出されている。いずれも約35cm×65cmの楕円形で、深さは60cm～70cmである。長軸は住居軸に直交する。下辺中央部には、出入口施設とみられるP5が検出されている。20cm×40cmの楕円形で、深さは20cm前後である。P5の東隣に、貯蔵穴とみられる土坑が検出されている。60cm×70cmの楕円形をなし、深さが20cm前後である。壁溝は左辺（南西側）に巡っており、壁溝に沿って小穴2か所が検出されている。同様の小穴は、下辺（南東側）にも2か所、右辺（北東側）下隅部付近に2か所、上辺（北西側）右隅部付近に1か所検出されている。上辺右隅部の小穴からは6の甕、下辺貯蔵穴から2の小型甕が出土している。

土器溜まりには入らない土器群として、下層を中心に出土した12～19の印手式の土器群をまず報告しておく。12～14は装飾壺である。12の頸部片は、縄文の上に竹管刺突を伴う円形浮文が2個、並んで貼りつけられる。13の肩部片は、結節文区画内に羽状縄文が充填され、上下の無文帯に赤彩が施される。14の胴部片は、山形沈線文区画内に羽状縄文が充填され、外側の無文帯に赤彩が施される。15は鉢もしくは高杯の口縁部片である。口縁部肥厚帯に羽状縄文、肥厚帯下部にヘラ刻み、端部と内面は無文で、内面にヘラミガキが施される。16は甕口縁部片である。端部に附加条縄文、外面に輪横み装飾とその表面に附加条縄文が施される。煤状付着物が多い。17～19は甕の胴部片である。いずれも附加条縄文が施され、18は羽状縄文である。煤状付着物がややみられる。

石製品1点が主柱穴から出土している。20は砂岩製の砥石である。整形されたものではないが、側面はすべて平滑化し、砥石としてよく用いられている。前後は折れている。

<083号上層土器溜まり>

083号跡の右辺上層には、弥生時代末～古墳時代初頭の土器溜まりが形成されている。083号跡全体での出土土器総重量は9.3kgを超え、そのほとんどが土器溜まりに属す。覆土3層上面に形成された楕円状凹みへ一度に投入されたもので、住居床面とは明らかに高さが異なる。ただし、住居跡の施設とみられる小穴や貯蔵穴、床から出土した土器3個体が、土器溜まり出土片と接合している。これら1・2・6の土器は通常、住居跡に直接伴うと評価されてもおかしくない。したがって、覆土3層を埋戻し土とみてよいなら、住居跡廃絶から土器溜まり形成までごく短期間の出来事であったと考える。

1は外来系の高杯である。杯部の一部のみが欠損する。杯部外面は粗いハケ、内面はミガキ、脚部はナデを基調とする。脚部の造りは器台と同じく、三方透し孔を有し、中心部にも縦に貫通する器台特有の孔があるが、杯部の接合によってふさがれる。明色である。2は小型の甕である。底部のみ欠損している。頸部に折返し段装飾を有する。胴部は粗いハケ、内面はヘラナデを基調とする。口縁部肥厚帯のみ赤彩の

痕跡が認められる。3は小型粗製の壺である。厚みがあり、ナデを基調とする。4は3と同種の小型粗製壺とみられる。強いヨコナデが施された素口縁を有する。5は赤彩の折返し口縁壺である。折返し部分には内外とも細いハケ、折返し下端部にはハケ刻みが施される。6はほぼ完形の台付甕である。頸部屈曲は比較的強く、口縁端部にハケ刻み、外面と口縁・脚内面に細いハケが施されたのち、外面胴部はミガキ様のヘラナデ、内面は密にヘラミガキが施される。下部は二次被熱し、腹部に煤状付着物がみられる。7・9～11も台付甕である。胴部下部のものは全周する。7・9・10は粗いハケ、11は内外ともヘラナデを基調とする。いずれも二次被熱を受ける。8は二次被熱で内面が黒色化した高杯とみられる。ナデを基調とし、内面は丁寧にヘラミガキが施される。

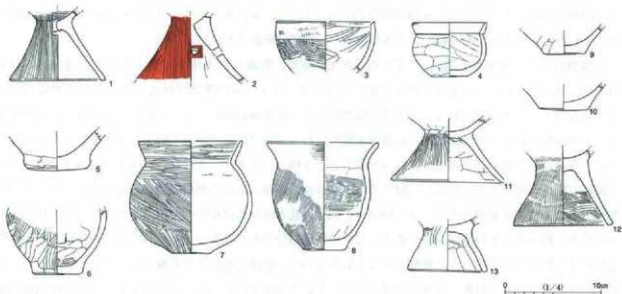
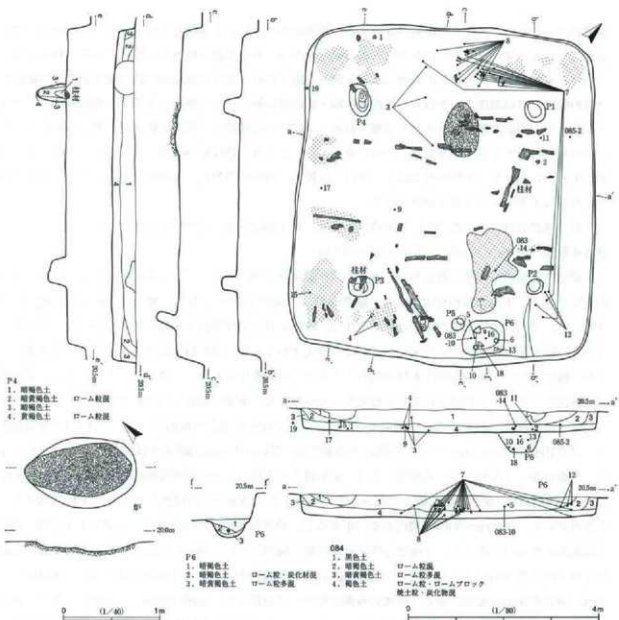
なお、確認面付近で須恵器甕片も多数混入する。9と19は084号跡出土片と接合している。

084号跡（第102・103図、図版30・68・69・82）

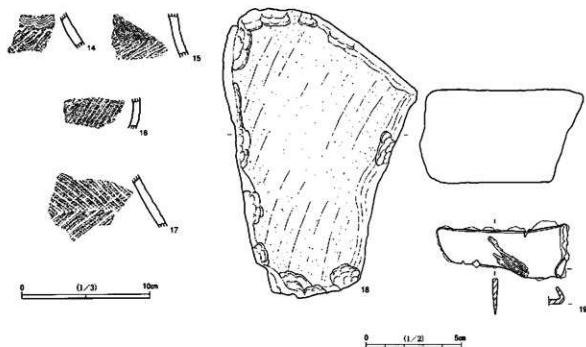
古墳時代前期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（A13グリッド）に位置する。7.1m×6.3mの隅円方形である。主軸はN49度Wである。確認面からの深さは0.4mである。覆土は単純な自然埋没状況とはいえ、炭化材や焼土塊が床面に多く散在し、壁際においては床面との間に薄い間層を挟んで検出されている。径12cm～13cmの太い炭化材が2か所検出されており、調査時にはこれを主柱の一部と考え、焼土塊の検出状況から南西方向に木材が倒れたとみて、焼失家屋であろうと考えられた。ただし、遺物等の出土状況からそのまま放置されたとは思えず、片づけなど、廃棄に関わる行為が加わっていると考えられる。

炉は1か所検出されている。主軸線上の北西寄りに主柱穴と並んで検出された。75cm×115cmの楕円形で、深さ10cm前後の凹みがあり、内側に赤色硬化面が55cm×110cmの範囲で形成されている。もう1か所、床面が激しく被熱している場所がある。南東寄りの主柱穴に近い場所で検出された被熱面は、95cm～175cmの不整形で、深さ6cm前後のなだらかな凹みをもち、全面が赤色硬化している。主柱穴は4か所検出されている。径35cm～50cmの楕円形や円形をなし、深さは40cm～60cmである。南西のP4では、炭化材が床面から6cmほど直立し、4cmほど埋まった状態で検出された。ほかの3か所においても、覆土上層で炭化材や焼土粒が検出されている。下辺中央には出入口施設とみられる小穴が2か所ある。右のP5は径25cm、深さが40cm前後の円形で、住居の外側に向かって傾斜する。左側は25cm×35cmの楕円形で、深さ25cm前後である。貯蔵穴とみられる土坑P6は、小穴と70cm×90cmの隅円方形をなし、深さは35cm前後である。内側からは6・10・13・17～19の遺物が出土している。東側隅には、高さ5cm～8cm前後の土手状の高まりがある。貼床は、南西側と、出入口施設から東側に確認されている。

土器量は多く、総重量4.7kgにも達する。出土位置は、貯蔵穴内と床面付近出土の1～4・6・9～11・13・16・17・19と、上層（1層～3層）出土の5・7・8・12等に分けられる。1は小型器台である。縦方向のミガキが施される。2は高杯脚部である。径8mm前後の小さい四方透し孔を有し、赤彩を伴うミガキが施される。脚端部は同じ高さで意識的に打ち欠いてある。器台と同大に再整形された可能性がある。3・4は小型の鉢である。3はハケのちミガキ様のヘラナデ、4は粗いヘラナデが施される。4は丸底鉢の模倣と考えるが、折返し口縁である。5は壺の底部、6は小型粗製壺の底部である。7・8は小型甕である。ナデを基調とする。9・10は5と同様に底の部分だけが完形で出土した。9は甕、10は壺とみられる。11～13は台付甕の脚部である。12・13は脚部分のみが完形である。14～17はいずれも附加条縄文を有する甕片である。頸部に櫛波拍状文を有する14や、胴部で羽状に交互施文される17がみられる。なお、上層からは083号跡・085号跡と接合した壺片が出土している。以上のように、焼失住居の可能



第102图 084号跡 (1)



第103図 084号跡 (2)

性があるにもかかわらず、脚のみ、あるいは壺壺の底部のみが貯蔵穴や床面から出土した。これは、脚を小型器台、底部を小型丸底鉢に見立て、住居廃絶時に祭祀が行われ、遺棄された可能性がある。

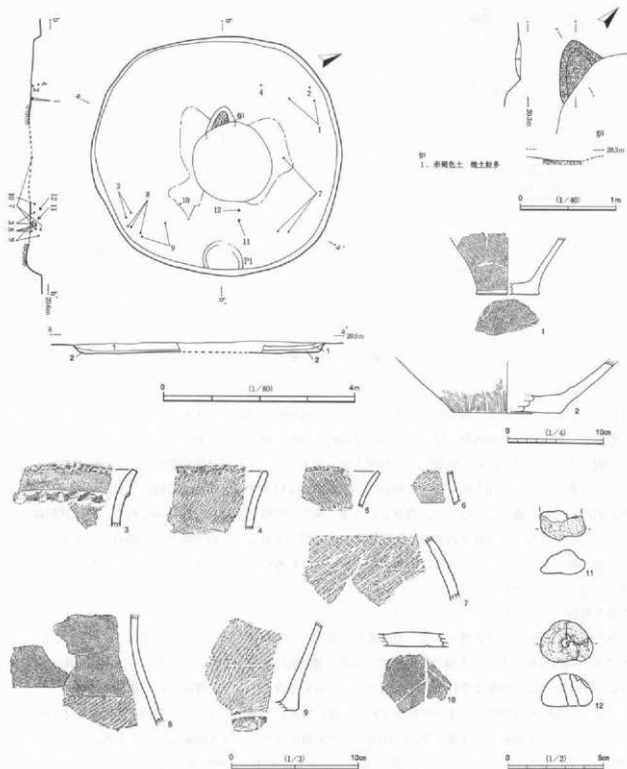
石製品1点が貯蔵穴から、鉄製品1点が覆土から出土している。18は砂岩製の大型砥石である。石の目に沿って板状の石の片面を砥石として使い込み、錆が広く付着する。使用面の縁に欠損部が多数みられるが、同時に摩耗も進んでいるため、遺棄されるまで現品の状態で使用されたとみられる。19は鉄製鎌である。このように短い直刃鎌は古墳時代前期を代表する形態である。左辺壁際の焼土面付近で出土した。基部は軽く折り返されている。刃部に木質の付着が観察されるが、柄の装着状態を反映したものではなく、基部形状と方向が異なる。

085号跡 (第104図、図版31・69・82)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り (A14グリッド) に位置する。5.0m×5.2mの円形に近い隅円方形である。主軸はN68度Wである。確認面からの深さは0.2mである。本跡の中心部は後世の円形土坑により攪乱を受けている。覆土はローム粒を含んでおり、埋戻しの可能性がある。

炉は中央部やや北西寄りに1か所検出されている。攪乱により削り取られ、範囲は不明である。柱穴は検出されない。主軸線上の南東壁際に、60cm×80cmの楕円形で、深さ8cm前後の小穴が検出されている。貯蔵穴としては浅いものである。住居跡の床には、中央部を中心に硬化面が広がっていたと考えられるが、攪乱のため不明瞭である。

遺構の検出状況が悪いものの、土器は2.8kgを超える量が出土した。破片ばかりであるが、印手式の土器群が中心である。1は床面出土の壺底部片である。外縁に附加条縄文、底部に木葉痕が認められる。暗色である。2は1と一緒に床面から出土した大型装飾壺の底部である。内面の荒れが著しく、外面では縦へらミガキが観察される。赤彩は確認できない。3は壺の口縁部片である。端部に附加条縄文が施され、肥厚帯下部に波状隆帯が貼り付けられる。4は壺の口縁部片である。肥厚帯は設けられず、端部及び外面



第104図 085号跡

に附加条縄文が施される。頸部は無文とみられる。明色である。5は甕の口縁部片である。端部及び外面に附加条縄文が施される。煤状付着物が多い。薄手でやや開く器形を有する。6は甕の頸部片である。半截竹管状の草茎2本を束ねたような施文単位で、2条の波状文が横位に施され、波状文の下を沈線文が区画する。7は甕の胴部片である。燃りの異なる附加条縄文が羽状に施文される。8は3の胴部片とみられ

る。頸部は無文、胴部は附加条縄文である。暗色である。9は8と同じ附加条縄文を有する壺の底部片である。内面に多量の煤状付着物がみられる。10は壺の底部片で木葉痕がみられる。なお、上層では、透し孔を四方にもつ東海系の高杯脚部片等も散見された。

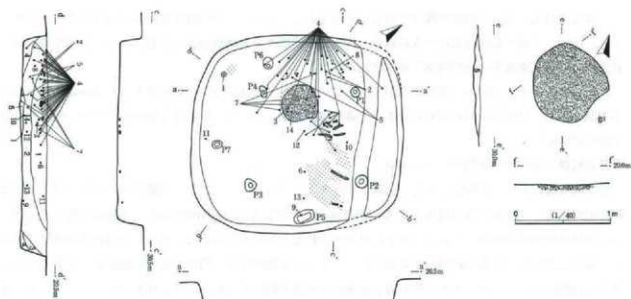
石製品としては、上層から軽石2点が出土している。11・12は白色系の軽石である。3cmにも満たない小型品である。11は平滑面が認められるが主要部分が欠損している。12には欠損面はないが、明らかな平滑面も認められない。

086号跡（第105図、図版31・69・83）

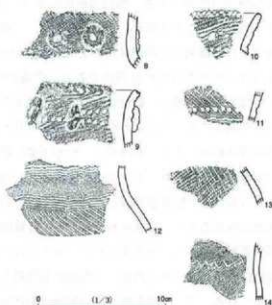
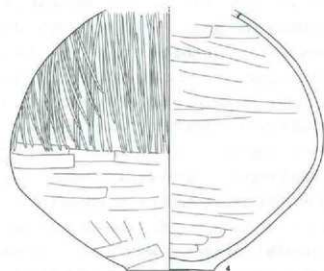
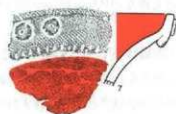
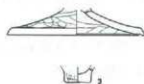
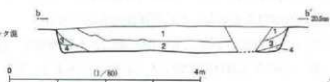
弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（A13グリッド）に位置する。4.2m×4.4mの隅円方形である。主軸は、N54度Wである。確認面からの深さが0.5m前後である。本跡の右辺（北東側）に、後世の地境溝が貫通して走る。覆土にはローム粒などが混入するので、埋戻しの可能性が考えられるが、層序に関しては人為的特徴がみられない。ただし、上層には同一個体の壺片が散在し、土器溜まりのような状態になっていた。また、炉の周辺や床の上に焼土塊がみられ、下辺に向かって広がっている。焼土塊の東側端には床上に炭化材も検出されている。炭化材は連続性に乏しく、これだけで焼失住居と認めることはできないが、焼絶時に片づけなどが行われた可能性は考えられる。

炉は主軸線上の北西寄りに1か所検出されている。径約80cmの不整形円形で、深さ4cm前後の凹みがあり、全面が赤色硬化している。主柱穴と調査時に考えた小穴が4か所ある。P1～P4はいずれも浅い小穴で、径25cm前後、深さは3cm～10cmである。出入口施設とみられる下辺（南東側）中央のP5は、25cm×40cmの隅円長方形で、深さが9cm前後である。左辺のP7は、15cm×30cmで、深さが14cm前後である。上辺左寄りのP6は径20cmの円形で、深さは15cm前後である。住居跡の床面は、ほぼ全面が硬化している。

土器量は多く、4.6kgを超える。本跡に直接伴うのは1であり、拓本に示した土器群も本跡の時期を示すと考えられる。一方、重量の最も多くを占めているのは上層から出土した4で、2・3がこれに伴う。上層には小型器台片等も含まれているので、小規模の土器溜まりが形成されていた可能性もある。1は小型裝飾壺の胴部である。西隅部床面に伏せて置かれていた。腹部で水平に割れており、現品は鉢状をなす。内面が著しく荒れる。外面文様帯は、二重～四重の山形沈線が施され、一つ置きに縄文を充填、縄文部分には斜櫛歯文と鋸歯文状の沈線、無文部には赤彩が施されるという複雑なものである。胎土に大量の赤色スコリアを含む点は異色である。底面に初痕が2粒分認められる。2は関東に定着しない形の土器で、高杯や裝飾器台、脚付壺などの脚と考える。胎土は地元土器と変わらないが、硬質の焼成である。ナデを基調とする。3は壺の小型模造品とみられる。底面までヘラナデが施される。4は壺の胴部である。遺存度は高い。無文、無赤彩で、やや下膨れ形状をもち、平底である。ヘラナデを基調とし、胴部上半には光沢を伴う縦ヘラミガキが密に施される。側面に明瞭な黒斑をもつ。5は在来の鉢または高杯の口縁部片とみられる。肥厚帯外面と、肥厚帯下部の刻みの中に、布状組織圧痕が認められる。組織が陰刻でなく陽刻に見えるなど、単純な布圧痕としては疑問もあるが、縄文とは明らかに異なる微細文様である。無文部は赤彩を伴うミガキが施される。6・7は赤彩された折返し口縁裝飾壺の口縁部片である。ともに端部は上向きである。6は折返しの外面に羽状縄文、下端にヘラ刻みが施され、2条1単位で棒状浮文が貼り付けられる。7は端部と折返しの外面に羽状縄文、下端部に縄文原体刻みが施され、竹管刺突を伴う2個以上1組の円形浮文が貼り付けられる。8は壺の頸部片である。羽状縄文が施され、ドーナツ状の円形浮



- 086
1. 黒褐色土 ローム層底
 2. 暗褐色土 ローム粒・ロームアロップ混
 3. 暗黄褐色土 ローム粒多混
 4. 暗褐色土 ローム粒混
 5. 赤褐色土 焼土粒多混



0 10m (1/4)

0 10m (1/2)

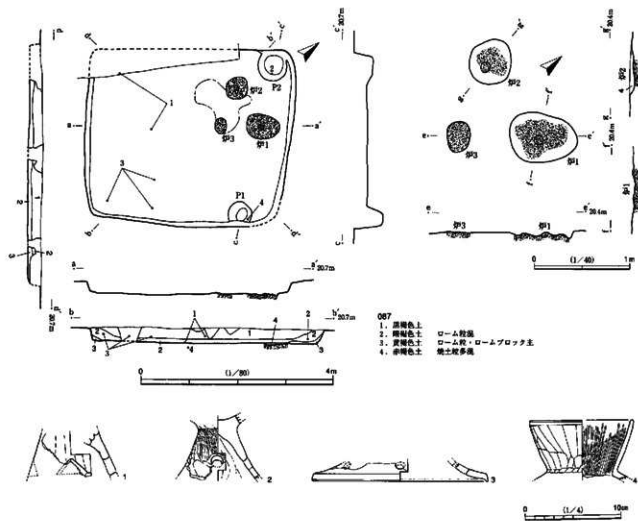
第105図 086号跡

文が貼り付けられる。9は壺の口縁部片である。端部に縄文原体刻み、外面に粗い附加条縄文、横位刺突列点文2列が施され、最後に耳状突起が2個貼り付けられる。胎土に白雲母が多い。10は9とほぼ同質の壺である。端部の内側に刺突列点が施される点、外面刺突列点の間に細かい縄文が施される点が異なる。11は壺の口縁部付近片である。附加条縄文が羽状に施されたのち、竹管状刺突列点が横位に2列、その下部に浅い櫛描微波状文が施される。12は壺の頸部片である。5齒1単位の浅い櫛描微波状文が、1.5cmの無文帯を挟んで横位に2条施され、肩部以下には附加条縄文が密に施される。煤状付着物が多い。13は壺の胴部片である。附加条縄文が羽状に施される。14は壺の肩部片で、横位結節文で区画した下部に縄文が施される。煤状付着物が多い。

087号跡 (第106図, 図版31・69)

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡である。遺跡北半部北寄り(ア13グリッド)に位置する。北西側の壁周辺は攪乱を受けている。4.3m×3.7mの隅円方形である。主軸はN42度Eである。確認面からの深さは0.3mである。覆土の堆積状況には埋戻し等の痕跡は見いだせない。

炉は3か所あり、寄り集まるように検出されている。主炉とみられる炉1は、主軸線上の北東側壁近くに位置する。径50cm×70cmの楕円形で、深さ6cm前後の凹みがあり、赤色硬化面が40cm×55cmの範囲で広



第106図 087号跡

がっている。炉2は、炉1の西隣に位置する。径約50cmで、深さ5cm前後の凹みがあり、赤色硬化面が30cm×35cmの範囲で広がっている。炉3は、主軸線上のやや北東寄り、炉1の南西隣に位置する。20cm×30cmの楕円形で、ほぼ平坦であり、全面が赤色硬化している。住居跡の床面には、炉2と炉3の間で硬化面が検出されている。支柱穴は検出されていない。左右の壁際に小穴が2か所検出されている。P1は、東側隅部に位置し、径約50cmで、深さ35cm前後である。内部から4の壺が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。P2は北側隅部に位置する。径約60cmで、深さ10cm前後の浅い小穴である。

出土土器量は0.9kg程度である。1は高杯の脚部である。一辺2.5cmの三角形透し孔を四方に有する。滑らかなナデを基調とし、胎土に多量の赤色スコリアを含む。赤彩の痕跡は認められない。2は東海系「開脚」高杯の脚部である。外面にヘラミガキが施され、径1.3cmの円形透し孔を四方に有する。088号跡出土片と接合した。3は脚付壺等の脚とみられる。淡色で脚縁部ヨコナデが顕著であり、径1.2cmの円形透し孔を八方に有する。端部につまみ上げが作出される。4は直口縁壺である。口縁はやや内湾気味である。ヘラナデを基調とし、内面にヘラミガキが施される。

088A号跡（第107・108図、図版32・69・70・83）

弥生時代後期の竅穴住居跡である。遺跡北半部北寄り（A12グリッド）に位置する。6.6m×5.8mの隅円方形である。主軸はN53度Wである。確認面からの深さが0.6mである。088B号跡の床面、主軸、炉の位置をそっくり継承し、建て替えられた可能性がある。北側隅は戦時中とみられる擾乱を受けている。覆土は4層などで埋土が疑われるが、自然埋没の可能性が高い。右辺では1層を中心に土器溜まりが形成されている。

炉は主軸線上の北西寄りに1か所検出されている。南東側で088B号跡の炉と接し、これを切って設けられている。50cm×80cmの隅円方形で、深さ6cm前後の凹みを持ち、赤色硬化面は40cm×80cmの範囲で広がっている。柱穴は対角線状に4か所、壁から1m付近のところで検出されている。いずれも径20cm～30cmの円形であり、深さが65cm～75cmである。出入口施設と思われる小穴が下辺中央の壁付近で検出されている。径約20cmの円形で、深さが20cm前後である。南側部付近には壁際に小穴が2か所検出されている。右側が径15cm×35cm、深さ1cm程度の楕円形で、左側は径20cm×40cm、深さ6cm程度の不整形楕円である。

本跡に直接伴う遺物は少なく、図示できるものでは16の土器片1点と、27の鉄製品1点が相当する。とくに27は、炉に隣接する床面から出土した資料であり、本跡に鉄製品が確実に伴うことは特筆される。

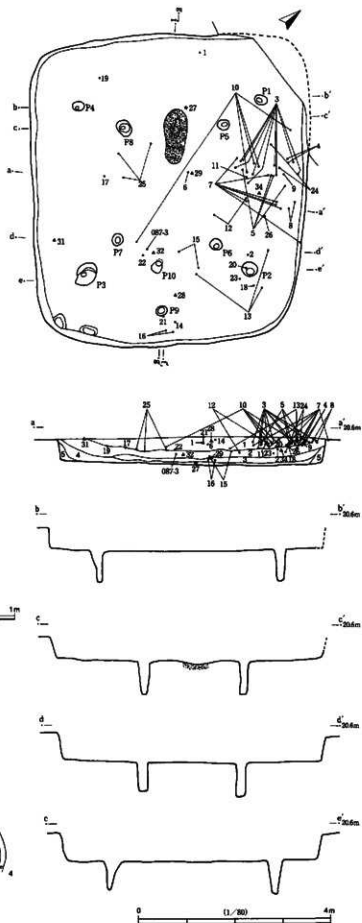
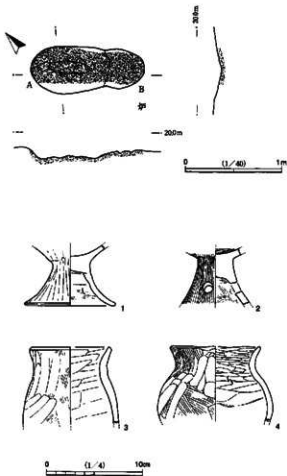
16は壺の胴部片である。久ヶ原系の甕の可能性もある。下腹部に縄文原体刻みを伴う段裝飾が1条施され、段の上下は横方向の粗いヘラミガキが施される。割がれがひどく、赤彩の有無は確認できない。内面は著しく荒れている。

27は鉄鏝である。長3.5cm、幅3.2cmの広根無茎鏝である。鏝はなく、逆刺を有する。薄手の簡易な造りで、全周が研ぎだされているように観察される。根鉄等の痕跡はみられない。

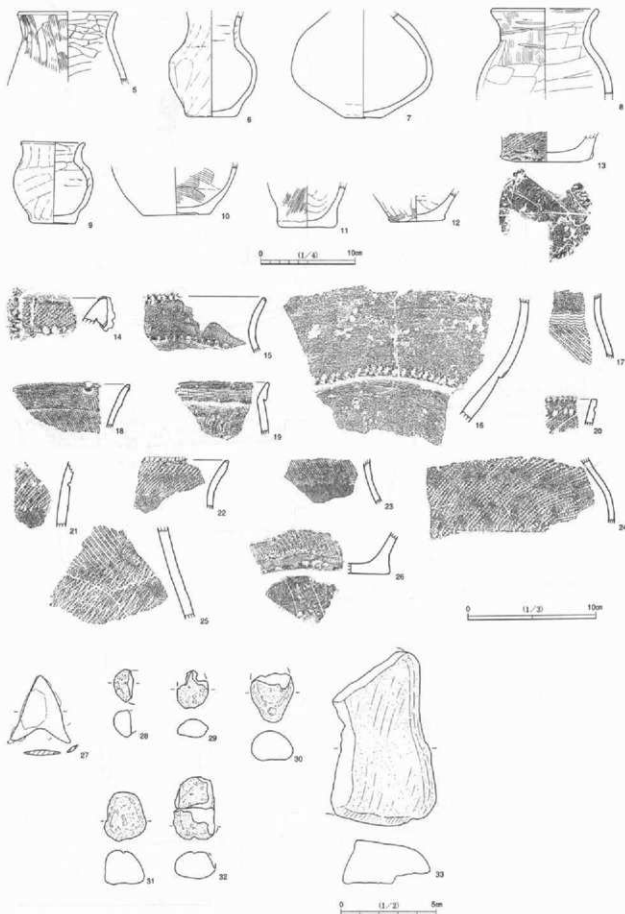
<088号上層土器溜まり>

088号跡上層には、弥生時代末～古墳時代初頭の土器溜まりが形成されている。088号跡出土土器の総重量は8.6kg近くにもなり、ほとんどが土器溜まりに属す。基本的に088A号跡廃絶後、一定期間を置いた時期の資料である。土器は覆土2層上面に形成された鏝状の凹みに集中しており、右辺から比較的短期間に投入されたとみられる。小型粗製壺を主体とし、生活廃棄物とは異なるとみられる。

- 088
1. 黒色土
 2. 暗褐色土
 3. 黄褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗黄褐色土
- ローム状多層
ローム殻層
ローム殻・ロームブロック層
ローム殻層



第107図 088号跡 (1)



第108图 088号跡 (2)

1は高杯とみられるが粗製である。ヘラケズリ・ヘラナデを基調とし、脚部内面にハケが若干みられる。杯部内面が荒れており、二次被熱を受ける。2は東海系「開脚」高杯である。明色で、丁寧にヘラミガキが施される。三方に径1.2cmの円形透し孔をもつ。脚の端部破断面が摩耗している。3～12は小型壺である。このうち7は丁寧にナデが施された下膨れの外来系壺であるが、ほかは在来の形状を継ぎ、粗いハケやナデを基調とした粗製・素口線の壺である。ほかにくらべ、6の風化が著しい。11は印手式の壺である。粗い附加条縄文と底部木葉痕が観察される。14は折返し口縁裝飾壺である。外面に縄文と刻みを伴う棒状浮文、折返しの下端部に縄文原体刻みが施される。15は壺の口縁部片である。端部にヘラ刻み、頸部段裝飾に半截竹管状刺突列点が巡る。19は小型壺である。粗いハケを基調とし、頸部に折返し段裝飾を有する。上記粗製壺と同質である。17・18・20～26は印手式の土器群である。附加条縄文を有する。17には5歯1単位の浅い櫛描波状文、18には広い輪横み裝飾が2帯以上、20には深い刺突文、20・22には端部に縄文原体刻み、25には羽状に附加条縄文が施される。

軽石を含む石製品7点が土器溜りに伴って出土した。28～32はいずれも白色系の軽石である。最大でも径3cm前後という小型礫である。破損品を含むが、明確な平滑面等はみられない。33は砂岩製の砥石である。下辺は敲打痕に覆われ、敲打の際に裏面等が欠損したとみられる。磨面が破断面の角を丸くしていることから、破損後も砥石に用いられている。なお、図示していないが埋痕を残す3cm大の焼成粘土塊が出土している。

088B号跡 (第107・108図, 図版32・69・70)

弥生時代後期以前の竪穴住居跡とみられる。遺跡北半部北寄り(A12グリッド)に位置する。088A号跡より規模が小さく、そっくり重複していたため、本跡は炉と柱穴のみ残されていた。柱穴の配置から推定すると、縦5m前後、横4m前後の楕円形や隅円長方形であったと考えられる。主軸と深さは、088A号跡とほぼ同じであったとみられる。

炉は主軸線上の北西寄りに1か所検出されている。上部は088A号跡の炉に切られる。幅50cmの楕円形になるとみられ、全面が赤色硬化している。主柱穴は4か所検出されている。いずれも径約25cmで、深さが60cm～70cmである。配置が長方形をなすことから、全形も縦長とみられる。出入口施設と思われる小穴が主軸線上の南東寄りに検出されている。径約23cmで、深さが30cm、外側に向かって傾斜する。

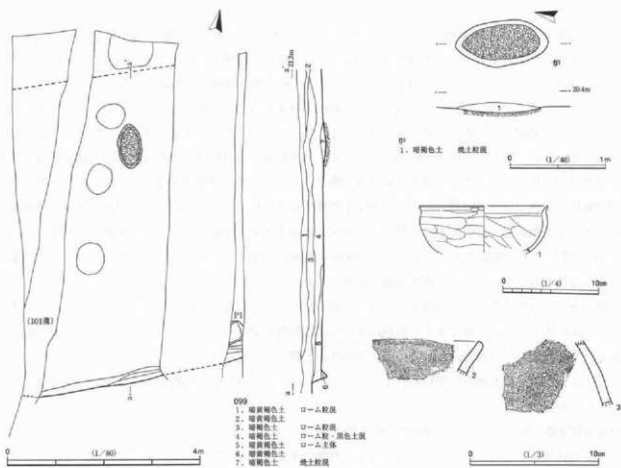
088A号跡がそっくり重複するため、本跡に伴う遺物は確認できなかった。

099号跡 (第109図, 図版32・70・83)

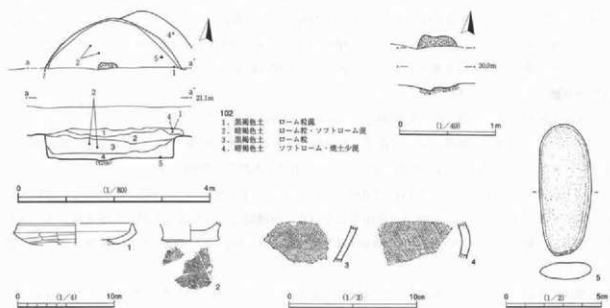
古墳時代前期ないし中期の竪穴住居跡とみられる。遺跡南半部北寄り(M27グリッド)に位置する。101号跡の溝や、後世の攪乱によって削平され、残存するのは炉と南側の壁の一部である。確認面からの深さも、最大0.3m前後で、遺存状態は悪く、主軸・形状・規模等は判明しない。

炉は1か所検出されている。住居跡の北寄りに位置していると思われる。径50cm×100cmの楕円形で、深さ4cm前後の凹みがあり、全面が赤色硬化している。南側壁近くに貯蔵穴と思われる土坑が1か所検出されている。攪乱を受けているが、幅40cmの隅円長方形とみられ、深さ30cmである。壁溝は南側で一部検出されている。

土器は1.7kgが出土したが床面付近で良好なものがなく、覆土出土の中から参考になるものを図示した。1は和泉式新相から鬼高式古相にみられる丸底杯である。ナデ・ヘラケズリを基調とし、全面に赤彩が塗布される。覆土からはほかにも同期の杯や高杯片が出土しており、指痕がついた5cm大の焼成粘土塊



第109図 099号跡



第110図 102号跡

も併せて出土している。2は五領式の「く」の字壘である。ハケが施される。3は裝飾壺の胴部である。わずかに結節文区画とその上部に縄文が観察される。

102号跡 (第110図, 図版32・70・83)

弥生時代後期の竪穴住居跡である。遺跡南半部北寄り (M28グリッド) に位置する。本跡は、南側約2/3が調査区外につき未調査である。東側の壁は攪乱や後世の溝によって削られている。主軸、形状・規模等は判明しないが、隅円方形、もしくは隅円長方形が想定される。表土部分を除くと、深さは0.5mである。覆土は徐々に堆積した状況ではなく、埋め戻された可能性が高い。なお、本跡を攪乱する溝は、その付近に最近まで洞があったという伝聞を得ており、遺物はないが、新しいものと判断する。

東側に張り出した浅い掘込みがみられる。これは本跡の施設なのか、重複する別の遺構なのかは確認できなかった。ただし、出土遺物の中には鬼高式の土師器が若干含まれていたため、後者の可能性が高い。

炉は1か所検出されている。南側の調査区界に位置しているため、形状や規模は判明しない。3cm前後の凹みがある。被熱硬化のため凸凹しているが、火床面の残りが悪く、赤色化はみられない。柱穴や貯蔵穴等の施設は検出されていない。

出土土器は少なく、張り出し部を含めても0.6kgに満たない。1は土師器杯である。須恵器杯身模倣としては浅いことから、鬼高式の新相を示す。出土位置から、重複する張り出し部分に伴うと考えられる。2は本跡の時期を最も反映する甕片である。底部木葉痕を有し、形状から印手式に属すとみられる。3・4はともに附加条縄文を有する甕の胴部片である。5は粘板岩の小型板状礫である。床面から出土した。長さ6.8cmで、図の左側辺に擦痕があり、下端部に敲打痕がみられる。

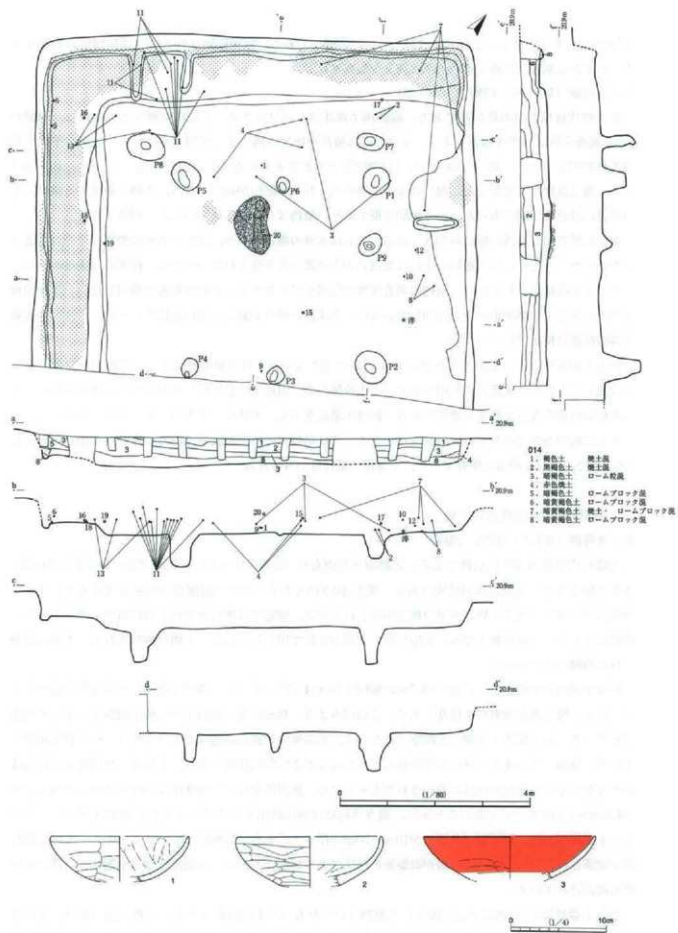
2 古墳時代中・後期の住居跡

014号跡 (第111・112図, 図版9・46・74)

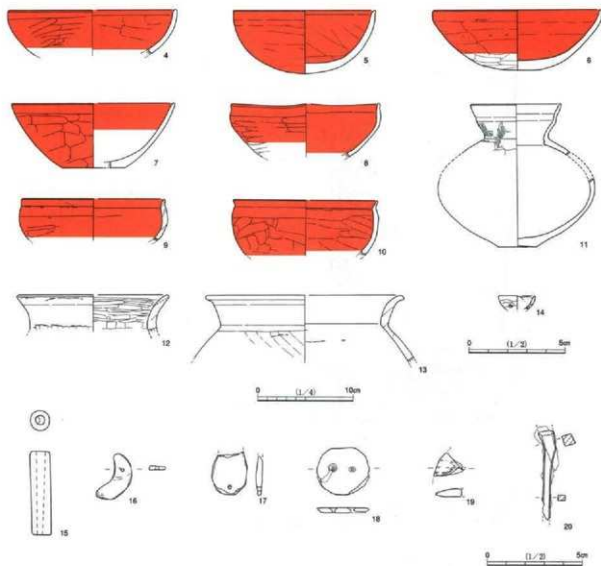
古墳時代中期の竪穴住居跡である。遺跡南半部南寄り (E35グリッド) に位置する。推定長9.2mの大きな方形をなす。主軸はN39度Wである。深さは0.8mである。ゴボウ掘削機の攪乱を受けるが、床までは及んでいない。覆土上層に多量の焼土が含まれており、壁際では床のわずかに上の位置で、焼土が帯状に堆積していた。下層の焼土では、完形に近い土器が正位で出土している。土層の観察等から、1回は改築された形跡が見て取れる。

炉は中央付近に位置し、1.1m×0.7mの範囲で10cmほど凹んでいる。内部は被熱による硬化や赤色化がみられず、焼土塊が散布する程度である。この凹みより、数cmほど上部の土中に焼土塊がまとまって検出されている。炉に起因する焼土と観察されたので、拡張後の炉跡に該当するとみられる。柱穴は2組検出された。東西に3か所ずつ計6か所の柱穴をもつのは小さい竪穴住居であり、その後、楕円形の主柱穴4か所を有する大型の竪穴住居に改築されたとみられる。拡張部分は、完備状況で10cm~20cmほど高く、幅が1.0m~1.1mと一定であることから、調査当初には地山削出しによるベッド状の施設と考えた。ただし、土層観察では、最下層 (8層) が10cm~20cmの厚さで広く水平に堆積していることから、上面に硬化面が確認されないものの、この層が改築後の貼床である可能性もある。改築後は壁溝が廻り、一部に仕切溝も確認されている。

出土土器量は4.7kg超に及ぶ。図示した遺物はいずれもベッド状の高まりや、8層上面の高さにおいて出土しているため、改築後の床面に散在した遺物が主体とみられる。和泉式の新相を示す。1~10は杯で



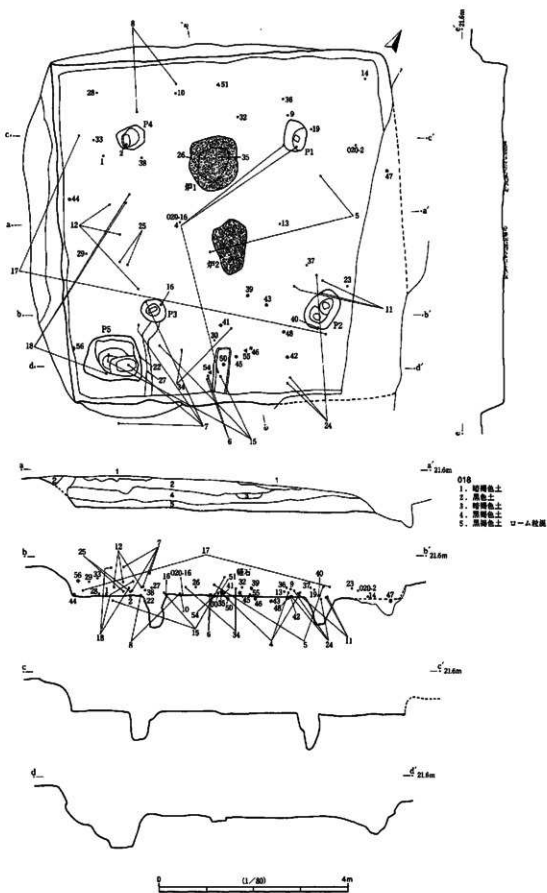
第111图 014号跡 (1)



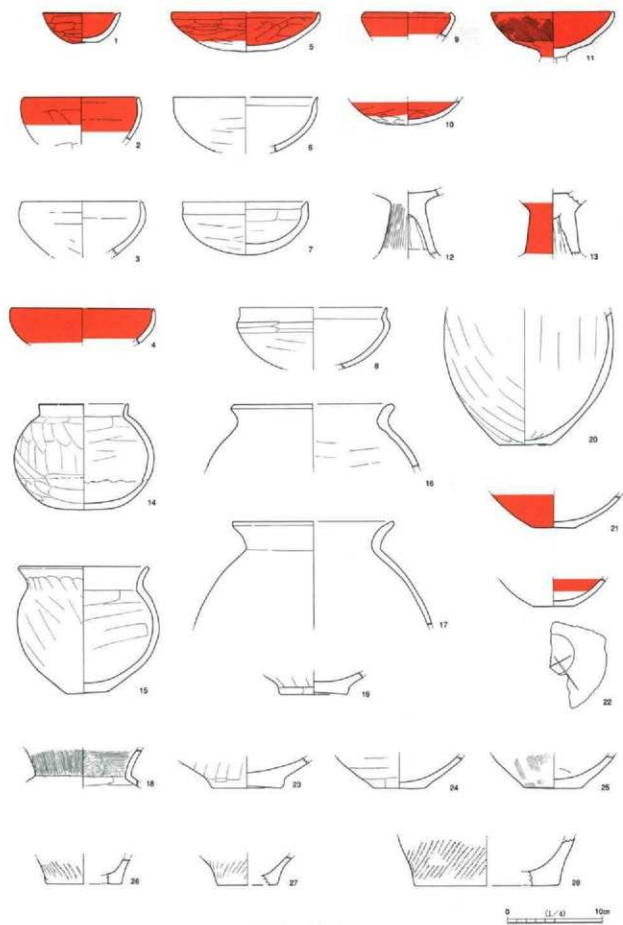
第112図 014号跡 (2)

ある。外面にヘラケズリ，内面にナデを基本とし，3～10は内外面とも赤彩が施される。5・6がほぼ球形で，丸底である。2・7のように平底や，8～10のように口縁部の屈曲するものも含まれる。11は小型の壺である。須恵器層の模倣もしくは小型丸底壺の系統である。口縁部と胴部に接点はない。縦ハケのちナデを基本とする。口縁部には段を有し，その上部はヨコナデで仕上げられる。底部を中心に激しい二次被熱を受ける。12・13は壺である。頸部がしっかり屈曲する。口縁部にヨコナデ，屈曲部を境界にヘラナデ（ケズリ）が施される。14は壺形の小型土製品とみられる。1か所穿孔されている。

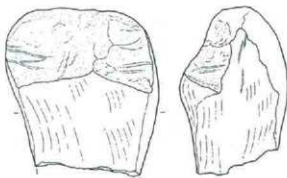
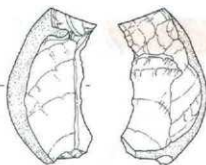
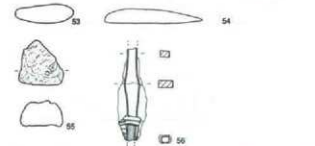
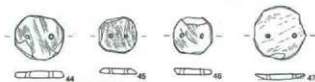
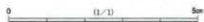
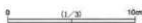
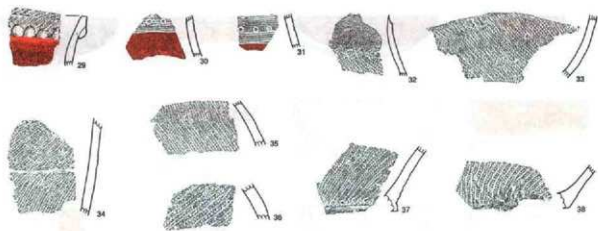
石製模造品類と管玉が，ベッド状の高まりや8層上面の高さにおいて，改築後住居跡の両側部，左側辺及び中央部という要所から出土しており，廃棄儀礼等の痕跡を留める。15は管玉である。滑石系石材であるがよく研磨された小型品で，片面穿孔であり，数珠繋ぎによる摩耗がみられる。16～19は石製模造品類である。滑石系石材ながら質や色調がすべて異なり，16の勾玉，17の剣形，19の双孔円板片は滑らかで密な石質，18の双孔円板は光沢をもつ結晶片岩質で，19を除き研磨痕は目立たない。20は鉄製の釘とみられる。炉の付近の覆土上層から出土している。ほかに，鉄滓とみられる鉄塊1（第17表）が出土している。



第113图 018号跡 (1)



第114图 018号跡 (2)



第115图 018号跡 (3)

018号跡 (第113~115図, 図版10・47・48・74)

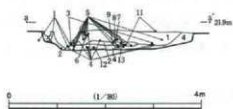
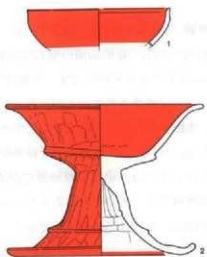
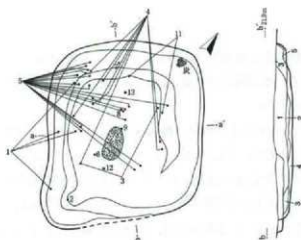
古墳時代中期末～後期初頭の堅穴住居跡である。遺跡南半部南寄り (C36グリッド) に位置する。7.5m×7.4mの大きな正方形をなす。主軸はN35度Wである。確認面からの深さは0.7mある。西辺は後世の地境溝によって破壊されているが、おおむね遺存度は良好である。

炉は、本跡中央とやや北西寄りの2か所が検出された。両者とも平坦で、掘込みはない。主軸上北西寄りの炉1は、1.1m×1.0mの範囲で被熱硬化がみられ、内部の赤色化が顕著である。本跡中心部にある炉2は、1.1m×0.7mの範囲で被熱硬化が認められ、一部に赤色化が認められるが、炉1より小範囲である。炉の周囲では、床の硬化があまりみられない。主柱穴は4か所検出されている。いずれも径50cm前後の不整円形で、深さは55cm～70cmである。東辺の2か所では柱穴の重複があり、建替えや補修等があったとみられる。貯蔵穴とみられる土坑が南西隅に認められる。上端で1.2m×1.0m、最深部70cmの長方形をなすが、完掘状況では複雑な形状である。調査時には南側の小穴のみが先に検出されたことから、少なくとも2穴の重複とみられ、南側の小穴のほうが新しいと考えられる。貯蔵穴の西から間仕切り溝にかけての床面には、硬化面が形成されている。

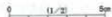
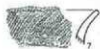
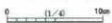
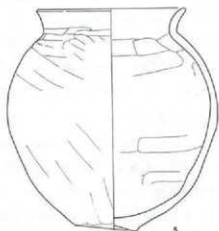
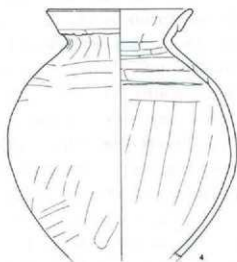
土器は12kgを大幅に超える膨大な量があり、比較的下位にて出土している。総じて和泉式の新相を示す。杯が多くを占め、とくに1～10のような赤彩の丸底杯が主体を占める。高杯も赤彩され、11のように内湾化した杯部を有するものが含まれるほか、12・13のような短い屈折脚が主体的である。14～25は壺及び甕である。このうち、14・15は器形の異なる小型の甕であるが、ともに外面腹部と内面底部に多量の煤が付着する。16・17・20の大型甕も、程度は異なるがいずれも縦長胴部を有するとみられ、煤状付着物や二次被熱が顕著にみられる。なお、18・21・22は古い土器片が混入した可能性が高く、このうち22は平底杯の可能性があり、内面に赤彩を伴うミガキをもち、外面に焼成前のへら線を有する。このほか、印手式の壺・甕片が多く出土している。26～28・37・38は甕底部片である。附加条縄文が施文される。29～31は壺片である。口縁部片には附加条縄文、頸部片には柳描行線と円形刺突列点がみられ、無文帯に赤彩が施されている。32～36は附加条縄文を有する甕片である。32の肩部片は結節文で文様態を区画している。これらの土器片の存在は、本跡が弥生時代後期の遺構と重複していた可能性を示唆する。

石製模造品類は、白玉5点、双孔円板6点、勾玉1点が出土している。39～43は滑石製白玉である。いずれも緑味灰色～オリーブ味灰色である。42・43は側辺中央部を境に研磨方向が変わるが、他と同様に明確な稜は有さない。44～49は双孔円板 (鏡形) である。いずれも灰色の滑石系石材を使用し、表裏側面の研磨痕を明瞭に残す。褐色味帯びるロウ石質の44・49、蛇紋岩質の48、暗緑色味帯びる片岩質の45・46、緑泥片岩質の47とで、大きさ、穿孔位置に相違がみられ、厚みのある49は両面穿孔である。50は48と同質石材による勾玉である。簡易な三日月形をなす。これら模造品は左右の壁際から1点ずつ、残りは出入口が想定される下辺中央部から出土しており、住居廃絶儀礼等の痕跡を留めるものと考えられる。

51は灰味黄緑色の頁岩ないし凝灰岩質石材で、玉などの素材を採取した石核の可能性が高い。52は破損した流紋岩製大型砥石である。四方に平滑面が発達し、頭部には無数の磨削傷がつく。53は端部に敲打痕のある小礫である。54は砥石である。砂岩質で、よく使い込まれている。55は白色系の軽石である。中央の小型炉から出土した。若干の磨面が観察できる。56は鉄製長頸鏝の篋被部とみられる。錆が著しく、X線によっても関形状は判然としない。ほかに小鉄塊 (第17表) と含貝殻土塊 (図版89) が出土している。



- 019
 1. 黑褐色土
 2. 黑色土
 3. 黑褐色土
 4. 黑褐色土
 5. 黄褐色土
- 黑坑窑
 口—人洞
 黑褐色土坑



第116图 019号坑

019号跡 (第116図, 図版11・48・74)

古墳時代中期の竪穴住居跡である。遺跡南半部南寄り (C36グリッド) に位置する。規模は小さく、3.7m×3.4mの不整隅円方形をなす。主軸はN33度Wである。確認面からの深さは0.4m程度である。北東隅に炭化材が検出されており、北西隅や南隅では床面付近で完形に近い土器が出土している。なお、出土遺物には隔たった時期のものがみられるので、古墳時代中期以前の遺構が重複する可能性も排除できない。

中心部に、炉とみられる0.7m×0.4m赤色化範囲が検出されているが、とくに被熱硬化はしていない。住居跡の床面は、平坦な部分が少なく、全体に皿状をなし、硬化面の形成がみられない。平面図では壁際にベッド状の高まりがあるような表現をしているが、段は不明瞭である。

遺構の大きさに反して土器量は4.5kgと多い。とくに1, 2, 4, 5は、中央の低い部分から出土した破片と接合するもので、確実に本跡に伴う遺物とみられる。いずれも和泉式の土器群である。1は杯の口縁部である。赤彩の丸底杯とみられるが、二次被熱の激しい小片である。2は裝飾高杯である。遺存度は高いが、二次被熱を受ける。ヘラナデ調整され、比較的粗い造りで、明瞭な赤彩を伴う。脚が柱状ではない、脚部下段が反り返るまで開く、杯部外底段の突出度が低いなどの新しい特徴を示す。3は小型丸底壺の口縁部である。ヘラナデ調整で、赤彩痕跡があるが、二次被熱が著しい。4は和泉式の壺である。突帯貼付けによる二重口縁、ヘラナデを基調とした縦長胴部をもち、遺存度は高い。5は縦長球形の壺である。ヘラナデを基調とする。頸部屈曲が明瞭な古相を示し、全体に二次被熱、底部内面に煤状付着物が認められるが、遺存度は高い。6~11は印手式の壺または壺片である。いずれも附加条縄文を有し、外面に煤状付着物が認められる。7の口縁部片は端部にまで施文が認められ、8の肩部片は附加条縄文を羽状に施文後、波状の結節文を別に施文し区画を構成するなど、裝飾的施文が徹底されている。

石製模造品類2点は内区床面から出土している。ともに滑石系の灰色ないし暗灰黄色石材が使用される。12は剣形石製品である。縦に2か所穿孔され、表裏側面とも横の明瞭な研磨痕を残し、身に当たる両長側辺は斜めに研磨されている。13は双孔円板(鏡形)である。表裏側面に斜め方向の研磨痕が観察される。

020A号跡 (第39~41図, 図版11)

020B号跡埋没後の凹地を利用して、構築された古墳時代中期~後期の竪穴状遺構である。遺跡南半部南寄り (C37グリッド) に位置する。小規模であり、推定で2.7m×3.6mの長方形をなす。主軸はN18度Eである。020B号跡覆土の4層上面を床とし、深さは0.35m前後である。020号跡としては多量の遺物が出土しているが、大半が本跡 (A) の範囲内から出土したものである。本跡の覆土には焼土を含む。北西隅ではスラグが出土している。

南部に貯蔵穴様の長方形土坑を有している。土坑内部から、薄い焼土とともに多量の土器が出土した。柱穴1か所が主軸上の北寄りで検出されている。この柱穴について、020B号跡覆土中に認められた焼土範囲が柱穴の位置に一致することから、柱穴は020A号跡の床から掘られ、その上から焼土が入った可能性が高いことを示す。

020号跡ではA・B合わせて14kgにも及ぶ土器器が出土した。その大部分がA号跡範囲内に集中しており、和泉式の土器群を主体としている。押図は020B号跡とともに第3節-1に掲載した。B号跡床面付近出土の土器片も若干みられるが、上層土器片と接合するものも多く、出土地点のみでは厳密に分離で

きないので、ここで併せて報告する。1～8は杯である。うち、1・2は凹底のもので、1は完形である。2はよくナデ調整され、赤彩が施された後、焼成前に放射状の線刻が外面に施される。ほかは丸底杯とみられ、3・4は赤彩され、口縁が「く」の字になっているもので、ともに内面のほうが明瞭な襷をもつ。5は赤彩され、下部にヘラケズリにより不明瞭な襷を有する。6～8は鬼高式の須恵器蓋模倣杯とみられ、7は遺存度が高い個体で、油煙状の光沢をもつ黒色化部分のみみられる。9～16は高杯である。9は小片であるが、内面にヘラ描き文様がみられる。10～14は赤彩とナデを基調とした屈折脚高杯であるが、13は赤彩されず、脚の屈折が不明瞭化している。15・16は鬼高式の高杯である。17は小型丸底壺とみられ、ナデを基調とし、上半部のみ赤彩される。18も同器種であるがやや大型で、二次被熱のため下部の赤彩は不明である。19～21・23～28はA号跡出土の甕である。ナデを基調とする和泉式の甕を主体とするが、25のような鬼高式の甕を含み、19も後者の可能性が高い。22・29の甕、30の壺はA号跡出土であるが、古いB号跡に關係する五領式土器群とみられ、22は頸部に折返し段表現をもつ。31～39はB号跡に伴う五領式の土器群とみられるが、一部は上層出土を含む。31・33は高杯で、ともに脚部接点が高い開脚高杯か、柱状屈折脚高杯の可能性が高い。31は全面が赤彩で、風化が著しい。32はナデを基調とした台付甕の脚とみられるが、胴部破損後に激しい二次被熱がみられ、古い破片が炉器台等に転用された可能性がある。34・35・39は無文の直口縁壺である。ハケのちナデを基調とし、赤彩されるが二次被熱により不明瞭なものもある。34はやや内湾ぎみの口縁、35・36は凹底が特徴的である。36は折返し二重口縁壺で、薄手の整った造りを持ち、縦方向のミガキが丁寧に施される。37は甕である。遺存度が高い。球形胴部、「く」の字口縁を有する薄手の個体で粗いハケ（3本/cm）と、一部ナデが施される。

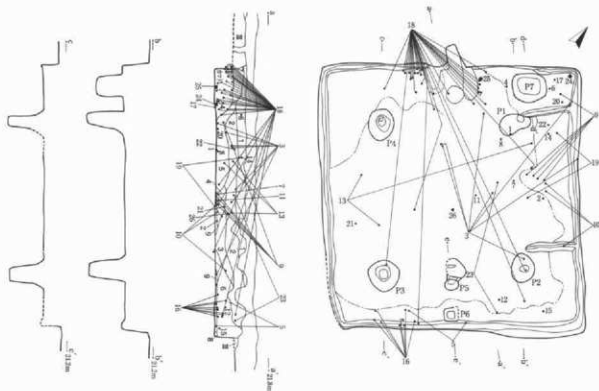
石製品3点と鉄製品3点がA号跡に伴って出土した。40は磨石である。流紋岩質の拳大礫で、周縁に比べ二面が著しく平滑である。41は滑石製模倣品で、双孔円板である。柄模倣をもつ軟質の褐灰色石材で、穿孔の周囲と縁に放射状の線刻が施されている。42は石製模倣品の未製品である。片理のみみられる細粒の緑灰色石材を用い、母岩から連続的についた板状剥片で、完成品より厚みがある、片側面に自然面がある、剥離面が湾曲している等の特徴がみられる。上部に穿孔を試み、貫通したが本体は割れ、廃棄されたとみられる。43の鉄製品3片は、同一個体の曲刃鎌とみられる。身の中央部に木質が付着する。

036号跡（第117・118図、図版15・51・70・76）

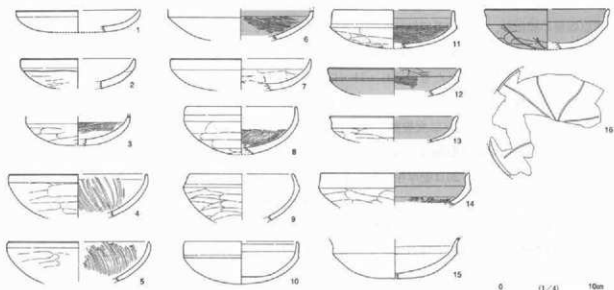
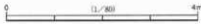
古墳時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り（V19グリッド）に位置する。5.6m×5.4mの竪穴住居である。主軸はN43度Wである。確認面からの深さは約0.3mと浅く、南西側半分をゴボウ掘削機によって床面まで攪乱されている。

カマドが北西側壁のやや右寄りに設けられている。左袖部や煙道部がゴボウ掘削機によって破壊されており、カマドの上部は崩落、流失が著しい。焚き口と左右の袖部周辺に多量の赤色塊と白色砂を含む。床面中央付近を中心に硬化面が形成されている。壁際には、深さ5cm以上の壁溝が廻る。主柱穴は4か所検出されている。それぞれ上面形は広がっており、径50cm～68cmの不整円形をなし、約70cm～80cmの深さがある。北東側主柱穴2か所からは、北東方向に延びる深さ約10cmの仕切溝2条が検出されている。南東側壁付近には、形状から出入口施設とみられる小穴2か所がみられる。中央寄りの小穴が壁側の小穴に切られた状態で検出されている。また、その付近の壁際に小穴1か所が検出されているが、規則性はなく、根痕の可能性もある。カマドの右側、北東側隅部において貯蔵穴が1か所検出されている。

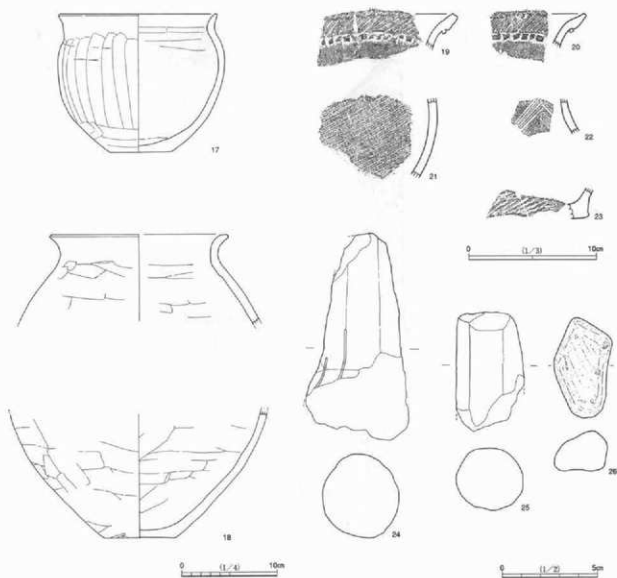
4kgを超える鬼高式の土器群が床面直上と下層において出土している。1～16は土器器杯である。半数



- 036
1. 原褐色土
 2. 黄褐色土
 3. 黄色土
 4. 褐色土
 5. 原褐色土
 6. 暗黄褐色土
 7. 灰色土
 8. 黄色土
 9. 黄色土
- ロームプロッタ・原褐色土層
 ロームプロッタ・原褐色土層
 山砂・ロームプロッタ層
 ロームプロッタ・ローム・原褐色土層
 山砂層
 ロームプロッタ・ローム
 (地盤)



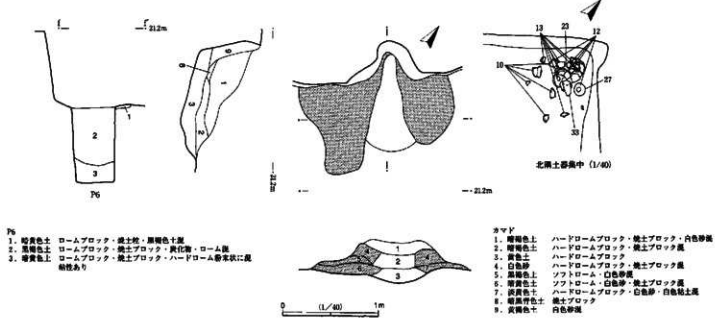
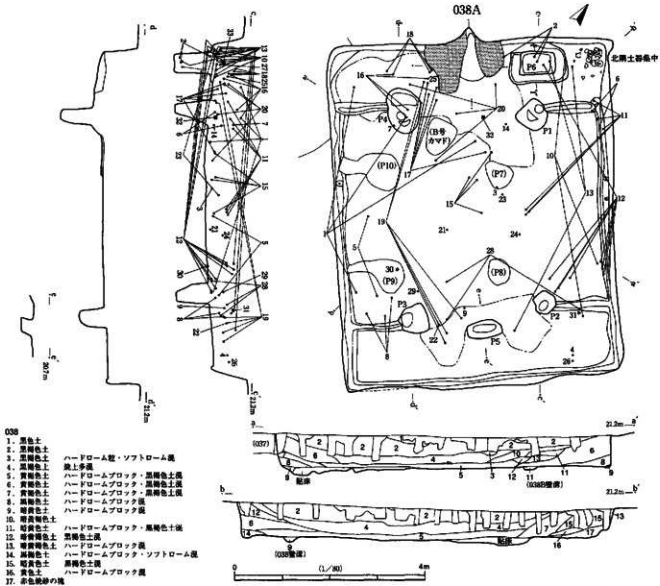
第117图 036号跡 (1)



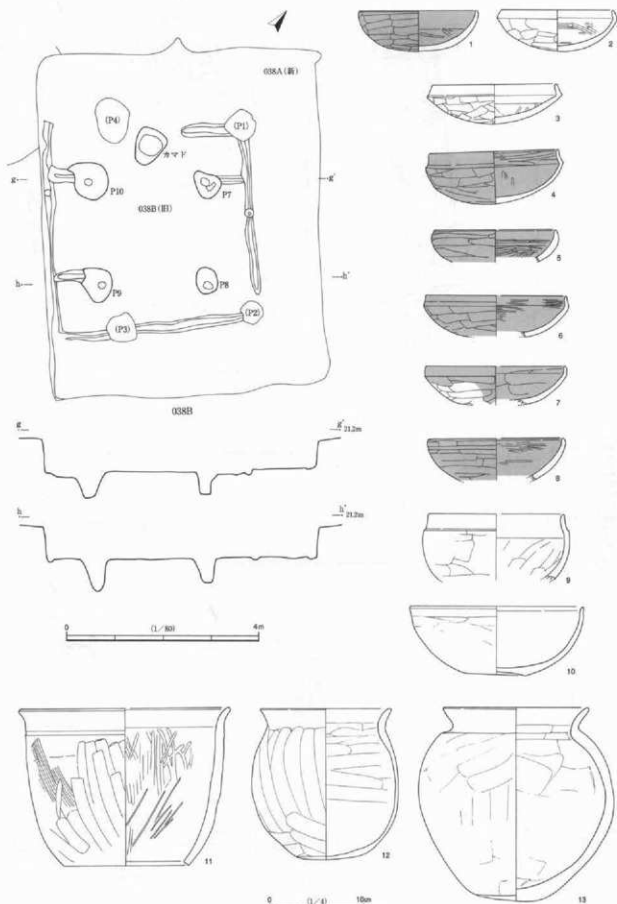
第118図 036号跡 (2)

が須恵器身の模倣杯，残りが蓋模倣杯か和泉系統の杯であり，いずれもやや浅身で，内面にミガキが施されたものが多い。赤彩は含まず，黒色処理されたものが6・11～14，16の6点含まれ，そのうち漆仕上げとされる暗色系の処理がされたものは6・11・12の身模倣杯に限られる。16の外面には焼成前ヘラ描きによる放射状の刻線が施される。17は厚手の小型壺である。強い口縁部ヨコナデ，縦に揃った胴部ヘラケズリが特徴的で，底部は激しい二次被熱を受ける。18は同一個体とみられる大型壺の口縁部・底部片である。ヘラナデ調整の縦長球形胴部，強いヨコナデにより丸みを帯びた口縁部を有する。19～23は混入した印手式の逸片である。19・20は肥厚帯に附加条縄文とその下部に蛇行隆帯が施された口縁部片，22は籬描山形文が施された頸部片，21・23は附加条縄文が施された胴部・底部片である。

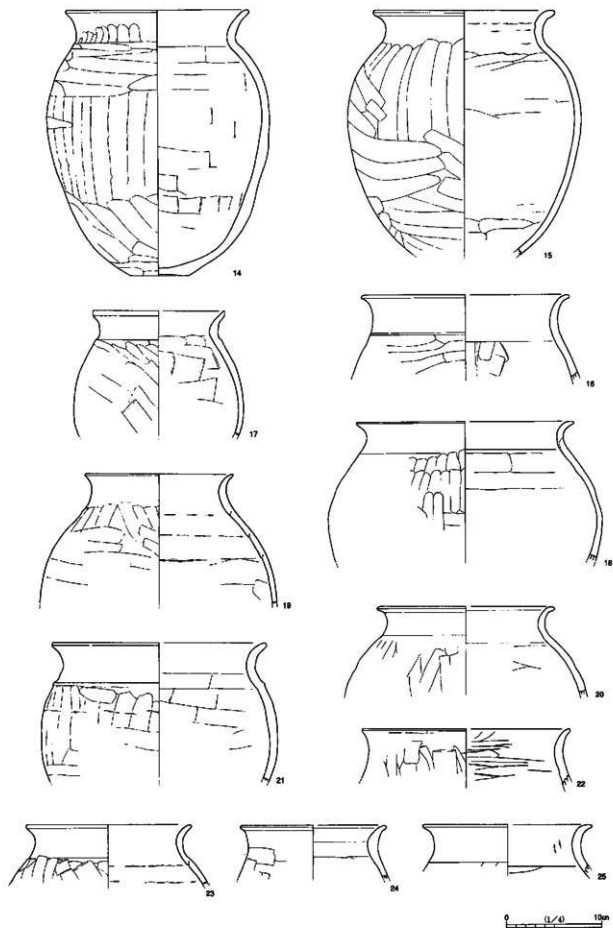
カマド支脚2点がカマド脇と住居北隅床面から，軽石1点が覆土中層から出土している。24は支脚である。蕨状混入物を含む砂質粘土製のほぼ完形品で，基部付近に縦方向の傷がつく。25は24と別個体の支脚である。基部を欠損している上，風化して脆い。26は白色系の軽石である。磨石としてよく使用され小さくなっており，6面もの平滑面が形成される。ほかに，発泡質の鉄滓が2点出土している（第17表）。



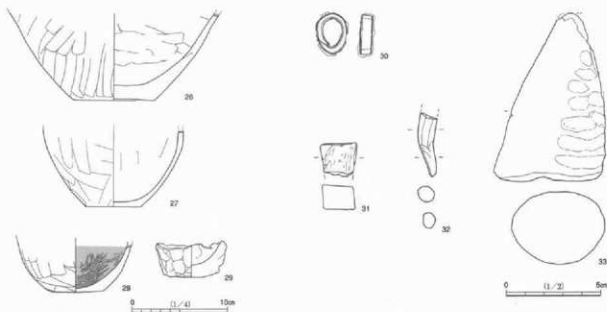
第119図 038号跡 (1)



第120图 038号跡 (2)



第121图 038号跡(3)



第122図 038号跡 (4)

038A号跡 (第119～122図, 図版15・16・52・53・70・76)

038B号跡を改築したとみられる古墳時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り (V20グリッド) で検出された。7.3m×5.9mの大きな長方形をなし、北西隅側が037号跡を切っている。主軸はN39度Wである。確認面からの深さは約0.6mである。1層・2層を除くとロームブロックを多量に含む覆土であり、本跡廃棄後に、少なくとも緑が埋まる程度にまでは埋戻しが行われたとみられる。

カマドは、北西側壁の中央に位置する。左側 (北西側) の袖部や煙道部の一部はゴボウ掘削機によって攪乱される。調査時には、火床部が凹んだので埋め、その上に袖を構築し直したものと観察された。火床部から煙道部にかけて砂を貼りつけている。北側隅部には、焼土と土器 (支脚等) が廃棄された状態で検出されており、カマド修理の際に廃材や古道具を掃き寄せたままの状態とみることもできる。

支柱穴は4か所検出されている。径56cm～60cmの不整形円形で、深さは55.8cm～88.9cmである。壁溝は三辺で巡っており、カマドのある上辺では検出されていない。間仕切溝が計4条検出されている。側壁の溝から直角に伸び、各柱穴に突き当たる。一部は038B号跡の壁溝とほぼ重なった状態で検出されている。貯蔵穴とみられる土坑は、カマドの右 (北東) 側に隣接している。上端65cm×120cmの長方形で、深さ約0.8mの本格的な貯蔵穴で、周囲も深さ3cm～5cm掘りくぼめられ、対応する蓋が伴った可能性がある。床面は038B号跡より若干浅く、本跡の内区には038B号跡の床面との間に厚さ約20cmの貼床が形成されている。下辺中央には出入口施設とみられる45cm×70cm、深さ約20cmの楕円形小穴が検出されている。周辺の床はとくに硬く締まる。カマド周辺の床にも硬化面が形成されている。

038号跡の土器量は5.6kgを超えており、その大部分はA号跡に伴うものである。上層のみで接合する個体には11・16・18・19・22・28等が挙げられるが、他はおおむね下層と上層で接合するもので、埋戻しに伴った可能性が高い。支脚や焼土とともに本跡北隅から集中出土した10・12・13・23・27は、遺存度の高いやや異質な土器群である。

本跡出土土器はすべて土師器であり、鬼高式の特徴を有する。まず、1～10は杯である。半数が須恵器身の模倣杯、半数が蓋模倣杯等であり、全体的に浅身のものが多い。内面にミガキが施されたものも多く、黒色処理が施されたものは1・4～8で、貯蔵穴から出土した2も黒色部分がある。このうち4～8は漆仕上げとされる暗色系の処理が施され、8は口縁部下に沈線を有する蓋模倣杯で、時期の決め手となる。やや異質感のある10は平底碗形の大形杯で、二次被熱が著しい。11は唯一の甗である。遺存度は低い。内面にミガキ様の丁寧なナデが施され、焼成前に縦方向のヘラ描き線が付けられる。12は小型甗である。丸底気味の点が外部の影響を示唆する。縦ヘラケズリで異例の薄さに造られ、二次被熱を受ける。13も丸底気味の甗である。厚手で、肩に稜を形成する強い口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデが施される。焼けた砂質粘土が付着し、二次被熱が著しい。14～26は厚手の大型甗である。縦ヘラケズリを基調とする14・15・21・23等と、ヘラナデを基調とする17～19・22等とは口縁部形状に若干の相違がみられるが、いずれも口縁部に強いヨコナデが施され、縦長球形胴部、平底を基本形とする。27は平底の小型甗である。揃った縦ヘラケズリを基調とする。二次被熱を受け、内面の剥落が著しい。28は鉢形の土器とみられる。甗の底部と同じ形状・外面調整を有するが、内面にミガキと黒色処理を施されている。29は覆土から伏位で出土した鉢形の手捏ね土器である。内面は滑らかなヘラナデが施される。

石製品1点、土製品1点、支脚1点が出土している。鉄製品1点は038B号跡に伴う。31は覆土上層から出土した凝灰岩製砥石の破片である。白色系の細粒・軟質石材で、4面を砥面とし、かなり使い込まれている。32はカマド前面の床から出土した焼成粘土塊である。手捏ね製で、明色に焼成され、現長3.4cm、一方が破損している。33は本跡北隅部から出土した支脚である。焼けて脆くなっているが、完形品である。重心の偏った円錐形で、砂質粘土を掌でこねた際の製作痕が残る。

038B号跡（第119～122図、図版15・16・52・53・70）

古墳時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り（V20グリッド）に位置する。038A号跡より規模は小さく、推定値で4.8m×4.3mのほぼ正方形をなす。主軸は038A号跡と同じである。確認面からの深さは038A号住居跡と同様の約0.7mである。

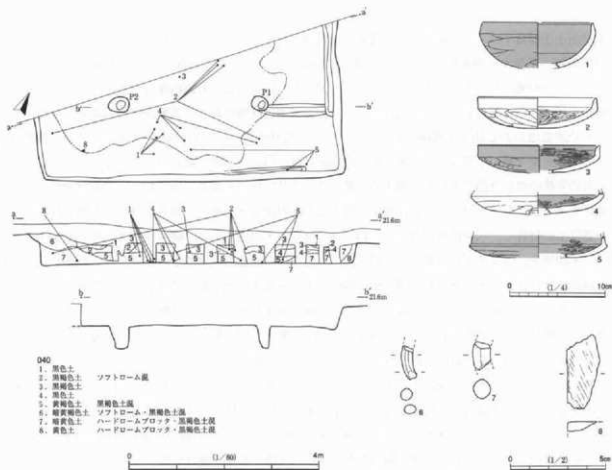
カマドは、火床部の一部が遺存しており、50cm～88cmの範囲で検出されている。主柱穴はP7～P10である。径45cm～68cmの不整形円形で、深さは47cm～57cmである。北東側の柱穴周辺にかけて硬化面がみられる。出入口施設は、検出されていない。周壁溝がほぼ全集し、各主柱穴に向かって間仕切り溝も構築される。

鉄製品1点がP9の覆土から出土し、本跡に伴うとみられる。30は鉄製の刀子鏃とみられる。最大径2.1cmで、錆化により板状剥離が進行しているが、X線写真から、帯状鉄板を筒状にして継ぎ合わせた痕跡が識別できる。

040号跡（第123図、図版17・53）

古墳時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部中央付近（W18グリッド）に位置する。本跡の2/3ほどが調査区外に位置する。一辺が6.5mの長方形が方形と推定される。主軸はN22度Wである。深さは確認面から0.3mで、ゴボウ掘削機の激しい攪乱が床に及んでいる。

カマドが想定される場所は調査区外のため、現状では確認できない。主柱穴は、4か所のうちの2か所が検出されている。東からそれぞれ、径は30cmと45cm、深さが40cmと50cmである。壁溝が東側で確認されている。右側の壁溝から、間仕切り溝が直角に延びており、東側主柱穴に突き当たる。



第123図 040号跡

土器量は1.3kg程が出土し、床面付近で1～5の良好な土師器杯類が検出されている。いずれも鬼高式である。1は和泉系丸底杯とみられる。内外面ともに黒色処理が施されるが、ミガキを伴わず、内面の過半をヨコナデが占める。外面はヘラケズリにより整えられる。2～5は内面ミガキを伴う身の模倣杯で、内面に3～5は黒色処理が施される。

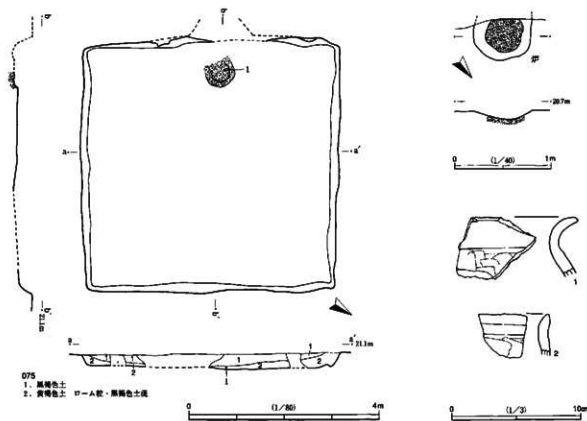
焼成粘土塊2点、砥石1点が出土している。6・7は焼成粘土塊である。いずれも棒状の小片である。8は砥石である。軟玉質の明るい灰味黄緑色をした硬質石材で、角柱状砥石の小片である。

075号跡 (第124図, 図版27)

古墳時代後期の竪穴住居跡である。遺跡北半部南寄り(U21グリッド)に位置する。一辺が5.4mの方形をなす。主軸方向はN116度Wである。確認面からの深さは0.3m以内と浅く、ゴボウ掘削機が激しく床面を攪乱している。

カマドの痕跡とみられる焼土が、南西壁際に検出されている。攪乱によって壁際が削平され、煙道も失われている。火床の幅は0.6mで、深さ7cmの掘込みがある。柱穴、貯蔵穴、出入口施設は検出されていない。床面に明確な硬化面も検出されていない。

土器量は少なく、0.7kgに満たない。そのうち0.5kgは、1・2のような鬼高式後半の甕で、台付小型甕も含むが、小片である。その他の破片は印手式の土器片である。なお、隣接する076号跡から出土した鬼高式の杯類は、本跡に出自が求められる可能性がある。



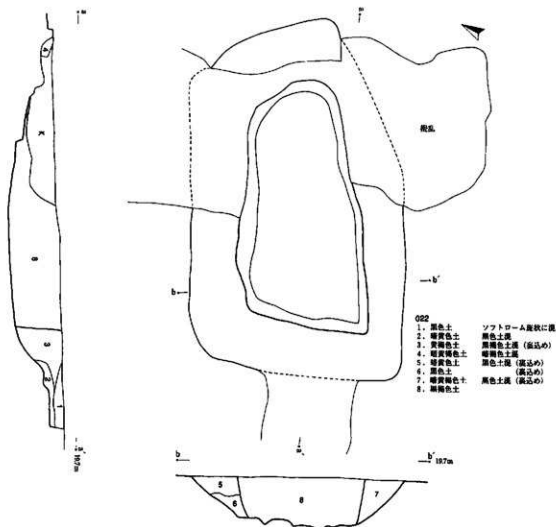
第124図 075号跡

3 古墳

022号跡 (第125図, 図版33)

土坑である。古墳時代以降の埋葬施設の可能性がある。遺跡南半部北寄り (M28グリッド) に位置する。北東側半分は幅1.55m、深さ30cm~40cmの溝が交差し、激しく攪乱を受ける。また、南西側小口からは主軸方向に幅0.95m、深さ20cm~30cmの浅い溝が走っており、これも調査時に攪乱と判断された。墓壇は長さ約3.7m、幅約2.5mの隅円長方形をなす。確認面からの深さは最深部で約50mである。木棺は、南西側小口と北西側辺の西側隅部で、裏込土が垂直に充填されていることが土層断面観察により確認されたことから、その存在が想定された。主軸は、N63度Eである。ただし、全掘時には、内部が凸凹である理由から、墓ではない可能性もあると観察された。

遺物は1kg程度出土しているが、調査途中で攪乱の範囲を見分けるのが困難であったとみられ、攪乱部分出土遺物との分離ができない状態である。遺存度の高い個体は含まれない。内容は、印手式の土器群が若干含まれるほかは古墳時代土器が中心で、五領式、和泉式、鬼高式をいずれも含む。平安時代初期の杯3点、中世以降陶磁器・瓦質土器を4点含むが、小片である。したがって、本跡が古墳時代の所産である公算は大きい。最大の破片は和泉式の高杯脚部であるが、主軸が026号跡 (石棺) と一致すること、周辺古墳群の状況から、後期古墳の埋葬施設を考慮しておく必要があろう。



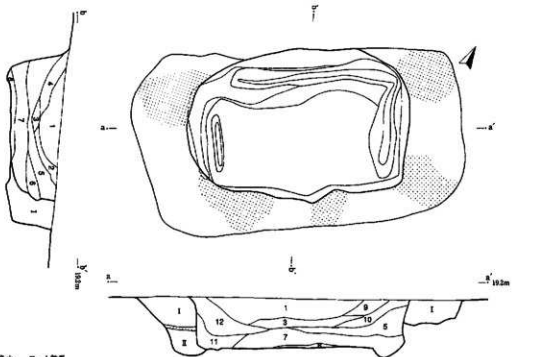
第125図 022号跡

026号跡 (第126図, 図版33)

古墳時代後期の古墳埋葬施設で、組合式箱形石棺とみられる。遺跡南半部中央付近 (J32グリッド) に位置する。棺材は盗掘によりほとんど抜き去られており、その残骸と墓壇を残すのみである。推定される石棺の大きさは約2.3m×1.6mで、内法では約1.8m×1.0mで、主軸はN56度Eである。確認面からの深さは50cm前後である。棺材は茨城県筑波山産の雲母片岩である。片理が進行し大きい白雲母が目立つ粗粒の石質で、筑波山西部のつくば市沢産の可能性が高い。最大で長さ18cm、厚さ3cm前後の破片しか残されておらず、採取された2.5kg分はすべて盗掘坑から出土した。墓壇は確認面で3.4m×1.9mの隅隅長方形をなし、墓壇壁は石棺基底面に向け傾斜して掘られているが一定ではなく、形を整えた形跡はない。基底面には板石材を埋め込んだとみられる幅15cm~30cm、深さ10cm未満の溝が、両小口と北側辺に検出されている。裏込めには所々に粘土が使用されている。粘土使用量は少なく、明確な互層構造はもたない。なお、本古墳に伴う墳丘及び周溝については、調査区内で確認することはできなかった。

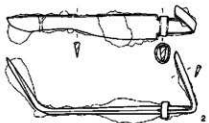
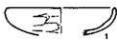
土器は0.2kgに満たない量で、いずれも小片であるが、鬼高式の新相とみられる。1は丸い浅身の土師器杯である。薄手の口縁部小片で、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリを基調とし、口縁部は丸く湾曲し、わずかに内傾する。

副葬品とみられる鉄製刀子1点とガラス玉29点が、盗掘の埋戻し土より出土した。2は鉄製刀子の完形品である。身の切先側1/3部分が鈍角に、茎を鋭角に折り曲げられた状態で出土した。関に釦が装着され



026

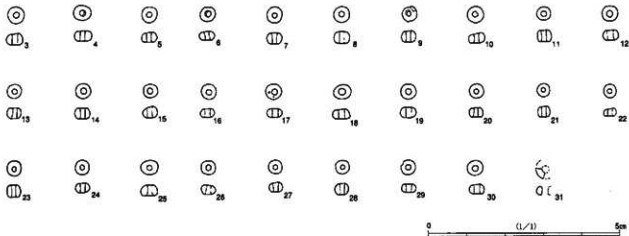
- | | |
|----------|----------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム腐葉 |
| 2. 白色粘土 | 暗褐色土・ローム腐葉 |
| 3. 暗褐色土 | ロームブロック・白色粘土ブロック |
| 4. 暗褐色土 | ローム殻・暗褐色土層 |
| 5. 暗褐色土 | ローム殻・ローム・白色粘土層 |
| 6. 暗褐色土 | ローム殻・白色粘土層 |
| 7. 黄土 | ロームブロック・白色粘土層 |
| 8. 黄土 | 白蟻寄つたロームブロック・白色粘土層 |
| 9. 暗褐色土 | ローム殻・白色粘土層 |
| 10. 暗褐色土 | ロームブロック・ローム殻・白色粘土層 |
| 11. 暗褐色土 | ロームブロック・ローム殻・白色粘土層 |
| 12. 暗褐色土 | ロームブロック・ローム殻・ローム層 |
| 1. 黄土 | ロームブロック・白色粘土ブロック・心片層 |
| 2. 黄土 | ロームブロック・ローム層 |



0 (1/40) 1m

0 (1/4) 10cm

0 (1/20) 5cm



第126図 026号跡

ているが、茎には木質の付着がみられないことから、柄と鞘を取り外し、両端を意図的に折り曲げて副葬したとみられる。全長14.4cm、茎長4.9cmである。茎は極めて薄い板状をなす。3～31はガラス小玉である。フルイにかけて検出されたもので、完形品28点、半欠品1点の計29点が出土している。大きさにばらつきが少なく、径3.3mm～4.3mm、厚さ1.8mm～3.0mmで、径3.9mm前後、厚さ2.6mm前後が多い。047号跡

例に比べ大型である。色彩はこい青（濃藍色）やにぶい青（藍色）が中心である。断面は丸みを帯び、内包する気泡も球体であるので、鋳型製品と考える。

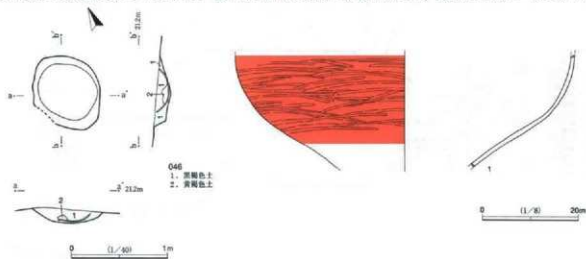
4 土坑

046号跡（第127図、図版34・54）

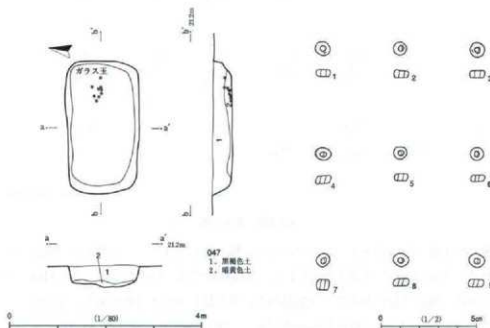
弥生時代後期の壺埋納坑である。遺跡北半部中央付近（Y16グリッド）に位置する。重機による表土除去の際に、壺が掘削爪にかかって存在が明らかとなったため、上半部が欠失している。また、検出面より下まで耕作が及び、原状を失っている部分がある。047号跡の南側正面0.5m地点に隣接して設置される。土坑は0.8m×0.7mの不整形円形で、深さは検出面から0.1m、床面は皿状をなす。

壺の大きさから、独立した壺棺墓である可能性があるが、調査時には上記のような位置関係から、047号跡の墓壇被葬者に対する供献として土器が置かれたのではないかと観察された。

1は大型壺の胴部下部片である。胴径が70cmを超える超大型であるが、厚みはおおむね7mmと、通常サイズ土器との差はない。外面には、最下部を除く大部分に赤彩が施され、横方向の粗いヘラミガキ状調



第127図 046号跡



第128図 047号跡

整痕が認められる。内面は荒れが激しく、土器自体も比較的脆くなっている。本跡からは弥生土器の甕小片も出土しているが、それらは確実に伴うといえる出土状況ではなかった。

047号跡 (第128図、図版34)

弥生時代後期の土壌である。遺跡北半部中央付近 (Y16グリッド) に位置する。046号跡が南側正面に隣接する。1.4m×0.8mの隅円長方形である。主軸はN80度Eである。検出面からの深さが0.2mである。046号跡の状況から、造営当時の地表は検出面より相当程度高かったと考えてよいことから、土壌の浅さは墓であることを否定する要素とはいえない。耕作による攪乱が一部に及んでいる。

本跡の東側から集中的に、ガラス小玉10点が出土しており、完形の9点を図示している。これらは、土層観察帯をはずした際に初めて存在に気づいたため、他の覆土にも含まれていた可能性が残る。観察帯内の覆土はふるいにかけ、1点を確認した。ガラス小玉はいずれも、丸い気泡や不整円筒形の孔から鋳型製とみられ、径3.2mm~3.9mmの小型品で、明るい青緑色を基調とし、やや透明度がある。大きさと色調は026号跡出土小玉と明確な相違が認められる。

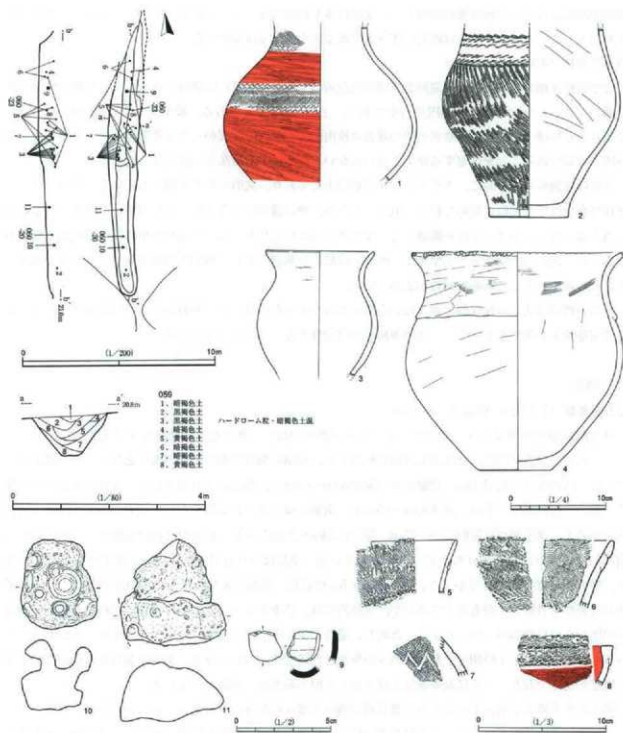
土壌の規模は成人の伸展葬に適さない小型のものであるが、ガラス小玉の集中地点は被葬者の頭部にあたる可能性を示唆するもので、二次埋葬施設の可能性をなお残すものといえる。

5 環濠

059号跡 (第129図、図版34・58・78)

弥生時代後期の溝であり、環濠の一部である可能性が高い。検出地点は遺跡北半部北端 (I10グリッド) である。調査区内ではほぼ南北方向に検出され、北側は調査区外にまで確実に延びることが確認されている。区内総長は約15.0m、確認面での幅は40cm~60cmで、断面は逆台形をなす。底は北半部の方が深くて狭く、底幅35cm~45cm、深さ80cm~65cmで、南側にゆくにつれて浅くなり、中央にある20cmほどの段を上がると、南半部では底幅55cm~75cm、深さは50cm~20cmとなる。検出面における限り、中央の段から南側約7m地点において立ち上がり、終息している。南端は060号跡 (住居) と接する位置にあたるが、新旧関係は判別できなかった。南端から5.5m付近に、底面が赤褐色化した部分がみられたため、遺跡の可能性も考慮して調査をすすめたが、全体的には、特筆すべき硬化部分は確認されなかった。埋没は周囲からの自然崩落・流入による。ただし、遺物が多く出土した上層にのみロームブロックが混入しているので、遺物が示す時期に、残った凹みを整地した可能性が高い。なお、北側の調査区界付近は、上部に攪乱が及んでおり、とくに北東側は土採りによる削平範囲に一部掛かっている。

図示した土器は上層出土であるが、遺存度の高い土器4点を含む。本溝がこれらの時期まで機能したことを示す。1は装飾器である。2条結節文区画の羽状縄文帯が、頸部と肩部に配され、その他の無文帯にミガキ、赤彩が施される。内面は荒れが著しい。2は印手式の甕である。肩部に横の結節文4条が施され、胴部から底部には附加条縄文が施される。胴部はほぼ完形で、頸部が水平に破損する。破断面の一部に摩耗がみられるから、意識的に打ち欠き、転用された可能性がある。破損前に二次被熱し、多量の煤状付着物に覆われる。3は無文の小型甕である。光沢のない滑らかなナデが内外ともに施され、上半部は煤状付着物に覆われる。4は久ヶ原系の甕である。底の一部を除き完形である。ナデを基調とし、肩部に上被される段装飾を有し、口縁端部は細かい押圧波状をなす。二次被熱が著しく、煤状付着物が若干みられる。5は壺の口縁部片である。附加条縄文が口縁部と端部に施され、円形刺突文が口縁部に2列、頸部に



第129図 059号跡

1列施されたのち、3cm間隔に耳状突起文が貼り付けられる。薄手で、内面に滑らかなナデが施される。6は壺の口縁部片である。細かい白雲母を含む明色の胎土がやや異質である。輪積み装飾が2段～3段表現され、そこに縄文が施される。また、6本以上1単位の櫛描波状文が内外面に施される。7は裝飾壺の肩部片である。結節文と縄文に挟まれた鋸歯状沈線文が特徴的である。8は鉢または高杯の口縁部片である。肥厚帯外面と端部に結節回転文、無文部と内面はミガキ、赤彩が施される。060-16と同一個体とみら

れる。

石製品では軽石2点、転用羽口とみられる須恵器片が1点出土している。9は須恵器壺の口縁部付近とみられる小片である。破断面にガラス状に融解した滓が付着し、破損後に羽口または埴場に転用されたとみられる。出土地点は攪乱部分に当たったため、混入した可能性が高い。10・11はともに白色系の軽石である。ともに10は深い穴が11か所も認められ、内部に擦痕を観察できる穴が含まれる。

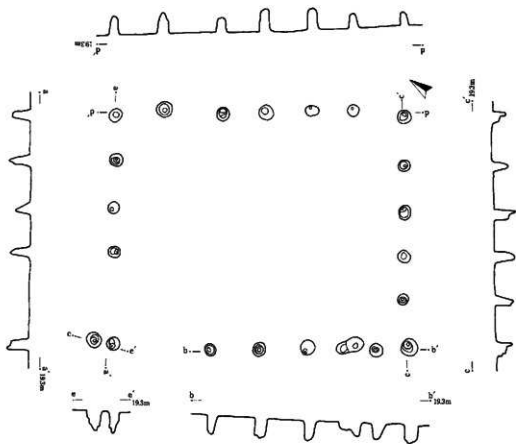
第4節 その他の遺構・遺物

1 掘立柱建物

023号跡 (第130図, 図版33)

古墳時代以降の掘立柱建物跡である。遺跡南半部北寄り (M30グリッド) に位置する。整った長方形をなす、5間×6間の隅柱建物跡である。梁行5.2m、桁行6.3mである。主軸 (長軸) はN33度Wである。柱穴の形は径25cm~35cmの円形または楕円形で、よく揃っている。柱痕は検出されておらず、覆土はいずれもロームブロック・ローム粒が混じる暗褐色土である。

柱穴のP4, P11, P16, P19から土器片が出土している。いずれも小片で、総重量も0.1kgに満たない。古墳時代前期の埴片が含まれており、时期的な上限を示す。



第130図 023号跡

2 土坑・溝

061B号跡 (第74図, 図版23, 図は061A号跡と一緒に示す)

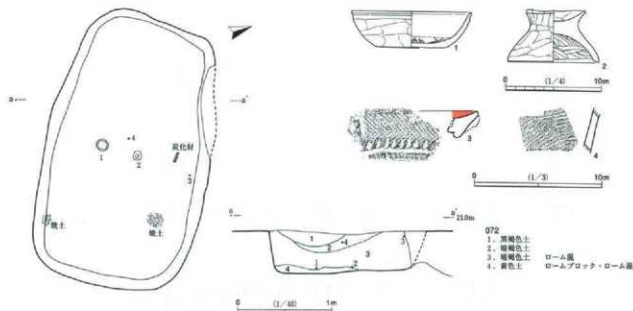
奈良時代の土坑とみられる。遺跡北半部北端 (イ11グリッド) に位置する。2.0m×1.6mの隅円長方形をなし、深さは0.5m~0.6mで、底面は硬くなく凸凹している。覆土は黒褐色土主体で、焼土は含まれていない。061A号跡覆土を掘り込んで構築されたものと観察された。正位で完形の土師器杯が出土しており、072号跡等との類似性がある。1は丸底の浅い杯で、外面はヘラケズリ、内面は斜めのヘラミガキが施され、形態から奈良時代の所産とみられる。全体的に二次被熱を受け脆くなっている。

072号跡 (第131図, 図版34・66・80)

奈良時代の土坑である。遺跡北半部北端 (イ11グリッド) に位置する。北東側の壁が一部攪乱されている。長さ2.8m、幅1.8mの隅円長方形をなし、確認面からの深さは約0.4mである。主軸はN60度Wである。四方とも壁は比較的急に立ち上がり、多少の凸凹を含みながら広く平らな底面を有する。

北東壁付近、及び南西壁付近の2か所で焼土が検出されている。北東側の焼土は底面直上において確認され、層としては極めて薄いものである。南西側の焼土は、底面から浮いた位置で検出されている。また、炭(炭化物)が、北東側の壁付近から出土している。覆土の1・2層は自然流入土とみられるが、3層にはロームが含まれるため埋土の可能性もある。4層はロームブロック主体の薄い層であるため、埋戻しというよりも一次掘削時の微擾乱とみるなら、4層上面を本跡の底面と解釈できる。

土坑中央の床面付近から、完形の土器2個体が正位で出土した。1は非ロクロ成形の土師器杯である。口縁部がわずかに反り、平底気味、浅身で、口縁部ヨコナデのち、外面ヘラケズリ、内底面に放射状暗文風のヘラミガキが施される。激しい二次被熱の結果、口縁端部が著しく脆弱化している。内面は口縁のみドーナツ状に1/2周、外面は1/4周が黒色化しており、口縁部内面の非黒色化域にも3条の黒い筋が観察される。くすみぎみの色調であるが、油煙の可能性もある。2は土師器蓋である。当該期にみられる武蔵型壺系の台付甕を製作中、焼成前の脚・底部分のみを利用し、破断面にヘラケズリ、脚部内面にヘラミガ



第131図 072号跡

キを加えて形を整えたものである。脚部内面が淡色で光沢を有するのに対し、外面は全体的に二次被熱で黒色化しており、脚端部は淡色であるが1/3ほど黒色化が及ぶ。1・2の黒色化範囲は、両者を正位で重ねた場合に対応関係にあり、重ねられた状態で灯明具等に用いられたとみられる。奈良時代の所産とみられる。なお、3・4は弥生時代後期の壺口縁部片と甕胴部片である。当該期集落に伴う土坑の可能性も考慮し掲載したが、覆土上層から出土している。

本跡は薄い焼土層・炭化材を伴う土坑で、重ねた状態の灯明具が出土した。同じような奈良時代～平安時代の被熱土坑は、印旛沼を隔てた対岸の松崎Ⅱ遺跡SK-055にみられる。松崎Ⅱ遺跡では周囲に有天井土坑や方形区画墓、その他の土壌が検出されている。本遺跡ではほかの関連遺構が未検出であるが、総合的にみれば、埋葬儀礼に関係する施設の可能性がある。

098号跡（第4図，図版34）

遺跡南半部北寄り（N29グリッド）に位置する。北東側1/3ほどが攪乱（ガス管理設坑）を受けて壊されている。2.4m×1.0mの隅円長方形である。主軸はN55度Wである。深さは0.2mである。

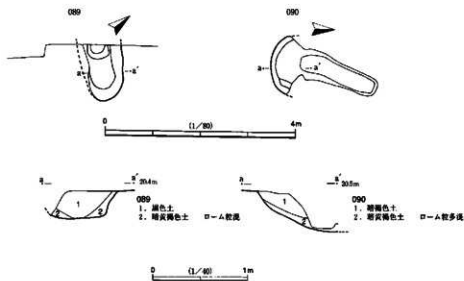
本遺跡の北西側に20cm×25cmの楕円形で、深さが16cm前後の小穴がある。遺物は出土していない。

089号跡（第132図，図版34）

溝である。遺跡北半部北寄り（A12グリッド）に位置する。長さ約2.5mが検出されており、北西側の調査区外に向かってのびる。南東側では斜めに立ち上がり、終息する。確認面での幅は約1.8mである。底面が二段になっており、南東端から1.7m地点までの深さは0.6m、幅1m、そこから20cmほど段差を下がると、深さ0.8m、幅0.6m前後となる。断面は逆台形である。覆土は弥生時代住居痕と同質であることから、比較的古い時期の所産と観察された。本跡の南西側は地境の溝で攪乱されている。遺物が出土していないため時期を決定できないが、形態から弥生時代の溝である可能性がある。

090号跡（第132図，図版34）

溝とみられる。遺跡北半部北寄り（A12グリッド）に位置する。長さは約6m弱が検出され、確認面で



第132図 089・090号跡

の幅は約2.5mと推定される。底幅50cm～80cm、深さは90cm前後の断面逆台形をなす。089号跡と同質の覆土である。南南西側が第二次大戦中の旧軍施設により擾乱されている。調査時には089号跡と090号跡が直角に位置することから、隅が途切れるタイプの方形周溝墓を考慮し調査を進めたが、遺物は出土しなかった。

091号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（N28グリッド）に位置する。本跡は北東・南西方向にのびており、092号跡～095号跡が並行して走っている。両側とも調査区外に延びており、調査区内においてはガス埋設管2本が直角に横切っている。上端幅は約1.7mで、底幅は約0.4mである。深さは10cm前後である。土師器片に混じり、陶器片1点が出土している。

092号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（N28グリッド）に位置する。上端幅は約1.0m、底幅は約0.2m～0.3mである。深さは30cm前後で、断面は逆台形である。土師器片が出土している。

093号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（N28グリッド）に位置する。上端幅は約1.0m、底幅は約0.2m～0.4m、深さは20cm前後で、断面は皿状である。五領式と鬼高式の土師器片が出土している。

094号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（N28グリッド）に位置する。上端幅は約0.7m、底幅は約0.3m～0.4m、深さは30cm前後で、断面は逆台形である。土器は出土していない。

095号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（N28グリッド）に位置する。上端幅は約0.4～1.0m、底幅は約0.1m～0.4m、深さは10cm前後で、断面は皿状をなす。本跡の中間あたりには北側に挟り込まれたような箇所がある。この挟り込みから五領式と鬼高式の土師器片が6点出土している。

100号跡（第3図）

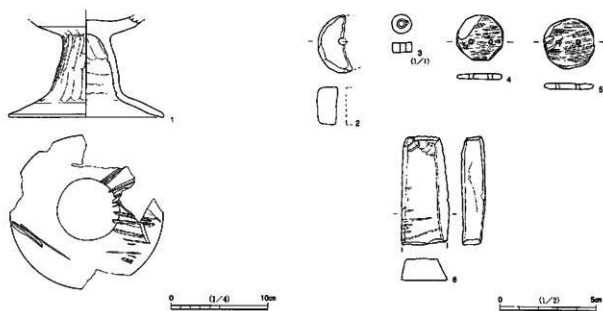
溝である。遺跡南半部北寄り（M27グリッド）に位置する。東西の端は調査区外で、本遺跡の中間をガス埋設管が走る。上端幅約0.4m～1.0m、底幅は約0.2m～0.4m、深さは0.4mで、断面は逆台形をなす。覆土は、ローム粒とロームブロックを含む暗褐色土だけで構成され、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は出土していない。

101号跡（第3図）

溝である。遺跡南半部北寄り（M27グリッド）に位置する。099号跡の住居を切っている。南北に走っており両側とも調査区外へのびている。上端幅は約0.4m～0.7m、底幅は約0.2m～0.4m、深さは0.2mで、断面碗状をなす。現在の道とほぼ並行して走っている。断面に強固に硬化した暗灰褐色土層がみられるので、道として機能した時期があったと考えられる。本遺構と並行して、小穴が4か所検出している。P1は短径約1.0m、深さ約0.3m、P2は径約0.5m～0.6m、深さ約0.1m、P3は径約0.5m～0.6m、深さ約0.2m、P4は径約0.6m～0.7m、深さ約0.1mである。いずれも覆土が099号跡の覆土と異なるので、配置を考えると本跡との関連が考えられる。遺物にガラスおはじきや、鯉石が混じるので近代まで使用されたのは明らかであるが、当初の時期を特定するには至らない。

3 遺構外出土遺物 (第133図, 図版70図)

把製された1.8kg前後の土器のうち、I32グリッドから出土した1は、和泉式の屈折脚高杯である。脚部内面には鉄器の端部を擦ったとみられる筋状の傷が10条以上形成される。もっとも発達した傷は長さ5.0cm、幅0.7cm、深さ0.4cmである。2は太筒状の土錘である。径約2.9cm、高さ2.1cmである。3はM29グリッドから出土した滑石製白玉である。径5.1mm、高さ2.1mmである。稜は不明瞭である。4、5は双孔円板である。比較的暗い灰色の滑石製で、多角形をなし、製作時擦痕がよく残る。4はM28グリッドから出土した。6は砥石である。N28グリッドの094号跡出土である。四面加工された安山岩製で、うち1面が砥面に用いられ、1面に鉄器端部による擦切傷がみられる。



第133図 遺構外出土遺物

第3章 まとめ

第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器と集落

本遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡計75軒が、環濠の一部とみられる溝等とともに検出されている。遺構は台地を道路幅(約25m)で縦断する調査区の、ほぼ全面で検出される。当該期の突出した集落遺跡であることを示唆する。

集落の特徴をまとめるまえに、本遺跡で出土した弥生時代後期の土器群、いわゆる印手式について、少し触れておく。昭和36(1961)年に菊池義次は、印磨沼と手賀沼周辺地域が、北関東系弥生土器と南関東系弥生土器の混合地域であるとの認識を示した(『印磨手賀』1985所収)。このとき、この地域の特殊性とされたのは、両系統の異なる土器が同時に出土するという点である。融合や折衷という意味合いは強くなかった。次に、この地域の土器が活発に議論されるようになるのは、昭和49(1974)年の楠沼修平らによる事例報告が、相次ぐようになってからである。古内茂の報告のように、おおむね北関東系土器との認識である。昭和50(1975)年、熊野正也らが白井南遺跡を報告した際に注目した土器は、輪積口縁と縄文が一個体に同居する土器であった。熊野は輪積装飾が多用される南関東の壺が基本にあるとして、久ヶ原式における特殊な土器と考え、その後久ヶ原式からも切り離して、「白井南式」という名称を与えた。一方、深沢克友はこれとほぼ同時に、当センター『研究紀要』3で「印磨・手賀沼式」という名称を与えている。融合・折衷がみられた地域における土器群の総称という意味合いが強い。説明はやや異なるかもしれないが、これらは本質的に異なる土器群を扱っているわけではない。

山武地域から印磨地域を経て、東葛飾北部地域にかけての一带は、弥生時代後期土器群の境界にあたる。その南北で土器群の様相が明瞭に異なり、とくに文様構成及び外形には、一見してわかる相違がある。両者はしばしば南関東系、北関東系と概括される。帯縄文土器群、縄文多様土器群という概括もある。境界一帯の土器群は、上記の過程に指摘されたとおり、南北の異系統土器が共存するという側面と、様々な異系統要素を一個体に内包するという側面を併せ持つ。具体的に特徴を記せば、壺と壺がともに細身の筒形で形態差が南ほど明確でなく、外面を縄文に覆われる点では北の要素を比較的多く有する。このため、茨城県南部地域の土器群と一緒に論じられることもある。一方、「輪積」壺は南の要素である。また、北的器種はほとんど二次被熱を受けて煤状付着物に覆われることから、機能的には壺の扱われかたをされる。これに対し二次被熱を免れる壺は、少ないがその大半は山形沈線文区画をもつ久ヶ原系の壺である。稀少器種である高杯、鉢についても、久ヶ原式と類似のものが主体的である。このように、器種によって周辺諸要素の含み方が異なる。複雑な混在状況であり、二者択一でも一律的な融合でもない。搬入品を含む可能性も高い。分類の基軸をどこに求めるかによって分布範囲も大幅に変わる、そのようなことがとくに起こりやすい性質の土器群である。

白井南遺跡例では、壺口縁部の輪積装飾と、縄文とを同時にもち資料が目玉された。同様の資料は、本遺跡や隣接する間見穴遺跡でも存在する。ただし多数を占めるわけではなく、むしろ筒胴の縄文多様土器のほうが多い。地理的な近さを考えると単純な地域差とはいいいがたく、時期差にしる系統差にしる、まずは多様性を認めておく必要がある。これほどの多様性は、少なくとも茨城県南部地域の縄文多様土器群で

ある上稲吉式には認めがたい。むしろ、千葉市以南の久ヶ原式はまったく様相が異なる。一方、縄文の種類に関しては次節に詳しいが、久ヶ原系壺の帯縄文部分を除くと、附加条縄文が直前段多条縄文以外にはほとんど用いられない。この点は精製の鉢や高杯にも適用される。多様性の中にも、一つの土器群として貫徹された特色がある。本書では報告の都合上、この土器群に何らかの総称が必要なので、便宜的に印旛・手賀の略称として呼び慣わされている印手式のほうを使っている。本遺跡では、融合・折衷土器とともに、隣接地域の類品や、搬入品そのものも多い。どこの系統であれ使用痕跡が明瞭で、生活に取り込まれている。「印旛手賀」で最初に指摘された混合状態とは、このことであろう。混在や折衷が常態であるとなれば、多様性を認めた大枠での総称が現実的である。むしろ、明らかに他系統の土器は、出自様式の名称を用いての説明が必要であり、個別に対応した。

さて、今回の調査資料を概観すると、確実に弥生時代中期まで遡る資料はない。本遺跡は後期から始まった集落とみられる。

弥生時代後期の、東海系土器の本格参入前の竪穴住居跡が最も多く、40軒（005・006・007・008・015・016・017・027・028AB・029・030・033・034・035・039・043・044・045・048・049・052・055・060・062・065・068・073・074・076・077・078・079・080・082・085・086・088AB・102）ある。八千代市教育委員会の昭和57年度調査でも、最多の8軒が報告される。

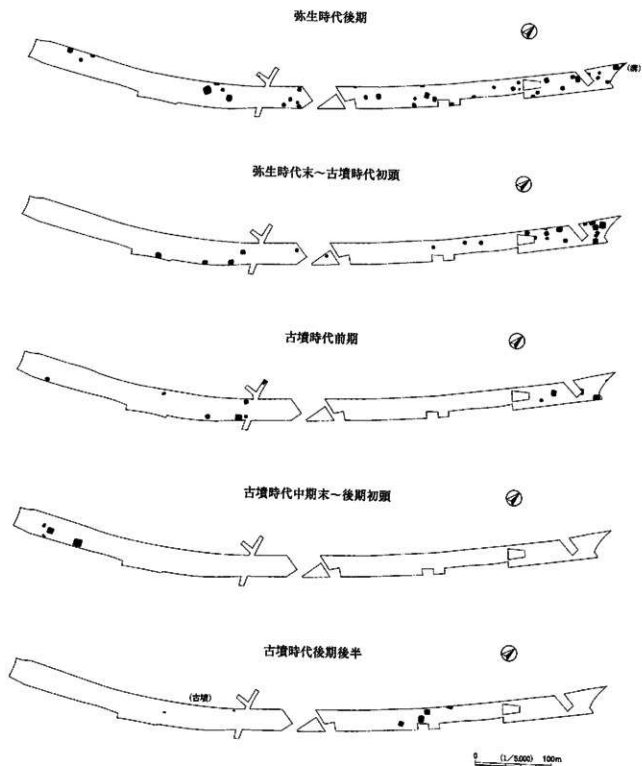
土器は多様性に富む。かなりの時期差を含むとみられる。特徴は上記で概括したとおりである。量的には附加条縄文の壺と、輪襷装飾の壺が主体的で、装飾壺・鉢・高杯はかなり少ない。壺は形態に関わらず煤が大量に付着して黒色化し、使用痕跡が明瞭である。印手式の折衷的な様相を象徴する資料としては、074号跡出土の壺が特筆される。外面が縄文で覆われるにもかかわらず、外形は台付甕である。

竪穴住居跡の形態も多様である。隅円長方形（楕円形）・隅円方形・円形に分けられる。隅円長方形の竪穴住居跡（005・006・008・017・052・060・074・076・079・088AB）は長さ7m～9mに達する大型のものが多く、主軸に直交する長楕円形柱穴4か所を伴う率が高い。それ以外の隅円方形・円形は小さく、長さ5m～4m前後が主体的である。3mを下回る小型例も含まれる。この形態差は、現在、時期差で分けられる状態ではなく、異形態が併存した可能性がある。

竪穴住居跡の分布は調査区全域に広がり、平戸の台地上は全域が集落とみられる。域内には墓とみられる土壇と大型壺の埋納坑1組のほかに、墓は見いだせない。北半部北東隅では、059号跡の溝が南北に走っている。途切れること、南に対応する溝が検出されてないことなどの疑問点があるものの、形態から環濠の可能性が高い。台地の東縁辺に近い位置であり、地形に沿って、環濠が存在する可能性がある。

弥生時代末～古墳時代初頭の、東海系土器の参入が本格化したころの竪穴住居跡は23軒（001・004・010・013・031・032・037・041・042・050・051・053・054・058・061A・064・066・067・069・070・071・083・087）である。昭和57年度調査では1軒報告される。

東海系土器の本格的な参入が始まると、在来器種の極端な比率減少がみられる。当センター「研究紀要」21の草刈古墳群土器編年I期に併行するころ（以下、草刈I期併行、等と呼ぶ）である。比率減少の原因には、出土土器量自体の変化がある。それ以前の土器群は、016号跡のような良好な資料でも1kg未満の出土量しかなく、007号跡のように2kg近い資料は稀で、印手式はもともと破片資料が主体である。一方、東海系器種が主体を占める013号跡では、明瞭な土器壺まりを形成していないのに土器量は2kgを超え、個体の遺存度も高い。明らかに増加している。両者が破片で共存する061A号跡例等を考



第134図 道地遺跡における集落変遷

慮すれば、在来器種が従来どおりの量で推移している一方、東海系器種が量的にも質（器種の豊富さ）的にも、大幅に追加された状態といえる。以上の状況下では、破片資料は軽視されやすく、破片資料の不当評価が比率減少を一層印象づける結果を生む。この時点での印手式はかなり健在である。

竪穴住居跡の形態は隅円方形が主体的である。長さ5m～4m前後が多いが、7m～6mの大型のものや、3m前後の小型のものも含まれる。隅円長方形は4例（004・013・069・083）認められるが、例外的になっている。とくに大型である後2例については、土器の出土位置からやむをえず当該期と考えたが、上層と同じ時期の土器溜まりが形成されていることは、前代の竪穴住居跡である可能性も示唆している。

分布はやや粗密を伴うが、前代と同じ調査区全域に展開する。重複はしないが、前代の竪穴住居跡に隣接して営まれたかのような位置関係で分布する。この時期の墓は確認されない。別の位置に墓域が存在するとみられる。また、この時期から前代の竪穴住居痕跡を利用するなどして、小凹地に土器溜まりが形成され始める。

古墳時代前期、すなわち五領式期の竪穴住居跡は12軒（002・003・009・011・012・020B・056・057・063・081・084・099）認められる。

印手式の最後は、五領式の土師器に一部併行する。本遺跡にもこの事実を示す良い資料がある。056号跡は「く」の字口縁平底甕が定着した、五領式の土器群（草刈Ⅱ期併行）が出土している。かなり一括性（同時期性）が高い土器群であり、その中に、やや変容した印手式の甕が1個体伴っている。

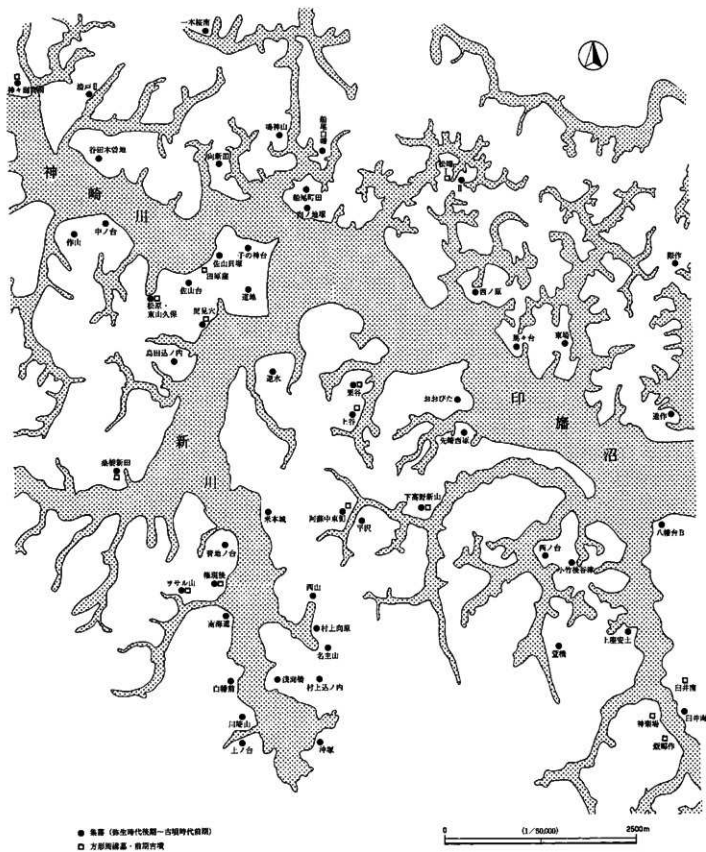
竪穴住居跡の形態は直線的な方形であるが、やや隅円気味のものが多い。一辺7m～8mという大型のものから、4m前後のものまでである。散在し、前代までの分布域を踏襲したように観察されるが、数は明らかに減少する。年代的には、ほとんどが前代との境界線上の古い資料で、前期後半に下る資料はない。今回の調査による限り、古墳時代前期の比較的早いうちに集落が途絶または縮小した可能性が高い。

以上、道地遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期前半まで、継続的かつ大規模な集落が営まれたことが読みとれる。その後は縮小・断絶し、古墳時代中期から後期初頭と、後期後半に再び短期の小規模集落が営まれるまで、集落は営まれなかったとみられる。

周辺遺跡との関係ではどうか。

平戸・佐山の半島は、かつての印旛沼に突き出た台地である。現在は神崎川と新川の合流点に当たる。新川はここで南に屈曲し、かつて印旛沼先端部であったはずの南端において、江戸時代に掘られた千葉市境の運河により、東京湾へと注ぐ花見川に連結されている。新川～花見川は、内海世界を東京湾岸世界と繋ぐ水路上の最短ルートに当たる。運河との境界にある排水機場から、新川をまっすぐ北上すると、正面にみえるのが平戸・佐山半島である。半島にぶつかって右（南東）に折れると、現在の印旛沼が広がる。左（北西）に折れて神崎川を遡るルートは、手賀沼西部方面への最短ルートである。半島の北側には、手賀沼方面へと直に北上する最も深い沢があり、これも水路上の有効なルートに数えうる。逆に、神崎川や印旛沼方面から平戸・佐山半島を遠望すると、そこからも正面にみえる。内海世界における屈指の要衝といえる。

そんな平戸・佐山半島において、本遺跡の北西隣りに位置するのが田原壙遺跡である。八千代市教育委員会の発掘調査によって、弥生時代中期の小規模な環濠集落が確認された。断面V字形の環濠が円形に巡り、その内部には、重複のない状態で典型的な宮ノ台式期の竪穴住居跡が十数軒営まれている。印旛沼西部において宮ノ台式期の集落は稀少であり、その立地がのちの地域圏形成に大きな影響を及ぼしたとみら



第135図 印旛沼西部の弥生後期～古墳前期の遺跡

れる。環濠域内で後期の堅穴住居跡は確認されていない。中期末には居住地の役目を終えたとみられる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、田原窪遺跡の東隣に道地遺跡、西隣りに佐山台遺跡、南隣に間見穴遺跡が営まれる。道地遺跡は先述のとおり、弥生時代後期に最も密度が濃い。佐山台遺跡は古墳時代にかかる最も密度が濃くなるとみられている。間見穴遺跡では、当該期計17軒が検出されており、5軒が弥生時代後期の所産とみられる。間見穴遺跡の南西隣には、すでに報告した島田込ノ内遺跡がある。弥生時代末から古墳時代前期の堅穴住居跡が12軒検出されている。

平戸・佐山半島は、台地上のほぼ全域が弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡とみられ、その範囲は半島の付け根に及んでいた様子がうかがえる。本遺跡はその一角と位置づけられる。弥生時代後期以降、田原窪遺跡から外側に向かって、粗密を伴いながら広く台地上に集落が展開する。環濠は台地の縁に移動し、より広範囲を囲った可能性がある。これらの遺跡は、共通して堅穴住居跡が重複しない傾向がある。前代の住居跡を、原則的に再利用しない習俗があったかもしれない。もし長期間これが踏襲されると、集落は基数の割に占地面積がひろくなり、拡散の一途をたどる。道地遺跡の場合は、古墳時代にさしかかると薄くなるが、間見穴遺跡・島田込ノ内遺跡等の半島付け根においては、その分若干密度が濃くなる観がある。このように、平戸・佐山半島を中心とした集落群はほぼ一体の性格のものである。隣接遺跡を含めて考えると、弥生時代中期に始まった集落は拡散しながら、ほぼ古墳時代前期前半まで継続したと認められる。前期後半には規模が極端に縮小し、古墳時代中期以後になると、平戸・佐山半島から消滅することはないが、短期間で内部移転を繰り返す小規模集落となる。

平戸・佐山半島には、少数ながら、周辺に前期古墳が築かれる。これらはおもに半島付け根の台地縁で確認される。新川に面する道地遺跡側の集落には、隣接の間見穴古墳群が対応するものとみられる。別に報告するとおり、間見穴古墳群は前期古墳と後期古墳からなる。前期古墳は少なくとも4基確認されている。最大の古墳は一辺21mの方墳（ないし前方後方墳）の間見穴002号墳で、周溝内から壘形埴輪が出土している。これらは弥生時代後期の堅穴住居跡に重複して築かれたが、以後の住居跡とは重複しない。台地縁に整然と並んで造営され、純粋な墓域を形成している。一方、神崎川側の北面においては、田原窪遺跡等における数基の古墳がある。田原窪遺跡では方墳が調査されており、間見穴古墳群と類似の構成である可能性がある。前期の方墳が存在するのに対し、弥生時代後期に遡る方形周溝墓は確認されていない。方形周溝墓の伝統はもっていなかったとみられる。前期古墳も基数が少なく、集団墓的性格は見いだせない。一部階層のための特殊な墓制として、古墳時代に入ること、新たに受容したとみられる。

新川沿岸には当該期の遺跡が多数分布する。とくに南端付近では、沖塚、上の台、川崎山、白幡前、ヲサル山、権現後、菅地ノ台などの遺跡が調査されている。支谷が樹枝状に入り組む地形にもかかわらず、新川を直接望む台地ばかりに遺跡は集中する。こうした主流路への強い志向性は、水田の生産性のみでは生じえず、水路の利便性が重視されたことをものがたる。西の船橋方面から八千代市を横断して新川に合流する大支谷もあるが、この支谷が通る桑橋付近では、新川ほど当該期遺跡が確認されない。地形だけに左右されない、立地に対する強い選択性が働いている。なお、新川南端付近の沖塚遺跡は、弥生時代末から古墳時代初頭の稀少な鍛冶遺跡である。精錬滓の報告例では全国屈指の古い例で、鉄滓の分析によると高熱によって生じる粒状滓等も含まれ、弥生時代にはなかった高熱処理を行っている。ただし、大陸・朝鮮半島系原料に近い成分の資料が多く、そこでは荒鉄段階からの精錬・鍛錬作業が想定されると分析されている。精錬に関する解釈は現在、流動的となっているが、報告書段階の分析結果に準拠する限り、鉄素

材（荒鉄）を搬入し、器具に製品化した場所がここに存在したとみられる。

神崎川北岸には、本遺跡の対岸に鳴神山（約20軒）、船尾白幡、船尾町田、松崎Ⅱ、一本桜南、向新田などの遺跡がある。前3者は弥生時代後期の集落遺跡で、鳴神山遺跡では本遺跡とほぼ同じ内容の印手式土器群が出土しているが、本遺跡よりやや小規模で、若干早く途絶する集落とみられる。替わって造営されるのは、やや奥まった立地の松崎Ⅱ遺跡や一本桜南遺跡である。両者は若干の時期差を含むものの、弥生時代末から古墳時代初頭に営まれた集落である。輪積み、刻みを伴う「く」の字口縁ハケ目付壺などを含む土器群のみ出土しており、存続期間は短い。両遺跡とも、本遺跡よりやや早く途絶する。つぎに営まれるのは向新田遺跡である。ここでも存続期間は短く、平底甕を中心とした五領式の土器群のみ出土する。古墳時代前期だけ造営された集落で、五領式新相の時期までであるが、和泉式期には1軒もない。このように、神崎川北岸は活発な離合集散と集落移転を繰り返す。対岸の本遺跡等に比べ存続期間が短い傾向がある。その消長には深い関係性がみられる。

新川の屈曲によりコの字形に囲まれた右岸（南東側）一帯は、八千代市教育委員会の調査によって、逆水遺跡からおおびた遺跡にかけ、かなりの密度で当該期遺跡が存在することが判明している。さらに、印旛沼を佐倉市方面へ、本遺跡から南東に6km進むと、正面に白井の台地がみえてくる。ここで右に折れ、手繰川を2km遡ると、タイプサイトの白井南遺跡に到達する。手繰川を挟んで白井南遺跡の対岸には、古墳時代前期の古墳群、飯郷作遺跡がある。

以上のように、印旛沼西部地区の集落遺跡は、竪穴住居跡の重複が少ない傾向で一致しているが、集落動態は異なる。平戸・佐山半島の集落遺跡は継続性が強い。印旛沼や神崎川北岸では、集落が移動している。古墳時代への移行期には、やや奥まった立地にみられる。一本桜南遺跡が手賀沼との分水嶺に近い点を考慮すると、古墳時代開始期における交通の活発化に伴って、集落立地がやや複雑化した可能性がある。この点からすると、主流路への志向性は弥生時代後期段階のほうが強いとみられる。

もう一つ、印旛沼西部地区の集落遺跡には、方形周溝墓群があまり伴わない傾向がある。報告例は古墳の例も含めると、権現後、ヲサル山、桑橋新田、阿蘇中学校東側、栗谷などがあり、隣接の間見穴遺跡で4基以上が伴うことはすでに述べた。これらは弥生時代後期の古い事例ではなく、東海系土器の参入が本格化した弥生時代末～古墳時代初頭以降の新しい事例である。集団墓的な群集も認められない。この地区では弥生時代後期に方形周溝墓を築かずむしろ拒絶し、古墳時代の開始前後に、ようやく特殊な墓制として受容した可能性がある。印旛沼西部地区は外来文物に対する選択性が強く備いた世界と考える。

このように、印旛沼西部地区は弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が多く分布し、独自性の強い世界を形成しているが、それとは裏腹に閉鎖的ではなく、内外を繋ぐ水上交通がとくに重要視された社会でもあったとみられる。この世界の要衝にある平戸・佐山半島には、継続性のある大規模な拠点集落が存在したと推定され、遺地遺跡はその一角であった可能性が高い。

<参考文献>

柿沼修平 1974 「印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡」『なわ』13

加藤修司ほか 2001 「千葉県文化財センター研究紀要」21

菊池義次 1961 「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化—弥生土器の新資料を中心として」『印旛手賀—印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』早稲田大学出版会1985所収

熊野正也・伊礼正雄ほか 1975 「白井南」佐倉市遺跡調査会・佐倉市教育委員会

- 熊野正也 1978 「佐倉市・白井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの」『MUSEUMちば』9 千葉県博物館協会
 林勝則 1986 『平戸遺地遺跡』八千代市教育委員会
 深沢克友 1978 「房総地方弥生後期文化の様相—印旛・手賀沼系式土器文化の発生と展開について—」『千葉県文化財センター研究紀要』3
 古内茂 1974 「房総における北関東系土器の出現と展開」『ふさ』5・6合併号
 八千代市教育委員会 1995 『八千代市埋蔵文化財調査年報』平成6年度
 八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報』平成6年度版

第2節 弥生土器の縄文

弥生土器に施文された縄文については、文様と施文原体の観察結果を属性表（第9表）に記載したが、ここで原体の種類等についてまとめておきたい。弥生土器については、縄文原体の記載がごく簡単に済まされるのが普通であるが、当遺跡のように縄文の種類が多様な土器群については、原体の種類を記載すべきであろう。縄文は多くの土器属性の一つにすぎないが、当地域の土器研究にあっては有効な指標となるはずである。

1 観察と分類の方法

原体の観察と分類は、実測作業を終了した後に、『江原台』（田村他1979）を参考にして行った¹⁾。対象は縄文施文資料302点のうち、同一個体の重複や原体の不明瞭なものを除いた272点である。その後、最近の研究成果の存在を知り、原体の記載は基本的に峰村篤の方法（峰村1999）に合わせることにした。当遺跡における附加条縄文はすべて附加条1類（山内清男1979）であるため、単に附加条とする。2条を附加するものについては、軸繩の溝に沿って附加繩を1条ずつ巻いていく「交互附加」を「+R・R」のように、2条を同時に巻いていく「同時附加」を「+2R」のように表現する。ただし、「前前段多条」・「直前段多条」という山内・峰村の表現は用いず、田村の「0段」・「1段」を採用した。この場合、相対的な表現よりも、絶対的な表現のほうがわかりやすく、誤解が生じにくいと判断したものである。また、当遺跡の附加条縄文は大半を2種類の原体が占めるものの、それ以外に1～3例しか見られない多くの種類が見られたため、大半を占める2種類をA類・B類とし、その他をC類としてまとめた。なお、後に詳述するように、単節縄文の1段多条の原体と、附加条縄文の原体はほぼ同様に作られたものである。附加繩が軸繩の中にとっかりと入り込んだものは単節縄文・1段多条（単節・B類とする）となり、附加繩と軸繩の差が相対的に大きいものは附加条縄文となる。実際には中間的なものが多く、峰村はいくつか段階を設定しているが、今回は厳密な観察と区分をしていない²⁾。以上の方法により以下のように分類を行った。

単節縄文

- 単節・A類 (1段2条)
- 単節・A'類 (1段2条, 原体が太いもの)
- 単節・B類 (0段多条または1段多条)

附加条縄文(1種)

- 附加条・A類 (2条交互附加)
- 附加条・B1類 (1条附加)
- 附加条・B2類 (2条同時附加)
- 附加条・C類 (その他の附加条。5種類あり)

無節縄文

撚糸文

布圧痕

図版90～92に各分類の代表的なものについて実体顕微鏡で撮影した拡大写真を掲載した。一部はチョークをつけたままであるが、ご理解をいただきたい。2枚を左右に並べたものはステレオ写真である。平行法で実体視すると条の深さなどの変化を読みとることができる。○番号は、相同の条を示している。条を識別して何条で1サイクルになっているかが、主要な観察点となる。なお、交差法で見ると凹凸が逆転してしまうが、原体の縄の形状は鮮明になる。

2 文様と施文原体の種類

(1) 単節縄文

単節・A類 1段の縄を2本撚り合わせた、ごく細い2段の縄を原体とする(単節・1段2条)。ほとんどはLRとRLを羽状施文している。LRとRLの原体は同じ太さである。原体が細いために一度に幅広く施文するのは困難である。施文幅は指1本分程度であり、しかも浅い。回転・接触不良のものも多い。一般に「南関東系」とされる、折返し口縁や赤彩によって飾られた壺・高杯・鉢・碗にみられた。

図版90-1 (003-26)・単節・1段2条・羽状 RL, LRとも原体を回転させた横方向に、同じ節・条が2条ごとに現れる(以下ではこれを「2条サイクル」のように表記する)。写真上に示した①・②がそれぞれ相同の条である。施文は浅い。

図版90-2 (060-9)・単節・1段2条・羽状 RL, LRとも2条サイクルである。施文単位のわかりやすい、比較的しっかり施文された部分を撮影したが一部に重畳施文がみられる。他の部分では、接触・回転不良により何度も繰り返して施文していることが多い。

単節・A'類 1段の縄を2本撚り合わせたA類のなかで、やや太い原体を使うものである。裝飾性をもつ壺・鉢にみられるが、胎土や色調などは在地系の土器に似たものを含む。羽状施文の場合にはLRとRLで原体の太さが違っているものや、一方の原体の撚りが乱れているものが多い。どちらか一方に撚るのが不得手であった可能性がある。

単節・B類 1段の縄を3本から4本撚り合わせた、2段の縄を原体とする(単節・1段3条または4条)。A類に比べて原体はやや太い。羽状施文は1例のみであった。なお、1段で3条ないし4条を撚り合わせる方法は、1段2条の原体に1本ないし2本を附加する附加条縄文とあまり変わらない。実際に、原体閉端圧痕が付いた資料では、1段の縄1本を折り曲げて閉じたものに、もう1本を附加していることがわかる。この場合、単節縄文と附加条縄文の差は、軸縄と附加縄の太さの違いがあるか、及び附加縄がどれだけ撚り合わされているかによる。分類は、施文された結果、附加縄の条が他とあまり変わらないものを単節縄文、附加縄のほうが深いもの、節が尖るものなど差が認められるものを附加条縄文としたが、その違いは漸移的である。

在地系とみられる壺や壺に施文された単節縄文は、ほとんどがこの原体を使っている。例外は単節・0段多条(おそらく3条)の4例のみである。ただし、0段多条は、単節・B類や附加条縄文に普通であるのに対して、単節・A類には全くみられないので、この4例も単節・B類に含めることにした。その結果、在地系とみられる土器には、0段ないし1段2条の単節縄文を施文した例が皆無となった。

図版90-3 (004-32)：単節・1段3条・RL 3条サイクルである。条の深さ、節の形状に差がみら

れず、施文効果は単節そのものであるが、1段Lを3条撚り合わせている。写真の①～③は相同の条であり、チョークで白く印をしているのが特徴的な相同の節である。

図版90-4 (052-6)：単節・1段3条・RL 3条サイクルである。②とした条がやや深く付く傾向があるが差は顕著でない。

図版90-5 (035-1)：単節・1段4条・RL 条ごとの差がほとんどなく施文効果は単節縄文そのものであるが、4条サイクルである。相同の節が4条ごとに現れている。

(2) 附加条縄文

附加条・A類 (LR+R・R, RL+L・L) 単節縄文の原体(2段の縄)に1段の縄を2本交互に附加したものである。軸繩の溝に沿って螺旋状に附加繩を巻いていくと1条おきとなり、あいた部分にもう1本を巻く。附加条縄文の大半がこのタイプである。軸繩LRにはRを、軸繩RLにはLを附加する。附加繩の太さが軸繩の1段に近く、さらによく撚合わさって軸繩のなかに入り込むと単節・1条4段になる。縄文施文全体の45.5%、附加条縄文の78.6%を占め、もっとも一般的に使われたといえる。LR+R・RとRL+L・Lを羽状施文するものもみられる。

図版90-6 (067-6)：附加条・LR+R・R 4条サイクルである。1条おきに深い浅いが繰り返す典型的なもので、浅く接触不良の②と④が軸条、深い①と③が附加条である。

図版90-7 (055-7)：附加条・LR+R・R 4条サイクルである。やや浅い②と、接触不良の④が軸条である。しかし、軸条と附加条の差は小さいので、施文効果としては単節縄文(単節・1段4条)に近い。

図版90-8 (056-34)：附加条・LR+R・R 4条サイクルである。浅い②と④が軸条、深い①と③が附加条である。①が他の条と平行でなく不規則なのは、附加繩が軸繩の溝に沿って規則的に巻かれていなかったか、途中でずれたためであろう。

附加条・B1類 (LR+R, RL+L) 単節縄文の原体(2段の縄)に1段の縄を1本附加したものである。軸繩LRにはRを、軸繩RLにはLを附加する。

図版91-9 (059-5)：附加条・RL+L 3条サイクルである。①と③は繋がっており、1段の縄を折り返している原体閉端圧痕である。軸条は末端部では深く施文され、他の部分では浅いか接触不良となることが多い。②は附加条で、末端部以外では若干深い。上端のみもう1条見える部分は②と繋がっていて、附加されなかった部分であろうか。しかし、軸条と附加条の差は小さいので、施文効果としては単節縄文(単節・1段3条)に近い。

附加条・B2類 単節縄文の原体(2段の縄)に1段の縄を2本合わせて附加したものである。軸繩LRにはRを、軸繩RLにはLを附加する。表記はLR+2R, RL+2Lとする。

図版91-10 (059-2)：附加条・RL+2L 深・深・浅・浅の4条サイクルである。②・③が軸条、①・④が附加条である。附加条のほうがやや深く、節が突る。

図版91-11 (056-36)：附加条・LR+2R これも深・深・浅・浅の4条サイクルであろう。やや不規則であるが、②・③が軸条、①・④が附加条であろう。不規則なのは、A類に比べて原体が乱れやすいことの現れであろうか。

附加条・C類 A類, B類以外の様々な原体をまとめた。いずれも例はごく少ない。

図版91-12 (065-13)：附加条・R+i・i 1段Rの軸繩に0段lを2本交互に附加する。深・浅・

深・浅の4条サイクルである。①と③が附加条で、軸・附加条とも施文すると無節である。

図版91-13 (061-22) : R+1・1 1段Rの軸繩に0段1を2本交互に附加する。写真では見えにくい
が、末端で深く、次第に消える①と③が軸条、途中から出ている②と④が附加条である。軸条・附加条とも無節であり、条のなかには縷維痕がみられる。底部付近であるため原体閉端圧痕は下側に付いている。

図版91-14 (061-17) : 附加条・LR+2L 単節繩文の原体(2段の繩)に1段の繩を2本合わせて附加したものであるが、附加繩の撚りが通常とは逆である。①・②の軸条と③・④の附加条で節の傾きが逆になっている。

図版91-15 (083-18) : 附加条・LR+R・ずらし附加 単節繩文の原体(2段の繩)に1段の繩を1本附加するが、附加するピッチが通常と異なる。通常は軸繩の溝に沿って巻くところを、1回巻くごとに1条(間隔が広がるほうに)ずらししている。原体を復元したところ同様の施文効果を得ることができた。

083-20は、集計表の「多段構成」に含めている。ずらし附加の例はほかに「附加特殊」に含めた055-11, 085-9, 「多段構成」に含めた088-18がある。

図版91-16 (065-2) : 附加条・LR・1段3条+R 単節・B類・1段3条の軸繩に1段の繩Rを1本附加している。①の附加条と②~④の軸条3条で4条サイクルとなっている。

図版92-17 (055-10) : 附加条・RL+LR・LR 単節・RL(2段の繩)に2段の繩を2本交互に附加したものである。附加繩に2段の繩を使うのはこの資料1点のみである。②と④は繋がっており、軸繩の閉端圧痕が深く付いたものである。①と③の附加条は施文すると複節となり深く付いている。

図版92-18 (042-2) : 附加条・LRL+2R・2R 複節(3段の繩)・LRLの軸繩に、1段Rを2本束ねたものを2本交互に附加したものである。軸繩に3段の繩を使うのも、合わせて4本を附加するものこの資料のみである。

図版92-19 (065-7) : 附加条・L+L 無節(1段の繩)・Lの軸に、同段・同撚のLを1本附加したものであると思われる。軸条①と③は閉じた端を形成している。附加条は撚り戻しになっている。原体を復元したところ、同じ太さのLを2本結合し³⁾、かなり撚りを緩くしながら一方を附加繩として巻きつけるとほぼ同様に施文できることがわかった。

図版92-20 (083-18) : 附加条・不明 原体は不明であるが、附加条繩文と思われる。繰り返しは認められるが、複雑である。

(3) 無節

図版92-21 (003-28) : 無節・R 2条サイクルである。条の幅は裝飾壺等に普通な単節・細繩文と同じくらいである。

図版92-22 (052-10) : 無節・L 2条サイクルである。

(4) 撚糸文

図版92-23 (045-3) : 撚糸文・L 軸への巻きつけが密で施文効果が単節に近いものである。仮に単節として観察すると、想定される回転方向に繰り返し認められないので識別できる。縦に施文する。

図版92-24 (004-30) : 撚糸文・R 横に施文し、条は横方向である。条の方向が斜め以外の資料は、おそらく1点のみである。

図版92-25 (003-31) : 網状撚糸文・無節 0段(撚り方向不明) 2条を縦に絡めた無節の網状撚糸文である。条の幅は0.4mmと、繩というより糸というのが相応しい。

図版92-26 (060-14)：網状撻糸文・単節 1段R 2条を縦に絡めた単節の網状撻糸文である。

(5) 布圧痕

布圧痕の可能性のある資料1点を掲載した。なお、このほかに折返し口縁の下端などに付けられた原体布痕のなかにもいくつかみられた。

図版92-27 (086-5) 単節縄文に似るが、相同の条・節の繰り返しが全く認められず、単位の重複しているところを除くと、縦が縦にも横にも連続していても撻箇所がみられないため、布目圧痕ではないかと考えた。経糸と緯糸が直交する様子がみられることから、布目圧痕とみて誤りない⁴⁾。

3 縄文施文技法の特徴

縄文施文資料302点(片)のうち、同一個体の重複や原体の不明瞭なものを除いた272点について集計したのが、第4表である。単節縄文と附加条縄文の単純な比率は、単節32.4% (88点) に対して附加条57.0% (155点) であるが、単節縄文のうち、単節・B類とした附加条縄文と同様の原体で施文したものを附加条に含めると、単節系25.7% (70点)：附加条系63.6% (173点) となる。撻りの方向は、羽状施文が一般的な単節・A類は当然であるが、単節・B類や附加条縄文を加えても、0段→1段R→2段LR側167点に対して0段R→1段L→2段RL側140点と、顕著な差がない。ただし、単節・A類ではLRとRLは同じ太さの原体で同じように施文されているのに対して、単節・不明や附加条を羽状施文したものにはLRとRLのどちらかの撻りが不完全であるものや、太さの違う原体を使うものがみられた。おそらく在地系土器の作り手には羽状縄文が一般的でなかったことが原因であろう。個人的なレベルでは1巻きとr巻きに得手不得手があった可能性がある。

附加条縄文には多くの種類がみられたが、資料数でみると附加条・A類が8割近く(78.6%)を占めており、標準的な縄文原体といえそうである。原体を復元して施文実験を行ってみると、附加条を加えることによって、あたかも雪道でタイヤチェーンを巻いたように滑らない効果がみられた。また、同じ節の大きな縄文で比べた場合、附加条原体は条が多い分太いため、そのこと自身が施文しやすい効果をもつ。土器の曲面に、一度にきわめて幅広く施文する技法は、柔らかい軸で滑りにくい仕組みをもった附加条原体でなければ存在し得なかったであろう。単節・A類の指1本分のごく狭い幅で施文する技法とは対照的なあり方である。これは、当然どちらが優れているかではなく、一度に幅広くくつきりと施文するか、何度も施文を繰り返してでも細かい縄文を施文するか、といった指向の違いとみるべきであろう。

単節縄文は、いわゆる「南関東系」の土器と在地系の土器の両方に認められるが、A類とした前者に特徴的な縄文は、在地系の土器のなかには全く見出すことができなかった。B類とした1段ないし0段多条の縄文は、文様としての効果はほとんど変わらなくても、撻り合わせる縄の数が異なっているのである。その効果について峰村は「主に条の変化を指向していることが窺える」(峰村1999)としているが、施文された結果としては差が少ないのだから、むしろ附加条原体と同様の、施文するときの効率やくつきり施文できるかどうか、あるいは多条を撻り合わせる伝統などを想定すべきではないだろうか。

当遺跡の土器群に限っても、縄文施文の技術や縄文原体の製作には排他的な2つの伝統が存在し、長く継続したらしい。赤生土器の縄文については、報告書等にデータが充分提示されない傾向にあるが、以上に示した排他的な要素は系統の識別や型式の認定において有効な指標となるのではないか。その2つの系統は、単節縄文のなかにも存在した。1段ないし0段多条の単節縄文を識別する必要があることを強調しておきたい。

第3表 弥生土器の縄文組成

分類1	分類2	原体	合計			
単節	A類 (1段2条)	単節・LR	7	22.4%	1・R・LR系 合計 168個	
		単節・RL	7			
		単節・羽状	47			
	A類 合計			61		r・L・RL系 合計 136個 (羽状は両方にカウント)
	A'類 (1段2条)	単節・LR	2	3.3%		
		単節・RL	1			
		単節・羽状	6			
	A'類 合計			9		
	B類 (1段or0段多条)	B類	単節・0段多条・LR	2	6.6%	単節B類除くと
			単節・0段多条・RL	2		
単節・1段3条・LR			6			
単節・1段3条・RL			5			
単節・1段3条・羽状			1			
単節・1段2&3条・LR			1			
単節・1段4条・RL			1			
B類 合計			18			
単節 合計			88	単節計	32.3% 25.7%	
附加条	A類 (2条交互附加)	附加条・LR+R・R	78	44.5%	附加条内訳 A類 81.2% B1類 8.1% B2類 2.7% C類 8.1% 計 100.0%	
		附加条・RL+L・L	32			
		附加条・羽状	11			
	A類 合計			121		
	B1類 (1条附加)	B1類	附加条・LR+R	4	4.4%	
			附加条・RL-L	7		
			附加条・羽状	1		
	B1類 合計			12		
	B2類 (2条同時附加)	B2類	附加条・LR+2R	1	1.5%	
			附加条・RL+2L	3		
	B2類 合計			4		
	C類 (その他の附加条)	C類	附加条・1段R+0段1-1	3	4.4%	
			附加条・LR+2L	1		
			附加条・LR+R・R 附加特殊	2		
			附加条・RL+LR・LR	1		
附加条・L・L			1			
附加条・羽状 附加特殊			2			
附加条・多段構成			2			
C類 合計			12			
その他 合計 (不明など)			6	2.2%	単節B類含むと	
附加条 合計			155	附加条計	57.0% 63.6%	
無節	無節	無節・L	3	無節計	2.2%	
		無節・R	2			
		無節・羽状	1			
無節 合計			6			
摺糸文	摺糸文	摺糸文?	1	摺糸文計	8.1%	
		摺糸文・L	7			
		摺糸文・R	5			
		摺糸文・羽状	1			
		摺糸文・網目状	8			
摺糸文 合計			22			
布圧痕			1	布圧痕計	0.4%	
総計			272	合計	100.0%	

(引用文献)

- 田村言行 1979 「弥生時代」「弥生式土器について」「江原台」佐倉市教育委員会
山内清男 1979 『日本先史土器の編年』先史考古学会
峰村篤 1999 「銚台 I 群土器について」「銚台遺跡 第2地点発掘調査報告書」松戸市遺跡調査会
註

- 1 実測図における縄文原体の表現を修正する余裕はなかった。属性表が優先するものとした。
- 2 単節・B類の存在は、遺物の観察が一通り終了してから気がついた。附加条縄文に分類した資料のなかから、附加条が輪縄とあまり変わらないものを見直す必要があるが、完全には実施できなかった。したがって、組成では附加条縄文が多めになっている可能性が高い。
- 3 田村1979の付図に輪縄と附加条の結合の仕方が示されている。
- 4 佐倉市教育委員会 田村言行氏にご意見をうかがった。

第3節 土器以外の出土遺物

金属製品 (第16表, 図版88)

金属製品は判別可能な製品をすべてX線写真撮影を行ったうえ図化した。銅鏃1点(001-27)のほかはすべて鉄製品である。その他の鉄片も出土しているが出土量は少ない。

弥生時代後期まで遡る出土状況の確実な例はわずか2点に過ぎない。刀子の茎(008-8)、および広根無茎の鉄鏃(088-27)である。弥生時代末以降はやや増加し、銅鏃(001-27)以外に、刀子や工具類が7点程度(001-28, 29・004-39, 40・013-9・041-2, 3)が伴う。古墳時代前期の事例では2点(002-8・084-19)が伴う。鉄製直刃鏃(084-19)はほぼ完形の良好な資料である。古墳時代中期以降では、鉄製の長頸鏃(018-56)、曲刃鏃(020-43)、刀子ハバキ(038-30)など比較的大型品が残される。石棺出土の刀子(026-2)はハバキが装着されたまま柄がはずされ、切先と茎が裸で折り曲げられた状態で副葬されていた。

このように、弥生時代から古墳時代にかけて鉄器出土率が微増するが、本格的な鉄器増加が始まる古墳時代中期までに集落が縮小するので、出土総量は少数にとどまったとみられる。

石製模造品 (第13表, 図版89)

古墳時代中期の堅穴住居跡・土器溜まりから滑石製模造品が出土した。鏡形である双孔円板15点(003-37・014-19・014-18・017-13, 14・018-44~49・019-13・020-41ほか)、剣形2点(014-17・019-12)、勾玉形2点(014-16・018-50)、未製品1点(020-42)がある。灰色から緑みの灰色で片理をもつ石質が多く、ほかに滑らかで密な石質、褐色味帯びるロウ石質、光沢をもつ結晶片岩質、蛇紋岩質などがみられる。房総産蛇紋岩の特徴とされる磁鉄鉱が入る例はない。片面穿孔により反対面に割れを生じているものが多い。017-14と018-44は外周の研磨面位置が一致し、唯一、一緒に整形された可能性があるが、穿孔位置は一致しない。020-42は板状剥片に擦切りと穿孔の痕跡を有する未製品で、穿孔時に破損したとみられる。玉などの素材を採取した石核の可能性のある018-51も存在することから、石製品の一部が集落内で製作された可能性がある。ただし、少数であり、石材が多様であるので、集中的な生産は想定できない。

軽石・砥石・敲石（第14・15表・図版84～86）

軽石は弥生時代後期から古墳時代中期の住居跡（土器溜まり含む）23軒から総数145点がまんべんなく出土している。045号跡の85点が突出して多い。白っぽい淡い色調で、樹枝状の網目をもつ柔らかい石質が主体である。研磨痕をもつ磨石・砥石類14点と、小礫・小片がある。図化した比較的大型品には平坦な磨面、鋭利な磨切傷（001-23・005-29・069-27・071-7など）がみられ、金属器の研磨に使用された可能性が高い。完形品はなく、利用時は拳大以上であったとみられる。小礫・小片にも磨耗痕が多数観察でき、例えば研磨剤素材のように、単独ではない使用法も考慮の余地がある。

弥生時代・古墳時代の砥石・敲石類は40点を掲載した。人為的な平滑化、粗面化がみられ、破損しているが、破碎後も使用されているものが多い。縄文時代石器の再利用品が多く含まれる。例えば、縄文時代石剣（001-24）は側面が砥石に、縄文時代凹石（013-7）は研磨と敲打に再利用されている。再利用に時期的な偏りはなく、一般的な行動であったとみられる。図版86に掲載した064号跡・077号跡出土石英質石塊は、稜が著しく潰れており、前者に金属らしい付着物がみられるので火打石の可能性もある。

竪穴住居跡出土小石（第136図）

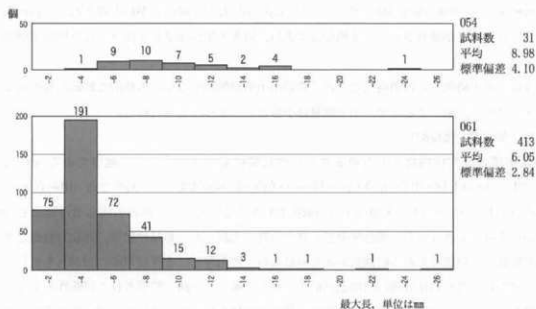
弥生時代後期の054号跡内の土坑と、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての061A号跡内の跡から、多量の小石が検出された。両住居跡は遺跡の北半部北寄りに位置するが、約70m離れている。小石の大きさは20mm以下で共通しているが、以下の違いがある。

054号跡例は31点で、平均 8.98 ± 4.10 mm、8mmが多く、半分が10mmを超える。偏差が大きい。

061A号跡例は413点で、平均 6.05 ± 2.84 mm、4mmが多く、9割が10mm以下である。偏差が小さい。

炭化植物遗体

炭化種子等の検出を目的に9軒の住居跡（002, 003, 007, 028, 029, 030, 031, 032, 037）で土壌サンプルを採取した。ほとんどは跡内またはその直上で採取している。フロテーションおよび試験フルイに



第136図 054・061号跡小石の大きさ分布

よる水洗別を行ったが、炭化材の小片以外は検出できなかつたため、残留物は廃棄した。

このほか、住居跡11軒 (001, 003, 007, 014, 019, 027, 041, 050, 061, 084, 086)、古墳1基 (022)、土坑1基 (046) から取り上げられた炭化物試料がある。すべて炭化材であつたので将来の樹種鑑定に備えて保管した。

第4節 総括

道地遺跡では、旧石器時代(後期)、縄文時代(早・前・中・後期)、弥生時代(後期)、古墳時代(前・中・後期)及び奈良時代の遺物・遺構が出土した。旧石器時代の石器は遺跡の北東、印旛沼を望む台地縁で出土した。縄文土器の多くを占める中期後半の土器群も、同じく遺跡の北東端で出土した。印旛沼に向かって半島状に突き出た広大な台地という立地条件が、遺跡の性格に色濃く反映されている。

本遺跡を代表するのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落である。当該期の竪穴住居跡は合計で75軒検出され、環壕の一部とみられる溝等が検出されている。弥生時代後期の竪穴住居跡40軒、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡23軒、古墳時代前期の竪穴住居跡12軒が検出され、前期後半には縮小し途絶する。長さ約750m×約25mの調査区全面で検出されることから、平戸・佐山半島の大部分が当該期の継続的な大集落であることを示す。

その後、空白期間において、古墳時代中期～後期初頭の竪穴住居跡4軒が営まれる。小型竪穴状遺構2軒を含む。同時期の土器溜まりが隣接して営まれる。場所は南半部南寄りに限られ、短期で姿を消す。カマドをもつ古墳時代後期後半の竪穴住居跡5軒が営まれる。場所は北半部中央に限られ、鬼高式期新相(7世紀中葉ごろ)の038A号跡等を最後に短期で姿を消す。分布の偏在性は、以前とは別の造営原理に基づく小規模集落であることを示す。

検出された後期古墳2基(埋葬施設のみ)は、平戸台古墳群に属するものである。総数はこれで10基となった。現在、群中で墳丘を残すのは8号墳だけである。検出された埋葬施設の1基は筑波石の箱形石棺であった。八千代市教育委員会による平戸台2号墳の調査では、同様の箱形石棺から多数の骨が出土した例が報告され、隣接の間見穴古墳群でも同様の箱形石棺が出土している。その後の葬送儀礼関連施設としては、奈良時代の被熱土坑2基が、台地北東端で検出されている。

<参考文献>

常松成人 2001『平戸台2号墳発掘調査報告書』八千代市教育委員会

付 表

第4表 旧石器

第図	No.	遺構	注記	種類	石材	観察事項	軸長	幅	厚さ	備考
8	1	Z14	0022	削器	黒曜石	左側縁に二次剥離	70.2	35.7	14.2	
8	2	Z14	0002	剥片	黒曜石	表面右上に使用痕	46.3	28.8	7.0	
8	3	Z14	0020	剥片	黒曜石	右側縁直線部に刃こぼれ	42.6	32.7	8.0	
8	4	Z14	0004	剥片	黒曜石		25.0	17.5	6.9	
8	5	Z14	0018	剥片	黒曜石	先端に使用痕	22.8	22.1	7.8	
8	6	Z14	0001	剥片	黒曜石		30.9	23.4	9.4	
8	7	Z14	0023	剥片	黒曜石		39.0	21.6	4.4	
8	8	Z14	0015	剥片	黒曜石		48.3	18.1	7.4	
8	9	Z14	0021	剥片	黒曜石		37.2	36.5	6.5	
8	10	Z14	0017	剥片	黒曜石	上部に使用痕	26.2	30.4	5.1	
8	11	Z14	0009	尖頭器	チャート	狭長剥片素材、先端と左側縁に調整	31.3	10.7	8.4	
8	12	Z14	—	剥片	頁岩	両側縁に顕著な微細調整痕、折断具?	48.7	37.0	7.6	
8	13	Z14	0006	剥片	珩片	表面右上に調整痕	21.7	16.9	5.8	
8	14	Z14	0019	剥片	珩片		26.1	16.5	5.8	
8	15	Z14	0011	剥片	珩片		14.9	32.5	4.3	
9	1	U21	0001	ナブ型石器	安山岩	狭長剥片素材、表面左側縁に刃磨し	52.4	21.5	9.1	
9	2	M29	0002	ナブ型石器	珩片	先端に整形剥離	23.3	9.8	4.6	
9	3	M29	0001	残核	珩質岩	石器に利用	30.6	30.6	9.8	
9	4	J12	088-422	剥片	安山岩		37.4	41.1	11.2	088-422
9	5	C35	017-004	剥片	頁岩	下端に微細な調整痕	17.7	23.9	4.7	017-4
9	6	I12	0001	剥片	珩片		38.5	60.2	12.9	
9	7	C36	0001	剥片	頁岩	側縁に微細な調整痕	29.8	25.1	11.0	
9	8	J13	084-038	剥片	頁岩		24.4	25.0	4.7	084-38
9	9	M30	0001	剥片	頁岩	石刃に近い	26.3	13.1	3.0	
9	10	C35	—	剥片	黒曜石		17.6	22.9	9.1	017-163

計測値は 軸長=実測図の縦軸長で、単位はmm。欠損部は現存値。

第5表 縄文土器

図	No.	位置	群	分類/主要文様	文様、成形・調整、備考	注記
12	1	C37	01群-3	縄文	RI群、後端直下無文	37C/2
12	2	C37	01群-3	縄文	RI群、施文疎	37C/1
12	3	C37	03群	無文	外面条痕、内面無調整、口唇上行'	37C/1
12	4	C37	03群	無文	内外面條痕	020/164
12	5	I12	03群	無文	外面~口唇上行'、内面条痕I→II	069/1132
12	6	Z14	04群-3	平行沈線文	竹管内側の平行沈線、附加条縄文、軸不明+I+	053/97、14Z/II層
12	7	C37	05-8群?	結節浮線文	横区画、2条1単位の弧状付フ	020/243
12	8	C37	05-8群	結節浮線文	結節浮線文多条	020/175、396
12	9	B36	05-1or2	変形爪形文	米字等の付フ	36B/1
12	10	C37	05群-2	波状貝殻文	密に施文	37C/1
12	11	J33	05群-3	三角文		013/47
12	12	B36	06群	側面正痕文	2段の縄原体正痕、LRも同原体、外面付フ、内面荒れ	36B/1
12	13	C37	06群	側面正痕文	1段の縄原体側面正痕、口唇上無筋Lも同原体	37C/1

図	No.	位置	群	分類/主要文様	文様, 成形・調整, 備考	注記
12	14	C37	08群	沈線文	L形, 砂・雲母多	020/66
12	15	一括	08群	平行沈線+交互刺突文	縄文あり原体不明, 砂・雲母多	147/43
12	16	G36	08群	沈線文内刺突	平縁, 陸帯に沿う沈線内に刺突列, 口唇上浅い刻み, 砂・雲母やや多	360/3
12	17	D35	09群-1b	陸帯+単列角押文	扇状把手, 刻み	016/68
12	18	C37	09群-2	陸帯+複列角押文	平縁, 楕円区画文, 砂・雲母多	020/396
12	19	C37	09群-1b	陸帯+単列角押文	波状口縁, 楕円区画文,	020/184, 375, 393
12	20	C36	09群-4	陸帯+沈線	陸帯上・区画内にLR	36C/2
12	21	Z14	10群-2	キリバー形	平縁, 陸帯区画, RL33	081/136
12	22	K29	10群-2	キリバー形	陸帯区画, RL形, 文様崩れるが垂下沈線間無文部狭い	002/23
12	23	F13	10群-2or3	キリバー形	陸帯区画, LRL形, 垂下沈線間無文	137
12	24	D36	10群-2or3	キリバー形	平縁, 太沈線区画(楕円区画か?), RL33	018/130
12	25	N29	10群-2or3	キリバー形	平縁, I 文様帯欠く, RL形→ナ形, 垂下沈線間無文	29N/1
13	26	Z11	10群-2or3	加E粗製	平縁, 太沈線, 楕円区画のみか, RL形, 浅縁の可能性あり	067/3
13	27	412	10群-2or3	キリバー形	垂下沈線間広い無文部, RL形より乱れたものか?	124
13	28	411	10群-3	意匠充填系	波状口縁, 口縁浮線区画, RL形+33	062/532
13	29	710	10群-3	横位連繫系	波状口縁, 口縁沈線区画, 沈線による弧線文	060/316
13	30	U20	10群-3	横位連繫系	波状口縁, 口縁太沈線区画+刺突, 沈線による弧線文, RL	076, 72
13	31	411	10群-3	意匠充填系	浮線文, 浅巻?	061/641
13	32	411	10群-4	横位連繫系	浮線入組系, RL	114
13	33	411	10群-3	横位連繫系	沈線による対向系, RL	061/428
13	34	411	10群	加E粗製	深い沈線楕円区画, RL形+33, 波状口縁	072/12, 13
13	35	F12	10群-4	横位連繫系	浮線入組系, RL	073/30, 32, 43, 63, 106
13	36	U20	10群-2	キリバー形	陸帯区画, RL形, 垂下沈線間無文部狭い, 図2点	076/6, 19, 20, 32, 58, 65, 127, 141, 162
13	37	F13	10群-2	キリバー形	垂下沈線間無文部狭い, 巻糸r	137
13	38	U20	10群 2or3	キリバー形	垂下沈線間無文部狭い, LRL	076/18, 32, 33, 34, 71, 79, 123, 162
13	39	F12	10群-3	意匠充填系	浮線文, 楕円区画, 渦巻文, LRL	073/5, 12, 38, 39, 48, 55, 57, 65, 66, 69, 75, 85, 123, 124
13	40	412	?	沈線+磨消縄文	波状口縁, 縄文L→太沈線区画→磨消	124
13	41	一括	13-14群	沈線意匠文	縄文L地に楕円区画, 由縁意匠, 垂下沈線, 沈線間磨消, 内面粗いヤジのみ	147/43
13	42	F10	?	沈線区画文	平縁, 沈線区画内に縄文LR33充填	060/332
14	43	F10	12群	沈線意匠文+刺突文充填	刺突は蛇行沈線の内外にあり	060/19
14	44	M30	14群	沈線単位文	波状口縁, 浅い縄文地に深い沈線	005/712
14	45	一括	14群	沈線文	波状口縁, 口縁部無文帯, 2本の沈線間磨消, LR33	147/49
14	46	一括	14群	集合沈線文	3本1組の沈線意匠, 刺突, 無筋L	147/43

図	No.	位置	群	分類/主要文様	文様、成形・調整、備考	注記
14	47	一括	14群	沈線文	縦手文、無節R	17/F3
14	48	一括	14群	集合沈線文	LR3>	17/F9
14	49	I34	14群	集合沈線文	LR3>	34I/1
14	50	C37	14群	集合沈線文	3本1組の沈線意匠、LR3>	37C/1
14	51	一括	14群	沈線文	平線、口縁部無文帯に沈線、行沈線は曲線?、LR3>	17/F3
14	52	E35	17群	帯縄文	平線、沈線間磨き残し→縄文RL、貼瘤	014/29
14	53	C36	17群	帯縄文	平線、沈線間磨き残し→縄文RL、貼瘤	017/168
14	54	C37	18群	帯縄文	平線、RL、口唇上に突起	020/387
14	55	Y20	18群	帯縄文	平線、縄文RL、指押圧貼瘤	074/62
14	56	C36	17群	刻文帯	平線、刻文帯間口条線、2段目以下無文、1段目の下にもう一段磨消しの痕跡	019/153
14	57	C35	17群	刻文帯	平線、行条線	017/61
14	58	C37	17群	刻文帯	平線、刻文帯2段、行条線	020/396
14	59	911	17or18群	組線文	条線→組線、裏に押圧	056/571
14	60	C36	17or18群	組線文	条線、組線、裏に押圧	017/163
14	61	D36	17or18群	組線文	条線、組線、裏に押圧	018/82, 152
14	62	910	10群	加E組製	平線洗鉢、口縁部無文帯、太沈線下に懸垂蛇行沈線	060/117, 325, 331, 357

第6表 縄文時代土製品

図	No.	品名	文様、成形・調整、備考	長さ	幅	厚さ	重さ	位置	注記
15	1	土製耳飾	けつ状耳飾、中央穿孔、3面に列点文	40.0	-	21.1	16	110	104
15	2	土器片鏢	素材は加曾利E?のハ-形	51.7	41.7	14.5	41	111	071/35
15	3	土器片鏢	素材は加曾利E?	50.8	32.6	11.6	25	712	088/319
15	4	土器片鏢	素材は加曾利E?	56.6	52.2	11.6	43	111	061/1186
15	5	土器片鏢	素材は加曾利E?	72.4	45.7	12.1	54	211	067/6, 28
15	6	土器片鏢	素材は阿玉台→加曾利古、裏母・砂粒多	57.1	41.4	14.4	40	C36	36C/3
15	7	土器片鏢	半欠、素材は加曾利E?	-	-	8.8	6	111	064/234
15	8	土器片鏢	半欠、素材は加曾利E?	-	35.3	13.7	26	Z14	053/26
15	9	土器片円板	周囲研磨、素材は加曾利E?	41.9	40.8	12.5	24	111	062/81

長さは、土器片鏢は切込軸長、その他は残存最大長。重さの単位はg。

第7表 縄文時代石器

図	No.	位置	注記	種類	石材	観察事項	長さ、幅、厚さ	重さ	備考
16	1	712	-	石鏢	黒曜石	凹基、長身、基部欠	42mm, 35mm, 5mm	1.5g	068-296
16	2	Z14	0016	石鏢	黒曜石	凹基→平基、長身、基部	39mm, 36mm, 4mm	2.3g	
16	3	D35	-	石鏢	黒曜石	平基、壳形	17mm, 17mm, 3mm	0.5g	015-12
16	4	E35	-	石鏢	頁岩	凹基→平基、先端わずかに欠	23mm, 22mm, 4mm	1.1g	014-72
16	5	C37	0001	石鏢	黒曜石	凹基、基部欠、先端欠?	21mm, 17mm, 4mm	1.1g	
16	6	V20	-	剥片	黒曜石	石鏢未成品?	21mm, 19mm, 5mm	1.7g	038-275
16	7	C36	0001	石斧	砂岩	分銅→盤型	全長96mm, 幅48mm-30mm-39mm, 厚21mm	114.0g	

第8表 弥生・古墳時代遺構

弥生後葉から古墳前期の住居跡

調査区	遺構名	時期	形状	幅	長さ	主軸方位	形状	戸	主柱	扉	出入口	遺構	土器	遺物	備考	7/10*
001	住居跡	弥生末葉~古墳初葉	長方形	4.6	4.9	3.6 N49E	長方形	2	なし	2x3	P??	改築あり。ベツト状高まり、仁壁	下層土器少。刃削りに透眼。銅土層に古墳中期の土器層まで	石、磁石、土、上層に土器石り形成		K29-38
002	住居跡	弥生末葉	長方形	4.9	5.0	0.3 N62E	長方形	なし	なし	-	-	-	0.2 床面に土器少。玉石??			K29-55
003	住居跡	弥生末葉	長方形	8.2	0.8 N47E		長方形	2	なし	なし	-	ベツト状高まり。壁面に小穴。築土・炭化灰少	5.5 下層土器少。刃削りに透眼。土直後〜古墳中期、上層に土器層まで。土器石器多。平田瓦器			K29-52
004	住居跡	弥生末葉	長方形	5.2	5.2	0.6 N59E	長方形	2	2	1	-	ベツト状高まり	6.0 床土器少。透眼に透眼あり。上直後土層に土器層まで形成			K29-57
005	住居跡	弥生末葉	長方形	7.2	5.7	0.8 N59E	長方形	1	4	-	-	-	9.0 土器層より。炭化材・遺骨多量。高層〜古墳中期、上層に土器層まで。小穴多。みはけは土器少			K29-50
006	住居跡	弥生末葉	長方形	8.0	-	0.1 N39E	長方形	-	2	-	-	-	0.6 七面片少			K29-38
007	住居跡	弥生末葉	長方形	3.8	3.8	0.3 N46E	長方形	1	なし	なし	なし	-	2.0 土器少			L29-53
008	住居跡	弥生末葉	長方形	9.0	9.0	0.3 N46E	長方形	1	4	-	-	柱は炭化材	1.0 土器片少			K1-35
009	住居跡	弥生末葉	長方形	3.5	-	0.3 N59E	長方形	1	?	-	-	-	0.2 土器片少			L31-27
010	住居跡	弥生末葉	長方形	4.7	4.7	0.2 N43E	長方形	2	-	-	-	ベツト状高まり。炭化材多	1.0 土器片少			L31-75
011	住居跡	弥生末葉	長方形	2.7	2.7	0.1 N25E	長方形	1	なし	1	-	炭化材・焼土少	0.3 土器片少			L32-38
012	住居跡	弥生末葉	長方形	4.6	4.6	0.2 N53E	長方形	1	なし	1	-	ベツト状高まり	0.2 床付近から炭化灰多い高杯			K28-88
013	住居跡	弥生末葉	長方形	5.8	5.8	0.7 N49E	長方形	1	2	-	-	炭化材・焼土少	2.0 床付近から炭化灰多い高杯。小型粘土器			J33-59
015	住居跡	弥生末葉	長方形	6.4	6.4	0.4 N58E	長方形	-	2	-	小穴	南東隅に小穴	0.7 下層土器片少。上層古墳中期の灰			K05-08
016	住居跡	弥生末葉	長方形	5.0	4.3	0.3 N65E	長方形	1	4	なし	-	-	1.0 床面に土器散在			K05-85
017	住居跡	弥生末葉	長方形	6.8	6.8	0.5 N37E	長方形	1	2	-	小穴	主柱は炭化材	3.6 下層石のみ。上層中期主体土器。土、石製製品散在	新(2010)8日。彫穴共通。上下に共通		K35-86
020B	住居跡	弥生末葉	長方形	4.3	4.8	0.5 N16E	長方形	1	なし	なし	-	-	0.1 少ない。みはけあり			K07-03
027	住居跡	弥生末葉	長方形	4.4	4.4	0.2 N59E	長方形	1	なし	なし	-	炭化材・焼土少				
028A	住居跡	弥生末葉	長方形	4.6	4.2	0.3 N49E	長方形	3	なし	なし	-	-	0.5 土器少			K07-08
028B	住居跡	弥生末葉	長方形	4.1	3.6	0.4 N49E	長方形	2	なし	なし	-	-	新(2010)8日。彫穴共通。上下に共通			K07-08
029	住居跡	弥生末葉	長方形	3.4	3.2	0.2 N58E	長方形	1	なし	小穴	-	-	A1に含む土器少ないが床面から炭化灰多い			K07-08
030	住居跡	弥生末葉	長方形	4.5	4.5	0.2 N34E	長方形	1	なし	なし	-	-	1.1 土器片少			P27-43
031	住居跡	弥生末葉	長方形	4.8	4.3	0.4 N65E	長方形	1	4	なし	土坑?	-	0.5 土器片少			P27-55
032	住居跡	弥生末葉	長方形	3.7	3.4	0.5 N34E	長方形	1	2?	なし	土坑?	-	0.7 土器片少			P26-82
033	住居跡	弥生末葉	不明	-	4.6	0.6 N20E	不明	なし	2?	なし	-	-	0.2 土器片少			K05-77
034	住居跡	弥生末葉	長方形	4.3	4.3	0.4	長方形	なし	なし	小穴?	-	-	0.7 土器少ないが床面から炭化灰多い			K04-93
													0.2 土器片少			K22-91

No.	遺跡名	西側大明	西側副窟	長さ	幅	溝		土坑		土坑六	土坑次	出入口	遺構	土器	遺物	子石 ¹⁾	
						主溝	副溝	1	2								1
035	住居跡	前	住居跡	4.3	4.3	0.3 N58E	無し	無し	無し	2	なし	小穴1	—	0.2 土器片少	—	U20-70	
037	住居跡	前	住居跡	4.4	3.7	0.4 N58E	無し	無し	無し	4	なし	小穴1	—	0.4 土器片少	新038B (改築) X07111 遺 足履書	V20-20	
039	住居跡	前	住居跡	4.5	4.5	0.5 N42E	無し	無し	無し	4	なし	—	—	0.4 土器片少	—	V20-90	
041	住居跡	前	住居跡	4.5	4.5	0.1 N29E	無し	無し	無し	0	なし	—	—	0.4 土器片少、刀子・鉄線破片	—	W18-42	
042	住居跡	前	住居跡	4.4	4.7	0.2 N59E	無し	無し	無し	2	なし	—	—	0.3 土器片	—	X17-50	
043	住居跡	前	住居跡	3.6	3.7	0.2 N37E	無し	無し	無し	0	なし	—	—	0.2 土器片少、小形土器片から集 り	—	X17-33	
044	住居跡	前	住居跡	5.4	5.4	0.4 N29E	円形	円形	1	4	なし	土坑1	—	0.7 土器片少	—	Y16-42	
045	住居跡	前	住居跡	5.0	5.0	0.3 N67E	円形	円形	1	0	なし	土坑1?	—	0.7 形跡から、形跡の跡・小形土 器片から、小石集中	—	Y15-81	
048	住居跡	前	住居跡	—	4.0	0.5 N39E	不明	不明	1	2	なし	—	—	0.2 土器片少	大平標瓦	Z15-74	
049	住居跡	前	住居跡	4.0	4.0	0.2 N49E	圓筒方形	圓筒方形	2	0	なし	土坑1?	—	0.2 土器片少	—	Z15-44	
050	住居跡	前	住居跡	4.6	4.7	0.3 N34E	圓筒方形	圓筒方形	2	0	1	—	—	1.3 床近に多数の跡・小形土器片・土 器片・土	—	Y15-06	
051	住居跡	前	住居跡	3.5	3.5	0.5 S09E	圓筒方形	圓筒方形	2	0	0	—	—	0.8 土器片少	—	Z14-71	
052	住居跡	前	住居跡	6.6	5.5	0.5 N27E	圓筒長方形	圓筒長方形	2	4	0	小穴1	—	0.9 中・上層で土器片や多 量	—	Z14-42	
053	住居跡	前	住居跡	5.0	4.5	0.4 N59E	圓筒方形	圓筒方形	3	4	2	0	小穴1	1.2 下層土器片散在。上層に形跡。土 器片	—	Z14-05	
054	住居跡	前	住居跡	3.6	2.8	0.4 W5E	圓筒長方形	圓筒長方形	1	0	1	—	—	1.2 土器片少	—	Z14-27	
055	住居跡	前	住居跡	—	6.1	0.4 N52E	圓筒長方形	圓筒長方形	—	2	0	小穴1	—	2.6 床近に近土器片のみ。中・上層 土器片多数	—	Y11-42	
056	住居跡	前	住居跡	7.9	—	0.3 W4E	圓筒長方形	圓筒長方形	3	3	1?	土坑1?	—	0.2 層上下層から土器片あり。小形 土器片・小形土器片・土器片・土器片	—	Y11-73	
057	住居跡	前	住居跡	—	—	0.1 —	圓筒方形	圓筒方形	1	0	0	—	—	0.2 土器片散在集中 2/3土器片	—	Y10-50	
058	住居跡	前	住居跡	—	—	0.1 —	円形	円形	0	0	0	—	—	0.3 土器片 1/4土器片	—	Z13-92	
060	住居跡	前	住居跡	7.3	6.3	0.6 N33E	圓筒長方形	圓筒長方形	3	4	0	—	—	3.3 下層→上層まで土器片多 量	—	Y10-47	
061A	住居跡	前	住居跡	7.7	6.3	0.6 N47E	圓筒方形	圓筒方形	7	4	1	土壁	—	6.7 床近→下層土器片多。大壁片新 061B出土	—	Y11-06	
062	住居跡	前	住居跡	4.7	4.0	0.5 N10E	圓筒方形	圓筒方形	1	4	0	小穴2	—	5.0 上層に土器片散在	—	Y11-83	
063	住居跡	前	住居跡	6.3	6.3	0.3 N49E	圓筒方形	圓筒方形	1	2	1	—	—	1.7	1/3土器片	—	Y12-23
064	住居跡	前	住居跡	5.8	6.6	0.2 N44	圓筒方形	圓筒方形	2	4	1	—	—	3.2	新065064E:1066	—	Y11-53
065	住居跡	前	住居跡	2.8	2.8	0.4 N19E	圓筒方形	圓筒方形	1	0	1?	—	—	0.9	新065064E:1066	—	Y11-51
066	住居跡	前	住居跡	5.6	5.6	0.4	圓筒方→長方 形	圓筒方→長方 形	0	0	1	—	—	0.7	新065064E:1066	—	Y11-40
067	住居跡	前	住居跡	3.9	3.9	0.4	圓筒方→長方 形	圓筒方→長方 形	0	0	0	—	—	1.0	新065064E:1066	—	Y11-88
068	住居跡	前	住居跡	5.0	4.7	0.3 W49E	圓筒方形	圓筒方形	2	0	0	小穴1	—	3.2	—	—	Y11-50

No.	遺構種別	時期層別	長さ	幅	深さ	主軸方位	形状	穴	主柱穴	軒梁穴	出入口	遺構	土器量	遺物	ノリ
069	住居跡	養生・古墳 養生	5.0	5.8	0.8 N30E		隅四角方形	4	4	0	-	-	土器量より形成	瓦・土	112-19
070	住居跡	養生・古墳 古墳初	3.4	3.6	0.2 N20E		隅四角方形	1	0	1	-	-	土手状高まり、炭化材・ 焼土少、土器量より形成		011-08
071	住居跡	養生・古墳 古墳初	4.9		0.2 N23E		円形	2	0	1	-	-	1.5		011-06
073	住居跡	養生・古墳 養生	4.2	4.2	0.6 N20E		隅四角方形	3	4	0	-	-	2.0		712-18
074	住居跡	養生・古墳 養生	6.3	5.1	0.5 N20E		隅四角方形	1	4	0	-	-	2.3		720-02
075	住居跡	養生・古墳 古墳初	5.4	5.4	0.3 N110E		方形	1	0	0	-	-	0.7		021-27
076	住居跡	養生・古墳 養生	7.6	6.1	0.6 N24E		隅四角方形	3	4	0	-	-	2.7		020-76
077	住居跡	養生・古墳 養生	3.6	3.1	0.2 E		隅四角方形	2	0	0	小穴1	-	0.2		021-53
078	住居跡	養生・古墳 養生	4.3	4.3	0.5 N23E		隅四角方形	2	4	0	小穴1	-	0.5		021-96
079	住居跡	養生・古墳 養生	6.0	5.7	0.3 N41E		隅四角方形	1	4	0	小穴1	-	1.3		523-26
080	住居跡	養生・古墳 古墳初	4.4	4.2	0.3 N20E		隅四角方形	1	0	0	小穴1	-	0.3		008-28
081	住居跡	養生・古墳 古墳初	3.9	4.2	0.6 N21E		隅四角方形	1	0	0	-	-	2.6		214-59
082	住居跡	養生・古墳 養生	5.2	6.2	0.6 N47E		隅四角方形	2	4	0	-	-	0.2		018-07
083	住居跡	養生・古墳 古墳初	7.2	6.6	0.8 N27E		隅四角方形	1	4	1	1	土器量より形成	9.3		213-38
084	住居跡	養生・古墳 養生	7.1	6.3	0.4 N60E		隅四角方形	2	4	1	1	炭化古遺存、炭化材・焼土 多、土手状高まり	4.7		715-61
085	住居跡	養生・古墳 古墳初	5.0	5.2	0.2 N20E		円形	1	0	1	0	-	2.8		714-03
086	住居跡	養生・古墳 古墳初	4.2	4.4	0.5 N24E		隅四角方形	1	4	0	小穴2	炭化材・焼土少	4.6		713-02
087	住居跡	養生・古墳 古墳初	4.3	3.7	0.3 N22E		隅四角方形	3	0	17	-	-	0.9		713-56
088A	住居跡	養生・古墳 養生	6.6	5.8	0.6 N23E		隅四角方形	1	4	0	小穴1	-	0.6		712-06
088B	住居跡	養生・古墳 養生	4.0	4.0	0.6 N23E		隅四角方形	1	4	0	小穴1	AIに含む			
099	住居跡	養生・古墳 古墳初	-	-	0.3 -		不明	1	-	-	-	-			
102	住居跡	養生・古墳 養生	-	-	0.2 -		隅四角方形	1	0	0	-	-	0.6		

古墳中期・後期の住居跡

No.	遺構種別	時期層別	長さ	幅	深さ	主軸方位	形状	穴	主柱穴	軒梁穴	出入口	遺構	土器量	遺物	ノリ
014	住居跡	古墳中・後 古墳中	9.2	9.2	0.6 N20E		方形	4	4	0	-	改善あり。掘削ベツト状 高まりor私堀。北側溝・溝 土多	瓦・土	535-08	
018	住居跡	古墳中・後 古墳初	7.6	7.4	0.7 N20E		正方形	4	4	0	新田2	仕切溝	13.0		006-40
019	住居跡	古墳中・後 古墳中	3.7	3.4	0.4 N20E		隅四角方形	4	なし	なし	-	-	4.5		006-03

№	遺跡名	時期	形状	伊	主柱穴	前後穴	出入口	遺構	土壌量	遺物	備考	頁
020A	住居跡	古墳中・後古墳	長方形	なし	なし	1	-	020Bの種か再利用用、長7×9	14.0	奈良に多量の土器、前～後期属	新020A(Ⅱ)、型穴実量、上下037-19に採出、多量の土器	171-19
036	住居跡	古墳中・後古墳	カマド	4	なし	小穴2	なし	土間2	4.0	灰～下層土器多量、灰多	V19-41	
038A	住居跡	古墳中・後古墳	長方形	カマド	4	1	小穴1	貯蔵穴に磨研鏡	5.6	下層～上層に採多数	V20-22	
038B	住居跡	古墳中・後古墳	正方形	カマド	4	なし	-	一 刀用磨研鏡ハネ	-	新038A(Ⅱ)(改測)037日		
040	住居跡	古墳中・後古墳	長方形カマド形	カマド	2	なし	-	1.3 床面付近に保存感高い灰	2.3	調査区外	F18-20	

古墳																
№	遺跡名	時期	形状	幅	長さ	主軸方位	形状	伊	主柱穴	前後穴	出入口	遺構	土壌量	遺物	備考	頁
022	古墳	古墳中・後古墳	隅四長方形	3.7	2.5	0.5 N63E	隅四長方形	-	-	-	-	-	1.0	焼物(部分も含め)土師器主体、中	主体部の磨りかたのみ	V28-47
026	古墳	古墳中・後古墳	隅四長方形	3.4	1.9	0.5 N62E	隅四長方形	-	-	-	-	-	-	磨研鏡	石磨の磨りかたのみ	J32-36

土坑																
№	遺跡名	時期	形状	幅	長さ	主軸方位	形状	伊	主柱穴	前後穴	出入口	遺構	土壌量	遺物	備考	頁
046	土坑	不明	不整形	0.8	0.7	0.1	-	-	-	-	-	-	-	大塚下平部		V16-14
047	土坑	古墳中・後古墳	隅四長方形	1.4	0.8	0.2 N62E	隅四長方形	-	-	-	-	-	-	ガラス小玉10	土燐素?	V16-14
061B	土坑	公使	不整形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	新061B(Ⅱ)日		
072	土坑	奈良・古墳	隅四長方形	1.4	0.9	0.4 N69W	隅四長方形	-	-	-	-	-	-	2.3	奈良後継土器片等	411-35

溝																
№	遺跡名	時期	形状	幅	長さ	主軸方位	形状	伊	主柱穴	前後穴	出入口	遺構	土壌量	遺物	備考	頁
059	溝	奈良・古墳	不明	15.0	0.6	0.6	-	-	-	-	-	-	-	土器から土器片、灰片(実量)もとの含む		410-19

その他の遺構																
№	遺跡名	時期	形状	幅	長さ	主軸方位	形状	伊	主柱穴	前後穴	出入口	遺構	土壌量	遺物	備考	頁
023	墓	古墳中・後古墳	円形カマド形	0.3	5.2	-	N33W	-	-	-	-	-	-	柱から土器片		K20-08
098	土坑	不明	隅四長方形	2.4	1.0	0.2 N59W	隅四長方形	-	-	-	-	-	-	なし		N29-16
089	溝	不明	-	-	1.8	0.8	-	-	-	-	-	-	-	なし		712-71
090	溝	不明	-	-	2.5	0.9	-	-	-	-	-	-	-	なし		712-63
091	溝	不明	-	-	1.7	0.1	-	-	-	-	-	-	-	なし		N28-21
092	溝	不明	-	-	1.0	0.3	-	-	-	-	-	-	-	なし		N28-21
093	溝	不明	-	-	1.0	0.2	-	-	-	-	-	-	-	なし		N28-31
094	溝	不明	-	-	0.7	0.3	-	-	-	-	-	-	-	なし		N28-42
095	溝	不明	-	-	1.0	0.1	-	-	-	-	-	-	-	なし		N28-42
100	溝	不明	-	-	1.0	0.4	-	-	-	-	-	-	-	なし		N27-49
101	溝	不明	-	-	0.7	0.2	-	-	-	-	-	-	-	なし		N27-46

原紙	%	面積	実面積	積形	口径	筒径	筒高	筒容	布張内面	紙張外延	紙入角	裏紙内面	裏紙外延	製作番号	注記	備考
27	27	005	25	葉	-	-	-	5	閉巻	紙張外延	少	紙張	有巻別状・1段2条	内面赤部	133	
28	1	006	1	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	結算文取組、裏紙別状、1段2条	外面赤部	4	
28	2	006	2	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	結算別状・1段2条	外面赤部	9	
28	3	006	3	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	附加条、L1+L・L	裏紙木質紙	14	
29	1	007	5	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	裏紙、L1+L・L	内面赤部	119	
29	2	007	6	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	裏紙、L1+L・L	内面赤部	23	
29	3	007	1	高杯	-	-	3.8	20	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内面赤部	48	杯蓋部裏紙
29	4	007	4	葉	23.4	-	4.2	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張・1段2条・L1		3,30,111	
29	5	007	2	葉	-	-	15.8	25	紙張外延	紙張外延	少	紙張	附加条・L1+L・L		48,112	
29	6	007	3	葉	-	-	7.0	22.0	60	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部、杯蓋部裏紙、筒蓋上面	4,12,90,93,94,70,103,108,109,111,112
30	1	008	1	葉	-	-	7.4	4.5	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	3
30	2	008	2	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	5
30	3	008	4	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	25
30	4	008	5	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	20
30	5	008	3	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	1
30	6	008	6	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	46
32	1	010	1	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	1
32	2	010	2	葉	-	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	8
34	1	012	3	高杯	14.0	-	4.0	30	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部、杯蓋部裏紙	23,25,27	
34	2	012	4	高杯	-	17.9	5.9	30	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	裏紙組合紙		
34	3	012	2	高杯	-	12.0	7.3	43	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外赤部	9,15,19,21,22,23,28	
34	4	012	1	小型盤	8.1	-	10.1	23	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内面赤部との接合部	5	
35	1	013	5	高杯	-	8.8	6.8	45	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部	2,4,7,8,20,4,4,29,34,36,5	
35	2	013	6	高杯	-	6.6	30	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	148	
35	3	013	4	小型盤台	8.4	-	4.0	65	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部、筒蓋上面	20	
35	4	013	1	小型盤	7.3	4.6	13.3	75	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部	49,100,101,121,122,123,126	
35	5	013	2	葉	-	-	9.5	15	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外赤部	133	
35	6	013	3	小型盤	13.6	-	13.3	40	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	内外面赤部、筒蓋上面	7,8,12,13,14,19,15,10,11,12,18	
36	1	015	1	杯	15.2	-	6.0	25	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	筒蓋上面	2,17	
36	2	015	2	葉	-	3.3	4.3	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	筒蓋上面	17	
36	3	015	6	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	1,2	
36	4	015	8	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	17	
36	5	015	7	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	17	
37	1	016	3	小型鉢	12.3	5.0	6.8	80	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	23
37	2	016	6	葉	-	-	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	41,48,54
37	3	016	5	葉	-	-	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	31,63,65
37	4	016	1	葉	-	-	9.6	26	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	11,12,42,43,46
37	5	016	4	葉	-	7.0	2.6	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	62
37	6	016	2	葉	-	7.8	6.3	15	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	40
37	7	016	9	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	63,67
37	8	016	11	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	62
37	9	016	10	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	15
37	10	016	7	葉	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	65
38	1	017	7	葉	12.8	-	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	71,50
38	2	017	8	高杯	-	-	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	1,14
38	3	017	10	高杯	-	-	-	15	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	142,143,144,145,153
38	4	017	9	高杯	-	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	3
38	5	017	5	葉	17.3	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	108,153,163
38	6	017	4	葉	19.0	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	46
38	7	017	3	葉	16.2	-	-	5	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	60,51,54
38	8	017	12	鉢	-	6.0	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	62,163
38	9	017	6	葉	-	7.0	-	20	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	78
38	10	017	2	葉	-	7.8	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	78,163
38	11	017	1	葉	-	5.7	-	10	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	5,141
39	1	020	1	杯	13.7	4.6	4.7	50	紙張外延	紙張外延	少	紙張	紙張	紙張	筒蓋上面	364,365,366,370,374,395

番号	%	説明	実測%	形状	口径	材料	長さ	底径	色調/内面	外装/外面	取入れ	演奏/内面	演奏/外面	製作番号	注記	備考	
50	1	035	2	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	黒調	少	??	新式文、準新式、調音板、附加条、取+L、L	8			
50	2	035	3	筒	-	-	-	5	黒調	黒調	少	???	附加条L+R・R	22			
50	3	035	6	筒	-	-	-	5	灰黄調	灰赤	少	??	??、扉付不明(附加条、取赤文?)	17			
50	4	035	1	筒	-	-	-	5	黒	にぶい漆調	少	??	附加条L+R・R	23			
50	5	035	4	筒	-	-	-	5	灰黄調	にぶい漆調	少	??	附加条L+R+赤羽状、準新・1段2条、取、取	3			
50	6	035	5	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	黒調	少	L? R	???, L? R, 附加条中黄に引く	8		外装黒付着	
51	1	037	1	高杯	19.6	-	9.5	30	にぶい漆調	にぶい漆調	少	L? R, ??	???, L? R, ??	28			
53	1	041	1	山	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	??、隅文身体側面正調	29			
54	1	042	2	筒	-	0.4	7.1	20	赤調	赤調	少	???	???	10, 40, 16, 18, 23, 24			
54	2	042	1	筒	-	0.6	-	10	黒調	黒赤調	少	??	若加条2條幅が羽状、取+L+赤?と取条L+R・R、取、取	23, 21, 25, 40			
55	1	043	1	筒	-	10.8	6.1	5	橙調	橙調	少	??, ???	??, ???	口縁下部調文取付、L, 2, 3, 5, 23の押花			
55	2	043	2	筒	-	-	-	5	暗赤調	黒	少	???	??、直線正調	8, 9, 10, 11, 12, 13, 20, 20B, 40			
56	1	044	1	筒	-	-	-	10	にぶい漆調	灰黄調	少	??	附加条取+L・L	37		口縁・脚平削化、史料有、部位で再利用可	
57	1	045	1	片	17.2	6.8	15.0	80	にぶい漆調	にぶい漆調	少	L? R	準新・1段2条・赤羽状、準新調文、取赤文区画3-4条、山形取調文、1段2条取調文、R	22, 23, 24, 41, 54, 66, 68, 71, 102, 114, 19, 175, 197, 110			
57	2	045	2	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	??	27, 44, 48, 41, 10			
57	3	045	4	筒	10.2	6.3	18.9	75	にぶい漆調	にぶい漆調	少	???	??	括弧木黒調、括弧文2単位、内面接合痕	33, 34, 41, 43, 54, 66, 68, 71, 102, 114, 19, 175, 197, 110		外装脚縁付着、二次焼成
57	4	045	3	筒	-	4.7	-	25	黒	にぶい漆調	少	??	??	311			
60	1	050	6	片	12.0	3.1	5.9	60	にぶい漆調	にぶい漆調	小石多	??, ???	???, L, ??, ???	外装接合痕	8, 105		外装器曲調*
60	2	050	11	片	8.2	-	-	80	黒調	黒調	少	??, ???	???, L, ??	158, 160			
60	3	050	8	小型器口	8.3	11.0	7.9	65	赤調	黒	少	??, ???	???, L, ???	穿孔3単位	183		
60	4	050	9	小型器口	5.8	8.8	6.5	80	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??, ??	??, ??, ??, ??	穿孔3単位	177, 181		外装脚状付着、脚縁黒
60	5	050	7	高杯	20.0	-	6.7	30	にぶい漆調	橙調	少	L? R, ??	???, L? R, ??	194, 195			
60	6	050	4	小型器口	9.0	4.5	13.3	80	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??, ??, ??, ??, ???	???	内面嵌り脚状付、脚縁内面接合痕	18, 36, 40, 57, 68, 70, 71, 73, 108, 111, 12, 152, 158, 176, 192, 210		
60	7	050	5	小型器口	9.6	4.7	9.5	95	橙調	橙調	3石多	??, ???	???, L, ??, ??	203, 206, 208, 207, 208, 209			内面内面脚状付着、脚縁黒、外装器曲調
60	8	050	10	小型器口	-	4.4	-	20	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	???, L	74, 109			
60	9	050	2	山	-	7.2	23.9	70	橙調	橙調	少	??, ???	??, L, ??, ??	括弧木黒調???	177, 148, 150, 174, 181, 184, 200		
60	10	050	3	小型器口	12.0	6.6	12.5	80	黄調	黄調	少	L? R, ??	???, L, L? R, ??	外装脚縁付着	70		外装脚、脚縁黒、二次焼成
60	11	050	1	台付筒	18.6	9.5	29.5	80	黒調	黒調	少	??, ???	???, L, ??, ???	口縁上に嵌りの??	79		外装脚縁部、二次焼成
61	1	051	1	台付筒	-	8.8	-	30	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??, ??	??, ??	??	10, 39		
61	2	051	2	筒	-	-	-	5	黒	黒	少	??	??、隅文身体側面正調、隅付取調文、取調正調	66, 68, 77, 102+111			
61	3	051	3	山	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	??、取赤文	27			
61	4	051	7	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	附加条L+R・R、隅文身体正調	23			
61	5	051	5	筒	-	-	-	5	黒調	黒調	少	??	附加条L+R・R	28, 37, 71			
61	6	051	4	筒	-	-	-	5	黒	黒	少	??	附加条L+R・R	17			
61	7	051	6	山	-	-	-	5	灰黄調	にぶい漆調	少	??	若加条L+R・R、取+L・Lで羽状	28, 70, 85			
62	1	052	11	筒	9.7	-	-	10	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??, ???	???	19, 44, 43, 214, 24, 47, 42, 45, 47			
62	2	052	1	筒	-	6.3	-	10	黒調	黒	少	??	??	括弧木黒調2枚成	123, 75		
62	3	052	6	筒	-	7.0	15.6	30	橙調	にぶい漆調	少	???	隅文、取加条・L+R・R	161, 161, 203, 204, 206, 215, 188, 202, 54-76, 86+93			外装脚縁付着、二次焼成
62	4	052	3	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	準新文区画、準脚羽状、1段2条	26, 31, 242		7と同・脚縁	
62	5	052	10	筒	-	-	-	5	黒調	にぶい漆調	少	??	附加条、扉付不明、取付取赤	187			
62	6	052	8	小型器口	-	-	-	5	灰黄調	黒調	少	???	隅調文、身体不明、準新・1段3条、取、取	7, 52			
62	7	052	4	筒	-	-	-	5	灰黄調	灰黄調	少	??	準脚L、附加条・L+R・R	174			
62	8	052	5	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	灰黄調	少	??	附加条L+R・R	171			
62	9	052	9	筒	-	-	-	5	黒調	黒調	少	??	附加条L+R・R	78			
62	10	052	2	筒	-	-	-	5	暗赤調	黒調	少	??	取調・L	3, 107			
63	1	053	13	筒	12.3	8.2	25.4	60	黄調	黄調	少	L? R, ??, L? R, ??, ???	???	1, 3, 8, 8, 11, 41, 42, 44, 45, 48, 61, 71, 5, 2, 53, 41, 43, 64, 84, 86, 117, 121, 121, 1, 2, 二次焼成		外装脚縁部、器底取、口縁、二次焼成	
63	2	053	2	筒	-	8.4	-	20	黒	にぶい漆調	少	??, ??	??	28			
63	3	053	6	筒	-	-	-	5	にぶい漆調	にぶい漆調	少	??	準脚取付、隅文取付、赤花	28			

番号	比	図	図名	形状	口径	口径	高さ	高さ	色内径	色外径	取入	取付内径	取付外径	製作番号	注記	備考	
74	2	061	2	高杯	18.4	-	-	20	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F	10, 204		内面磨削	
74	3	061	34	高杯	18.9	-	-	10	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F	1164			
74	4	061	10	高杯	-	-	4.2	20	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F	1160	外面成形		
74	5	061	4	小笠舞台	-	-	5.4	20	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	247			
74	6	061	3	小笠舞台	-	-	9.8	3.8	筒	筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	1700	穿孔3.6φ		
74	7	061	8	蓋	18.8	-	7.7	20	赤筒	赤筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	25, 40, 105, 194, 204	内外面成形, 取付 ばね状の取付け文		
74	8	061	5	蓋	-	-	7.7	13.4	30筒	黒筒	少	1F1F	1F1F	216, 277, 342, 376, 378, 382, 448, 4	黒部本蓋		
74	9	061	6	鉢	20.9	-	-	15	灰筒	黒筒	少	1F	1F	200, 443, 607, 1208, 2061, 1106, 1105	黒部本蓋		
74	10	061	7	蓋	-	-	8.7	-	10	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	32, 379, 377, 342, 376, 378, 382, 448, 4	外面成形	
75	11	061	21	蓋	-	-	-	5	灰筒	黒筒	少	1F	1F	101, 108, 96, 408, 500, 501, 502, 913, 1	外面成形		
75	12	061	20	蓋	-	-	-	5	灰筒	黒筒	少	1F	1F	915, 1100	外面成形		
75	13	061	29	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	灰筒	少	1F	1F	603	20と同一		
75	14	061	28	蓋	-	-	-	5	焼筒	灰筒	少	1F	1F	512	20と同一		
75	15	061	19	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	493			
75	16	061	23	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	182, 1104			
75	17	061	22	蓋	-	-	-	5	筒	黒筒	少	1F	1F	498			
75	18	061	33	蓋	-	-	-	5	灰筒	灰筒	少	1F, 1F	1F	1117	黒部本蓋		
75	19	061	17	蓋	-	-	-	5	灰筒	にぶい筒	少	1F1F	1F	2, 608	黒部本蓋		
75	20	061	15	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	黒筒	少	1F1F	1F	619	黒部本蓋		
75	21	061	18	蓋	-	-	-	5	灰筒	黒筒	少	1F	1F	604	小笠状, 5 本(蓋)		
75	22	061	16	蓋	-	-	7.7	2.0	5筒	筒	少	1F1F	1F	482	取付加え+R, 1 取付加え+R		
75	23	061	13	蓋	-	-	6.7	3.8	5筒	灰筒	少	1F1F, 1F	1F	413	取付加え+R+L, 1 取付加え+R		
75	24	061	14	蓋	-	-	6.5	2.5	5筒	灰筒	少	1F1F	1F	31	取付加え+R+L, 1 取付加え+R		
75	25	061	11	蓋	-	-	8.0	2.4	5筒	灰筒	少	1F1F	1F	113, 422	取付加え+R+L, 1 取付加え+R		
75	26	061	12	蓋	-	-	8.9	2.5	5にぶい筒	にぶい筒	少	1F1F	1F	303, 1704	取付加え+R+L, 1 取付加え+R		
76	1	062	4	蓋	-	-	-	5	筒	にぶい筒	少	1F1F	1F	510	内外面成形		
76	2	062	6	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	306	内外面成形		
76	3	062	8	蓋	-	-	-	5	灰筒	にぶい筒	少	1F, 1F	1F	378	内外面成形		
76	4	062	5	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	116	内外面成形		
76	5	062	12	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	426	内外面成形		
76	6	062	13	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	421	内外面成形		
76	7	062	10	蓋	-	-	-	5	灰筒	黒筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	704	内外面成形		
76	8	062	9	蓋	-	-	-	5	黒筒	黒筒	少	1F	1F	602, 508	内外面成形		
76	9	062	7	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	筒	少	1F	1F	308	内外面成形		
76	10	062	11	蓋	-	-	-	5	黒筒	灰筒	少	1F	1F	141, 270	内外面成形		
76	11	062	14	蓋	-	-	-	5	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	7	内外面成形		
76	12	062	3	蓋	-	-	-	5	焼筒	焼筒	少	1F, 1F	1F, 1F	36	内外面成形		
77	13	062	1	小笠	8.3	5.4	7.4	80	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F	1F, 1F1F	577	外面成形		
77	14	062	24	小笠	-	-	-	10	にぶい筒	にぶい筒	少	1F1F	1F1F	588	外面成形		
77	15	062	28	蓋	18.3	-	-	5	にぶい筒	焼筒	少	1F, 1F	1F, 1F	14, 15			
78	1	063	1	高杯	21.0	11.1	13.8	70	筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	42, 92, 76, 96, 98, 102, 108, 118, 120, 12	内外面成形		
78	2	063	4	小笠	-	-	11.6	6.6	35筒	筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	1, 2, 4, 7, 8, 10	内外面成形		
78	3	063	7	小笠	8.7	-	-	20	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	8, 26, 32, 40, 68, 83, 88, 101, 103	内外面成形		
78	4	063	8	小笠	5.8	3.0	8.3	80	にぶい筒	にぶい筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	101, 103, 108, 112, 115, 117, 120, 124	内外面成形		
78	5	063	6	小笠	9.2	-	-	10	にぶい筒	にぶい筒	少	1F	1F	10, 46, 52	内外面成形		
78	6	063	2	蓋	14.8	-	6.9	10	赤筒	赤筒	少	1F, 1F1F	1F, 1F1F	77, 78, 79, 80, 128, 130	外面成形		
78	7	063	3	蓋	-	-	4.6	5.8	30筒	にぶい筒	少	1F	1F	104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111	内外面成形		
78	8	063	11	蓋	-	-	4.3	-	5筒	にぶい筒	少	1F1F	1F1F	39	内外面成形		
78	9	063	9	蓋	-	-	-	10	にぶい筒	にぶい筒	少	1F1F	1F1F	55, 127, 141, 142, 155, 157, 163, 166, 14	内外面成形		

原寸	Ma	高	大	次	形	口	底	形	寸	色	色	入	内	外	作	注	備
87	15	070	7	葉	9.4	-	12.0	40	黒	黒	少	少	少	少	少	内面縞部起り目、 袷合巻、内外表布 巻	内面縞部起り目、 袷合巻、内外表布 巻
87	16	070	2	葉	8.1	5.4	10.2	65	赤	赤	少	少	少	少	少	123, 660, 702, 804, 1116, 1188	袷部から裾部まで
87	17	070	9	葉	-	4.5	5.0	20	にぶい	赤	少	少	少	少	少	114, 396, 714, 807	
87	18	070	3	小型葉	-	4.4	10.9	50	黒	黒	少	少	少	少	少	302, 613, 619, 679, 725, 906, 1076, 1136, 1202	外面縞部
87	19	070	5	葉	-	5.2	11.0	70	にぶい	黒	少	少	少	少	少	125, 145, 147, 122, 148, 149, 152, 151, 247	外面縞部
87	20	070	4	葉	-	5.4	12.3	70	縞	縞	少	少	少	少	少	39, 1009, 1055, 1060, 1105, 1209, 1222, 1190	外面縞部
87	21	070	24	葉	-	8.6	-	10	黒	黒	少	少	少	少	少	47, 481, 737, 695, 804	内面縞部まで
87	22	070	20	台付葉	16.3	8.6	32.1	60	にぶい	黒	少	少	少	少	少	132, 62, 426, 428, 427, 548, 651, 664, 671, 688	外面縞部、二 次地巻
87	23	070	22	台付葉	18.6	10.0	32.8	80	にぶい	縞	少	少	少	少	少	130, 252, 272, 625, 1216, 1220, 15, 21, 302, 3	外面縞部、二 次地巻
87	24	070	23	台付葉	15.8	-	25.1	45	縞	赤	少	少	少	少	少	14, 254, 276, 323, 325, 367, 368, 355, 509, 510	外面縞部、二 次地巻
87	25	070	17	葉	14.8	-	9.2	20	赤	赤	少	少	少	少	少	294, 257, 259, 300, 311, 306, 427, 428, 4	外面縞部、二 次地巻
87	26	070	18	葉	17.4	-	8.7	10	黒	黒	少	少	少	少	少	79, 983, 404, 404, 406, 406, 725, 734, 822, 824, 829	外面縞部、二 次地巻
88	28	070	19	台付葉	16.2	9.0	25.1	70	縞	縞	少	少	少	少	少	302, 404, 426, 427, 548, 651, 664, 671, 688	外面縞部、二 次地巻
88	29	070	36	葉	13.0	-	24.8	25	縞	縞	少	少	少	少	少	23, 197, 203, 206, 201, 463, 546, 35, 776, 779,	外面縞部、二 次地巻
88	30	070	16	葉	16.4	6.5	22.6	55	縞	縞	少	少	少	少	少	723, 676, 675, 989, 673, 781, 1204, 1220, 1190	外面縞部、二 次地巻
88	31	070	15	葉	18.4	-	20.5	55	縞	縞	少	少	少	少	少	1191, 1161, 891, 726, 676, 464, 472, 78, 914,	外面縞部、二 次地巻
88	32	070	14	葉	17.6	-	12.2	30	縞	縞	少	少	少	少	少	382, 676, 1186, 1428, 1505, 1169, 1121, 1121,	外面縞部、二 次地巻
88	33	070	12	葉	13.0	-	11.2	20	縞	縞	少	少	少	少	少	1074, 1196, 1182	外面縞部、二 次地巻
88	34	070	13	葉	17.0	-	14.0	30	にぶい	縞	少	少	少	少	少	30, 709, 716, 718, 1026, 1062, 1053	外面縞部、二 次地巻
88	35	070	10	小型葉	10.0	5.0	11.7	30	縞	縞	少	少	少	少	少	80, 407, 481, 221, 222, 223, 224, 226, 227, 699, 6	外面縞部、二 次地巻
88	36	070	25	葉	-	6.5	3.1	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	42, 476, 960, 975, 981, 1076, 689, 693, 1197, 11	外面縞部、二 次地巻
89	1	071	1	高杯	14.1	16.9	9.1	60	縞	縞	少	少	少	少	少	33, 660, 619, 1206, 1220	外面縞部、二 次地巻
89	2	071	2	高杯	-	-	7.1	40	縞	縞	少	少	少	少	少	141, 178, 185, 476, 500, 524, 523, 526, 606, 67	外面縞部、二 次地巻
89	3	071	4	台付葉	-	-	5.0	20	にぶい	縞	少	少	少	少	少	5, 844, 873, 880, 889, 893, 875, 971, 1086, 10	外面縞部、二 次地巻
89	4	071	3	葉	-	-	9.7	20	縞	縞	少	少	少	少	少	6, 110, 1200	外面縞部、二 次地巻
89	5	071	7	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	258, 464, 525, 626, 646, 649, 653, 650, 669, 36	外面縞部、二 次地巻
89	6	071	8	葉	-	-	-	5	縞	縞	少	少	少	少	少	5, 10, 11, 12, 13, 116, 211, 263, 361, 365, 277,	外面縞部、二 次地巻
90	1	073	3	鉢	-	9.8	20.4	40	にぶい	縞	少	少	少	少	少	276, 187, 262, 597, 707	外面縞部、二 次地巻
90	2	073	2	葉	21.6	-	11.6	10	にぶい	縞	少	少	少	少	少	723, 605, 608, 609, 627, 627, 626, 626, 1214, 1	外面縞部、二 次地巻
90	3	073	1	小型葉	5.6	3.4	7.0	40	にぶい	縞	少	少	少	少	少	302, 106, 187, 426, 427, 517, 677, 677, 598, 59	外面縞部、二 次地巻
90	4	073	4	葉	-	-	7.2	3.8	5	縞	縞	少	少	少	少	62, 497, 496, 625, 616, 776, 788, 124, 492	外面縞部、二 次地巻
90	5	073	5	台付葉	-	-	-	5	縞	縞	少	少	少	少	少	22, 214, 215, 228, 228, 416, 416	外面縞部、二 次地巻
90	6	073	9	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	351	外面縞部、二 次地巻
90	7	073	11	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	40, 96, 96, 91, 83, 191, 128, 199, 110, 113	外面縞部、二 次地巻
90	8	073	10	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	44	外面縞部、二 次地巻
90	9	073	9	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	80	外面縞部、二 次地巻
90	10	073	8	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	4, 7, 8, 9, 13, 65, 69	外面縞部、二 次地巻
90	11	073	7	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	44, 57, 58	外面縞部、二 次地巻
90	12	073	6	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	119	外面縞部、二 次地巻
90	13	073	5	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	118	外面縞部、二 次地巻
90	14	073	4	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	104, 112	外面縞部、二 次地巻
90	15	073	3	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	40, 96, 96, 91, 83, 191, 128, 199, 110, 113	外面縞部、二 次地巻
90	16	073	2	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	44	外面縞部、二 次地巻
90	17	073	1	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	80	外面縞部、二 次地巻
91	1	074	5	葉	-	-	29.1	45	にぶい	縞	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	2	074	3	台付葉	8.6	10.6	5	にぶい	縞	縞	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	3	074	2	葉	-	-	16.5	70	赤	赤	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	4	074	1	葉	-	-	5.8	16.0	70	にぶい	縞	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	5	074	4	台付葉	-	-	23.6	60	縞	縞	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	6	074	9	葉	-	-	-	5	にぶい	縞	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	7	074	4	葉	18.6	-	8.5	15	縞	縞	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻
91	8	074	6	葉	18.2	-	12.2	15	赤	赤	少	少	少	少	少	46	外面縞部、二 次地巻

番号	%	距離	実高%	地形	口徑	底径	器高	底径%	色裏内面	色裏外面	風入材	調整内面	調整外面	製作符号	注記	備考		
93	3	076	3	皿	-	7.3	-	10	にぶい青銅	青	少	付	付	付	付	付	46, 50, 54, 58, 59, 114	内面調整済
93	4	076	7	葉	-	-	-	15	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	58, 59	外面調整
93	5	076	5	葉	-	-	10.2	20	にぶい青銅	にぶい青銅	石炭・長心金	少	付	付	付	付	136, 149	
93	6	076	8	葉	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	199	
93	7	076	1	杯	13.1	-	-	5	にぶい青	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	136	
93	8	076	2	杯	12.2	-	-	5	青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	136	内面調整済
94	1	077	4	皿	-	-	-	10	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	12	内面調整済
94	2	077	2	皿	-	-	-	5	銅	にぶい青	多	付	付	付	付	付	4	内面調整済, 3と同一形状
94	3	077	3	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	多	付	付	付	付	付	126	2と同一
94	4	077	1	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	青	少	付	付	付	付	付	5	
95	1	078	1	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	24	内外面調整
95	2	078	2	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	26	
96	1	079	1	皿	18.4	-	16.3	60	黒銅	黒銅	少	付	付	付	付	付	18	
96	2	079	2	皿	-	7.2	-	10	にぶい青銅	にぶい青	少	不明	付	付	付	付	11, 10	内面調整済
96	3	079	3	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	16	
97	1	080	1	皿	-	6.2	-	30	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	5	
97	2	080	2	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	黒銅	少	付	付	付	付	付	6, 10	輪郭調整
97	3	080	3	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	1	外面調整済, 調整
98	1	081	3	皿	-	7.0	20.3	70	にぶい青銅	青銅	少	付	付	付	付	付	162, 164, 165	外面調整, 内面調整済の元の形状
98	2	081	4	皿	12.1	-	-	10	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	126, 141	
98	3	081	2	小調整	7.4	-	7.6	70	青	青	少	付	付	付	付	付	179, 180	内面調整済
98	4	081	5	台付盤	-	-	-	5	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	179	
98	5	081	1	皿	-	8.0	6.8	10	黒銅	黒銅	少	付	付	付	付	付	179	外部調整, 内外面調整, 二次調整
98	6	081	7	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	にぶい青	少	不明	付	付	付	付	14	内面調整, 調整済
98	7	081	10	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	にぶい青	少	不明	付	付	付	付	92	内面調整
98	8	081	8	皿	-	-	-	5	にぶい青	明赤銅	少	付	付	付	付	付	37	
98	9	081	9	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	37	
99	1	082	2	皿	-	-	-	5	にぶい青	青	少	付	付	付	付	付	3	
99	2	082	3	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	多	付	付	付	付	付	17	内外面調整
99	3	082	4	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	黒銅	少	付	付	付	付	付	37	内外面調整
100	1	083	3	高杯	22.0	12.6	15.0	45	にぶい青銅	にぶい青銅	多	付	付	付	付	付	87, 117, 134, 137, 138, 139, 120, 127, 130, 123	内外面調整済, 単位
100	2	083	1	小調整	9.9	-	-	30	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	211	
100	3	083	2	小調整	-	4.7	-	30	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	211	
100	4	083	5	皿	11.1	-	-	15	青	青	少	付	付	付	付	付	135, 145, 132, 201, 445, 446	
100	5	083	6	皿	13.9	-	-	10	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	78, 177, 212, 213, 221, 238, 205, 488	内外面調整
101	6	083	11	台付盤	15.8	10.0	26.9	80	黒銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	20, 66, 98, 108, 140, 112, 148, 143, 117, 177	内面調整, 二次調整
101	7	083	7	皿	15.2	-	15.6	30	黒銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	222, 128, 81, 31, 42, 48	
101	8	083	4	高杯	-	-	-	30	にぶい青	青銅	少	付	付	付	付	付	7, 132, 124, 228, 488, 423	
101	9	083	8	台付盤	-	9.2	6.1	45	にぶい青銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	18, 78, 42, 108, 205, 227, 226, 207, 312, 208, 206, 214, 302, 303, 412, 413, 389	
101	10	083	9	台付盤	-	-	11.9	20	黒銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	12, 102, 115, 155, 122, 208, 214, 21, 224, 1	外部調整, 二次調整
101	11	083	10	台付盤	-	-	15.5	30	黒銅	にぶい青銅	少	付	付	付	付	付	20, 128, 132, 131, 201, 228, 229, 303, 19	外部調整, 二次調整
101	12	083	16	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	青	少	付	付	付	付	付	1, 262, 267, 445, 414, 415	
101	13	083	13	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	多	付	付	付	付	付	224	内面調整, 調整済
101	14	083	18	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	488, 494-78	内外面調整
101	15	083	14	皿	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	43	調整済?
101	16	083	15	皿	-	-	-	5	銅	黒銅	少	付	付	付	付	付	54, 207	
101	17	083	19	皿	-	-	-	5	にぶい青銅	にぶい青	少	付	付	付	付	付	312	
101	18	083	20	皿	-	-	-	5	にぶい青	銅	少	付	付	付	付	付	357	

期別	No.	品名	数量	形状	口径	口径	高さ	寸法	色調内面	色調外面	裏入れ	裏面内面	裏面外面	製作番号	注記	備考	
101	19	085	17	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付、付	背取高、裏面不 平、L2+E	313			
102	1	084	1	小瓶蓋向	-	10.0	7.2	30	にぶい青	にぶい青	少	付、付	L2+E	211			
102	2	084	2	高杯	-	-	6.4	35	にぶい青	にぶい青	少	付	L2+E	210		外面赤彫、字欠4筆 位	
102	3	084	3	杯	10.3	-	-	35	青	青	白色粉 状物多	付、付	L2+E	31,180,207			
102	4	084	4	小瓶蓋	7.7	3.6	5.0	85	青	青	にぶい青	少	付	L2+E	228,209		
102	5	084	8	蓋	-	6.2	-	20	にぶい青	にぶい青	白色粉 状物多	付	L2+E	108			
102	6	084	6	小瓶蓋	-	5.1	-	20	灰青	にぶい青	白色粉 状物多	付	L2+E	221,122			
102	7	084	5	蓋	10.8	4.0	11.7	40	にぶい青	青	少	付	L2+E	内面接合板	40,90,91,94,95,97,98,99,100,101,102,103,104,105,106,107,108,109,110,111	外面面磨かれて	
102	8	084	7	小瓶蓋	11.7	4.6	11.2	45	青	青	少	付	L2+E	内面接合板	35,100,107,108,109,110,111,146,147,150,151,152,153,154,155	外面彫物付、二次 焼成	
102	9	084	9	蓋	-	4.3	-	15	青	にぶい青	白色粉 状物多	付	L2+E	19			
102	10	084	10	蓋	-	5.1	-	15	にぶい青	にぶい青	白色粉 状物多	付	L2+E	228		内外面彫磨	
102	11	084	13	合付蓋	-	11.9	-	20	灰青	にぶい青	少	付	L2+E	84			
102	12	084	11	合付蓋	-	10.4	7.9	40	にぶい青	黒青	少	付	L2+E	80,82,150		内面磨出穴	
102	13	084	12	合付蓋	-	8.4	-	25	青	青	白色粉 状物多	付	L2+E	220			
103	14	084	17	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	彫物多	付	形状改良、附加糸 L2+E	223			
103	15	084	19	蓋	-	-	-	5	灰青	灰青	少	付	附加糸L2+E	220			
103	16	084	18	蓋	-	-	-	5	にぶい青	黒青	少	付	細い沈線、附加糸 L2+E	221			
103	17	084	20	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	附加糸L2+E、字本 とL2+E組本で印 付、附加糸 L2+E、L1	9			
104	1	085	2	蓋	-	5.4	5.9	5	灰青	黒青	少	付	附加糸、L2+E、L1	67,10			
104	2	085	1	蓋	-	11.2	-	15	にぶい青	にぶい青	少	不明	付	404,204-274		内外面彫磨	
104	3	085	6	蓋	-	-	-	5	黒青	青	少	付	附加糸L2+E、L1 彫物多	16,19			
104	4	085	8	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	彫物、0段赤糸・ L2+E入、口磨 附加糸L1	10			
104	5	085	12	蓋	-	-	-	5	灰青	灰青	少	付	附加糸L1	103			
104	6	085	13	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付、磨物改良、 沈線改良	103			
104	7	085	9	蓋	-	-	-	5	にぶい青	灰青	少	付	附加糸、L2+E、 L1、一部L1、L1 赤糸、附加物	61,70,73		内面劣化顕著	
104	8	085	7	蓋	-	-	-	5	灰青	黒青	少	付	附加糸L2+E	20,101,102			
104	9	085	11	蓋	-	-	-	5	灰青	にぶい青	少	付	附加糸L2+E	27,146			
104	10	085	10	蓋	-	-	-	5	にぶい青	灰青	少	付	無彫物	179			
105	1	086	2	蓋	-	5.4	7.1	60	にぶい青	にぶい青	少	付	無彫物	173		外面磨出穴	
105	2	086	3	合付蓋	-	14.4	-	10	黒青	にぶい青	少	付	付	130,135			
105	3	086	4	ミニチュア 土製	-	2.6	-	40	にぶい青	にぶい青	少	付	付	14			
105	4	086	1	蓋	-	9.0	26.8	40	黒青	黒青	少	付	L2+E	内面中工具痕	1,2,3,4,6,7,15,16,17,18,24,25,26,27,28,29,30,31,32,33,34,35,36,41,42,44,47,48,71,72,84,85,110,120,121,122,123,124,125,126,127,128,129,140,150,151,152,153	外面彫磨	
105	5	086	7	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
105	6	086	5	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
105	7	086	8	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
105	8	086	12	蓋	-	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
105	9	086	11	蓋	-	-	-	5	灰青	灰青	少	付	付	付	付	付	付
105	10	086	9	蓋	-	-	-	5	黒青	黒青	少	付	付	付	付	付	付
105	11	086	6	蓋	-	-	-	5	灰青	灰青	少	付	付	付	付	付	付
105	12	086	14	蓋	-	-	-	5	黒青	黒青	少	付	付	付	付	付	付
105	13	086	10	蓋	-	-	-	5	灰青	黒青	少	付	付	付	付	付	付
105	14	086	13	蓋	-	-	-	5	灰青	黒青	少	付	付	付	付	付	付
106	1	087	3	高杯	-	-	-	5	青	青	少	付	付	付	付	付	付
106	2	087	1	高杯	-	-	-	15	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
106	3	087	2	合付蓋	-	18.3	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
106	4	087	4	蓋	10.6	-	-	5	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
107	1	088	11	高杯	-	9.6	8.5	30	青	青	少	付	付	付	付	付	付
107	2	088	12	高杯	-	-	5.9	20	青	青	少	付	付	付	付	付	付
107	3	088	4	小瓶蓋	8.0	-	7.9	30	青	青	少	付	付	付	付	付	付
107	4	088	5	小瓶蓋	8.0	-	-	40	にぶい青	にぶい青	少	付	付	付	付	付	付
108	5	088	6	小瓶蓋	10.0	-	-	35	青	灰青	少	付	付	付	付	付	付

原形	No.	起形	変形	部	口形	起形	部	起形	色調	内部	色調	外部	人物	調新	調新	外部	製作備考	定形	備考	
108	6	088	2	小型	-	4.8	10.7	00	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	襦袢内部縫合	480		内室内部縫合、外部灰化物付着、着目	
108	7	088	7	襦	-	1.8	11.1	30	襦袢	襦袢	襦袢	少	不明	~???	~???		126, 128, 177, 226, 246, 342, 351	内室内部縫合		
108	8	088	3	襦	11.0	-	9.2	40	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ??, ~??, ~??, ~??, ~??	~???	~???		127, 340	内室内部縫合		
108	9	088	1	小型	6.4	4.4	8.6	70	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	??, ~???	~???	内室縫合	242		外室襦袢	
108	10	088	8	小型	-	6.8	-	30	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~??	??, ~??			156, 158, 178, 179, 224, 422	外室襦袢	
108	11	088	10	小型	-	5.8	-	25	襦袢	襦袢	襦袢	少	白色針状物多	??	~???			173		
108	12	088	9	小型	-	5.9	-	30	襦袢	襦袢	襦袢	少	~???	~???	~???			173, 346		
108	13	088	16	襦	-	7.0	3.2	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???	襦袢	78, 91, 120, 153, 168, 358-41		
108	14	088	25	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???		372	内室縫合	
108	15	088	21	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	??, 襦袢のちぎれ處かに残残す、襦袢工具の痕み襦袢内部付着、着目	~???		78, 412			
108	16	088	19	襦	-	-	-	10	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			412, 418	内室縫合	
108	17	088	22	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			327, 412		
108	18	088	23	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			95	412	
108	19	088	24	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~??	~???	~???			127	
108	20	088	27	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			102	20と同一	
108	21	088	29	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			400	27と同一	
108	22	088	26	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			61		
108	23	088	28	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			91		
108	24	088	17	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			191, 320	
108	25	088	18	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			200, 222, 335	
108	26	088	20	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			123	内室縫合
109	1	099	1	杯	13.3	-	-	25	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			1	内室縫合
109	2	099	4	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~??	~???	~???			1	
109	3	099	3	襦	-	-	-	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			1	外室縫合	
110	1	102	3	襦	11.8	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			14	
110	2	102	4	襦	-	5.0	1.8	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	~???	~???	~???	襦袢	1, 2, 10		
110	3	102	5	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			19	
110	4	102	6	襦	-	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			13	
111	1	014	12	杯	14.2	-	-	30	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			141	
111	2	014	8	杯	15.0	6.3	-	30	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			148, 215, 193	
111	3	014	6	杯	17.8	-	-	10	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			62, 113, 162	
112	4	014	7	杯	17.3	-	-	10	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			51, 38, 35	
112	5	014	1	杯	14.8	-	6.3	95	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			181	外室縫合	
112	6	014	2	杯	17.4	-	6.5	95	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			172	外室縫合、外室縫合、外室縫合	
112	7	014	3	杯	16.8	6.5	6.8	25	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			45, 65, 68, 70		
112	8	014	11	杯	15.4	-	-	30	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	白色針状物多	~???	~???			158, 157	
112	9	014	10	杯	14.7	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			41, 120	
112	10	014	9	杯	15.0	-	-	30	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			74		
112	11	014	13	小型	9.2	4.0	14.9	80	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~??	~???	~???			18, 112, 165, 79, 82, 84, 87, 89, 84, 89, 8	内室縫合
112	12	014	5	襦	16.3	-	-	5	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			6, 87, 23	
112	13	014	4	襦	20.3	-	-	10	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			15, 16, 36, 143	
112	14	014	16	ミニチュア上服	3.8	-	-	25	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			100		
114	1	018	11	杯	8.0	2.2	3.2	95	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			321		
114	2	018	6	杯	11.8	-	5.6	15	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			220, 228, 260, 265		
114	3	018	8	杯	12.2	-	5.6	20	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			228, 265, 266	外室縫合
114	4	018	5	杯	14.8	-	3.7	15	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			172, 253, 264	外室縫合	
114	5	018	4	杯	15.4	-	4.2	40	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			170, 170	外室縫合	
114	6	018	3	杯	15.0	-	5.8	20	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			878, 820	外室縫合、二次縫合	
114	7	018	1	杯	13.0	-	5.0	40	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			54, 102, 111, 112, 235, 338, 360	
114	8	018	16	襦	15.4	-	5.4	30	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			272, 220, 228, 270	外室縫合	
114	9	018	9	杯	9.0	-	2.6	5	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			180		
114	10	018	2	杯	-	-	2.5	30	襦袢	襦袢	襦袢	少	??	~???	~???			377	外室縫合	
114	11	018	12	襦	12.8	-	4.9	40	襦袢	襦袢	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			291, 297, 299	外室縫合	
114	12	018	13	襦	-	-	7.1	30	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			15, 167, 204, 247	
114	13	018	14	襦	-	-	5.4	20	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??	~???	~???			373	
114	14	018	27	小型	9.2	-	11.0	45	にょい	襦袢	にょい	襦袢	少	??, ~???	~???	~???			216	外室縫合、二次縫合

集展	年	通巻	展覧%	形式	口徑	高さ	幅高	通巻%	色調内面	色調外面	扉入れ	裏面内面	裏面外面	製作番号	注記	備考
114	15	018	26	小冊型	13.4	4.4	13.3	70	黒紙	赤紙	少	紙、紙	紙、紙、紙、紙	紙、紙、紙、紙	1,207,307,308,309	外面紙、二次焼成
114	16	018	18	冊	16.6	-	6.7	5	色紙	黒紙	少	紙、紙	紙、紙	305	外面紙	
114	17	018	17	冊	16.8	-	10.8	5	色紙	黒紙	少	紙、紙	紙、紙	80,258	外面紙、二次焼成	
114	18	018	28	冊	-	-	3.8	5	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	66,124,42	内外裏紙並小冊紙	
114	19	018	20	冊	-	-	7.0	2,3	色紙	色紙	少	紙	紙	104		
114	20	018	25	冊	-	-	5.4	13.9	35	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	317,390	外面紙、裏紙、二次焼成
114	21	018	19	杯	-	-	4.4	3.4	20	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	337	表面紙
114	22	018	24	杯	-	-	4.2	2.8	30	赤紙	黒紙	少	紙	紙	309,327	
114	23	018	21	冊	-	-	7.2	3.1	10	黒紙	黒紙	少	紙	紙	83	外面紙、二次焼成
114	24	018	23	冊	-	-	5.4	3.4	15	黒紙	黒紙	少	紙	紙	123,889,324	外面紙、二次焼成
114	25	018	22	冊	-	-	6.0	3.4	10	色紙	色紙	少	紙	紙	107,898,326	外面紙
114	26	018	48	冊	-	-	7.8	2.5	30	色紙	赤紙	少	紙	紙	328,383	
114	27	018	47	冊	-	-	6.2	2.9	5	色紙	色紙	少	紙	紙	308	
114	28	018	46	冊	-	-	15.0	4.9	10	色紙	色紙	少	紙	紙	189	
115	29	018	58	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	333	外面紙
115	30	018	54	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	180	外面紙
115	31	018	59	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	385	外面紙
115	32	018	51	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	150	
115	33	018	49	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	63	外面紙付
115	34	018	53	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	171,106	
115	35	018	57	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	243	外面紙付
115	36	018	52	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	166	
115	37	018	50	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	194	
115	38	018	55	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	204	
116	1	019	3	杯	14.8	-	4.0	10	赤紙	赤紙	少	紙	紙	内外紙	52,88,128,148,158,229	
116	2	019	2	高杯	20.5	19.6	15.9	55	赤紙	赤紙	少	紙、紙	紙、紙、紙、紙	紙、紙、紙、紙	154	内外紙
116	3	019	4	冊	8.2	-	3.5	15	赤紙	赤紙	少	紙	紙	内外紙	12,48,152	
116	4	019	1	冊	14.6	-	25.8	70	赤紙	赤紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	22,24,48,49,78,91,92,94	外面紙、外面紙
116	5	019	15	冊	15.4	8.5	22.9	50	色紙	色紙	少	紙、紙	紙、紙、紙、紙	紙、紙、紙、紙	15,71,80,81,82,84,88,114,117,131,144,198,183,188,172,87,218,229	外面紙、二次焼成
116	6	019	9	冊	-	-	6.0	3.3	5	色紙	色紙	少	紙	紙	49	
116	7	019	10	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	73	外面紙付
116	8	019	11	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	83	
116	9	019	12	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	53	外面紙付
116	10	019	13	冊	-	-	-	-	5	色紙	色紙	少	紙	紙	183	外面紙付
116	11	019	14	冊	-	-	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	2,182	
117	1	036	11	杯	12.9	-	-	15	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	439	内外紙付	
117	2	036	16	杯	11.7	-	-	15	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	437		
117	3	036	19	杯	-	-	-	80	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	36,51,56,407,418,445,458	
117	4	036	17	杯	14.3	-	-	15	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	388	
117	5	036	15	杯	14.6	-	-	10	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	78,140,280	
117	6	036	10	杯	-	-	-	10	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	301	
117	7	036	6	杯	14.5	-	-	10	色紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	44	
117	8	036	5	杯	11.4	-	-	30	色紙	色紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	64	
117	9	036	13	杯	10.5	-	-	20	色紙	紙、紙	少	紙	紙	紙、紙	636,651,633,638	
117	10	036	14	杯	11.7	-	-	4.4	20	紙、紙	紙、紙	少	紙	紙	382,634,636	
117	11	036	4	杯	12.5	-	-	30	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	484	
117	12	036	18	杯	13.6	-	-	5	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	377	
117	13	036	12	杯	13.1	-	-	15	紙、紙	色紙	少	紙	紙	紙、紙	68,251,380	
117	14	036	9	杯	15.2	-	-	10	色紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	343	
117	15	036	8	杯	-	-	-	10	色紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	381,614	内面紙
117	16	036	7	杯	13.1	-	-	20	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	11,102,161,171,179,181,183,334	内面紙
118	17	036	1	冊	16.2	6.4	4.7	80	色紙	色紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	498,471,470	外面紙、二次焼成、内面紙
118	18	036	2	冊	18.2	7.0	35.0	30	紙、紙	紙、紙	少	紙、紙	紙、紙	紙、紙	11,43,154,213,228,231,236,271,274,277,278,411,417,461,461,463,468,482,483,484,488,471,51,108,222,22,2,209,275,275,276,338	

地区	%	通算	実働日	産別	口杯	給仕	産高	産厚	色割内面	色割外面	黒入物	割取内面	割取外面	製作番号	仕組	備考	
118	19	036	20	製	-	-	-	5	灰濁	黒濁	少	少	割取外L+2・L 2次行機等		203,412		
118	20	036	22	製	-	-	-	5	濁	灰濁	少	少	割取外L+2・L		47		
118	21	036	28	製	-	-	-	5	濁	灰濁	少	少	割取外L+2・L		8,82		
118	22	036	30	製	-	-	-	5	にぶい濁	にぶい濁	少	少	付、割取外平行沈 降		26		
118	23	036	27	製	-	-	-	5	にぶい濁	灰濁	少	少	附加品、基本不焼、 即取文		313,221		
120	1	038	23	杯	12.2	-	4.4	80	濁灰	黒濁	237,砂 粒多	少	少	少	277,228,229,264,467,470		
120	2	038	20	杯	11.6	-	4.4	100	にぶい濁	灰濁、にぶ い濁	237,砂 粒多	少	少	少	内外面D1調整 477,428,491		
120	3	038	21	杯	12.9	-	4.2	95	にぶい濁	にぶい濁	237,砂 粒多	少	少	少	内外面D1調整、内 面調整?		
120	4	038	22	杯	13.4	-	5.5	100	黒濁	黒濁、電気 濁灰	砂粒多 少	少	少	少	409		
120	5	038	28	杯	12.6	-	3.4	15	灰濁	濁灰	砂粒多 少	少	少	少	88,129		
120	6	038	24	杯	14.5	-	4.3	20	にぶい濁	灰濁	砂粒多 少	少	少	少	外面D1調整 187,284		
120	7	038	25	杯	14.4	-	4.0	15	にぶい濁	にぶい濁	237,砂 粒多	少	少	少	214		
120	8	038	27	杯	14.0	-	4.4	20	にぶい濁	黒濁、濁	砂粒多 少	少	少	少	108,110,113		
120	9	038	26	杯	13.9	-	6.8	10	灰濁	にぶい濁	砂粒多 少	少	少	少	72		
120	10	038	18	鉢	18.0	6.1	7.1	60	赤濁	赤濁	少	少	少	少	216,264,266,300,317,336,423,35,482	外面L、二次焼成、底 層静置付内面静	
120	11	038	10	皿	24.6	-	18.2	15	にぶい濁	にぶい濁	237,砂 粒多	少	少	少	188,189,201,207,173,219	外面D1調整	
120	12	038	3	皿	13.6	6.8	15.8	85	赤濁	赤濁	少	少	少	少	丸皿にぶい	23,35,38,40,42,144,151,286,402,433,437,4	
120	13	038	2	皿	15.0	7.8	20.1	85	にぶい濁	にぶい濁	少	少	少	少	460	外面粘土付、一部底 層、非粘土付内面静置	
121	14	038	1	皿	20.8	6.1	28.0	65	にぶい濁	にぶい濁	少	少	少	少	385	外面L、割取内面、二 次焼成	
121	15	038	8	皿	18.6	-	25.6	80	にぶい濁	にぶい濁	237砂 粒多	少	少	少	259,260,333,384	外面L、割取内面、二 次焼成	
121	16	038	15	皿	21.0	-	8.9	10	黒濁	濁灰	237,砂 粒多	少	少	少	88,168,157,274	内外面D1調整	
121	17	038	16	皿	13.5	-	13.0	25	黒濁	黒濁	少	少	少	少	38,131,214,221,233		
121	18	038	5	皿	22.4	-	14.6	5	濁灰	濁灰	237,砂 粒多	少	少	少	124,149,155,147		
121	19	038	9	皿	15.2	-	13.4	30	にぶい濁	にぶい濁	少	少	少	少	216,264,402,433,406,467	外面L、黒濁、二次焼 成	
121	20	038	13	皿	17.6	-	9.2	15	濁灰	灰濁	砂粒多 少	少	少	少	88,119,135,185,128	内外面D1調整	
121	21	038	4	皿	22.0	-	14.5	20	黒濁	黒濁	少	少	少	少	288	外側静置付	
121	22	038	11	皿	21.4	-	6.2	10	濁灰	濁灰	雲母、砂 粒多	少	少	少	465	外側静置付	
121	23	038	8	皿	17.0	-	6.2	20	濁濁	濁濁	少	少	少	少	217,400	外側黒濁	
121	24	038	12	皿	14.8	-	5.5	5	灰濁	にぶい濁	砂粒多 少	少	少	少	302	内外面D1調整	
121	25	038	14	皿	17.2	-	5.3	5	濁灰	灰濁	237,砂 粒多	少	少	少	90	内外面D1調整	
122	26	038	7	皿	-	8.2	9.2	15	濁灰	濁灰	砂粒多 少	少	少	少	409		
122	27	038	17	皿	-	3.8	8.0	40	赤濁	濁灰	少	少	少	少	608	内側静置付	
122	28	038	19	皿	-	5.3	5.6	10	濁濁	灰濁、電気 濁灰	砂粒多 少	少	少	少	88,437,434,440		
122	29	038	29	手摺皿	6.7	2.6	3.8	100	濁灰	灰濁	砂粒多 少	少	少	少	190	外側静置付	
123	1	040	4	杯	11.5	-	-	30	黒濁	黒濁	少	少	少	少	17,82,84,123		
123	2	040	3	杯	12.2	-	3.3	30	濁	濁	少	少	少	少	38,39,40,91,95		
123	3	040	5	杯	12.5	-	-	15	電機灰	濁灰	少	少	少	少	内外面黒色処理	7	
123	4	040	8	杯	-	-	-	25	濁灰	にぶい濁	少	少	少	少	88,77,78,107		
123	5	040	7	杯	-	-	-	15	濁	にぶい濁	少	少	少	少	外面赤影?	82,108,121	
124	1	075	-	製	-	-	-	5	にぶい濁	にぶい濁	少	少	少	少	26		
124	2	075	-	製	-	-	-	5	濁	にぶい濁	少	少	少	少	26		
126	1	046	1	杯	11.2	-	-	5	明赤濁	にぶい濁	少	少	少	少	8		
127	1	046	1	皿	-	-	-	30.2	黒濁	赤濁	少	少	少	少	外面赤影	4,11,41,94,72,76,78,80	
129	1	059	4	皿	-	-	-	16.3	赤濁	赤濁	少	少	少	少	外面赤影	13,27,96,1,32	
129	2	059	2	皿	-	8.3	20.3	75	黒濁	黒濁	少	少	少	少	附加品+L+2L 底層木層焼	75,90-120,282,223	
129	3	059	3	小皿型	11.2	-	13.0	60	濁濁	黒濁	少	少	少	少	少	24,48,98,92,49,43,29,42,91,78,79,35	外側L、二次焼成
129	4	059	1	皿	22.0	7.7	22.7	90	濁	にぶい濁	少	少	少	少	口筒+静置工具? の組み		
129	5	059	5	皿	9.1	-	-	5	濁	にぶい濁	少	少	少	少	附加品L+割本焼 加、灰状粉付の5 箇文筒文、円形割 取、黒濁、1段3 本+L	18,20,22,44,45	
129	6	059	6	皿	-	-	-	5	にぶい濁	にぶい濁	黒石多 少	少	少	少	附加品L+割本焼 加、灰状粉付の5 箇文筒文、円形割 取、黒濁、1段3 本+L	割取静置	
129	7	059	7	皿	-	-	-	5	にぶい濁	にぶい濁	少	少	少	少	附加品L+L 山の沈降、付品L 割取文、1段+L	32	

器名	№	器種	実測№	器形	口径	器径	器高	器容ℓ	色裏内面	色裏外面	胎人物	裏面内面	裏面外面	製作番号	注記	備考
129	8	059	-	壺	-	-	-	5	にぶい明漆	明漆黒	少	1F, 1	胎文	内面赤形	28	
131	1	072	1	杯	12.3	7.3	3.8	75	にぶい漆	にぶい漆	少	1F, 491F	491X 1, 1F	21		内外面黒付着、表良平安
131	2	072	2	高杯	5.1	9.4	5.4	100	にぶい漆	灰黄黒	少	1F, 491F	491X 1, 1F	22		特殊な高杯
131	3	072	4	壺	-	-	-	5	にぶい漆	にぶい漆	少	1F	草彫羽状、棒状浮文	40		11層下段横文型体 圧痕、内面赤形
131	4	072	3	壺	-	-	-	5	にぶい漆	にぶい漆	少	1F	附加彫13+1・1	20		
133	1	321	1	高杯	-	16.0	9.9	60	にぶい漆	にぶい漆	砂粒多	1F, 491F	1F, 491F	23		内外面の型跡、脚1 部内面への痕
-	-	001	A-1	壺	-	-	-	5	にぶい漆	にぶい漆	少	491F	13 8, 1F	201		二次焼成、砂黒い、因 は赤褐色
-	-	001	A-2	壺	-	-	-	5	にぶい漆	灰黄	砂粒多	491F	1F	202		二次焼成、砂黒い、因 は赤褐色
-	-	002	5	壺	-	-	-	5	漆	にぶい漆	少	1F	草彫羽状、円形浮文	25-4		
-	-	003	7	壺	-	-	-	5	にぶい漆	にぶい漆	砂粒多	491F	13 8, 1F	203, 204		二次焼成、砂黒い、因 は赤褐色
-	-	052	7	壺	-	-	-	5	にぶい漆	にぶい漆	少	1F	草彫羽状、圧痕跡 体不明、1段2条	26		3と同一側体

第10表 土製品

第図	No.	遺構	注記	種類	計測値	重量	備考
18	20	001	-	土製甕玉	-	2.2g	朱塗り
22	34	003	0259	土製甕玉	長径20.5mm短径20.1mm最大長19.0mm	6.2g	朱塗り
18	16	001	0082	土玉	長径37.8mm短径35.4mm最大長40.4mm	38.3g	
18	17	001	0184	土玉	長径37.0mm短径34.6mm最大長40.3mm	40.0g	
25	38	004	0295	土玉	長径38.4mm短径37.8mm最大長39.8mm	44.2g	
38	12	017	0055	土玉	長径29.1mm短径26.9mm最大長22.5mm	18.2g	
22	33	003	0152	紡錘車	上面径44.0mm下面径40.0mm最大高13.2mm	32.9g	
85	24	069	0887	紡錘車	最大高7.7mm	7.6g	土器片転用
133	2	表探	0002	紡錘車	最大高20.8mm	10.1g	半欠
25	36	004	0083	ミニチュア土器	口径10.3mm底径9.2mm器高21.9mm	-	壺形, 中央
25	35	004	0380	ミニチュア土器	口径31.0mm底径13.0mm器高20.8mm	-	鉢形
77	16	062	0114	ミニチュア土器	口径46.0mm底径25.0mm器高25.0mm	-	鉢形
129	9	059	0077	特殊土器	-	-	羽口?
118	24	036	0467	支脚	底径100.7mm最大高210.4mm	1220.0g	
118	25	036	0468	支脚	底径71.0mm最大高120.3mm	450.0g	
18	18	001	0311	転用砥石	長径54.5mm短径33.0mm	16.4g	土器片転用
22	36	003	0001	転用砥石	長径43.6mm短径29.0mm	11.1g	土器片転用
36	6	015	0014	転用砥石	長径38.9mm短径19.7mm	6.6g	土器片転用
-	-	001	0102	焼成粘土塊	長径35.6mm短径34.1mm	6.7g	
-	-	001	0296	焼成粘土塊	長径26.0mm短径22.3mm	5.7g	
18	19	001	0297	焼成粘土塊	長径31.0mm短径26.9mm	13.1g	
22	35	003	0199	焼成粘土塊	長径37.8mm短径17.6mm	5.9g	
-	-	014	0193	焼成粘土塊	長径28.7mm短径22.1mm	4.2g	
-	-	020	0049	焼成粘土塊	長径35.8mm短径27.3mm	7.4g	
46	3	031	0014	焼成粘土塊	長径36.5mm短径28.4mm	14.6g	
122	32	038	0180	焼成粘土塊	長径34.2mm短径8.3mm	2.5g	
123	6	040	0025	焼成粘土塊	長径17.5mm短径6.2mm	0.7g	
123	7	040	0028	焼成粘土塊	長径13.5mm短径10.1mm	1.4g	
25	37	004	0161	焼成粘土塊	長径14.5mm短径13.7mm	3.7g	サイコロ状
-	-	064	0207	焼成粘土塊	長径32.0mm短径10.0mm	3.2g	
77	17	062	0666	紡錘車	最大高8.1mm	14.8g	土器片転用
-	-	018	0218	化石を含む土塊	-	18.6g	写真のみ
-	-	018	0280	化石を含む土塊	-	18.4g	写真のみ
-	-	018	0380	化石を含む土塊	-	12.4g	写真のみ
61	8	051	0059	転用砥石	長径45.5mm短径36.9mm	12.5g	
122	33	038	0400	支脚	底径112.2mm最大高180.0mm	1290.0g	
78	12	063	0108	ミニチュア土器	底径3.4mm	-	高杯形

第11表 玉類

第四	No.	遺構	注記	種類	石材	色調	計測値	重量	備考
126	3	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青みの緑	径4.3mm最大高3.0mm	0.07g	
126	4	026	0001	ガラス玉	ガラス	きえた青緑	径4.2mm最大高2.3mm	0.05g	
126	5	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.8mm最大高2.3mm	0.05g	
126	6	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.5mm最大高2.2mm	0.04g	
126	7	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.9mm最大高2.5mm	0.05g	
126	8	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径3.8mm最大高2.9mm	0.05g	
126	9	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径3.6mm最大高2.6mm	0.05g	
126	10	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径3.9mm最大高2.1mm	0.05g	
126	11	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径3.4mm最大高2.7mm	0.05g	
126	12	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径4.0mm最大高2.2mm	0.04g	
126	13	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい青	径3.6mm最大高2.6mm	0.05g	
126	14	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい青	径3.8mm最大高2.6mm	0.05g	
126	15	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい青	径3.6mm最大高2.6mm	0.05g	
126	16	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径3.9mm最大高2.0mm	0.04g	
126	17	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径3.8mm最大高1.8mm	0.03g	
126	18	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径4.1mm最大高2.5mm	0.05g	
126	19	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径3.9mm最大高2.4mm	0.05g	
126	20	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい緑みの青	径3.5mm最大高2.2mm	0.04g	
126	21	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい緑みの青	径3.3mm最大高2.3mm	0.04g	
126	22	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい緑みの青	径3.3mm最大高2.9mm	0.03g	
126	23	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい緑みの青	径3.7mm最大高2.8mm	0.05g	
126	24	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径3.7mm最大高1.9mm	0.04g	
126	25	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径4.1mm最大高2.2mm	0.04g	
126	26	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青	径3.6mm最大高1.0mm	0.03g	
126	27	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.5mm最大高2.9mm	0.03g	
126	28	026	0001	ガラス玉	ガラス	こい青	径3.6mm最大高2.7mm	0.04g	
126	29	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.6mm最大高1.8mm	0.03g	
126	30	026	0001	ガラス玉	ガラス	暗い緑みの青	径3.9mm最大高2.0mm	0.04g	
126	31	026	0001	ガラス玉	ガラス	にぶい青緑	-	0.01g	欠損品
128	1	047	0003	ガラス玉	ガラス	にぶい緑	径3.7mm最大高1.9mm	0.03g	
128	2	047	0004	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.5mm最大高2.0mm	0.03g	
128	3	047	0005	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.8mm最大高1.7mm	0.03g	
128	4	047	0006	ガラス玉	ガラス	にぶい青緑	径3.6mm最大高2.6mm	0.05g	
-	-	047	0007	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	-	0.01g	
128	5	047	0008	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.2mm最大高2.0mm	0.03g	
128	6	047	0009	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.5mm最大高1.7mm	0.03g	
128	7	047	0010	ガラス玉	ガラス	にぶい緑	径3.3mm最大高2.7mm	0.04g	
128	8	047	0011	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.6mm最大高2.3mm	0.04g	
128	9	047	0012	ガラス玉	ガラス	明るい青緑	径3.9mm最大高2.1mm	0.04g	
112	15	014	0134	管玉	滑石?	灰褐	長径5.1mm短径5.1mm最大長21.6mm	0.86g	片面穿孔
50	7	035	0026	管玉	緑色凝灰岩	淡緑	長径2.7mm短径2.7mm最大長15.0mm	0.21g	片面穿孔
50	8	035	0027	管玉	緑色凝灰岩	深緑	長径2.5mm短径2.5mm最大長16.0mm	0.18g	片面穿孔?
115	39	018	0191	白玉		オリーブみのグレイ	径6.5mm最大高4.0mm	0.27g	
115	40	018	0197	白玉		緑みのグレイ	径5.8mm最大高2.2mm	0.13g	
115	41	018	0283	白玉		緑みのグレイ	径6.9mm最大高2.8mm	0.17g	
115	42	018	0288	白玉		オリーブみのグレイ	径5.5mm最大高3.5mm	0.17g	
115	43	018	0384	白玉		オリーブみのグレイ	径4.4mm最大高2.8mm	0.10g	
133	3	29M	0005	白玉		オリーブみのグレイ	径5.1mm最大高2.1mm	0.09g	

第12表 石製模造品

第図	No	遺構	注記	種類	石材	色調	計測値	重量	観察	備考
22	37	003	0126	双孔円板	滑石	灰	最大幅(25.8mm)最大長(21.5mm)	2.2g		平欠
112	16	014	0166	勾玉	滑石	オリーブ 灰	最大幅31.7mm最大長25.3mm最大厚2.9mm断面長径9.5mm断面短径2.9mm	1.6g	両面入念に研磨、腹面切削?	
112	17	014	0061	剣形	滑石	灰	最大幅18.9mm最大長(21.8mm)	2.9g		下半欠損
112	18	014	0211	双孔円板	滑石	緑灰	最大幅27.0mm最大長23.7mm	4.1g		
112	19	014	0105	不明	滑石	灰オリーブ		0.9g		小片
38	13	017	0030	双孔円板	滑石	オリーブ 灰	最大幅21.3mm最大長(16.9mm)	2.3g		一部欠
38	14	017	0021	双孔円板	滑石	灰	最大幅24.7mm最大長21.8mm	3.4g	7・8は形状類似	
115	44	018	0230	双孔円板	滑石	灰黄褐	最大幅24.8mm最大長(22.1mm)	4.5g	7・8は形状類似	一部欠
115	45	018	0285	双孔円板	滑石	暗緑灰	最大幅(19.4mm)最大長18.6mm	2.2g		
115	46	018	0326	双孔円板	滑石	灰	最大幅20.0mm最大長(18.2mm)	2.7g		
115	47	018	0317	双孔円板	滑石	緑灰	最大幅(27.3mm)最大長27.5mm	4.5g	両面穿孔	一部欠
115	48	018	0325	双孔円板	滑石	暗緑灰	最大幅38.1mm最大長38.7mm	8.1g	両面仕上げ研磨、両の面入念、両面穿孔	穿孔途中1
115	49	018	0338	双孔円板	滑石	灰・褐灰	最大幅(27.3mm)最大長(27.5mm)	7.7g	両面穿孔	
115	50	018	0327	勾玉	滑石	暗緑灰	最大幅14.5mm最大長25.2mm最大厚3.1mm断面長径11.2mm断面短径3.1mm	1.7g	腹・背面切削	
116	12	019	0123	剣形	滑石	暗灰黄	最大幅17.7mm最大長38.1mm	4.1g	全面ごく荒い線状痕	
116	13	019	0191	双孔円板	滑石	灰	最大幅28.0mm最大長27.3mm	5.7g	両面穿孔, 側面多面状	
41	41	020	0075	双孔円板	滑石	褐灰	最大幅28.8mm最大長(26.8mm)	6.5g	両面穿孔, 側面多面状	一部欠
41	42	020	0029	未成品?	滑石	緑灰	最大幅(30.7mm)最大長(26.8mm)	8.0g	擦切切断痕、穿孔あり	連続的な切傷、一部研磨
133	4	28M	0002	双孔円板	滑石	暗緑灰	最大幅23.7mm最大長(23.1mm)	3.5g	側面多面状	
133	5	東側住 簾	0002	双孔円板	滑石	灰	最大幅26.0mm最大長26.3mm	4.7g	側面多面状	

第13表 赤生・古墳時代石器

第図	No.	遺構	注記	種類	石材	観察事項	計測値	重量
19	26	001	0204	磨/砥石類	流紋岩	磨石類?使用痕不明瞭。被熱後破損	63mm, 52mm, 23mm	140g
19	25	001	0308	磨/砥石類	砂岩	研磨痕?+敲打痕。破損前・後に被熱	52mm, 51mm, 30mm	170g
19	24	001	0202	磨/砥石類	雲母片岩	両側縁研磨+先端敲打痕。縄文時代の石剣転用か	18mm, 34mm, 17mm	200g
20	5	002	0024	磨/砥石類	ガラス質	敲打?石核? 周辺から割離。石材硬質。発泡した明緑色の部分あり	13mm, 76mm, 26mm	400g
20	6	002	0024	磨/砥石類	シルト岩	敲打痕	90mm, 93mm, 74mm	1040g
25	41	004	0174	磨/砥石類	砂岩	平面敲打痕+研磨痕?	123mm, 88mm, 52mm	765g
25	42	004	0446	磨/砥石類	シルト質 粘板岩	敲打痕+研磨痕?	111mm, 83mm, 41mm	500g
26	3	005	0116	磨/砥石類	砂岩	磨石類?使用痕不明瞭	100mm, 47mm, 26mm	190g
26	2	005	0266	磨/砥石類	砂岩	両端敲打痕。一部破損後、敲打前に被熱	74mm, 35mm, 24mm	90g
30	7	008	0024	磨/砥石類	砂岩	砥石。磨面4, 他は破損面	25mm, 39mm, 10mm	15g
35	7	013	0127	磨/砥石類	砂岩	両端と両面敲打痕+一部研磨痕	89mm, 65mm, 52mm	435g
35	8	013	0128	磨/砥石類	シルト岩	周縁に黒色付着物。2平面平滑化と新鮮面露	45mm, 69mm, 31mm	210g
36	7	015	0016	磨/砥石類	砂岩	石皿or台石状。両面準減と平滑化	129mm, 79mm, 51mm	720g
38	15	017	0019	磨/砥石類	石英斑岩	被熱顕著。平面に敲打痕?	61mm, 61mm, 53mm	250g
115	51	018	0251	石核	頁岩	石核? 石製品石材?	82mm, 40mm, 29mm	145g
115	52	018	0337	磨/砥石類	流紋岩	砥面4, 破損面1。先端切削多, 劣化	84mm, 82mm, 56mm	540g
115	53	018	0338	磨/砥石類	石英斑岩	一端粗面化。敲打?	57mm, 30mm, 10mm	30g
41	40	020	0384	磨/砥石類	流紋岩	周縁に比へ2平面平滑	93mm, 65mm, 33mm	285g
47	1	032	0014	磨/砥石類	砂岩	砥石。砥面4, 破面を含む。1面荒れ	44mm, 27mm, 18mm	35g
122	31	038	0471	磨/砥石類	凝灰岩	砥石。砥面4, 小口1面破損。純白色, 軟質石材	18mm, 19mm, 14mm	6g
123	8	040	0089	磨/砥石類	不明	砥石小片。砥面2	39mm, 18mm, 5mm	4g
65	15	055	0156	磨/砥石類	砂岩	一端敲打痕。破損後被熱	59mm, 44mm, 19mm	80g
73	21	060	0137	石皿	砂岩	石皿or台石状。両面と側面1面準減と平滑化。両面僅む。被熱	126mm, 104mm, 61mm	1130g
73	23	060	0033	磨/砥石類	泥岩	砥石or磨石類小片。平滑凸面1	33mm, 28mm, 5mm	6g
73	22	060	0357	磨/砥石類	砂岩	砥石小片。平坦な砥面1	33mm, 23mm, 10mm	7g
77	18	062	0519	磨/砥石類	砂岩	平滑な凸面に切傷。鉄分付着あり	68mm, 36mm, 22mm	55g
-	-	064	0328	火打石	石英	火打石?後の一部に潰れ	37mm, 34mm, 27mm	38g
81	8	066	0041	磨/砥石類	砂岩	周縁粗。平滑平滑。一部平坦に準減?	98mm, 96mm, 20mm	300g
85	26	069	0758	磨/砥石類	砂岩	砥石小片。凸状砥面1	41mm, 14mm, 8mm	5g
85	25	069	1160	磨/砥石類	砂岩	砥石小片。凸状砥面1	30mm, 26mm, 14mm	11g
92	7	074	0062	磨/砥石類	粘板岩	砥石小片。平坦な砥面1。切傷あり。鏝による切断面1	38mm, 35mm, 8mm	12g
99	4	082	0015	磨/砥石類	チャート	一端若干粗面化	92mm, 40mm, 25mm	165g
101	20	083	0470	磨/砥石類	砂岩	砥石。平坦2+凸状2砥面。両小口破損	41mm, 38mm, 21mm	55g
103	18	084	0227	磨/砥石類	砂岩	砥石。平坦面1と側面に一部砥面。裏面と側面1面は平坦加粗面。他は破面	152mm, 101mm, 48mm	955g
108	33	088	0361	磨/砥石類	砂岩	砥石。平坦2+凸状1砥面。他は破損	91mm, 54mm, 24mm	140g
133	6	094	0001	磨/砥石類	安山岩	砥石。砥面1。金属切断面3のうち1面に切傷。切断は鏝でなく、刀子等による	27mm, 24mm, 11mm	26g
110	5	102	0016	磨/砥石類	粘板岩	両端粗面化	68mm, 27mm, 10mm	27g
115	54	018	0328	磨/砥石類	砂岩	砥石。両面と周縁ほぼ全体砥面。多方向の線状痕	45mm, 51mm, 8mm	25g
-	-	077	0009	火打石	石英	後のほぼ全部磨耗。表面荒れる。金属付着	30mm, 26mm, 15mm	13g

第14表 軽石

第図	No.	遺構	注記番号	種類	数	計測値	重量	磨耗痕	備考
18	21	001	0298	磨/砥石類	1	27mm, 66mm, 52mm	31g	平状3	
18	22	001	0175	磨/砥石類	1	45mm, 46mm, 34mm	14g	平状6	
18	23	001	0148	磨/砥石類	1	29mm, 23mm, 20mm	2g	平状5, 切歯1面	
-	-	001	-	小礫/小片	2	10mm級2			
20	7	002	0006	磨/砥石類	1	34mm, 47mm, 37mm	12g	平状3, 溝状2+	
22	38	003	0014	磨/砥石類	1	75mm, 47mm, 31mm	19g	平状2	ブラシ目で磨耗面不明瞭
-	-	004	0377	小礫/小片	2	10mm級, 20mm級		平状5	
27	28	005	0024	磨/砥石類	1	72×46×39	23g	平状4	
27	29	005	0689	磨/砥石類	1	32×32×19	4g	平状4, 切歯2面	
-	-	005	0711	小礫/小片	3	10mm級2			
38	16	017	0156	小礫/小片	1	19mm, 22mm, 16mm	1g		
115	55	018	0284	磨/砥石類	1	23mm, 23mm, 14mm	2g	平状1	小破片
-	-	018	0287	小礫/小片	2	10mm級2			
43	6	028	0058	小礫/小片	1	35mm, 26mm, 15mm	4g		
-	-	036	0241	小礫/小片	1	10mm級			
-	-	044	0011, 61	小礫/小片	2	10mm級2			
-	-	045	別肥	小礫/小片	85	10mm級24, 20mm級62			一部は小片
-	-	049	0017, 21	小礫/小片	2	10mm級2			
-	-	051	0085	小礫/小片	1	10mm級			磨面3?
69	39	056	0782	磨/砥石類	1	46mm, 40mm, 36mm	12g	平状1+	ブラシ目で磨耗面不明瞭
69	40	056	0010	小礫/小片	1	25mm, 20mm, 14mm	1g		
-	-	058	0028	小礫/小片	1	10mm級			
129	11	059	0064	磨/砥石類	1	55mm, 54mm, 33mm	11g	?	欠損面3, 遺存面ブラシ目
129	10	059	0074	磨/砥石類	1	48mm, 39mm, 39mm	9g	孔状11, 溝状2	
73	24	060	0171	磨/砥石類	1	30mm, 29mm, 18mm	3g	平状2	破片
-	-	061	0027	小礫/小片	1	19×18×16			千葉市鎌取遺跡例似る
-	-	061	0257, 299, 33	小礫/小片	8	0mm級1, 10mm級7			一部は小片
-	-	062	0295, 342, 37	小礫/小片	6	10mm級4, 20mm級2			一部は小片
-	-	063	0198	小礫/小片	2	10mm級, 20mm級			
79	11	064	0263	小礫/小片	1	30mm, 29mm, 17mm	2g		
-	-	064	0429, 474, 47	小礫/小片	3	10mm級3			
80	15	065	0113	磨/砥石類	1	57mm, 45mm, 29mm	8g	孔状2, 細い曲線溝1	欠損面5, 遺存面ブラシ目
-	-	065	0026	小礫/小片	1	20mm級			
83	19	068	0033	磨/砥石類	1	38mm, 35mm, 19mm	3g	凹状2, 平状1	
-	-	068	052, 221	小礫/小片	6	10mm級2, 20mm級4			一部は小片
-	-	081	0083	小礫/小片	1	48×38×31			
-	-	081	0074	小礫/小片	1	29×21×17			
118	26	036	0038	磨/砥石類		52mm, 30mm, 22mm	11g		
85	29	069	0770	小礫/小片		19mm, 27mm, 12mm	2g		
85	27	069	0236	小礫/小片		34mm, 25mm, 17mm	3g		
85	30	069	0756	小礫/小片		22mm, 19mm, 10mm	1g		
85	28	069	0845	小礫/小片		39mm, 21mm, 11mm	4g		
89	7	071	0006	礫		54mm, 89mm, 31mm	22g		使用・加工なし
90	9	073	0028	小礫/小片		17mm, 10mm, 5mm	0.3g		
90	10	073	0113	小礫/小片		18mm, 14mm, 10mm	0.5g		
90	11	073	0123	小礫/小片		13mm, 12mm, 13mm	0.8g		
92	8	074	0062	磨/砥石類		31mm, 32mm, 19mm	5g		
104	11	085	0080	小礫/小片		15mm, 23mm, 12mm	1g		調査時に破損
104	12	085	0106	小礫/小片		22mm, 27mm, 17mm	3g		
108	31	088	0004	小礫/小片		25mm, 21mm, 18mm	3g		
108	32	088	0186	小礫/小片		32mm, 21mm, 19mm	4g		
108	28	088	0373	小礫/小片		16mm, 9mm, 15mm	0.6g		
108	29	088	0421	小礫/小片		20mm, 16mm, 10mm	0.6g		原形?破損品
108	30	088	0277	小礫/小片		24mm, 21mm, 16mm	2g		

045の注記No.

5, 7, 29, 31, 10, 6, 8, 12, 12, 20, 85, 97, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 131, 132, 133, 134, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178,

第15表 金属製品

第型	No.	遺構	注記	種類1	種類2	計測値	重量	備考
18	27	001	0001	銅	銅線	全長3.6cm身長2.5cm巾1.4cm	4.6g	先端部
18	28	001	0098	鉄	鉄線	現長2.2cm現巾1.2cm	2.2g	切先 錆化激しい
18	29	001	0281	鉄	鉄工具	現長5.0cm基巾0.9cm	3.9g	基 刀子の可能性高い、錆化激しい
20	8	002	0005	鉄	鉄線?	現長2.7cm巾1.3cm	1.4g	錆化激しい
25	40	004	0117	鉄	带状製品	現長1.6cm巾1.8cm	1.7g	錆は安定している、層状に剥がれる
25	39	004	0214	鉄	鉄工具	現長3.4cm巾1.3cm	3.6g	タガネor方頭形鏃
30	8	008	0042	鉄	鉄刀子		3.3g	基
35	9	013	0076	鉄	鉄斧?	現長3.6cm現巾3.5cm	16.6g	塊状に割れている
112	20	014	0024	鉄	釘?	現長4.6cm現巾0.8cm	2.6g	錆激しい
115	56	018	0080	鉄	鉄線	現長4.8cm最大巾0.8cm	7.5g	先端部 工具の可能性もあるが 関節の錆化が激しく区別できない
41	43	020	0170.0 396	鉄	鉄線	現長4.7cm巾3.8cm	24.6g	曲刀、錆ぶくれが激しい 古墳時代後期 木片付着
126	2	026	0003	鉄	刀子片	全長14.4cm身長9.5cm巾1.3cm身厚0.4cm基長4.9cm巾0.7cm基厚0.4cm	12.9g	空堀の埋め戻し土中一括 錆化激しい 基に木質は付着していない柄は木装束か 4片あり
45	2	030	0007	鉄	鉄釘?	現長6.6cm巾0.45/0.55cm	5.9g	
45	3	030	0049	鉄	釘?		1.5g	
122	30	038	0391	鉄	鉄刀子ハバキ	長径2.1cm短径1.6cm内径(最大)1.7cm巾0.6cm	1.8g	鉄錆が激しく板状に膨らんだり割れている箇所が多い 鏃目が刃縁(特に内側に段差がある)
53	2	041	0011	鉄	刀子片	現長3.0cm巾0.9cm	2.5g	切先 錆が極めて進行し現形をとどめない
53	3	041	0038	鉄	鉄刀	現長2.3cm現巾1.8cm	5.7g	基部 錆が安定しており欠損部以外は若干膨らみ気味ながら形をとどめる
69	38	056	0261	鉄	棒状製品	現長3.7cm巾0.6cm	4.1g	
92	9	074	0008	鉄	管状製品	現長5.4cm径0.9cm	7.4g	両端欠損、近現代産れ込みか 削製のキセルに通じる作り方である 時期不明
103	19	084	0155	鉄	直刀鏃	全長6.8cm巾2.8cm	16.0g	柄部 木片付着 基部、折返しの一部が欠損しているがほぼ完形に近い 錆ぶくれ激しいが原形は明瞭
108	27	088	0423	鉄	鉄線	全長3.5cm巾3.2cm	3.6g	先端部 両丸造 ほぼ完形中央に錆ぶくれがある

第16表 鉄滓・鉄塊

No.	遺構	注記	種類1	種類2	長さ	幅	重量	備考
1	002	0021	鉄	鉄滓	38.6	26.2	34.5g	
2	008	0028	鉄	鉄塊	10.9	7.4	0.5g	製品の小片?
3	014	0159	鉄	鉄塊	34.8	20.2	10.2g	
4	018	-	鉄	鉄塊	16.9	16.7	3.5g	
5	036	-	鉄	鉄滓	48.8	38.3	25.6g	時期新しい
6	036	-	鉄	鉄滓	42.3	29.0	11.6g	時期新しい
7	052	0219	鉄?	鉄滓?	18.8	15.5	0.9g	
8	056	0950	鉄	鉄片	12.9	12.5	1.4g	住居一括
9	073	0099	鉄?	鉄滓?	11.3	10.4	0.5g	

写 真 图 版



遺跡付近航空写真1



道跡遠景
南上空より 平成6年冬撮影



平成6年度東側調査区
東方上空より



平成6年度西側調査区
東方上空より
奥は間見穴道跡のトレンチ
道跡付近航空写真 2



Z149北東



Z149北東



Z149北東



Z149北東



Z149北東=NW



Z149北東



Z149北東

Z149北東



Z149北東



001号跡



001号跡 跡内から出土した土器



002号跡
(平成6年度調査)



002号跡 跡内
から出土した土器

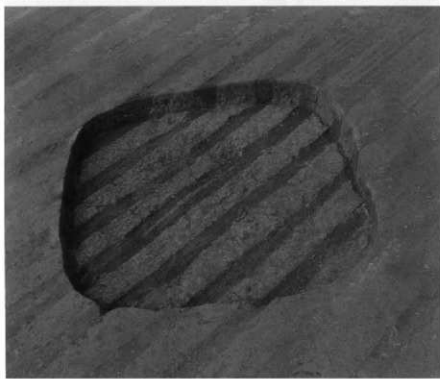


002号跡 残り調査分
(平成9年度調査)





006号跡



007号跡



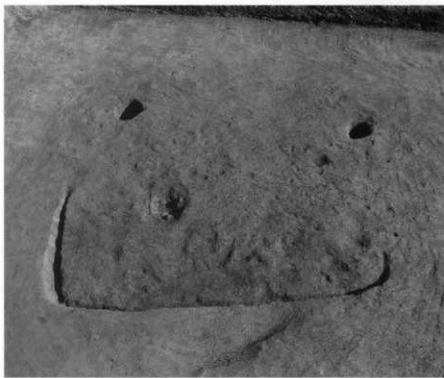
007号跡 土器(6)出土状況



007号跡 遺物出土状況



008号跡



009号跡



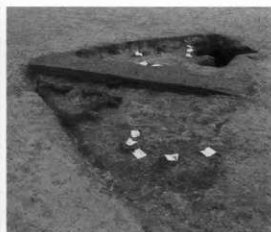
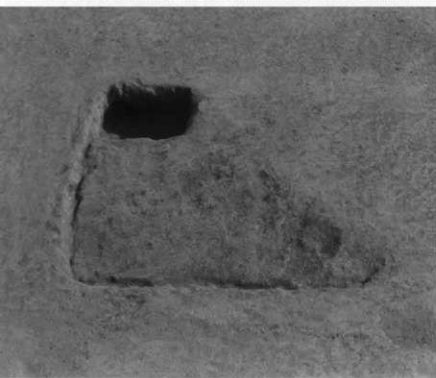
010号跡 炭化材出土状況



010号跡



010号跡 炉囲い土器



011号跡 遺物出土状況

011号跡



012号跡



013号跡



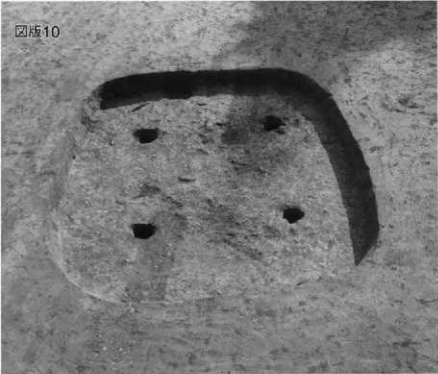
014号跡



015号跡 遺物出土状況



015号跡



016号跡 遺物出土状況

016号跡



017号跡



018号跡



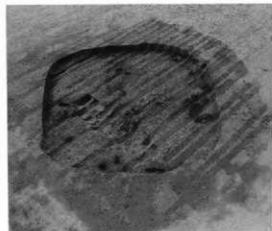
019号跡 土器(5)出土状況



019号跡



020号跡



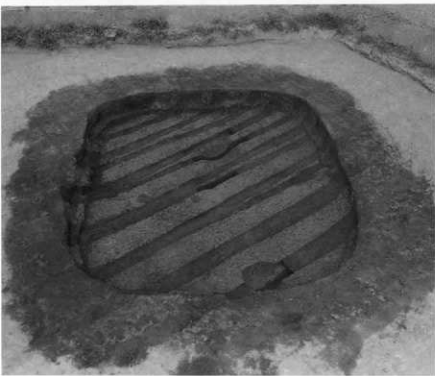
027号跡 炭化材・焼土出土状況



027号跡



028号跡



028号跡 旧床面



029号跡



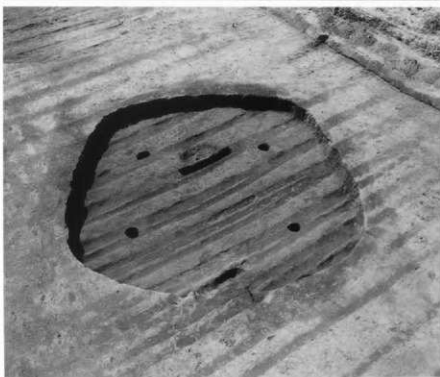
030号跡 遺物出土状況



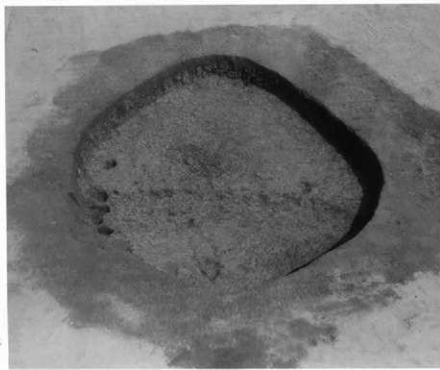
030号跡



031号跡 遺物出土状況



031号跡



032号跡



033号跡 土器(2)出土状況

033号跡



034号跡



035号跡



035号跡 遺物出土状況



036号跡 カマド



036号跡



037号跡



038号跡 追加調査分 (南側)
038号跡





038号跡 カマド



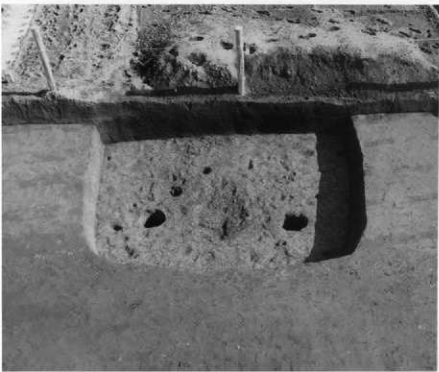
038号跡 貯蔵穴



038号跡 土器(15) 出土状況



038号跡 遺物出土状況(北隅)



039号跡 遺物出土状況



040号跡 間仕切り溝



040号跡



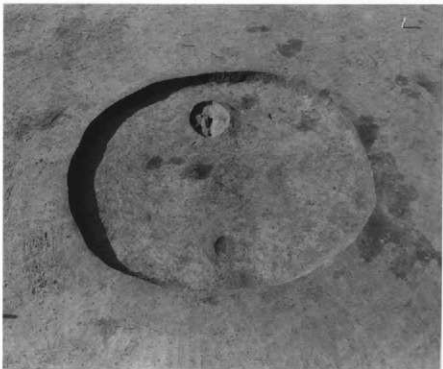
041号跡 遺物出土状況



041号跡



042号跡 遺物出土状況



042号跡



043号跡 遺物出土状況

043号跡



044号跡 遺物出土状況

044号跡



045号跡 遺物出土状況



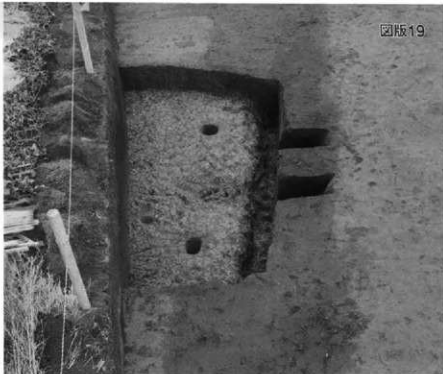
046号跡



046号跡 173-111 出土状況



048号跡 遺物出土状況



048号跡



049号跡 遺物出土状況



049号跡



050号跡 遺物出土状況



050号跡 貯蔵器内遺物



050号跡



051号跡



052号跡



052号跡 2-1



052号跡 炭化材出土状況



053号跡



054号跡 炉・小石集中



054号跡



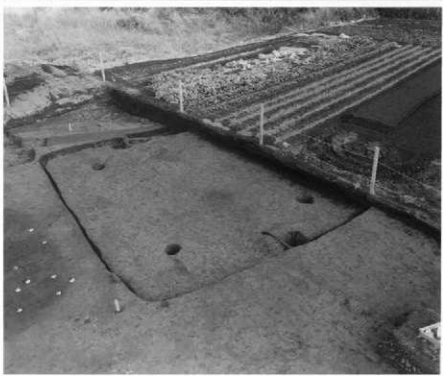
055号跡 土器(4)出土状況



055号跡



056号跡 貯藏穴内遺物出土状況



056号跡



056号跡 遺物出土状況



057号跡



058号跡 遺物出土状況

058号跡



060号跡



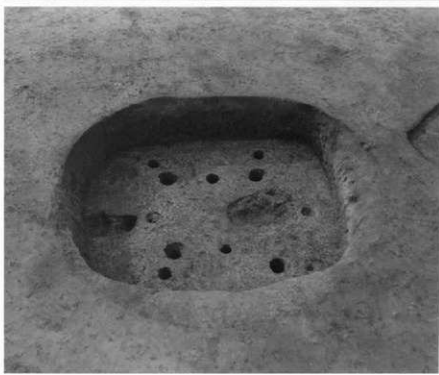
061号跡 貯蔵穴



061号跡



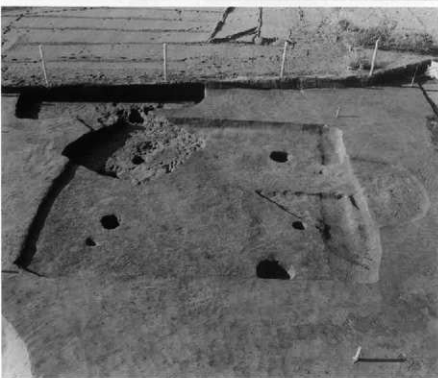
061号跡 小石集中



062号跡



063号跡



064号跡



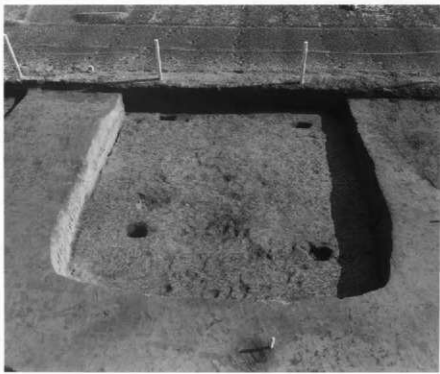
065号跡 (左)
066号跡 (右)



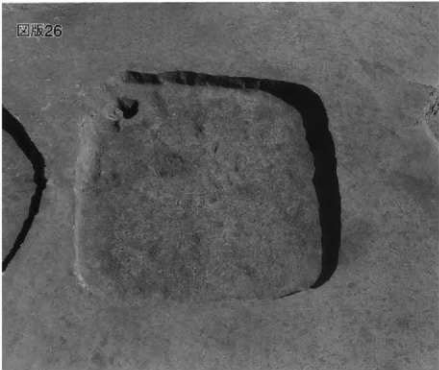
067号迹



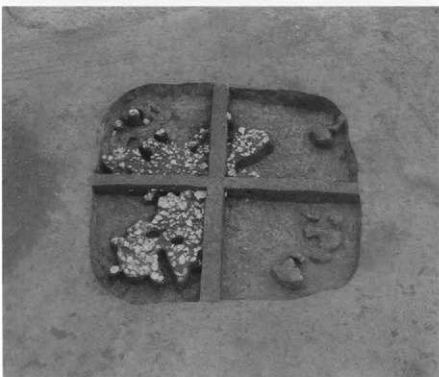
068号迹



069号迹



070号跡



070号跡 土器溜まり



070号跡 土器溜まり



071号跡



073号跡



074号跡 調査状況



074号跡



075号跡 遺物出土状況



075号跡



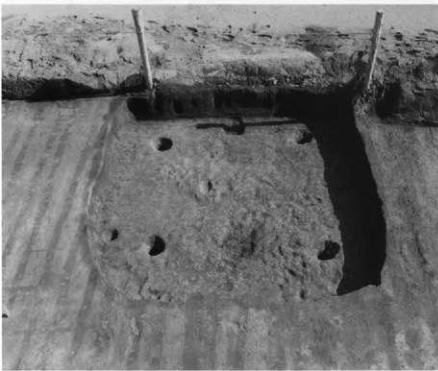
076号跡



077号跡

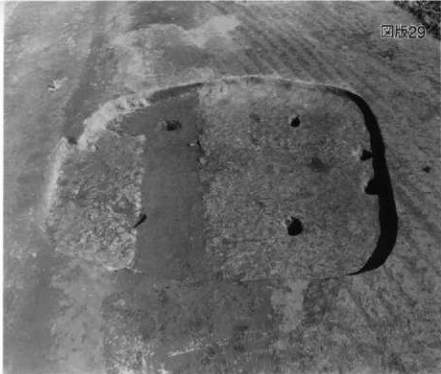


077号跡 遺物出土状況



078号跡

079号跡



080号跡 遺物出土状況

080号跡



081号跡





082号跡



083号跡 南壁付近のビット



084号跡 貯蔵穴 (P6) 内遺物



084号跡 炭化材・焼土出土状況



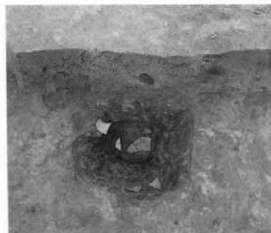
085号迹



086号迹 炭化材出土状况



086号迹



087号迹 P1内遺物出土



087号迹



088号跡



099号跡・101号跡



102号跡



022号跡 墓墳



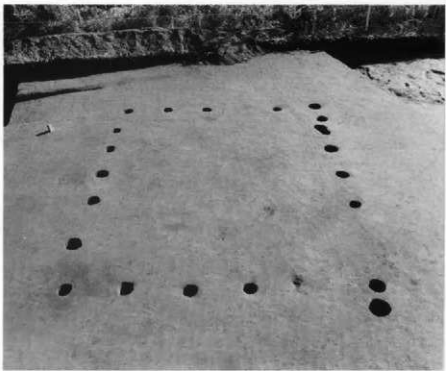
022号跡 埋葬施設



026号跡 墓墳



026号跡 石棺裏込



023号跡



046号坑



047号坑



097号坑



098号坑



099号坑 通坑出土彩陶



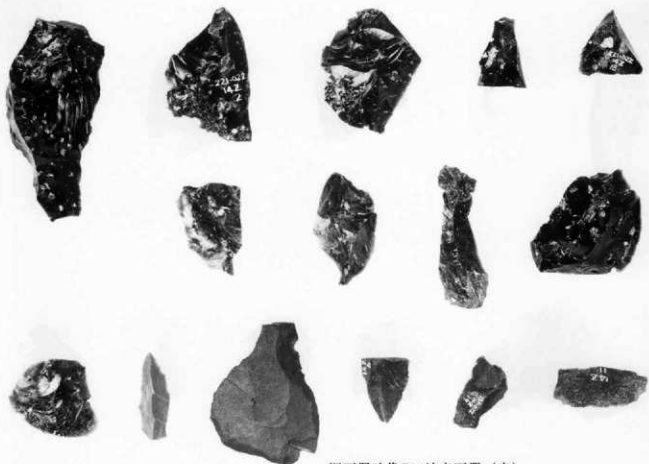
088号坑



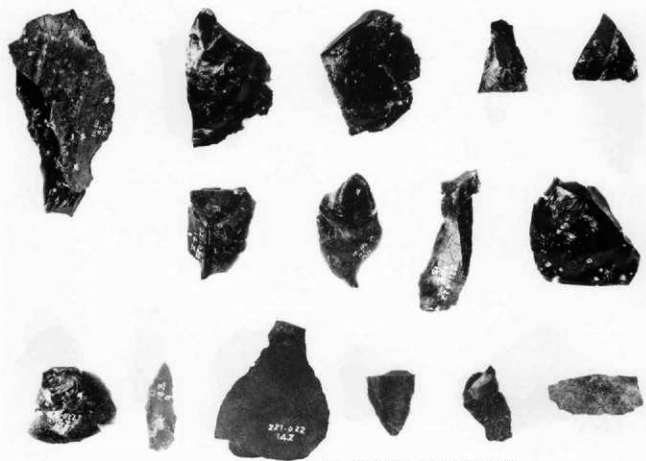
089号坑



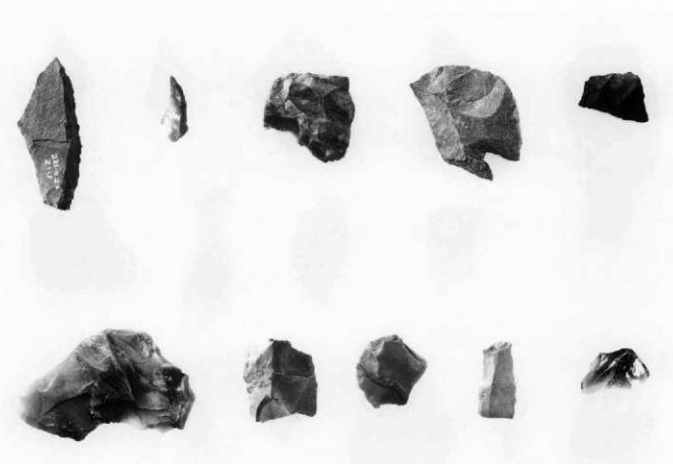
090号坑



旧石器時代Z14地点石器（表）



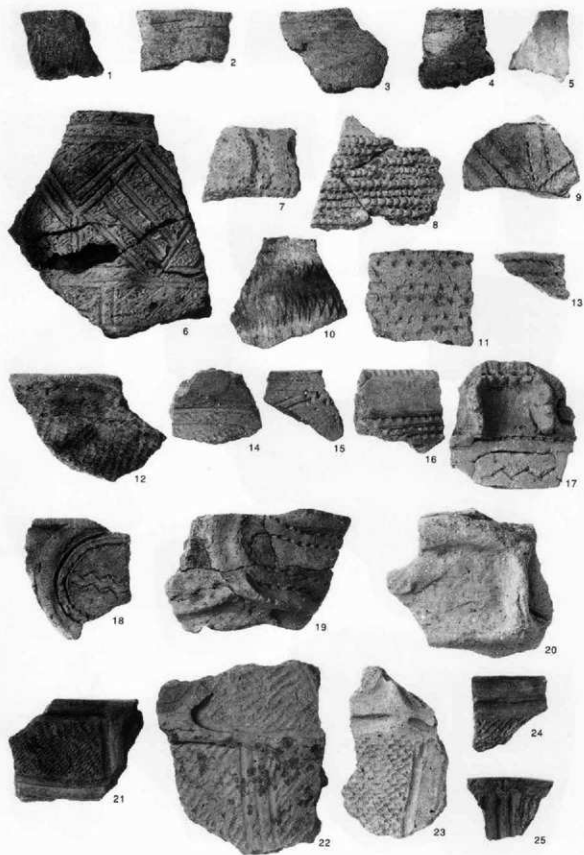
旧石器時代Z14地点石器（裏）



旧石器时代地点外石器（表）



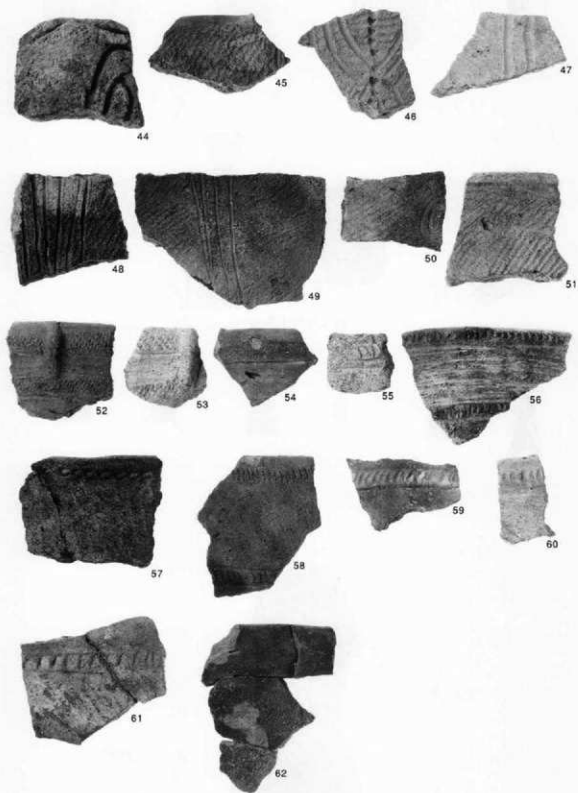
旧石器时代地点外石器（裏）



繩文土器 (1)



縄文土器（2）





縄文時代土製品



縄文時代石器



001-1



001-8



001-13



001-2



001-9



001-3



001-10



001-15



001-4



001-11



002-2



001-5



001-12



002-3



001-6



001-14



001-7



003-1



遺構出土土器 (2)



003-21



004-2



004-15



003-22



004-3



004-15



003-23



004-4



004-17



003-24



004-5



004-18



004-1



004-6



004-19



004-11



004-10



004-20



004-12



005-5



004-21



005-10



005-14



005-4



005-11



005-16



005-6



005-12



005-17



005-7



005-8



005-13



005-18



005-9



005-15



005-19



005-20



007-3



012-4



005-22



008-1



013-1



005-24



012-1



012-2



013-2



006-3



012-3



013-4



007-5



013-3



013-6



007-6



013-5



014-1



014-8



016-1



014-2



014-9



016-2



014-5



014-10



016-3



014-6



014-11



016-5



014-7



014-11



017-3



015-1



014-14



017-5



015-2



016-4



017-8



016-6



017-7



018-4



017-9



018-5



018-13



017-10



018-7



018-14



017-11



018-8



018-15



018-1



018-10



018-2



018-11



018-19



018-3



018-12



018-20



018-6

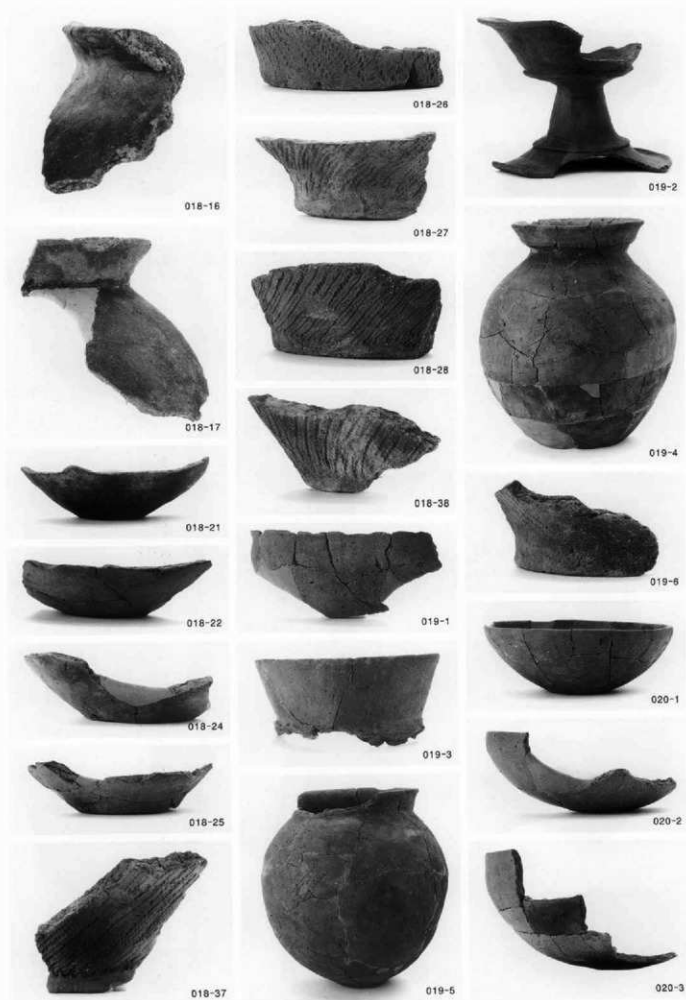


018-18



018-23

遺構出土土器 (7)



遺構出土土器 (8)



020-4



020-11



020-20



020-5



020-12



020-21



020-6



020-13



020-23



020-7



020-14



020-24



020-9



020-17



020-25



020-10



020-18

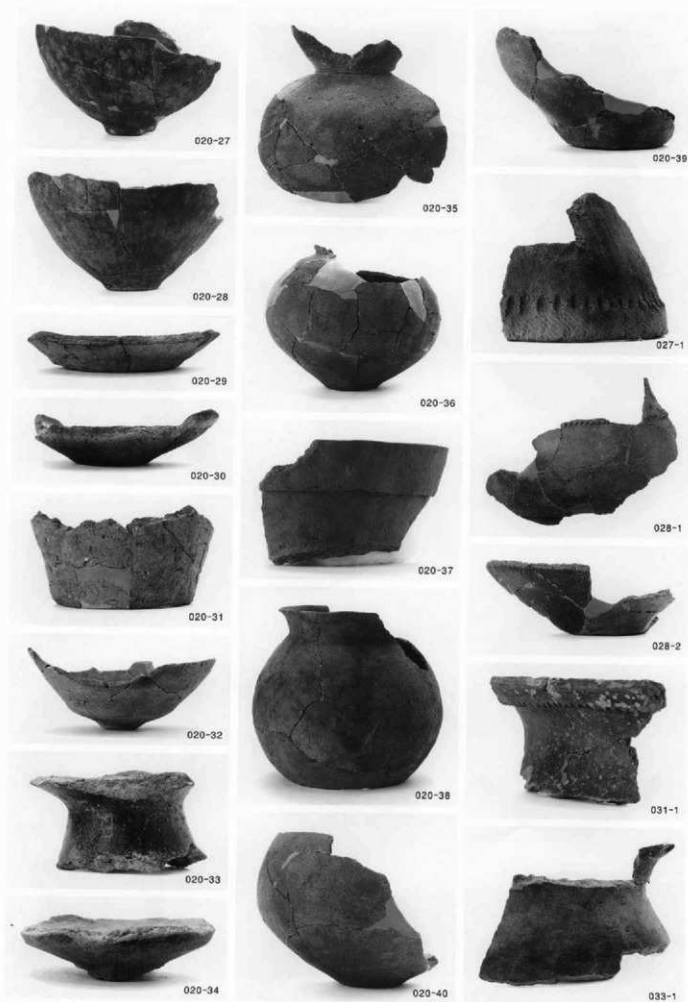


020-19



020-26

遺構出土土器 (9)



遺構出土土器 (10)



033-2



036-8



036-15



036-1



036-9



036-17



036-2



036-10



036-3



036-11



036-18



036-4



036-12



036-18



036-5



036-13



036-19



036-6



036-14



036-23



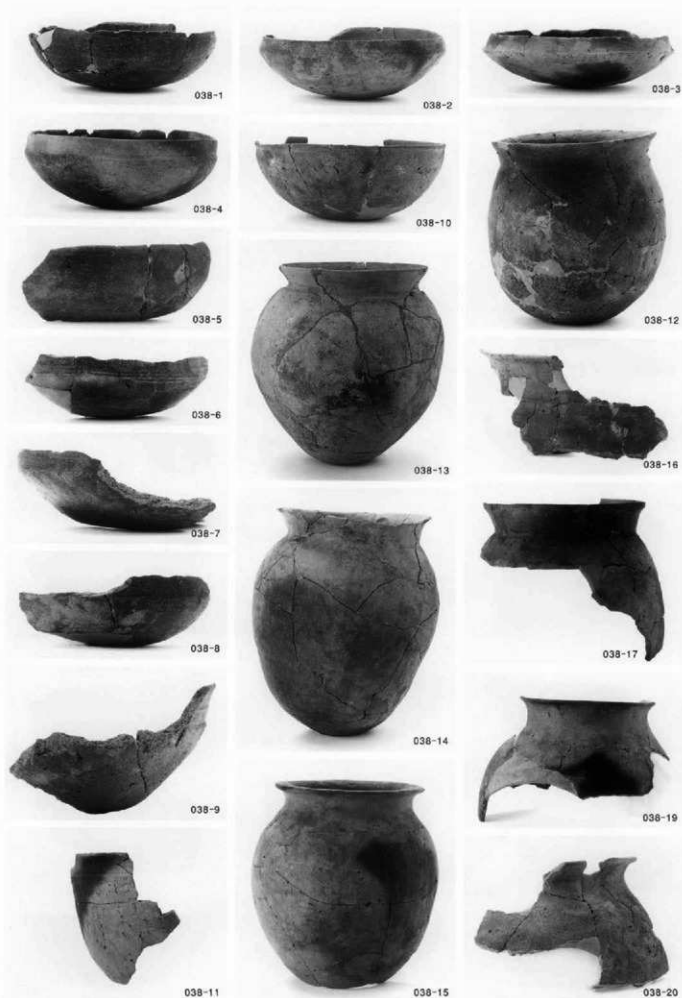
036-7



036-16



037-1



遺構出土土器 (12)



038-18



038-23



040-3



038-21



038-26



042-1



038-22



038-28



042-2



038-24



040-1



043-2



038-25



040-2



044-1



038-27



040-4



045-2



040-5



045-1



045-3



046-1



050-11



052-3



045-4



050-1



050-2



050-5



050-6





056-2



056-3



056-4



056-5



056-6



056-7



056-8



056-9



056-10



056-11



056-12



056-13



056-14



056-16



056-18



056-19



056-17



056-24



056-29



056-20



056-25



057-1



056-21



056-26



057-2



056-22



056-27



057-3



056-23



056-28



057-4



056-30



058-1



056-15



056-15



058-1



059-1



059-2



059-3



059-4



059-5



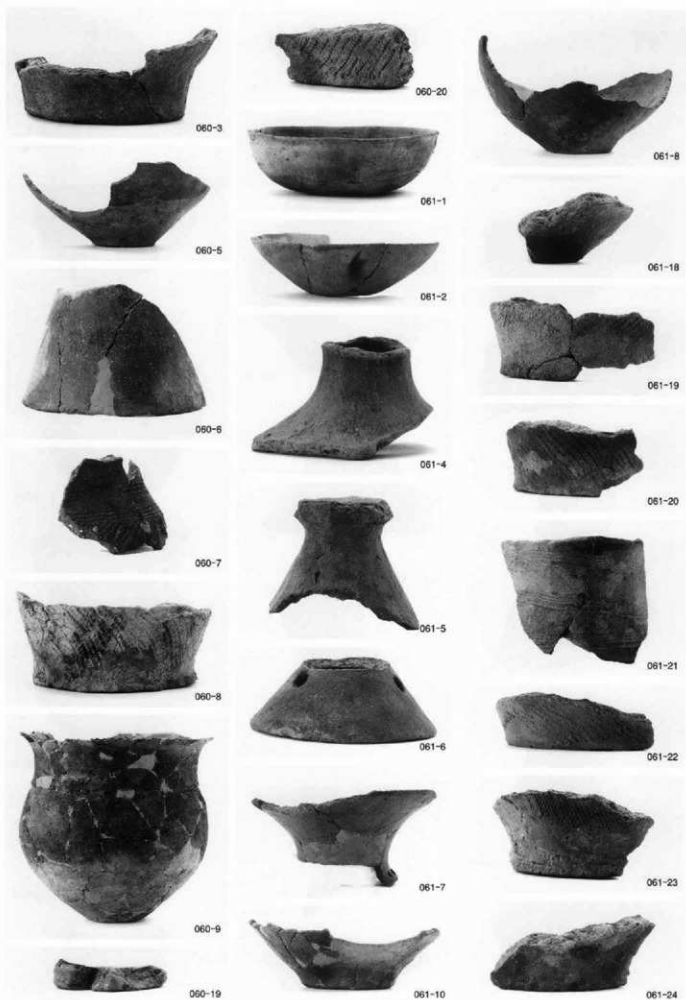
060-4



060-2



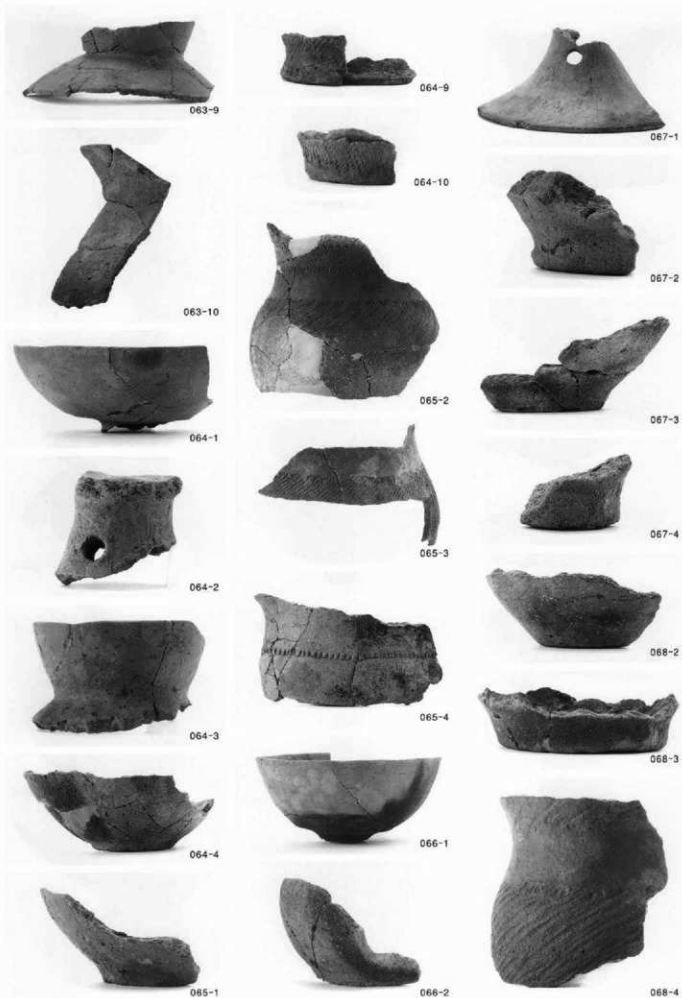
060-1



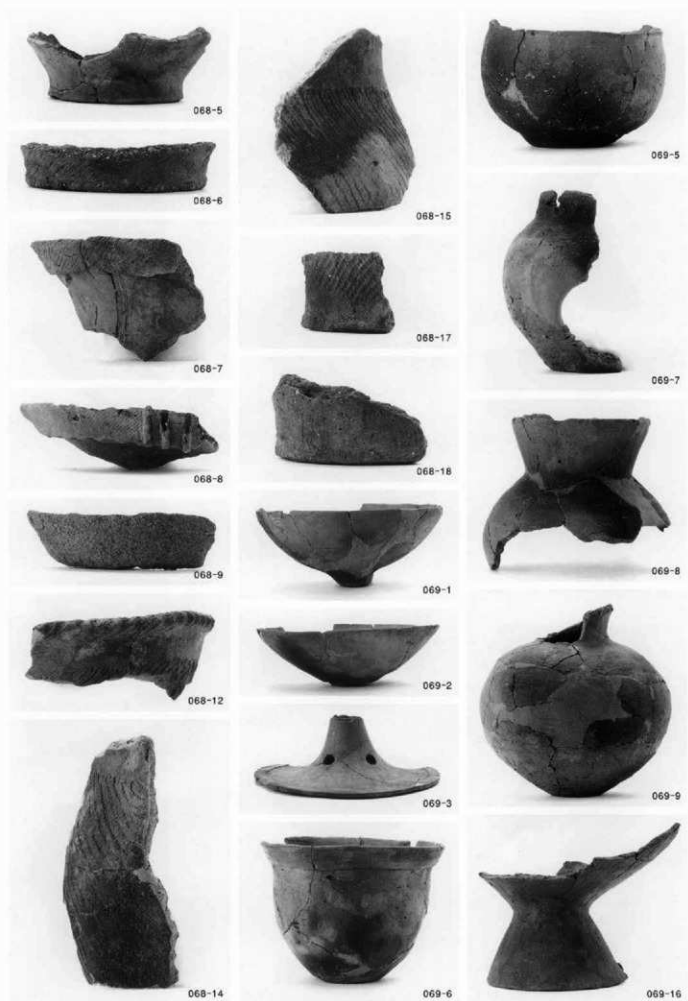
遺構出土土器 (19)



遺構出土土器 (20)



遺構出土土器 (21)



遺構出土土器 (22)



069-10



069-14



070-1



069-11



069-15



070-2



069-12



069-17



070-3



069-12



069-18



070-4



069-13



069-19



070-5



070-6



069-20



070-10





070-22



070-27



070-30



070-23



070-28



070-33



070-24



070-29



070-34



070-25



070-35



070-26



070-31



070-38



071-1



073-2



074-2



071-2



073-3



074-3



071-3



073-4



074-4



071-4



073-5



072-1



074-1



074-5



072-2



072-3



076-7



076-3



076-1



080-1



081-5



076-4



080-2



083-1



076-5



081-1



083-2



076-8



081-2



083-3



079-1



081-3



083-4



079-2



081-4



083-8



083-6



083-11



084-6



084-1



084-7



083-7



084-2



084-8



083-9



084-3



084-11



083-10



084-4



084-9



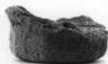
084-5



084-12



084-10



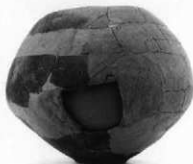
086-3



087-4



084-13



086-4



088-1



085-1



086-6



085-2



087-1



088-2



085-9



087-2



086-3



086-1



087-3



088-4



086-2



088-2



088-5



088-7



088-13



088-24



088-6



088-8



099-1



102-3



088-10



088-9



102-4



088-12



088-11



321-1



036-24



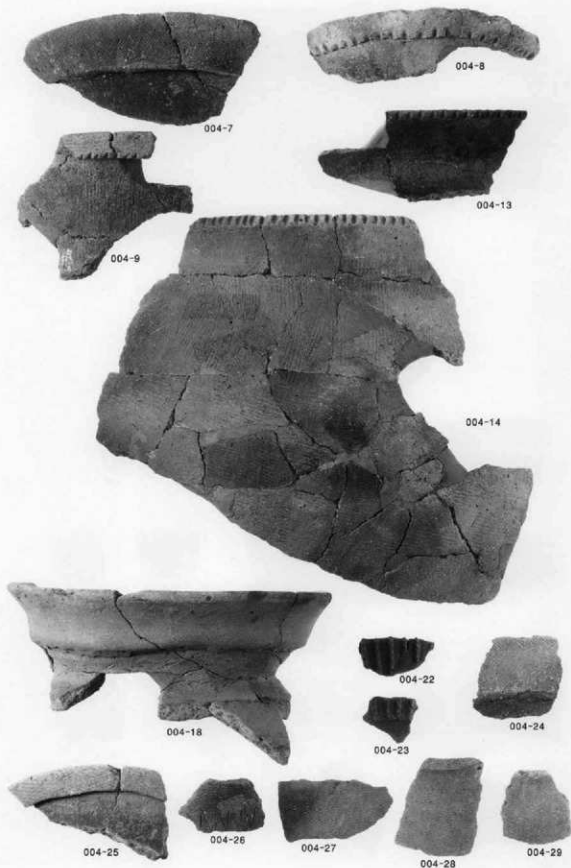
036-25



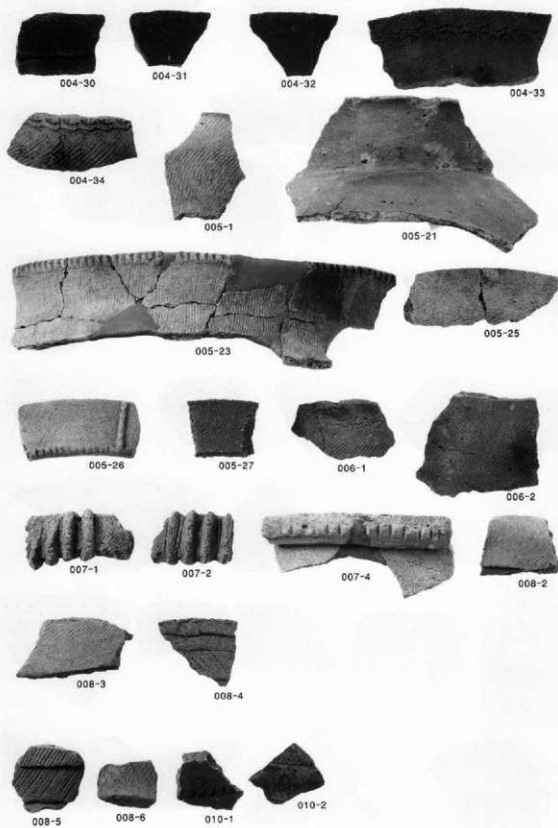
038-33

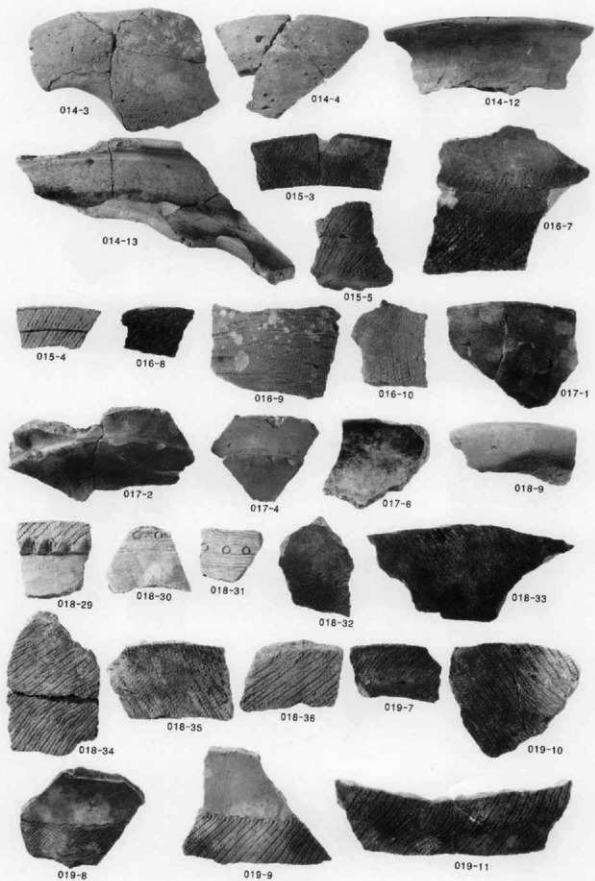
遺構出土土器 (30) ・支脚・遺構外出土土器



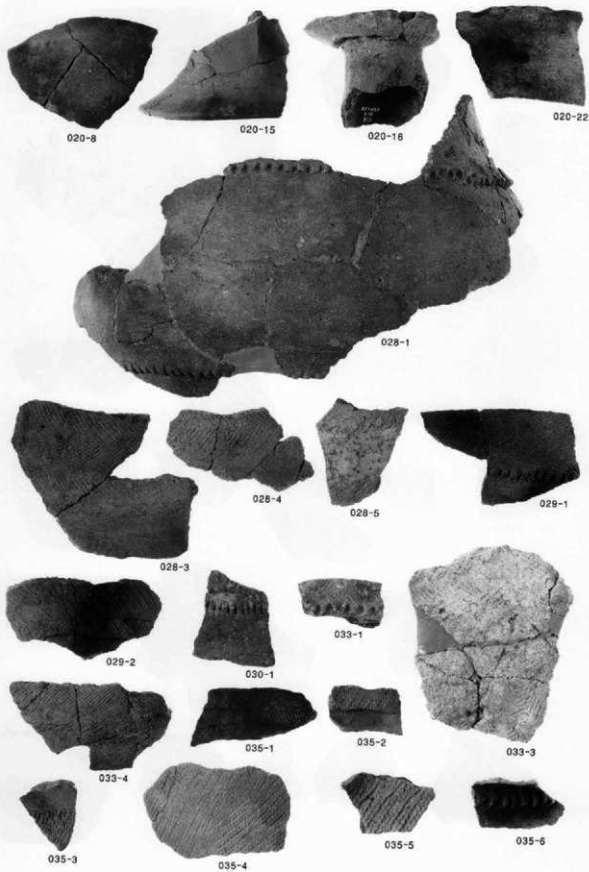


遺構出土土器片 (2)

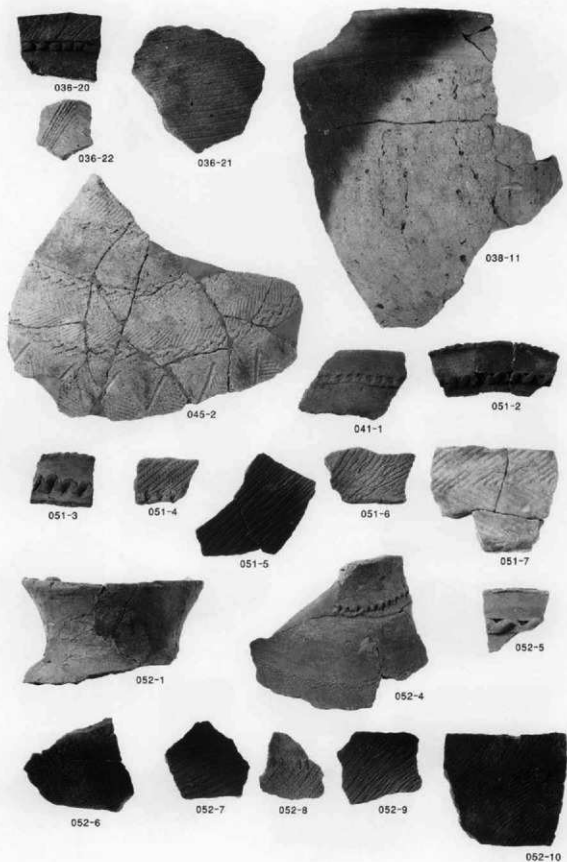




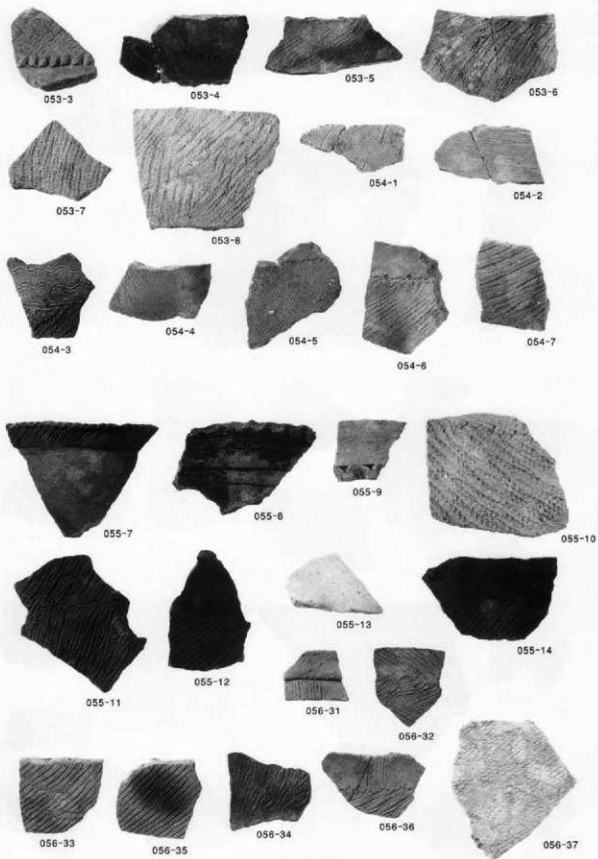
遺構出土土器片 (4)

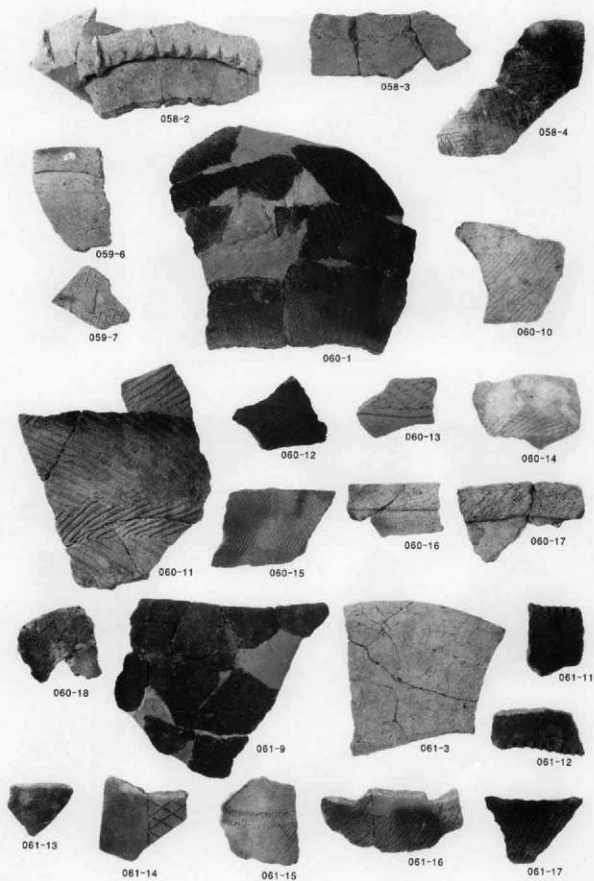


遺構出土土器片 (5)

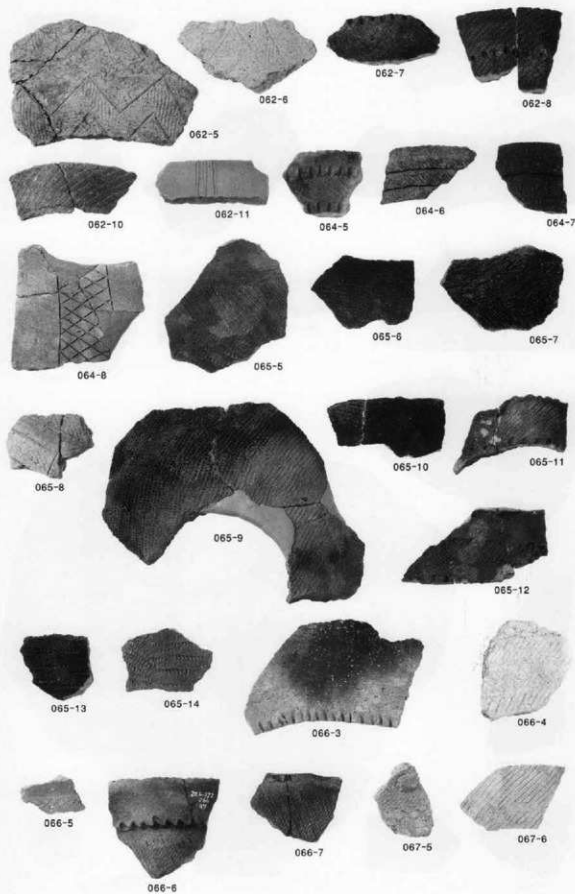


遺構出土土器片 (6)

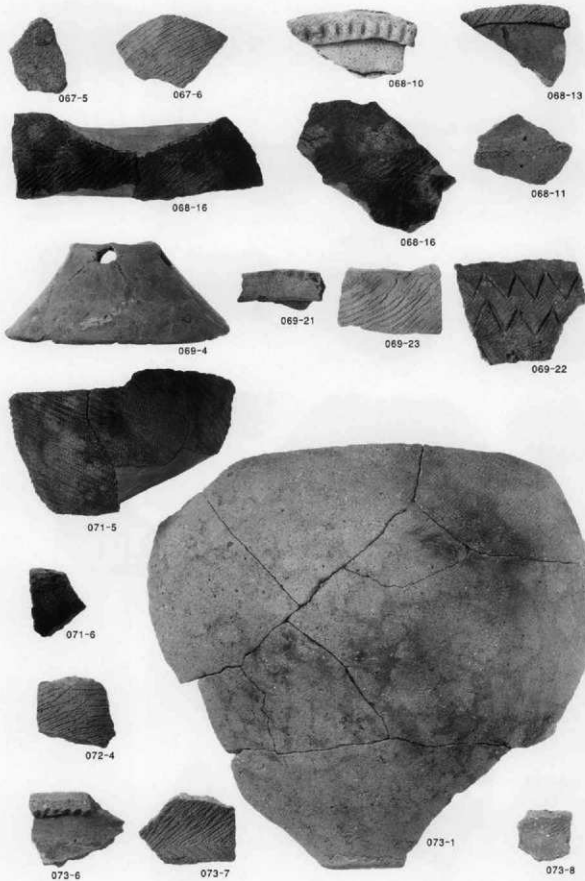




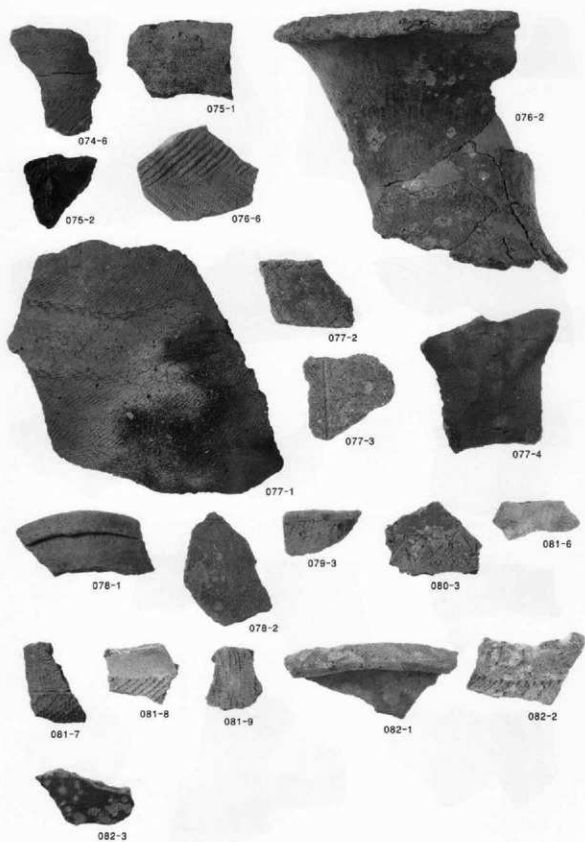
遺構出土土器片 (8)

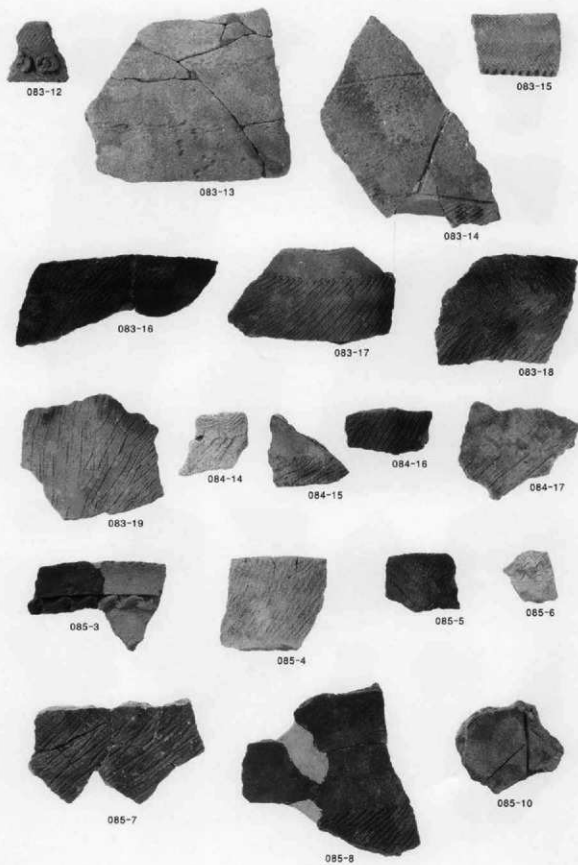


遺構出土土器片 (9)

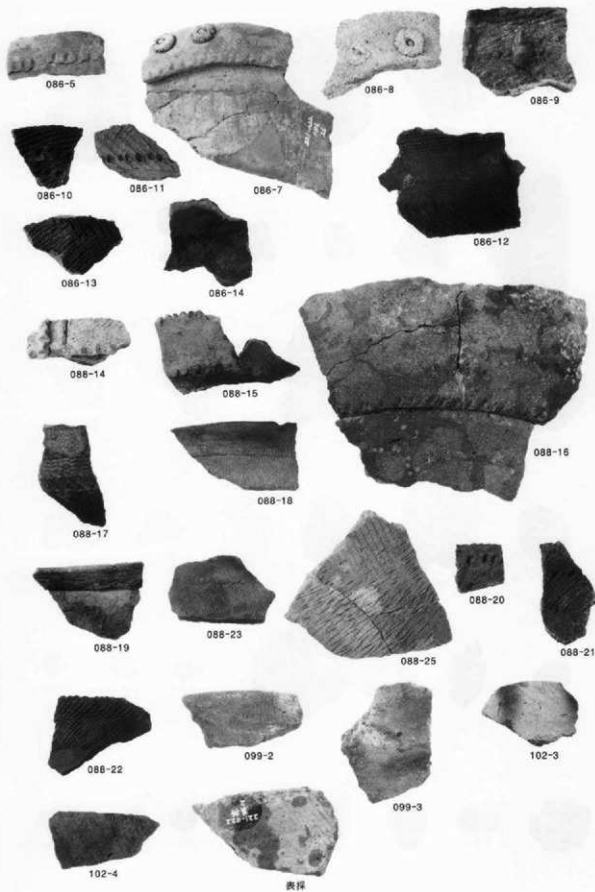


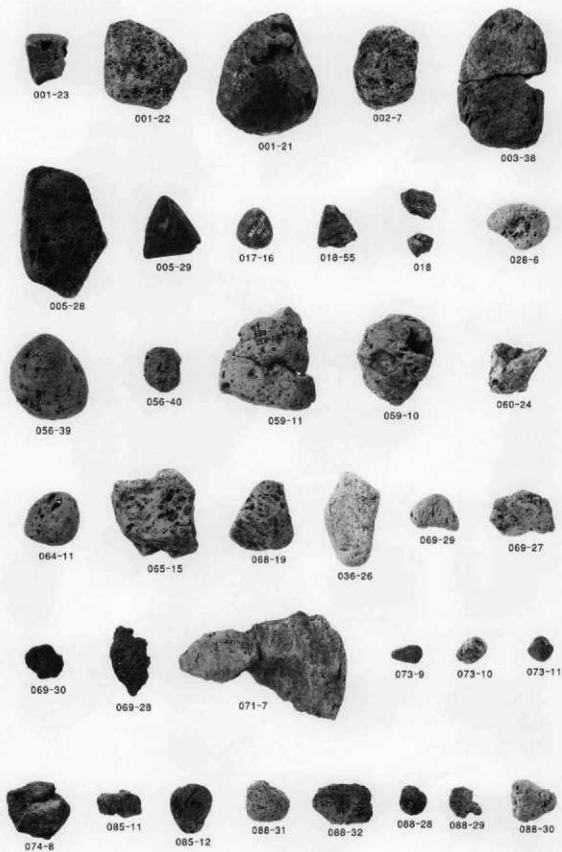
遺構出土土器片 (10)

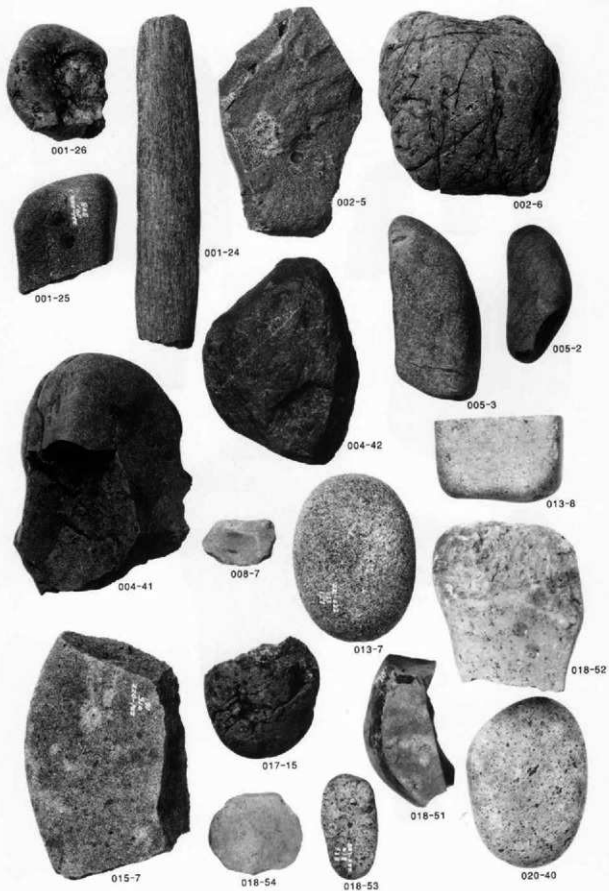




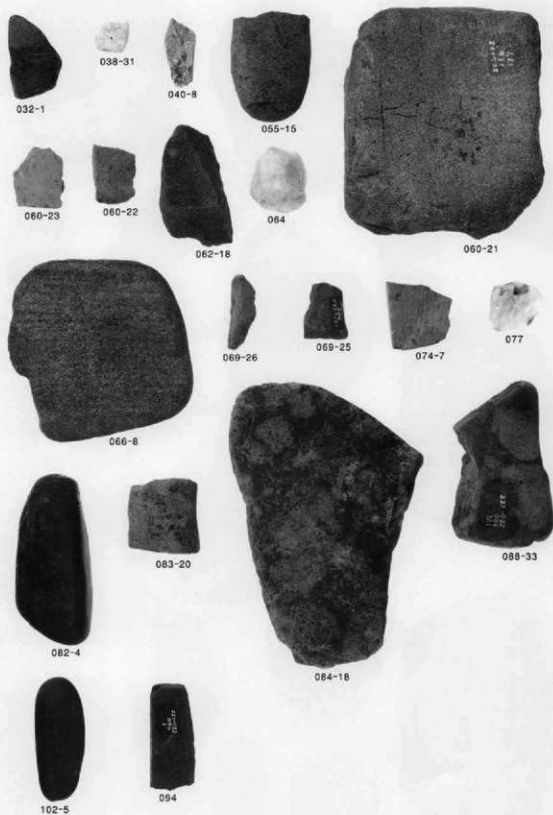
遺構出土土器片 (12)



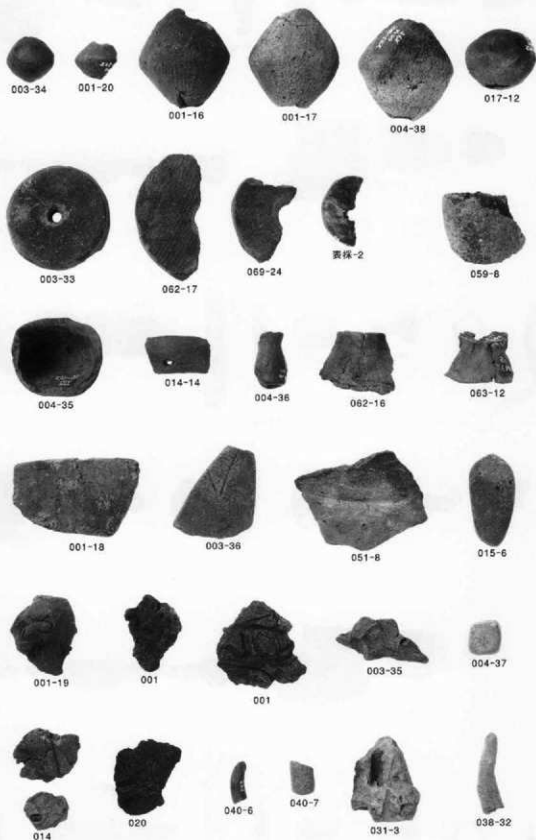




弥生時代・古墳時代の紙石・敲石(1)



弥生時代・古墳時代の礫石・巖石 (2)



弥生時代・古墳時代の土製品

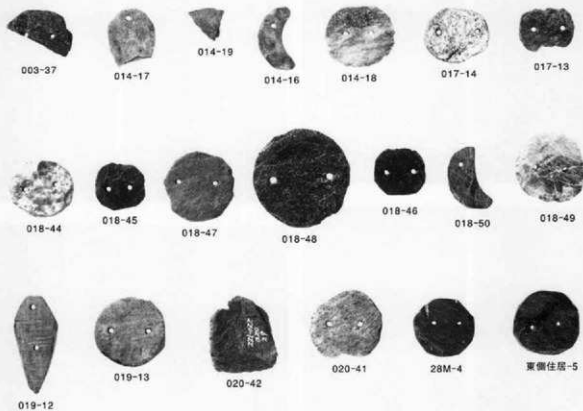


鉄製品



X線写真

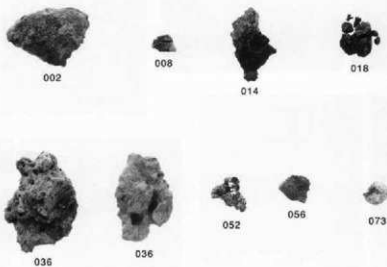
鉄製品(上段)・X線写真(下段)



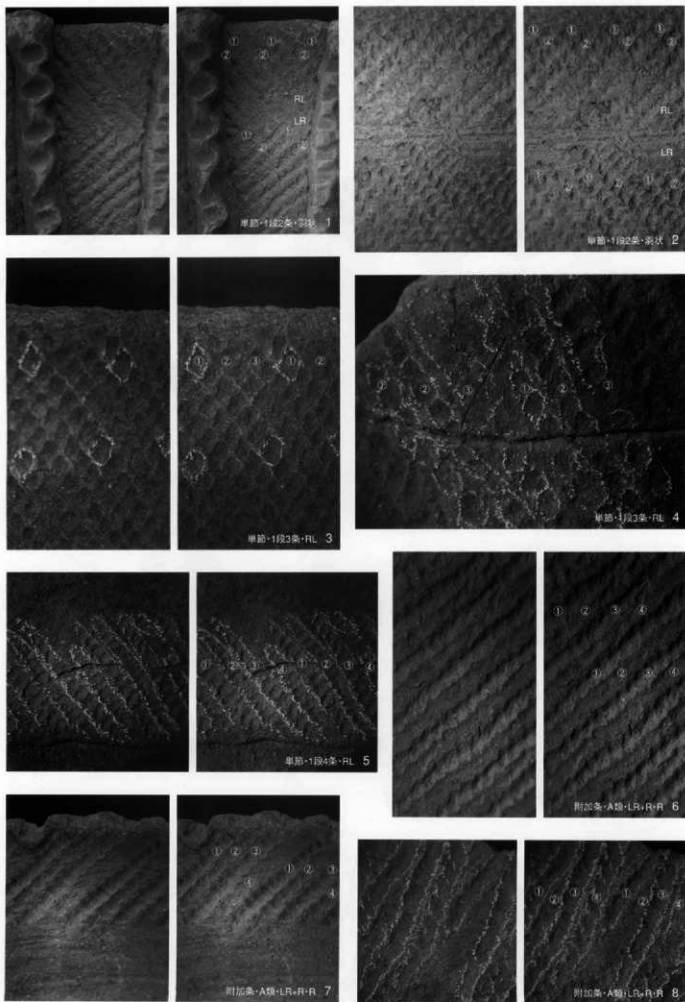
石製模造品



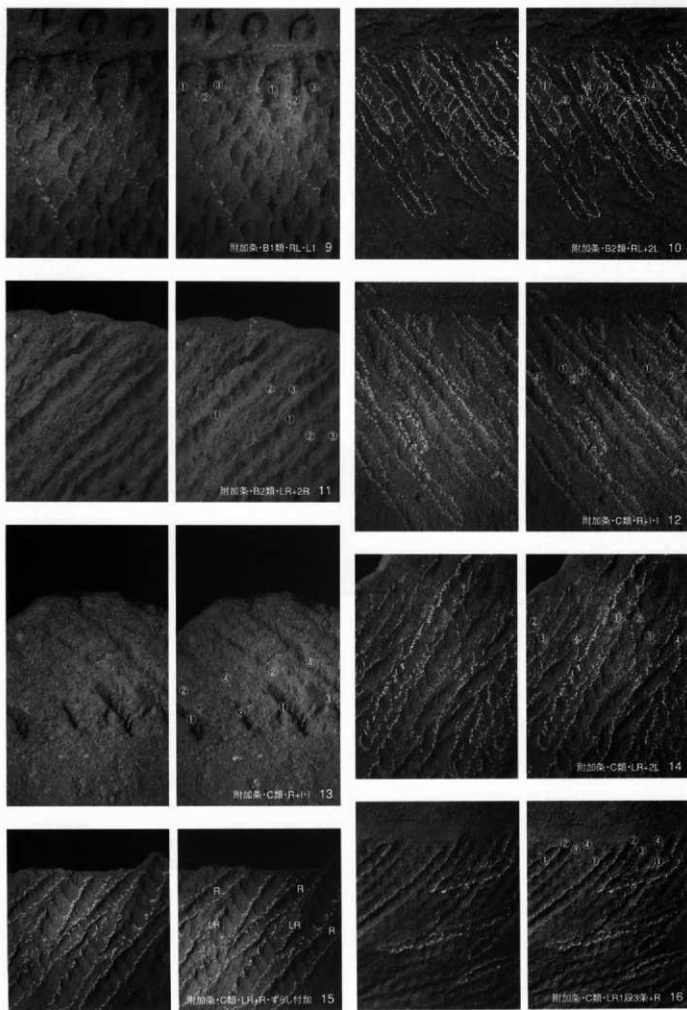
含貝殻土塊 (018)



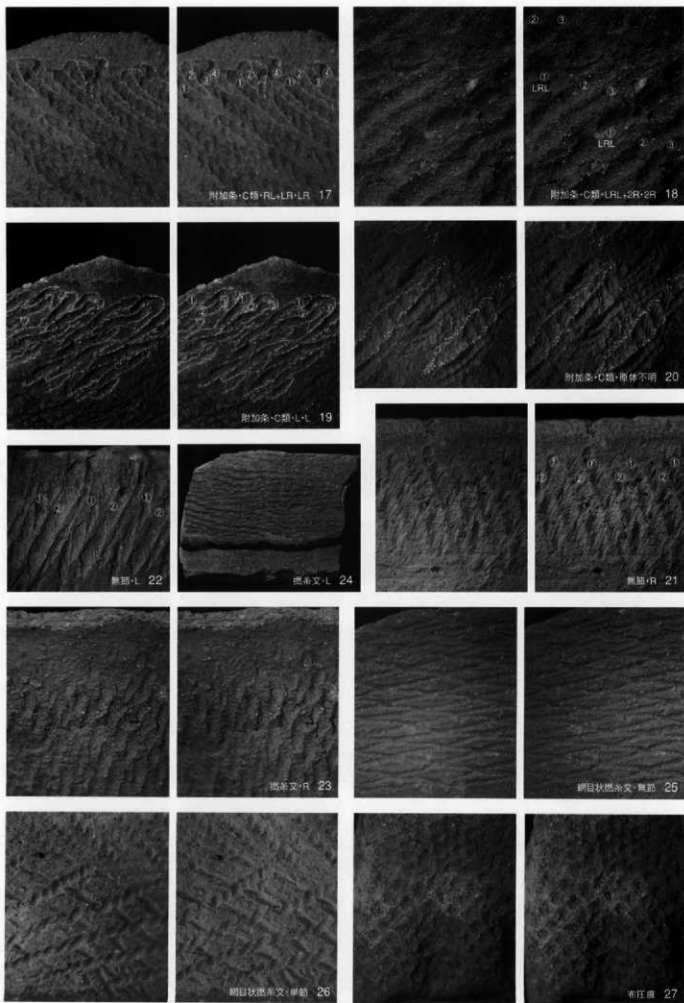
スラグ



弥生土器の縄文(1)



弥生土器の縄文(2)



弥生土器の縄文 (3)

報告書抄録

ふりがな	ふなばししいんざいせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	船橋印西線埋蔵文化財調査報告書							
副書名	八千代市道地遺跡							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第464集							
編著者名	田中 裕・西野雅人・古内 茂							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうちいせき 道地遺跡	ちばけんやちよし ひら 千葉県八千代市平 とあざどうち 戸字道地217他	12 221	022	35度 46分 06秒	140 度06 分56 秒	19940601～ 19971013 (3年次, 後 継続)	18,277㎡	主要地方道船橋 印西線建設に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
道地遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点 2か 所	ナイフ形石器, 削 器, 石核, 剥片	弥生時代後期から古 墳時代前期の大規模 集落跡の一部を調査 した。土壌及び環濠 とみられる遺構あ り。廃屋上に土器溜 まりを形成する例が 多い。 古墳時代中期の住居 跡にも土器溜まりあ り。石製模造品検出 例が多い。			
	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器(加曾利 E後半主体), 石 器, 土製耳飾, 土器 片鏃, 土器片円板				
	集落	弥生時代後期～ 古墳時代前期	住居跡 75軒 掘立柱建物 1棟 土壇墓 2基 土坑 2基 環濠 1条	弥生土器, 土師器, 土製品(玉類, 紡錘 車, 転用砥石, 土 玉), ガラス玉, 玉 類(管玉, 白玉), 砥石, 磨石類, 軽石, 金属製品(銅鏃, 鉄 刀, 鉄鏃, 鉄鏃, 鉄刀 子), 鉄滓				
	集落	古墳時代中・後 期	住居跡 9軒 古墳 2基	土師器, 須恵器, 石 製模造品(双孔門 板, 劍形, 勾玉), 金 属製品(鉄鏃, 鉄 鏃), 鉄滓, 鉄塊				
		奈良時代	土坑 2基					

千葉県文化財センター調査報告第464集

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 2
—八千代市道地遺跡—

平成16年3月31日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	都市基盤整備公団 千葉地域支社 千葉ニュータウン事業本部 千葉県印西市戸神501
	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市則徳809-2
印 刷	株式会社 富士印刷 千葉市稲毛区轟町3-6-18